

秋田県文化財調査報告書第107集

# 東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅷ

——妻の神I遺跡・乳牛平遺跡——

1984・3

秋田県教育委員会

# 東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅷ

——妻の神I遺跡・乳牛平遺跡——

1984・3

秋田県教育委員会

## 序

東北縦貫自動車道建設に伴う発掘調査は、秋田県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて記録保存を目的に実施しているものであります。昭和54年度から昭和56年度までは鹿角市が対象でしたが、昭和57年度からは小坂町を対象として発掘調査を行っております。

鹿角市ではこれまで34ヵ所の遺跡、発掘総面積154,435m<sup>2</sup>におよぶ調査を行いましたが、本報告書は昭和56年度に実施した妻の神I・乳牛平の2遺跡の調査結果を収録したものです。この報告書が鹿角地方の歴史解明と文化財保護に広く活用されることを望むものであります。

最後にこの調査に御協力いただきました顧問、専門指導員、日本道路公団、鹿角市、同教育委員会はじめ関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和58年3月

秋田県教育委員会

教育長 斎藤 長

## 例 言

1. 本報告書は、東北縦貫自動車道路線内に位置する昭和56年度発掘調査を行った10遺跡のうち、妻の神I遺跡（遺跡番号No.22）、乳牛平遺跡（遺跡番号No.25）の発掘調査報告書である。
2. 遺跡については機会をみて発表してきたが、本報告書を正式のものとする。
3. 発掘調査遺跡の記載は遺跡番号順による。
4. 発掘調査に関して、下記の諸氏から御指導、御教示を賜わった。記して感謝の意を表する。

（敬称略、順不同）

青森県埋蔵文化財調査センター主査

遠 森 正 夫

青森県埋蔵文化財調査センター主事

成 田 滋 彦

秋田県鹿角市教育委員会主事

秋 元 信 夫

5. 本報告書の執筆と編集は下記の調査員と補佐員が協議して作成した。

I の 1 小玉 準

I の 2 桜田 隆

II の 2 小林 克

妻の神 I 遺跡 橋本高史、鈴木秋良、鈴木 功、福本雅治、安保 敏

乳牛平遺跡 小玉 準、高橋 修、崩山 志、阿部明人、米田 哲

6. 本報告書のIIのI「地形と地質」は秋田県立能代北高等学校教諭藤本幸雄氏の執筆である。

7. 石器の石質鑑定は秋田県立博物館学芸主事嵯峨二郎氏にお願いした。

8. 炭化米及び炭化種子の分析は元岡山大学農学部教授笠原安夫氏に依頼した。

9. 報告書に使用した地図は、建設省国土地理院発行の5万分の1、2万5千分の1及び日本道路公団作成の千分の1の地形図である。

10. 遺跡の土層及び遺物の色調の記載は「新版 標準土色帖」（日本色彩研究所）を使用した。

11. 遺物の実測には、画像工学研究所のスケッチグラフ卓上型を活用した。

12. 遺跡の写真撮影は主に次の者があたった。

妻の神 I 遺跡 橋本高史、鈴木 功、安保 敏、鈴木秋良

乳牛平遺跡 小玉 準

13. 遺物の写真撮影は主に次の者があたった。

小玉 準、橋本高史、渋谷 志、熊谷 安、高橋れい子、鈴木 功、安保 敏

14. 遺物の実測、採拓、トレース、整理等は上記調査員、補佐員の他に次の者があたった。

妻の神 I 遺跡 柳沢照子、奈良美栄子、奈良栄子、大野甲子、高橋チエ子、

松本幸子、岡本龍子、加藤正子、山田美喜子、土屋ひさ子

乳牛平遺跡

中村陽子、村木繁子、阿部玲子、岡本龍子、熊谷裕子、越後谷栄子、  
皆原恵子、高柳良子、後藤のり子、小松郁子、藤井偉智子

15. 本報告書に記載した遺物の実測図、拓影図の縮尺は原則として $\frac{1}{20}$ 、 $\frac{1}{50}$ とした。その他のも  
のは任意の縮尺である。それぞれの実測図、拓影図にはスケールを付した。

# 目 次

序

例言

I	はじめに.....	1
1.	発掘調査に至るまで.....	1
2.	調査の組織と構成.....	2
II	遺跡の立地と環境.....	3
1.	地形と地質.....	3
2.	環境と周辺の遺跡.....	9

## 妻の神 I 遺跡

1.	遺跡の概観.....	17
(1)	遺跡の立地と環境.....	17
(2)	遺構の分布.....	17
(3)	遺物の出土状態.....	17
2.	調査の方法.....	19
3.	調査経過.....	22
4.	遺跡の層位.....	25
5.	遺構と遺物.....	26
(1)	遺構.....	26
(2)	遺物.....	128
6.	まとめ.....	134
付1	妻の神 I 遺跡 $^{14}\text{C}$ 年代測定結果.....	136
別編	妻の神 I 、 III および案内田遺跡出土の炭化穀類と豆の同定.....	195

## 乳牛平遺跡

1. 遺跡の概観	221
2. 調査の方法	221
3. 洞穴経過	223
4. 遺跡の層位	223
5. 遺構と遺物	224
(1) I 部検出遺構	226
(2) II 部検出遺構	247
(3) III 部検出遺構	291
(4) IV 部検出遺構	317
(5) トレンチ	317
(6) 遺物	325
6.まとめ	343

# 挿 図 目 次

第1図 段丘地形図.....	4
第2図 露頭地状図.....	6
第3図 東北縦貫自動車道関係及び周辺遺跡.....	11

## 妻の神I遺跡

第1図 遺跡位置図.....	18	第29図 S K113 土壙.....	75
第2図 通路地割図.....	20	第30図 S K114 土壙.....	76
第3図 クリック配置図.....	21	第31図 S K115 上塙.....	77
第4図 造構底質図.....	23	第32図 S K122 土壙.....	77
第5図 通路断面図.....	25	第33図 S K130 土壙.....	78
第6図 S I 101, 101' 壁穴住居跡.....	27	第34図 S K131 土壙.....	79
第7図 S I 102 壁穴住居跡.....	31	第35図 S K135 土壙.....	79
第8図 S I 104, 105壁穴住居跡.....	35	第36図 S K136 土壙.....	80
第9図 S I 106, 109, 109' 壁穴住居跡.....	39	第37図 S K139 土壙.....	81
第10図 S I 107 壁穴住居跡.....	41	第38図 S K140 土壙.....	81
第11図 S I 108 壁穴住居跡.....	45	第39図 I 乳土壙出土遺物.....	81
第12図 S I 121 壁穴住居跡.....	49	第40図 S I 101 壁穴住居跡.....	82
第13図 S I 121 壁穴住居跡カマド.....	51	第41図 S I 102 壁穴住居跡.....	85
第14図 S I 123 壁穴住居跡.....	53	第42図 S I 103, 005, 006 壁穴住居跡.....	87
第15図 S I 124 壁穴住居跡.....	55	第43図 S I 107 壁穴住居跡.....	91
第16図 S I 125 壁穴住居跡.....	56	第44図 S I 108 壁穴住居跡.....	95
第17図 S I 126 壁穴住居跡.....	59	第45図 S I 108 壁穴住居跡カマド.....	97
第18図 S I 127 壁穴住居跡.....	61	第46図 S I 109, 007 壁穴住居跡.....	99
第19図 S I 129 壁穴住居跡.....	63	第47図 S I 1020 壁穴住居跡.....	103
第20図 S I 131, 131' 壁穴住居跡.....	65	第48図 II 部壁穴住居跡出土遺物(1).....	104
第21図 S I 132 壁穴住居跡.....	67	第49図 II 部壁穴住居跡出土遺物(2).....	105
第22図 S I 133 壁穴住居跡.....	69	第50図 S K014, 015 土壙.....	106
第23図 S I 136 壁穴住居跡.....	70	第51図 S K016 土壙.....	107
第24図 I 部壁穴住居跡出土遺物(1).....	71	第52図 S K017 土壙.....	108
第25図 I 部壁穴住居跡出土遺物(2).....	72	第53図 S K018 土壙.....	109
第26図 I 部壁穴住居跡出土遺物(3).....	73	第54図 S K019 土壙.....	109
第27図 I 部壁穴住居跡出土遺物(4).....	74	第55図 S K022 土壙.....	110
第28図 S K111, 112 土壙.....	75	第56図 S K023 土壙.....	111

第57回	S K 015 上階	111	第65回	锯齿出土造物(1)	126
第58回	S K 020 上階	111	第66回	锯齿出土造物(2)	127
第59回	H 阶上坡出土造物(1)	112	第67回	遗物出土造物(1)	128
第60回	H 阶上坡出土造物(2)	113	第68回	遗物出土造物(2)	129
第61回	S D 010 池	115	第69回	残器类测图(1)	130
第62回	锯齿斜面图、断面A、B、C	120	第70回	铁器类测图(2)	131
第63回	锯齿斜面图、断面D、E	122	第71回	铁器类测图(3)	132
第64回	锯齿斜面图、断面F、G、H	124	第72回	铁器类测图(4)	133

## 乳牛平遺跡

第1回	夕日下配图	222	第1回	実測圖	268
第2回	I 烧造配置圖	225	第28回	H・S X(F)004・005燒土遺構実測圖	269
第3回	I・S 1001 穴穴遺構実測圖	227	第29回	H・S X(F)007~010燒土遺構實測圖	270
第4回	I・S 1002 烧火遺構实測圖	228	第30回	H・S X(F)011~014燒土遺構實測圖	271
第5回	I・S 1002 烧火遺構燒土・炭化材分布圖	229	第31回	H・S X(F)015~018・020 燒土遺構実 測圖	272
第6回	I・S 1003・0075穴遺構实測圖	231	第32回	H・S X(F)019・021・022 燒土遺構 測圖	273
第7回	I・S 1003 穴穴遺構实測圖	233	第33回	H・S X(F)023・024・026・027燒土遺 構实測圖	274
第8回	I・S 1003 A・B 穴穴遺構炭化材	235	第34回	H・S X(F)028・030~032 燒土遺構 測圖	275
第9回	I・S 1003・0105穴遺構炭化材測圖	236	第35回	H・S X(F)033~035燒土遺構炭化材測圖	276
第10回	I・S X(F)001~005燒土遺構實測圖	242	第36回	H・S A 001 井列模式圖	277
第11回	I・S X(F)004~006燒土遺構實測圖	243	第37回	H・S K 001~003土壤実測圖	278
第12回	I・S X 001~004土壤実測圖	244	第38回	H・S K 001~008土壤実測圖	279
第13回	I・S K 005~009土壤実測圖	245	第39回	H・S K 009~014土壤実測圖	280
第14回	I・S K 010~015上坡実測圖	246	第40回	H・S K 015~020土壤実測圖	281
第15回	I・S K(T)001 土壤実測圖	247	第41回	H・S K 021~024土壤実測圖	282
第16回	II 烧造配置圖	248	第42回	H・S K(T)001~002土壤実測圖	283
第17回	II・S 1001 烧火遺構・S K 023 上坡測 圖	250	第43回	H・S K(T)003~005土壤実測圖	284
第18回	II・S 1001 穴穴遺構カマド実測圖	251	第44回	H・S K(T)006 上坡実測圖	285
第19回	II・S 1007 穴穴遺構実測圖	254	第45回	H・S K(T)007 上坡実測圖	286
第20回	II・S 1008 穴穴遺構実測圖	255	第46回	H・S K 019土壤・S X 001実測圖	287
第21回	II・S 1009 穴穴遺構実測圖	258	第47回	H・S X 002 実測圖	289
第22回	II・S 1010 穴穴遺構実測圖	259	第48回	III・W 部遺構配置圖	290
第23回	II・S I 001・012・018 穴穴遺構・S K (T)004 上階実測圖	261	第49回	III・S I 001 穴穴遺構実測圖	292
第24回	II・S 1013 穴穴遺構燒土・炭化材出土狀 況	263	第50回	III・S I 002 穴穴遺構実測圖	293
第25回	II・S I 015・016 穴穴遺構實測圖	265	第51回	III・S I 003 穴穴遺構實測圖	294
第26回	II・T 018 穴穴遺構炭化材分布圖	267	第52回	III・S I 004 穴穴遺構實測圖	295
第27回	II・S X(F)001~003・006 燒土遺構土				

第53回	III・S X(F)001・002・004・005焼土道 構実測図	297	第67回	III・S X004 実測図	314
第54回	III・S X(F)006~010焼土道構実測図	298	第68回	IV・S D001 溝実測図	315
第55回	III・F A001 柱列実測図	299	第69回	トレンチ平面図	318
第56回	III・S B001 握立柱建物跡実測図	299	第70回	Aトレンチ土解断面図	319
第57回	III・S B002 握立柱建物跡実測図	300	第71回	Bトレンチ上解断面図	321
第58回	III・S 1001壁穴造構・S A001柱列・S B002 握立柱建物跡実測図	301	第72回	C・Dトレンチ土解断面図	323
第59回	III・S D001~005溝実測図	303	付図1	造構配置図	
第60回	III・S K001~004土壁実測図	305	付図2	乳牛平道跡周辺地形図	
第61回	III・S K005・006土壁実測図	306	付図3	I・S 1003・008~010壁穴造構 II・S K(T)002Tピット実測図	
第62回	III・S K(T)001・002Tヒート実測図	307	付図4	II・S 1002~005・017壁穴造構・S A001 柱列・S D002溝・S K004・021・S K(T) 002土壁実測図	
第63回	III・S K(T)004・006Tヒート実測図	308	付図5	II・S 1006・009・013・014壁穴造構 S K 001・002・009・010七脚・S D001溝・S X 004・005その他の造構実測図	
第64回	III・S X001 実測図	309			
第65回	III・S K005土壁・S K(T)003Tピット・ S X002 実測図	311			
第66回	III・S K(T)005土壁・S X003実測図	313			

## 表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧 ..... 10

### 妻の神 I 遺跡

第1表 S I 101 壁穴住居跡観察表	26	第18表 S I 131 壁穴住居跡観察表	63
第2表 S I 101' 壁穴住居跡観察表	29	第19表 S I 131' 壁穴住居跡観察表	64
第3表 S I 102 壁穴住居跡観察表	30	第20表 S I 132 壁穴住居跡観察表	67
第4表 S I 104 壁穴住居跡観察表	30	第21表 S I 133 壁穴住居跡観察表	68
第5表 S I 105 壁穴住居跡観察表	33	第22表 S I 137 壁穴住居跡観察表	69
第6表 S I 106 壁穴住居跡観察表	34	第23表 S I 138 壁穴住居跡観察表	70
第7表 S I 107 壁穴住居跡観察表	37	第24表 S I 001 壁穴住居跡観察表	83
第8表 S I 108 壁穴住居跡観察表	38	第25表 S I 002 壁穴住居跡観察表	84
第9表 S I 109 壁穴住居跡観察表	43	第26表 S I 003 壁穴住居跡観察表	86
第10表 S I 110 壁穴住居跡観察表	44	第27表 S I 004 壁穴住居跡観察表	89
第11表 S I 121 壁穴住居跡観察表	47	第28表 S I 005 壁穴住居跡観察表	90
第12表 S I 123 壁穴住居跡観察表	51	第29表 S I 007 壁穴住居跡観察表	90
第13表 S I 124 壁穴住居跡観察表	52	第30表 S I 008 壁穴住居跡観察表	93
第14表 S I 125 壁穴住居跡観察表	56	第31表 S I 009 壁穴住居跡観察表	98
第15表 S I 126 壁穴住居跡観察表	57	第32表 S I 009' 壁穴住居跡観察表	101
第16表 S I 127 壁穴住居跡観察表	58	第33表 S I 020 壁穴住居跡観察表	102
第17表 S I 129 壁穴住居跡観察表	60	第34表 壁穴住居跡内出土遺物一覧表	135

### 乳牛平 遺跡

第1表 I・S X(F)焼土造構観察表	241	第6表 III・S K(T)Tビット観察表	306
第2表 I・S K(T/Tビット)観察表	241	第7表 遺物観察表	339
第3表 II・S X(F)焼土造構観察表	276	第8表 遺物観察表	340
第4表 II・S K(T)Tビット観察表	287	第9表 遺物観察表	341
第5表 III・S X(F)焼土造構観察表	296	第10表 遺物観察表	342

# 図版目次

## 妻の神 I 造跡

図版1 妻の神I 造跡航空写真	(下) S K 115土塙
図版2 妻の神I 造跡遺景 (上) 発掘前	同版18 (上) S K 122土塙
(下) 発掘後	(F) S K 130土塙
図版3 I 部近景 (上) 発掘中	同版19 (上) S K 134土塙
(F) 発掘後	(下) S K 136土塙
図版4 II 部近景 (上) 発掘後	同版20 (上) S K 139土塙
(下) 造跡検出状態	(F) S K 140土塙
図版5 (上) S I 101、110堅穴住居跡	同版21 S I 001堅穴住居跡 (上) 考古村出土状態
(下) S I 101、101'堅穴住居跡	(下) 完掘状態
図版6 (上) S I 102堅穴住居跡	同版22 (上) S I 002堅穴住居跡
(下) S I 104、105堅穴住居跡	(F) S I 003、005、006堅穴住居跡検出状態
図版7 (上) S I 104、105、106堅穴住居跡	同版23 S I 003、005、006堅穴住居跡
(左下) S I 104堅穴住居跡遺物出土状態	(上) 考古村出土状態
(右下) S I 105堅穴住居跡遺物出土状態	(下) 完掘状態
図版8 S I 106、109堅穴住居跡	同版24 S I 003堅穴住居跡遺物出土状態
(上) 繰り下げ中	(上) 砂場卓
(下) 完掘状態	(中) 木柵
図版9 (上) S I 107、108堅穴住居跡	(下) 考古未
(下) S I 107堅穴住居跡遺物出土状態	同版25 (上) S I 007堅穴住居跡
(左) 磁製石斧	(下) S I 008堅穴住居跡検出状態
(右) 鉄器	同版26 S I 008堅穴住居跡 (上) 完掘状態
図版10 (上) S I 121堅穴住居跡	(左下) カマド
(下) S I 121堅穴住居跡	(右下) 鉄器出土状態
図版11 (上) S I 124堅穴住居跡	同版27 S I 009堅穴住居跡 (上) 完掘状態
(下) S I 126、127堅穴住居跡	(左下) カマド
図版12 S I 126堅穴住居跡遺物出土状態	(右下) 鉄器出土状態
(上) 土器器环	同版28 S I 020堅穴住居跡 (上) 完掘状態
(中) 鉄器	(下) 鉄器出土状態
(下) 鉄器	同版29 (上) S K 014土塙
図版13 (上) S I 129堅穴住居跡	(下) S K 015土塙
(F) S I 129、131、131'堅穴住居跡	同版30 (上) S K 016土塙
図版14 (上) S I 133堅穴住居跡	(F) S K 018土塙
(下) S I 138堅穴住居跡	同版31 (上) S K 019土塙
図版15 (上) S K 112土塙検出状態	(下) S K 023土塙
(下) S K 111、112土塙	同版32 S K 023土 壈出土状態
図版16 (上) S K 112、土塙鉄器出土状態	同版33 (上) S K 024土塙
(下) S K 113土塙	(下) S K 025土塙
図版17 (上) S K 114土塙	

- 図版34 (上) S K 026土塁  
          (下) S K 022土塁
- 図版35 S D 010堀跡 (上) 全景  
          (下) 断面A
- 図版36 S D 010堀跡 (上) 断面B  
          (下) 断面C
- 図版37 S D 011堀跡 (上) 全景  
          (下) 断面A
- 図版38 S D 011堀跡 (上) 断面B  
          (下) 断面C
- 図版39 (上) S D 011, 013断面C  
          (下) I郭北側、S D 012, 013堀跡
- 図版40 (上) S D 012堀跡断面D  
          (下) I郭南側、S D 013堀跡
- 図版41 (上) S D 012, 013断面E  
          (下) S D 013堀跡断面E
- 図版42 S D 013堀跡 (上) 断面C西側  
          (下) 断面C東側
- 図版43 S D 013堀跡 (上) 断面F  
          (下) F付近木材出土状態
- 図版44 S D 013堀跡 (上) 断面G

- (下) 断面H
- 図版45 S D 116溝
- 図版46 I郭堅穴住居跡出土遺物 (1)
- 図版47 I郭堅穴住居跡出土遺物 (2)
- 図版48 (上) I郭堅穴住居跡出土遺物 (3)  
          (下) I郭堅穴住居跡出土遺物 (4)
- 図版49 (上) I郭土塁出土遺物  
          (下) II郭堅穴住居跡出土遺物 (1)
- 図版50 II郭堅穴住居跡出土遺物 (2)
- 図版51 II郭土塁出土遺物 (1)
- 図版52 II郭土塁出土遺物 (2)
- 図版53 (上) 墓跡出土遺物 (1)  
          (下) 墓跡出土遺物 (2)
- 図版54 (上) 造構外出土遺物 (1)  
          (下) 造構外出土遺物 (2)
- 図版55 (上) 出土鉄器 (1)  
          (下) 出土鉄器 (2)
- 図版56 (上) 出土鉄器 (3)  
          (下) 出土鉄器 (4)
- 図版57 発掘調査風景
- 図版58 発掘調査風景

## 乳牛平遺跡

- 図版1 道跡 1 空から見た乳牛平道跡
- 図版2 道跡 1 西町1道跡より見た乳牛平道跡  
          2 柴内館から見た乳牛平道跡
- 図版3 道跡 1 I郭湖東側  
          2 同 上
- 図版4 道跡 1 I・S I 001  
          2 I・S I 002
- 図版5 道跡 1 I・S I 002  
          2 I・S I 002西コナー柱痕跡
- 図版6 道跡 1 I・S I 002  
          2 I・S I 002
- 図版7 道跡 1 I・S I 003  
          2 I・S I 003
- 図版8 道跡 1 I・S I 003  
          2 I・S I 003
- 図版9 道跡 1 I・S I 003・004  
          2 I・S I 003・004

- 図版10 道跡 1 I・S I 004  
          2 I・S I 004
- 図版11 道跡 1 I・S I 002・006  
          2 I・S I 002・005・006
- 図版12 道跡 1 I・S I 005  
          2 I・S I 006
- 図版13 道跡 1 I・S I 003・004・007・010  
          2 I・S I 003・004・007・010
- 図版14 道跡 1 I・S I 003・004・007・010  
          2 I・S I 003・004・007・010
- 図版15 道跡 1 I・S I 009・010  
          2 I・S I 009・010
- 図版16 道跡 1 I・S I 003・008  
          2 I・S K 001・002
- 図版17 道跡 1 I・S K 001・002  
          2 I・S K 006・007
- 図版18 道跡 1 I・S K 008・010

図版18	2	I・S K011		
図版19 遺跡	1	I・S K012		
	2	I・S K013・014		
図版20 遺跡	1	I・S K015		
	2	I・S K (F) 002		
図版21 遺跡	1	I・S K (T) 001		
	2	I・S K (T) 002		
図版22 遺跡	1	I・全景		
	2	I・全景		
図版23 遺跡	1	I郭から見たII郭		
	2	II郭調査状況		
図版24 遺跡	1	II・S I 001		
	2	II・S I 002		
図版25 遺跡	1	II・S I 001～005		
	2	II・S I 001～005・017		
図版26 遺跡	1	II・S I 004・005・S K004		
	2	II・S I 004・005・S K004		
図版27 遺跡	1	II・S I 006		
	2	II・S I 007		
図版28 遺跡	1	II・S I 006・009・010		
	2	II・S I 008		
図版29 遺跡	1	II・S I 011・018		
	2	II・S I 011・012・018S		
		K (T) 004		
図版30 遺跡	1	II・S I 013炭化物出土状況		
	2	II・S I 013		
図版31 遺跡	1	II・S I 009・013・014		
	2	II・S I 013・014		
図版32 遺跡	1	II・S I 015・016		
	2	II・S I 015・016		
図版33 遺跡	1	II・II郭南端の窓穴遺構		
	2	II・同上		
図版34 遺跡	1	II・S X (F) 003		
	2	II・S X (F) 006		
図版35 遺跡	1	II・S X (F) 007		
	2	II・S K001		
図版36 遺跡	1	II・S K003		
	2	II・S K004		
図版37 遺跡	1	II・S K004		
	2	II・S K005		
図版38 遺跡	1	II・S K006・007		
	2	II・S K008		
図版39 遺跡	1	II・S K016		
	2	II・S K019		
図版40 遺跡	1	II・S K020		
	2	II・S K021		
図版41 遺跡	1	II・S K (T) 001		
	2	II・S K (T) 003		
図版42 遺跡	1	II・S K (T) 004		
	2	II・S K (T) 005		
	3	II・S K (T) 006		
図版43 遺跡	1	II・S X001		
	2	II・S X002・S X015		
図版44 遺跡	1	II郭		
	2	II郭		
図版45 遺跡	1	II・III郭と表の神遺跡		
	2	II・III郭と表の神遺跡		
図版46 遺跡	1	III・S I 001		
	2	III・S I 002		
図版47 遺跡	1	III・S I 002		
	2	III・S I 003		
図版48 遺跡	1	III・S I 003		
	2	III・S I 004		
図版49 遺跡	1	III郭		
	2	III郭		
図版50 遺跡	1	S X (F) 001		
	2	S X (F) 001		
図版51 遺跡	1	III・S D001～005		
	2	III・S D001～005		
図版52 遺跡	1	III・S D001～005		
	2	III・S D001土層面		
図版53 遺跡	1	III・S K (T) 001		
	2	III・S K (T) 006		
	3	III・S K (T) 003・S K005		
	4	III・S K (T) 003・S K010		
		S X002		
図版54 遺跡	1	III・S X001		
	2	III・S X001		
図版55 遺跡	1	III・S X001		
	2	III・S X003		
図版56 遺跡	1	III・S X003		
	2	III・S X003		
図版57 遺跡	1	V郭残存部とI・V郭間の堆		

		2 V字西端に見られる段差		2 同 上
図版58 道跡	1	1・II郭間の確認調査前（中央部 段差が上昇）	図版63 道跡	1 B郭とBトレント 2 Bトレント調査状況
	2	II・III郭間の確認調査前	図版64 道跡	1 Bトレント土壘 2 Bトレント土壘
図版59 道跡	1	里郭と裏の神相道跡間の塀（中 央部土壘小山）	図版65 道跡	1 BトレントII郭側塀上層 2 Bトレント土壘
	2	里郭と土基状小山間の塀（左、 田郭、右、小山）	図版66 道跡	1 Bトレント土壘芯と塀底の溝 2 Bトレント雨潤塗底の溝
図版60 道跡	1	T郭北側に見られる断	図版67 道跡	1 Bトレント南側塀底の溝 2 Bトレント土壘芯
	2	同 上	図版68 道跡	1 田郭よりII郭 2 裏の神相道跡から乳牛平遺跡
図版61 道跡	1	Bトレント溝査状況		
	2	同 上		
図版62 道跡	1	Bトレント調査状況		

# I はじめに

## 1. 発掘調査に至るまで

秋田県の北東部、鹿角市と鹿角郡小坂町を通過する東北縦貫自動車道の建設計画の魁は、昭和40年11月公表の鹿角市・青森市間、同42年11月公表の盛岡市・鹿角市間の基本計画である。次いで昭和43年4月の鹿角市・青森市間約81kmの第2次施行命令と同46年6月の岩手県二戸郡安代町・鹿角市間約37kmの第5次施行命令によって、その通過予定区域が知られ、これを受けて同47年11月27日に、鹿角市十和田錦木・小坂町間の路線発表があつて、ようやくその具体的な姿を県民に現わしたのである。

このため、秋田県教育委員会では、文化庁と日本道路公団が交わした覚書に基づき、昭和44年8月、鹿角市十和田地区から鹿角郡小坂町の青森県境まで、幅4km、延長25kmにわたって遺跡の分布調査を行い、67遺跡を確認し、その成果を公表した。<sup>(註1)</sup> 昭和48年8月には、鹿角市八幡平、尾去沢、花輪地区で、幅4km、延長20kmの遺跡分布調査と試掘を実施して、46カ所の遺跡を確認した。<sup>(註2)</sup>

昭和51年2月21日になると、昭和48年8月実施の鹿角市内遺跡分布調査結果をふまえて、日本道路公団から鹿角市八幡平から同市十和田錦木に至る延長約21.1kmの路線の発表があり、測量が実施されるに及んだ。

秋田県教育委員会では、日本道路公団仙台建設局鹿角工事事務所の依頼により、昭和52年10月にこの路線上の遺跡分布調査を行い31遺跡の存在を確認した。<sup>(註3)</sup> 昭和55年に新たに2遺跡が発見追加され、現在総計33遺跡となっている。

その後、遺跡の処遇や調査方針について日本道路公団仙台建設局と秋田県教育委員会の間に協議が持たれ、最終的に遺跡は記録保存が決定した。昭和54年2月に遺跡の発掘調査依頼があり、秋田県教育委員会では昭和54年度八幡平地区7遺跡の発掘調査を行った。昭和55年度は追加委託契約をも含めて八幡平、花輪地区19遺跡の調査を行い、昭和56年度に8遺跡の調査を行い、3カ年に及ぶ鹿角市内の路線内遺跡調査を全て完了している。

註1 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書 第20集 1970年。

註2 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書 第24集 1972年。

註3 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書(八幡平～十和田錦木)』秋田県文化財調査報告書 第56集 1978年。

## 2. 調査の組織と構成

調査主体	秋田県教育委員会	
調査顧問	坪井 清足	奈良国立文化財研究所所長
	芹沢 長介	東北大学文学部教授
専門指導員	小林 達雄	国学院大学文学部助教授
	林 謙作	北海道大学文学部助教授
	須藤 隆	東北大学文学部助教授
	藤沼 邦彦	東北歴史資料館考古研究科長
	進藤 秋輝	宮城県多賀城跡調査研究研究第一科長
調査担当者	岩見 誠夫	秋田県埋蔵文化財センター副所長 (猿ヶ平II、柏木森遺跡担当)
	桜田 隆	秋田県埋蔵文化財センター文化財主事 (妻の神IV、一本杉遺跡担当)
	小玉 準	秋田県埋蔵文化財センター文化財主事 (乳牛平、明堂長根遺跡担当)
	橋本 高史	秋田県埋蔵文化財センター文化財主事 (妻の神I、中の崎遺跡担当)
	小林 克	秋田県埋蔵文化財センター文化財主事 (室田、案内IV、柏木森遺跡担当)
調査補佐員	藤井 安正、松岡 忠仁、児玉 悅郎、高橋 學、奈良 義博 (以上岩見班)	
	神田 公男、児玉 昭彦、安保 康、池田 洋一	(以上桜田班)
	島山 土、阿部 明人、米田 哲、高橋 修	(以上小玉班)
	安保 徹、福本 雅治、鈴木 功、鈴木 秋良	(以上橋本班)
	関 直、阿部 義行、花田 孝夫	(以上小林班)
事務補助員	佐藤 順子、金沢万里子	
調査協力機関	日本道路公团鹿角工事事務所 秋田県東北総貫自動車道対策事務所 鹿角市建設部建設課高速道路対策室 鹿角市教育委員会	

## II 遺跡の立地と環境

### 1 地形と地質

#### (1) 地形と地質の概要

本地域の地形は大きく見て東西の山地、盆地内の段丘地形、沖積低地の三つに区分される。これらについて秋田県（1973）、内藤（1966、1970）および日本道路公団の東北自動車道土性縦断図表（日本道路公団仙台建設局：昭和53年）等を参考にしてまとめると次のようになる。

**山地：**東側は花輪越以北800～700mと北にゆくほど高度を下げるが、以南では1000m以上の標高で満壯年期のけわしい地形を示し、特に皮投岳（1122.4m）、五の宮峠（1115.0m）など起伏量の大きい山塊が連なっている。

地質は主として新第三紀中新世の火山碎屑岩となるが、それらを貫ぬいて石英安山岩や安山岩を分布している。また、福士川上流には南部の谷内、湯瀬と同様に粘板岩を主とする古生層の露出も知られている。これらの東側山地の山列は南部では南北に連なっているが、花輪越以北では方東方向にのびている。これは新第三紀層の走向に大略一致するほか、貫入岩顔や断層系の方向ともほぼ一致している。

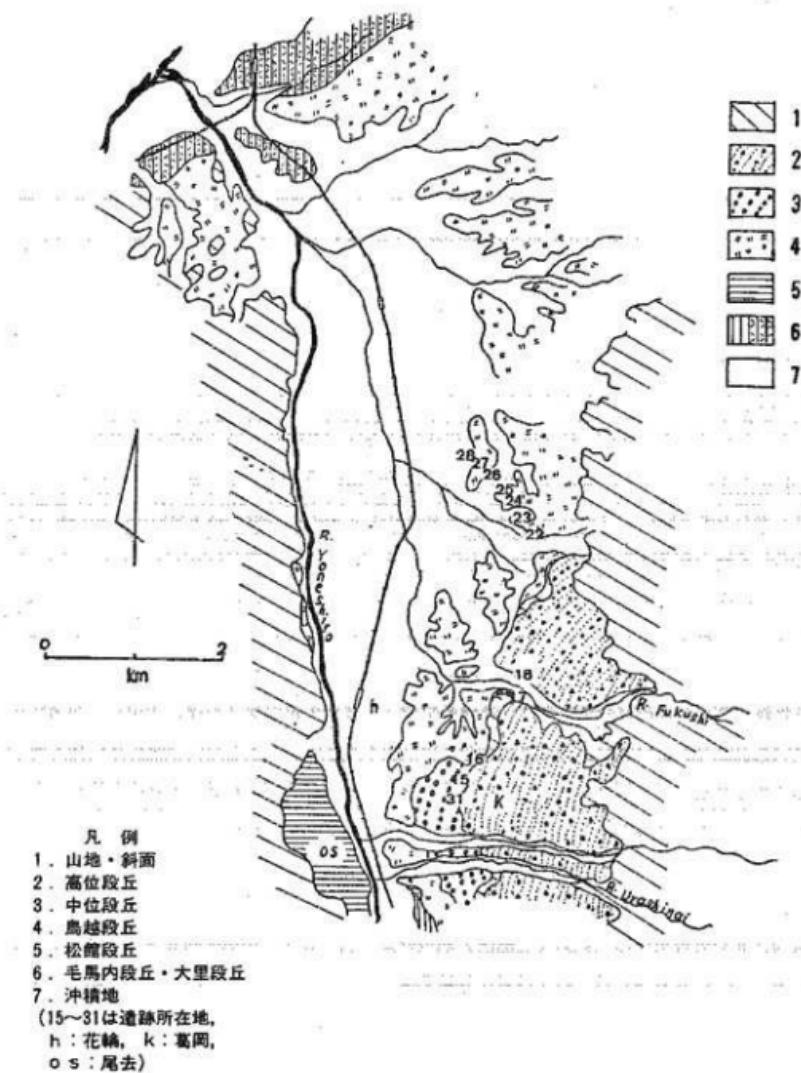
一方、西側山地は南部で400～600m、北部で250～300mで山容も東側山地ほどのけわしさは見られない。地質は東側山地と同様に第三紀中新世の火山碎屑岩を主とするが、大葛層大滝層などでは砂岩、泥岩などの碎屑岩が広く発達している。

**段丘地形：**花輪盆地南部の段丘面は、花輪高位段丘、花輪中位段丘（内藤、1970）、鳥越段丘（秋田県、1973）、松館段丘、大里段丘の5段に区別できる。このうち、鳥越段丘は秋田県（1973）では鳥越段丘・閑上段丘の二つに区別されたものであるが、後者は火碎流堆積物からなる前者の二次堆積物の上面であり、両者を区別する段丘崖の発達も局所的であって連続性に乏しいことから一括して使用する。また、松館・大里の各段丘は内藤（1970）の花輪低位段丘群とされたものである。

一方、花輪盆地の中～北部の段丘面は、高位段丘・鳥越段丘・毛馬内段丘・中位段丘などが見られる。次にそれぞれについて簡単に記載する。

高位段丘は、南部では東側山地の末端部からなだらかに斜面をもって扇状地状に広く分布する。かなり開析されているものの明らかに平坦面を残している。標高は1/25千地形図から、浦志内

\* 以下、高位段丘、中位段丘と略称する。



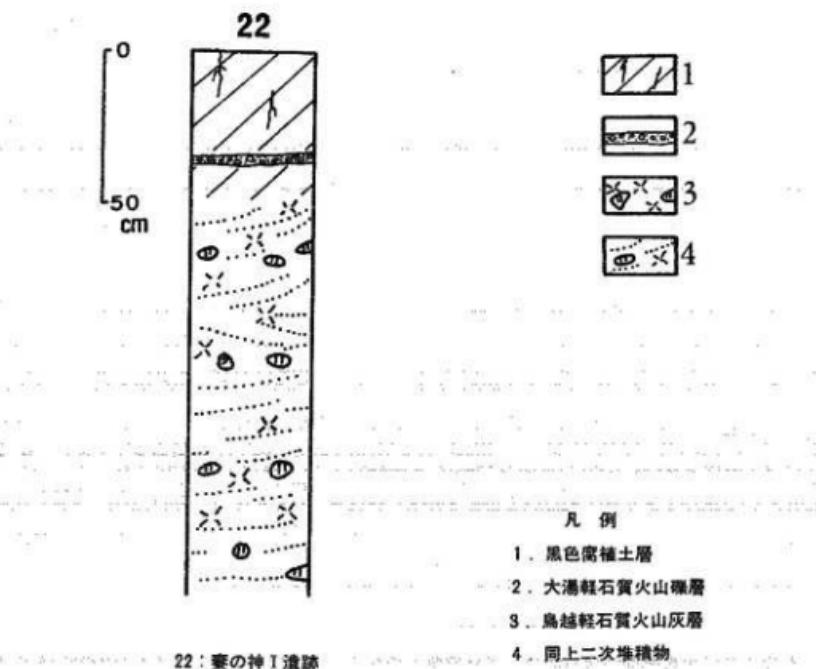
第1図 段丘地形図

川左岸の扇頂部で350m、葛岡北東の末端部で240mであり、平均こう配は約7.2% (4.1°)となる。また、歌内川流域でも320mから250までの高度差をもつ。一方、福士川左岸では350m～250mであるが、右岸では花輪スキー場北東の300mから女森西方の200mまでと明らかに低い。また、平均こう配も福士川以北では約4.4% (2.5°)と小さくなる。盆地の中～北部では南部ほど分布は広くなく、散在的で面の高度も230～240mと低い。構成層は数cmから50cm前後までの亜角礫が雜然と混入した不淘汰礫層であり、地表面に近い部分は数mにわたって風化が進み、礫はくさってマトリックスと大して変わらないかたさになることが多い。段丘面の分布範囲のはかに、葛岡西方では火碎流堆積物の下位に見られたりする。全体的に扇状地堆積物としての層相をよく残している。また、上部は数mが赤褐色の粘土質土になっており、中に末風化の亜角礫もしばしばみられる。最上部には粘土質になった火山灰層がみられることがある。

中位段丘は上田(1965)および内藤(1970)の産土神断層以南にやや広く分布し、浦志内川下流で標高230～180m、歌内川下流で270～200mである。産土神断層以北ではまだ確認していない。末端部は鳥越軽石質火山灰層におおわれるが、明瞭に扇状の地形面を残しており、平均こう配は柏木森の西方で約6.0% (3.5°)である。構成層は黄褐色のシルトないし砂のマトリックス中に数cmから30cm以上の角礫ないし亜角礫が雜然と混入する礫層で、全体的に層理は不明瞭で塊状であるが、末端部では厚さ数cmの連續性のわるいシルトないし砂の薄層を含なこともある。葛岡南方ではN値が70以上の高位段丘礫層の上に、最大6mの厚さで泥炭質粘土層が発達する。この付近は浦志内川と歌内川の扇状地にはさまれた湖沼的な堆積環境にあったものであろう。なお、この粘土層の上位に5～6mの厚さで重なる中位段丘構成層はすでに記載したように不良淘沙の亜角礫からなる礫層であるが、全体的にマトリックスは灰緑色を呈する。同様の色調の構成層は花輪東方の鳥越段丘の下部にもみられる。

鳥越段丘は鳥越軽石質火山灰層(内藤、1966)の堆積面であり大湯環状列石など多くの遺跡をのせて盆地内に最も広く分布する。特に大湯川の西岸および小坂川の左岸、米代川右岸によく発達する。高度は、花輪東方で170～180m、柴内から根市戸付近で150m前後、腰廻から一本木にかけて180m前後と盆地の周辺部にむかって高度をあげるが、特に大湯川沿いでは風張付近を扇頂部とする扇状地様の形態を示す。全域にわたって灰白色～乳白色の火山灰中に白色の軽石が多量に含まれる層相を示すが、大湯川と小坂川の合流点に近いほど層理の明瞭な二次堆積物が発達する傾向がみられる。火碎流台地としての形態をよく示しており、段丘面は平垣で段丘崖は急崖をなすことが多い。なお、小枝指から申ヶ野にかけては部分的に古い高市軽石質火山灰層が見られることがあり、埋没段丘面の存在が指摘されている(内藤、1966)。

\*このことから幕原(1960)は本段丘面を遺跡面と呼んだ。



22: 妻の神 I 造跡

第2図 露頭柱状図

松館段丘は南部で米代川左岸に沿い尾去から松館、荒町にかけて広く分布している。標高は160~170mで、夜明島川、黒沢川等の扇状地の解析された段丘とみられる。構成層は未確認である。盆地中部の東側に、草木川、佐比内沢、間瀬川等による扇状地が発達するが、これらは松館段丘と同時期の可能性がある。大里段丘は南部で米代川右岸沿いに大里付近まで分布する。標高150~155mと低く、構成層は上部はくずれやすい河床性の疊層を主として、田泥質の砂疊層が重なっている。河床性の疊層の上には大湯軽石質火山疊層があり、さらに部分的に軽石質の二次堆積物がその上に見られたりすることから北部の毛馬内段丘に対比できるものと思われる。

毛馬内段丘は大湯川両岸と松の木以西の米代川沿いに発達する最低位の段丘で東能代付近まで連続して分布する。標高は毛馬内付近で110~120m、松の木では112mである。構成層は大湯川沿いでは下部から大湯軽石質火山疊層、毛馬内軽石質火山灰層、不淘汰砂疊層の順に重なるが、米代川沿いでは毛馬内軽石質火山灰層が主となる。毛馬内軽石質火山灰層は米代川沿いでいくつかの遺跡を埋没させており、特に鷹巣盆地における胡桃館埋没遺跡（平安時代中~末期）はよく知られている（秋田県教委、1968、1969、1970、平山、市川、1966）。

ところで、この地域の第四紀地質と地形を特徴づけるものに花輪断層と十和田火山起源の火山碎屑物層があげられる。

花輪断層はほぼ直線的に米代川沿いに北上しており、東西の山地の起伏量、山容のちがい、段丘の非対称的分布等は、断層の東側の山地が第四紀を通じて上昇傾向がより強かったことを物語っており、注目に値する。一方、火山碎屑物層については内藤（1966、1970）、中川、ほか（1972）等によりくわしく知られており、古い方から小坂軽石質火山灰層、高市軽石質火山灰層（<sup>14</sup>C年代で25,850±1,360年前）、鳥越軽石質火山灰層（12,000±250年前）、申ヶ野軽石質火山灰層（8,600±250年前）、大湯軽石質火山疊層（3,680±130年前）、毛馬内軽石質火山灰層（1,280±90年前）に区分されている。このうち大湯軽石質火山疊層の<sup>14</sup>C年代値は同層の下位の炭質物についての値があり、同層の降下時期より古い年代値と考えられる。また、毛馬内軽石質火山灰層は前述のように埋没遺跡との関係から平安時代中~末期とみられており、大湯軽石質火山疊層の降下に引きつづいて流下した同一火山活動にともなう火碎流堆積物であるとの指摘もなされている（大池、1974、藤本、1980）。

## (2) 地 質

### No. 22, 23, 24, 25

いずれも標高161~163mで平坦な鳥越段丘上にある。上位から黑色腐植土層、鳥越軽石質

## II 道跡の立地と環境

火山灰層の順にみられるが、黒色腐植土層中には径 0.5~2.0 cm の鉄石を含む大湯軽石質火山疊層が 5~12cm でみられる。鳥越軽石質火山灰層は上部の 5~7 m が水中の二次堆植物となつており、明瞭な斜交ラミナがみられる。

### 参考文献

- 秋田県教育委員会 (1968, 1969, 1970) 「胡桃館埋没遺跡発掘調査報告 (概報、第2次、第3次)」  
秋田県文化財調査報告書、第14、19、22集
- 秋田県 (1973) 『秋田県総合地質図幅』、「花輪」
- 藤本幸雄 (1980) 「十和田火山起源の火山灰層の重鉱物組成 (その1) 大館、花輪盆地における火山灰層」、「大館工業高研究紀要」
- 藤原建藏 (1960) 「米代川流域の河岸段丘と十和田火山噴出物との関係」、「東北地理」12、2、P 34~41
- 内藤 博夫 (1966) 「秋田県米代川流域の第四紀火山碎屑物と段丘地形」、「地理学評論」第39巻第7号、P 13~34
- 内藤博夫 (1970) 「秋田県花輪盆地および大館盆地の地形発達史」、「地理学評論」第43巻、P 594~606
- 中川 久夫 ほか (1972) 「十和田火山発達史概要」、「東北大地質古生物研究報」第73号 P. 7~18
- 大池昭二 (1972) 「十和田火山は生きている」、「国土と教育」第26号 P. 2~7
- 上田良一 (1965) 「秋田県北部の第三系の層位と造構造運動について」、「秋田地下資源開発研究報告」第32号 P. 1~71

## 2. 環境と周辺の遺跡

秋田県の北東隅に位置する鹿角は、東に八幡平を介して岩手県と境を接し、北には青森県八甲田山系を抱え、年間平均気温花輪 9.4°C、年間平均降水量月 168mm を測り、積雪量概して少なく、年間を通じて昼夜の温度差の大きい内陸型気候を示す地である。

奥羽山脈中に形成された地溝盆地である鹿角盆地は、八幡平から北流する米代川、十和田から南流する大湯川、小坂川の三本の河川流域に開けた沖積地と、複合扇状地及び東部、西部の岡山岳地帯からなっている。盆地中央を流れる米代川、大湯川、小坂川の三本の河川には、東西の岡山岳地帯から多くの小侵蝕谷を伝わって小河川が流れ込み、沖積面よりも 70~80m 程高位にある標高 200m 前後の山岳地帯の段丘を剖析している。そして、こうした小河川の間に、さらに細かな沢筋によって区切られる場合が多く、それらの沢筋によって分断された舌状の台地が、群となって剖析谷と剖析谷の間にいくつか連なって存在する。

鹿角盆地は多くの遺跡をその中に抱えているが、それらの遺跡は前述の標高 200m 前後の段丘地帯に立地し、その段丘が多く的小侵蝕谷によって剖析されているため、分布状態は多くの小河川によって分断された個々の段丘毎に群在の様相を呈する。盆地内で特に遺跡の集中する箇所をあげれば、熊沢川と米代川の合流地点南東の長崎地区、米代川に西流して注ぎ込む歌内川が剖析する大黒地区、同じく米代川支流である福士川周辺の産土神地区、米代川、大湯川、小坂川の合流地点南側の神田地区、同じく北側の源田石地区、小坂川に注ぎ込む荒川の周辺等がある。また、盆地中央部東側の風張台地も広範囲に遺跡が点在する。

鹿角では旧石器時代の遺跡は確認されておらず、調査が行われたり遺物が採集されたりして確認されているのは、全て縄文時代以降の遺跡である。

縄文時代早期の様相は、まだ明確に把握されている状態とは言い難い。三ヶ年にわたる東北縦貫自動車道関係遺跡の調査で、大地平遺跡、上高岡 IV 遺跡、柏木庄遺跡等から、青森県八戸市是川や岩手県三戸市等で出土例があり赤御堂式と呼称される表裏縄文の土器が破片で確認されている。同様の上器は大湯付近からも採集されている。また、上高岡 IV 遺跡、猿ヶ平日遺跡、柏木庄遺跡からは、胎土に多量の纖維を含み複雑な羽状縄文の施された所謂砲弾形の深鉢が出土しており、早期末~前期初頭に位置づけられている。上記の遺跡からは、縄文時代早期東北地方北部に通有のトランシェ様の石器も併せて出土している。他に極く少量ではあるが一本杉遺跡からは貝殻文土器の破片、飛鳥平遺跡からは青森県八戸市でも出土し、草創期の可能性も指摘されている瓜形文類似の土器も破片で出土している。<sup>54</sup>

縄文時代前期の遺跡としては、八幡平玉内にある清水向遺跡があげられる。この遺跡は昭和 29 年武蔵鉄城氏等によって調査され、県内で初めて縄文時代竪穴住居跡 2 棟を確認した遺跡と

\* 表字は第 3 回の遺跡番号と一致する。

第1表 周辺遺跡一覧

&lt;鹿角の中世城館&gt;

記号	城館名	残存状況	城主(伝)	記号	城館名	残存状況	城主(伝)	記号	城館名	残存状況	城主(伝)
A	谷内金館	やや良		S	尾去館	やや良	尾去越中(安保)	2L	柴内館		
B	谷内館	不良	谷内三郎(成田)	T	下館	不	万谷野鷹不良	2M	万谷野鷹	不良	
C	谷内館	不良	一戸源正左衛門(武田)	V	玉内館	不	高市館不良	2N	高市館	不良	高市玄蕃(成田)
D	長牛塚	不良	西支那・源氏の館	W	上山館	不	上台館	2P	上台館		
E	白鷹館	やや良	白鷹鷹猪由	X	茶臼館	不	新牛米館	2Q	新牛米館	不	新生米左近(奈良)
F	長内会館			Y	花輪館	不	新牛米館	2R	新牛米館	不	新生米左近(奈良)
G	三ヶ田館	やや良	三ヶ田在近(阿部)	Z A	かいねま館	やや良	小平館	2S	小平館	やや良	小平源次郎(奈良)
H	長源館	やや良	長源下桂(成田)	Z B	高瀬館	やや良	小枝指無	2T	小枝指無	不	小枝指左馬之助(奈良)
I	長内古館	やや良		Z C	荒石門館	不	一ヶ森館	2V	一ヶ森館	やや良	
J	長内館	やや良	長内刑部(成田)	Z D	花輪古館	不	丸尾館	2W	丸尾館	やや良	奈良越後
K	下和志貢館	不		Z E	黒土館	やや良	黒土井後(秋元)	2X	高屋館	やや良	高屋筑前(秋元)
L	田中館			Z F	(無名館)			2Y	甚石館	不	甚石十郎(成田)
M	湯瀬館	消滅	高瀬中納(安倍)安寄内	Z G	(無名館)			3A	中草木館	不	良
N	小豆沢館	不	小豆沢賀河(秋元)	Z H	妻の神館			3B	闇上館	不	良
O	石鳥谷館	やや良	石鳥谷元郎(安保)	Z I	乳井館	不	乳牛六郎(安保)	3C	毛馬内館		
P	大里館	不	大里(大里)(安保)	Z J	柴内館	不	柴内孫次郎(安保)	3D	瀬田石館	やや良	瀬田石太郎左衛門(奈良)
Q	松原館	やや良	松原越前(安保)	Z K	西町館						

&lt;鹿角の周辺遺跡&gt;

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
36	大谷館	53	尾去館	70	大野曲場	87	上ノ野	104	申ケ野
37	三ヶ田館	54	酒水向	71	天塚	88	上ノ野	105	草木
38	長谷館	55	三光塚1号	72	戸森I	89	上ノ野	106	小板野
39	新城15、17、18番地	56	三光塚2号	73	野日	90	上ノ野	107	中野
40	新城26、27番地	57	六角平	74	野IV	91	上ノ野	108	白坂
41	長烟	58	玉内	75	万谷野	92	上ノ野	109	瀬田石A・B
42	天狗塚	59	甘藷	76	野田	93	上ノ野	110	狐平
43	三ツツ	60	下平	77	野I	94	上ノ野	111	柏
44	下毛和忠首	61	郷上神A・B・C	78	野II	95	上ノ野	112	寺上日
45	下野の柴	62	赤坂B	79	長野	96	石野古墳	113	瀬
46	後田	63	東山C	80	野V	97	曲谷	114	大湯
47	石鳥島	64	東山A	81	野C	98	枯草	115	一本木
48	岩瀬	65	東山C	82	花輪C	99	曲谷	116	八幡堂
49	中ノ島	66	赤坂A	83	花輪A	100	曲冠		
50	下島岡A	67	日向殿	84	堀II・田	101	平元		
51	尾去	68	御体堂	85	芦羽	102	平元		
52	在室	69	戸森	86	上ノ野区	103	島野		



1:50,000

1000m 0 1000 2000 3000

〈東北縦貫自動車道路線上の遺跡〉

番号	遺跡名	時代・時期	道構・遺物	収録報告書
1	居熊井	縄文(後期)	縄文堅穴住居跡、土壙、土器場跡、縄文土器	東北縦貫自動車道発掘調査報告書1
2	湯瀬館	縄文	縄文土器、掘立柱建物跡、礫石配列建物跡	# I
3	上山田	縄文(前期)	縄文土器	# I
4	大地平	縄文	弥生	# I
5	堂の上	縄文(前中期)	縄文土器	# I
6	歌内	縄文	平安	II
7	鳥居平	縄文	縄文堅穴住居跡、土壙、縄文土器、平安堅穴住居跡	# III
8	飛鳥平	縄文(早期・後期)平安	縄文堅穴住居跡、縄文土器	# III
9	北の林I	縄文(中期・後期)平安	縄文堅穴住居跡、土壙、平安堅穴住居跡、掘立柱建物跡	# III
10	北の林II	縄文(中期・後期)平安	縄文堅穴住居跡、土壙、縄文土器、平安堅穴住居跡	# III
11	上島岡	縄文	縄文堅穴住居跡、縄文土器	# IV
12	上島岡田	縄文	縄文土器	# I
13	上島岡背	縄文	縄文土器、平安堅穴住居跡、土壙跡、須恵器	# V
14	朝林	縄文	平安	V
15	柏木森	縄文	平安	V
16	中の崎	縄文(後期・晚期)平安	縄文土器(後期・晚期)、平安堅穴住居跡、掘立柱建物跡、須恵器、土器跡	# VI
17	孫行門館	縄文	平安	VII
18	案内I	縄文	平安	VII
19	案内II	縄文	縄文堅穴住居跡、縄文土器、平安堅穴住居跡、土器跡	VII
20	猪ヶ平I	縄文(中期・晚期)弥生	縄文堅穴住居跡、フラスコ状ビット、縄文土器、弥生土器	VII
21	猪ヶ平II	縄文(早期・後期)	縄文堅穴住居跡、フラスコ状ビット、縄文土器	VII
22	妻の神I	縄文(晚期)平安	中世	VIII
23	妻の神II	縄文	平安	XI
24	妻の神田	平安	中世	XI
25	孔牛平	縄文	平安	XII
26	下孔牛	縄文	平安	XII
27	西町I	縄文	弥生	XII
28	西町II	縄文	縄文土器	XII
29	室田	中世?	なし	XII
30	明堂長柄	縄文	土壙、フラスコ状ビット、縄文土器、溝状遺構	XII
31	上島岡II	縄文	縄文堅穴住居跡、縄文土器	XII
32	一本杉	平安	縄文土器、平安堅穴住居跡、掘立柱建物跡、土器跡、須恵器、中世建物跡	VII
33	案内田	縄文	平安	VII
34	小豆鉢	縄文	平安	VII

第3図 東北縦貫自動車道路線上及び周辺遺跡

して注目された。出土した土器は、前期後葉円筒下層d式を中心として、円筒下層a式、円筒下層b式等であり、また円筒下層d式土器に伴って、山形県吹浦遺跡等に類例の求められる大木6式土器も出土している。また、東北縦貫自動車道関係の調査では、居熊井遺跡<sup>1</sup>、上山田遺跡<sup>2</sup>、堂の上遺跡<sup>3</sup>、小豆沢館遺跡<sup>4</sup>等から主に円筒下層a式を中心とした前期後葉の土器の出土をみている。

縄文時代中期の遺跡は東北縦貫自動車道関係遺跡の調査で数箇所調査されている。飛鳥平遺跡<sup>5</sup>、北ノ林I遺跡<sup>6</sup>、北ノ林II遺跡<sup>7</sup>では石組の複式がをもった竪穴住居跡が検出され、天木9～10式土器を出土している。また歌内遺跡では、フラスコ状土壙の壙底から中ノ平式土器を出土している。

後期は、鹿角における縄文時代各期を通じて、調査、発見例の最も多い時期である。東北縦貫自動車道関係の遺跡では、後期中葉の捨場と竪穴住居跡を確認した居熊井遺跡<sup>1</sup>、後期初頭の埋設土器を検出した飛鳥平遺跡<sup>8</sup>、後期中葉の石組のがをもつ竪穴住居跡を検出した案内I遺跡<sup>18</sup>、案内III遺跡<sup>9</sup>、猿ヶ平I遺跡<sup>10</sup>、猿ヶ平II遺跡<sup>11</sup>、後期後葉の竪穴住居跡を検出した案内II遺跡等がある。さらに昭和43年には奥山潤氏等によって、十和田大湯の黒森山麓竪穴群遺跡が調査され、後期前葉の土器を伴った石組をもつ竪穴住居跡の検出が報告されている。<sup>12</sup>

また、昭和26年、27年の両年に調査が行われ史跡指定された大湯環状列石は、その後数回にわたって周辺の分布調査がなされ、現在の万座、野中郷の両列石の他にも付近数箇所に配石群の存在が確認されている。<sup>13</sup>

晩期では、清水向遺跡と同じ台地に立地する玉内遺跡<sup>51</sup>が知られ、晩期中葉の遺物とともに所謂日時計形の列石が確認されている。また、この玉内遺跡の立地する台地とちょうど米代川を挟んでの対岸には東在家遺跡があり、晩期中葉までの遺物を多く出土している。東北縦貫自動車道関係の調査では、柏木森遺跡<sup>15</sup>、明童長根遺跡<sup>31</sup>から袋状土壙群が検出され、晩期初頭の遺物を多く出土している。

秋田県内における弥生時代の遺跡は今までのところ縄文時代のそれと較べると、知られている遺跡数、その内容とも少なく且つ不明確な点が多い。鹿角はその中にあっては比較的該期様相の理解がすんでいる地域である。

鹿角盆地北端の小坂町周辺では、奥山潤、安保彰両氏の活動により、内ノ岱遺跡、曙岱遺跡等から、天王山式類似の土器、後北C式土器が採集され報告されている。また鹿角市尾去沢からは田舎館式類似の土器が出土している。東北縦貫自動車道関係の調査では、大地平遺跡<sup>4</sup>、駒林遺跡<sup>14</sup>から縄軸の格縄体の回転施文された土器片、奥山潤氏等命名によるところの小坂X式土器が出土し、さらに猿ヶ平I遺跡<sup>20</sup>からは天王山式類似の土器が出土している。しかし、これらの弥生時代の土器は今のところ断片的な出土に限られており、伴出する他の遺物や遺構等、未

だ不明な点が多く残されている。

奈良、平安期の古代の遺跡も近年調査例を増して来ている。古くは昭和初年に木村善吉氏等によって調査され、その後、後藤守一氏等によって調査された菩提野堅穴群遺跡がある。この遺跡は計12カ所の堅穴群からなると想定されたが、その調査当初から覆土中に入る火山灰層が注目され、以来鹿角における該期の遺跡調査は、この火山灰層との関係解明を大きな視点の一つとして据えることになる。近年では大湯環状列石周辺の分布調査、鳥野遺跡、源田平遺跡、<sup>103</sup> 小平遺跡等の調査で、該期堅穴住居跡が検出され、また、東北縦貫自動車道関係の調査では、歌内遺跡、飛鳥平遺跡、北の林I<sup>5</sup> 遺跡、北ノ林II<sup>9</sup> 遺跡、上葛岡IV<sup>10</sup> 遺跡、駒林遺跡、一本杉遺跡<sup>11</sup> 中ノ崎遺跡、案内I<sup>16</sup> 遺跡、案内III<sup>18</sup> 遺跡、妻ノ神II<sup>22</sup> 遺跡、妻ノ神II<sup>23</sup> 遺跡、下乳牛遺跡<sup>26</sup> 等で堅穴住居跡が検出されている。さらに御休堂遺跡<sup>27</sup>、高市向館遺跡でも同様の住居跡が検出されている。菩提野堅穴群から含めた現在まで確認されている該期住居跡の総数は、144棟という膨大な数にのぼる。

他に、奈良、平安期の遺跡としては、十和田錦木字曲谷地にある枯坂古墳、尾去沢字東在<sup>38</sup><sub>55, 56</sub> 家にある三光塚古墳群<sup>39</sup>があげられる。いずれも終末期の小円墳であり、玉類、刀装具等を出土している。また十和田字宝田にも古墳群<sup>40</sup>があったと伝えられている。

中世鹿角は、鎌倉時代にこの地に移住したと伝えられる成田氏、安保氏、秋元氏、奈良氏の所謂鹿角四氏の支配する地域であった。これら四氏から出自する各々の庶流は、盆地内に所領を得て『鹿角由来集』『鹿角由来記』などに伝えられる鹿角四十二館にそれぞれ居を構えて割拠する。この状態は近世鹿角が南部領となるまで続く。

鹿角には、鹿角四十二館あるいは四十八館に該当するものを含めて計58カ所に及ぶ「館」跡が確認されている。これらの「館」跡は、舌状に張り出した台地を、1~數本の堀切を構築して造りあげている多郭連続式のものが多い。すなわち、一カ所の「館」跡は数個の郭が連っている。また、郭自体が元来舌状台地であったため、「館」として使用される以前にも人間の居住域として選定される事が多く、郭上面の調査では時として縄文時代、平安時代の堅穴住居跡等が中世の造構、遺物等とともに検出される。

今までに発掘調査を行われているのは、小枝指七ヶ館、長牛館、御休堂遺跡<sup>41</sup>等があり、東北縦貫自動車道関係では、湯瀬館遺跡と乳牛館の一部と考えられている妻ノ神I<sup>22</sup>、同II<sup>23</sup>、同III<sup>24</sup> 乳牛平遺跡<sup>25</sup>が調査終了している。

さい かみ いち  
妻 の 神 I 遺 跡

遺 跡 番 号 No.22  
所 在 地 鹿角市花輪字妻の神31番地他  
調 査 期 間 昭和56年4月20日～8月12日  
発 挖 予 定 面 積 3,219m<sup>2</sup>  
発 挖 調 査 面 積 4,800m<sup>2</sup>

## 1. 遺跡の概観

### (1) 遺跡の立地と環境

妻の神 I 遺跡は、秋田県鹿角市花輪字妻の神31番地他に所在する。

岩手県に源を発する米代川が秋田県側に西流し、湯瀬の急峻な渓谷を出て、北へと流れを変え、ここに鹿角盆地を形成する。鹿角盆地は東西約10km、南北約30kmの細長い形をしており、遺跡は盆地の中央やや南よりの東側の鳥越段丘面上に位置する。乳牛部落西方の段丘面は、いくつかの塀とそれによって区切られた郭がみられ、この付近一帯は乳牛館の一部とみられる。当遺跡においては、I 郭、II 郭および3重の塀が検出された。

### (2) 遺構の分布

妻の神 I 遺跡は、中世の館跡を形成した空堀が創る範囲内を調査対象として行った。調査を進めることにより I 郭をとりまく部分的に 2 重の塀のさらに外側にも塀のあることが確認され、結局 I 部郭分は 3 重に塀が廻ることがわかった。塀跡は調査区域外にも延びており、かなり大規模なものであったらしい。

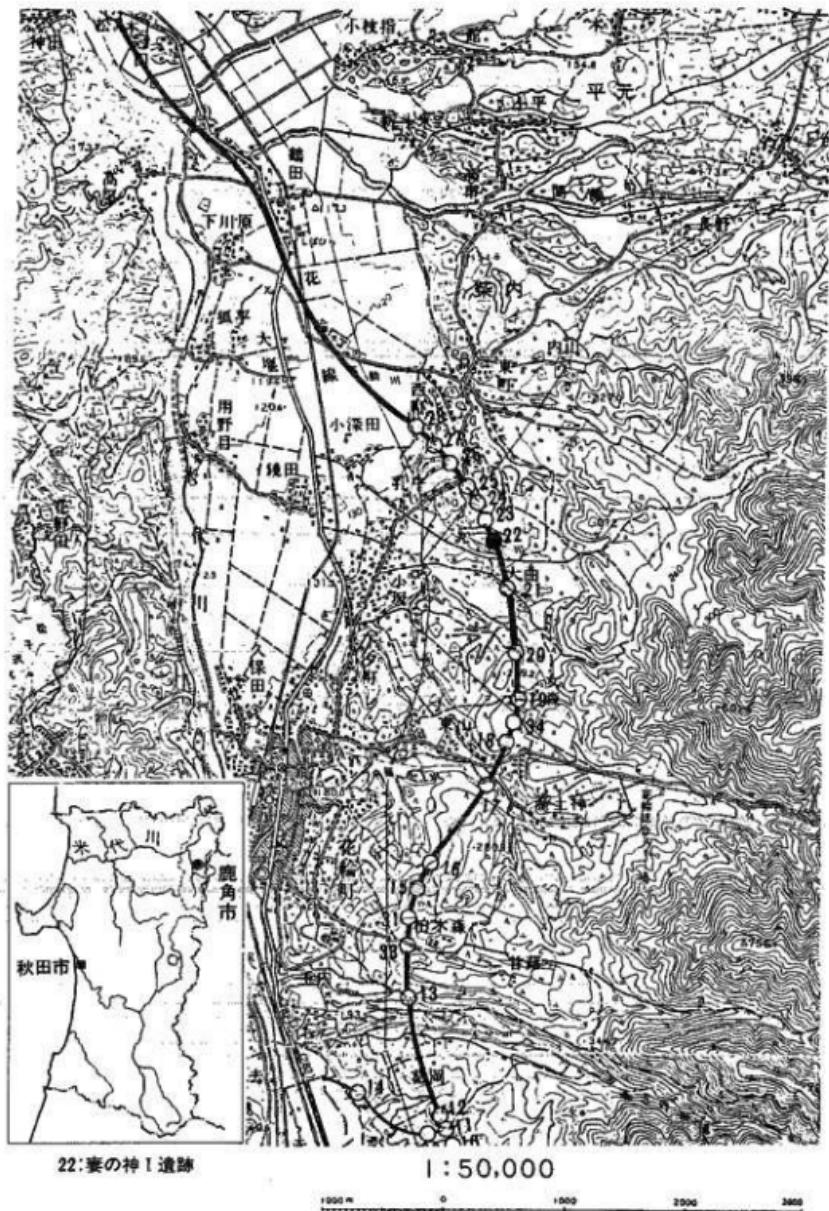
塀は古地の縁辺部を利用して構築されており、古地上からは平安時代の竪穴住居跡、縄文時代晩期のフ拉斯コ状ピット等が検出された。住居跡によっては塀によって一部を切られたものもあった。中世の館跡に付随したとみられる遺構は塀跡以外検出されなかった。

### (3) 遺物の出土状態

出土遺物は縄文時代晩期と平安時代の遺物がほとんどである。縄文時代の遺物は遺構外では I、II 郭ともまとまりなく少量出土するのみであり、フ拉斯コ状ピットのうち S K 023 上塙からややまとまって出土しているにすぎない。フ拉斯コ状ピット出土土器はいずれも底縁部から出土した。

平安時代の遺物は、住居跡内を主にほぼ全面にわたり出土したが、量的にはそれほど多いものではない。東北北部に限定してみられる把手付土器も出土した。

また、南側の塀跡から焼けた板が 2 枚出土しており、これが中世のものと考えられる唯一の出土遺物である。このように館跡として遺構自体は中世のものでありながら、遺物は縄文、平安時代のものの出土がほとんどであった。



第1図 遺跡位置図

## 2. 調査の方法

妻の神 I 遺跡は、郭部と堀部の比高が大きく日本道路公団の付設した STA 杖の見通しが困難であり、また歴史時代の遺跡は方位に合わせるという方針から、STA 155+00を15-Kとして磁北に合わせて 5m × 5m のグリッドを組んだ。南北基線をアルファベットとし、西へ行くにつれて進むものとした（西←→M、L、K、J、I →東）。東西基線は算用数字とし、北へ行くにつれて進むものとした（北←→17、16、15、14、13 →南）。各グリッドの名称はこれら基線の直交する東南隅の座標の算用数字とアルファベットの組み合わせにより呼ぶこととした（15-K、14-L……）。

実測は堀断面については、グリッドと関係なく I 郭から放射状にいれた10本のトレンチにより、S = 1%で行った。その他郭上面の遺構の実測はグリッド中心に、間尺もしくは 1m のマス目を組んで原則として S = 1% で、カマド等は S = 1% で行った。また地形実測図は航空測量による遺跡付近図と現場における S = 1% の平板測量による実測図をもとに作成した。

報告書使用挿図は現場作成のもの及び整理期間中作成のものとともに、原則として次のように縮尺を統一した。住居跡平・断面図：1/50、土廻平・断面図：1/50、溝平・断面図：任意、土器実測図：1/50、上器拓影図：1/50、石器実測図：1/50。遺構計測表のうち( )としたものは、重複等で正確な法量を測り得なかったものである。したがって( )内の数値は実際の数値より小さいものとなっている。

なお、報告書に使用したスクリーン、トーンは次のとおりである。これ以外のものについては図中に示した。

焼土

炭化物

炭化米

遺構・遺物記号は、平城京発掘調査で実施しているものを参考に、下記のように定めたものを使用した。

記号	遺 構	記号	遺 構	記号	遺構・遺物	記号	遺 物
SA	櫛列・柱列	SK	土 垒	S(X)	焼 土 遺 構	RQ	石 製 品
SB	建 物 跡	SK(F)	フテスコ状ビット	S(X)R	捨 地 場	RT	具 製 品
SC	廐	SK(H)	堅穴 状 遺 構	S(X)S	配 管 (管 道)	RU	人 体 骨
SD	溝・堀・濠	SK(O)	ビ ッ ク ト	S(X)U	土 器 墓 遺 構	RV	紙・布 製 品
SE	井 戸 跡	SK(S)	幕	RC	炭 化 物	RW	木・竹 製 品
SF	墓 地・土 墓	SK(T)	トラップビット	RM	金 属 製 品	RY	そ の 他
SG	死 池	S(L)	河 川	RN	自 然 製 品		
SH	広 場	SM	道路・橋・陸段	RO	骨 角 製 品		
SI	住 居 跡	SX	そ の 他	RP	土 製 品		



第2図 遺跡地形図



第3図 グリッド配置図

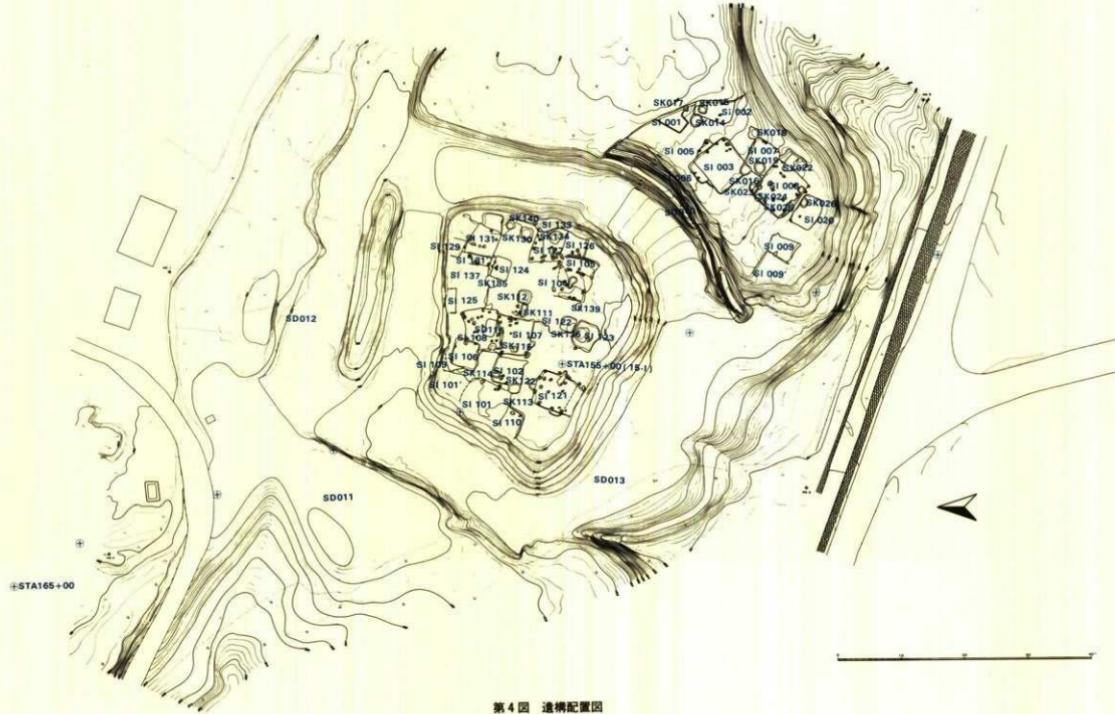
### 3. 調査経過

妻の神 I 遺跡は昭和56年4月20日～8月12日の間にわたって行われたが、調査の全般的な経過は次のとおりである。

4月20日から調査にはいったが、遺跡はほとんどが山林だったため、枝のとりはらい等を最初に行つた。それらのはば終了した23～25日の間にグリッド杭を設定した。グリッドは磁北にそう。坪掘りの結果、郭部分の表土は薄く機械による排土は不可能と判断されたので、24日に堀部分だけ機械により抜根した。27日からはグリッドと関係なしに、放射状に堀に数本のトレンチをいれ、掘り下げはじめるとともに、II郭から調査にはいった。当所の範囲外にもトレンチを入れたところ、堀跡が検出されこれを S D-011 とした。この結果、遺跡の範囲は当所の3,219m<sup>2</sup>から5,081m<sup>2</sup>へと広がった。

5月12日に II郭から住居跡を検出、S 1 001 とした。II郭の表土をほぼ剥ぎ終えた6月2日から平行して I郭の表土剥ぎにはいった。12日に II郭にももう1丘、堀が廻っているのを検出し S D-010 とした。7月7日に I郭から住居跡を検出、I郭と II郭の混乱を避けるため S 1 101 とした。8日に II郭からプラスコ状ピットを検出し (SK 023 とした)、掘り下げたところ中から縄文時代晩期の土器が3点出土した。I、II郭を平行して調査し、住居跡、土塙を検出し、検出順に造構番号を付していった。22日にはほぼ精査の終了したII郭の造構配置図を作成した。その後は一部、中の崎遺跡へ分離していたグループも加えて、I郭の精査を急いだ。

8月8日にはば精査を終了。11、12日に I郭の造構配置図を作成して、妻の神 I 遺跡の調査を終了した。最終発掘面積は 4,800m<sup>2</sup>であった。この間7月25日には現地説明会を開いて、地域の埋蔵文化財保護意識の高揚に努めた。



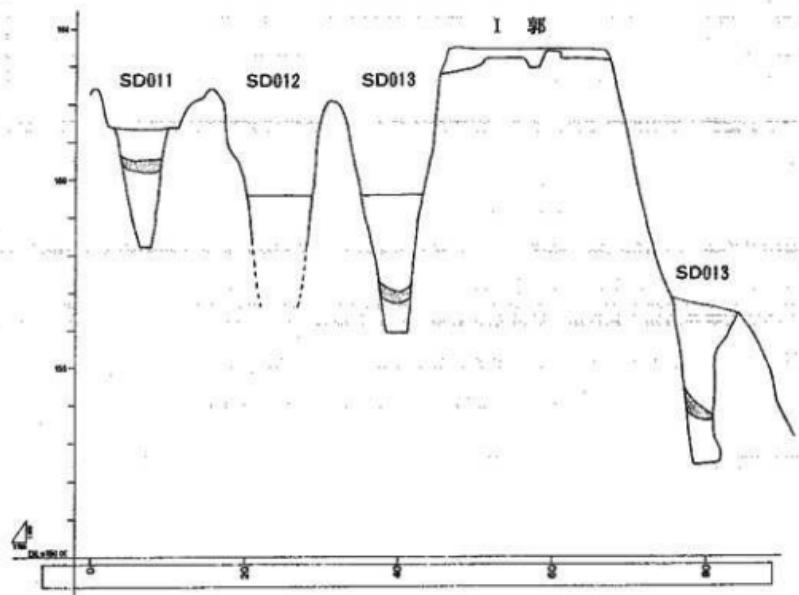
第4図 造構配置図

#### 4. 遺跡の層位

妻の神 I 遺跡の層位は郭部と堀部で違うため、以下それについて概略を述べる。

**郭部** I、II 郭ともに表土は極めて薄く、10~20cm程度の黒褐色土におおわれているのみである。したがって、遺物は縄文時代のものと平安時代のものが混在して出土する状況であり、層位的に把握することは不可能であった。

**堀部** 堀は4条検出されているが、外側のSD010、011と内側の012、013とでは堆積状態に差異がみられる（第5図）。特に大きな違いは、浮石（スクリーントーン部分）の埋土内における相対的位置である。外側の堀においては上部の方にみられるのに対し、内側の堀においては下部の方にみられる。浮石がどちらもプライマリーなものとしても、二次的だとしても同時期に流入したものとすれば、外側の堀が内側の堀より古い可能性が大きく、浮石降灰時期以前に外側の堀が構築されていた可能性もでてくる。南部のSD010と013の切り合ひ関係もSD010が古く、新旧関係を裏付けるものかもしれない。しかし、浮石の相対的位置だけで新旧関係を判断することはできず、可能性があるというにすぎない。



第5図 遺跡断面図

## 5. 遺構と遺物

### (1) 遺構

#### ア. I 郭の遺構

##### (ア) 壁穴住居跡

S I 101 壁穴住居跡

(表内のカッコ掛けは確認可能な値を示す…以下同じ)

第1表 挿図番号		第6図		図版番号	図版5
遺構名	S I 101	検出地区	17-K、17-L、18-K、18-L		
法		南東側壁	北西側壁	南西側壁	北東側壁
壁長	(51.0cm)	—	—	(180cm)	(205cm)
壁高	8.1~21.3cm	—	—	35.3~36.5cm	22.1~22.4cm
壁溝幅	—	—	—	—	—
壁溝深	—	—	—	—	—
形態	方形	面積	(38.8m <sup>2</sup> )	主軸方向	
かまど位置	なし			構築素材	

・ プラン確認 地山面で確認したが、南西部のS I 110壁穴住居跡及び北東部のS I 101' 壁穴住居跡との切り合い関係は平面プラン確認時点ではできなかった。断面観察して新旧関係は不明確ながらも S I 101'、110壁穴住居跡より新しいことが確認された。

・ 壁面の状態 南東壁は掘り込みプランを確認できたが、その他のプランは極めて不明確であった。また、北東壁は堀跡により切られているため不明である。したがってはっきりと確認えたのは南東壁のみであるが、壁はゆるやかに立ち上がる。

・ 覆土 上部は削平を受けている。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒褐色土 10Y R % 粘性ややあり。しまり中。黄褐色土少量混入。
2. にぶい黄褐色土 10Y R % 粘性なし。しまり中。炭化物少々、黄褐色土少量混入。
3. 暗褐色土 10Y R % 粘性あり。しまり中。黄褐色土少量混入。
4. 暗褐色土 10Y R % 粘性あり。しまりよし。にぶい黄褐色土、黄褐色土少量混入。
5. にぶい黄褐色土 10Y R % 粘性あり。しまり中。黄褐色土少量混入。
6. 褐色土 7.5Y R % 粘性あり。しまりよし。



第6図 SI101, 101', 110堅穴住居跡

**床面** 床面はあまり堅固でない。数個の礫が検出された。

**壁溝** なし。

**柱穴、ピット** 住居跡内に 6 個あるが、明確に柱穴となりうるものはない。

**カマド** なし

**遺物とその出土状態** いずれも床面からまとまりなく出土した。第24図 1, 2 は縄文時代後期のものと思われる。この他はすべて土師器もしくは須恵器の破片である。土師器表の口縁部は若干くびれをもつもので、口縁部先端も薄くならない類のものである。

### S I 101 積穴住居跡

第2表		挿図番号	第6図		図版番号	図版5
遺構名		S I 101'	検出地区		18-J, 18-K, 19-J, 19-K	
法 量			南東側壁	西北側壁	南西側壁	北東側壁
	壁長	(410cm)	—	—	—	—
	壁高	16.9~30.4cm	—	—	—	—
	壁溝幅	—	—	—	—	—
形 態	壁溝深	—	—	—	—	—
	方形?	面積	(11.9m <sup>2</sup> )	主軸方向		
かまと	位置	なし		構築素材		

**プラン確認** 地山上面にて、S I 101 積穴住居跡の北東部に黒褐色土の掘り込みを検出した。

**壁面の状態** 北東・北西壁は S D013 墓跡によって、南西壁は S I 101 積穴住居跡によってそれぞれ切られている。唯一、確認される南東壁も、きわめて不明瞭である。

**覆土** S I 101 積穴住居跡の覆土を参照のこと。

**壁溝** なし。

**柱穴、ピット** なし。

**カマド** なし。

**遺物とその出土状態** 3 片の破片が出土したのみで、いずれも土師器の表の破片である。

### S I 102 積穴住居跡

第3表		挿図番号	第7図		図版番号	図版6
遺構名		S I 102	検出地区		16-J, 16-K, 17-J, 17-K	

法 量	東 側 壁		西 側 壁	南 側 壁	北 側 壁
	壁 長	450cm	448cm	427cm	403cm
	壁 高	6.9~18.0cm	9.9~13.5cm	8.2~13.3cm	9.6~17.5cm
	壁 溝 幅	—	—	—	—
形 態	方 形		面 積	(19.8m <sup>2</sup> )	主軸方向
かまど	位 置	な し		構築素材	

プラン確認 地山上面にて方形プランを確認した。S K113、114土壤を切っている。

壁面の状態 壁面もしっかりしており、直角に近い立ち上がりを呈す。

覆土 上面が削平を受けている。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒褐色土 10Y R % 粘性ややあり。しまり中。褐色土及び黄褐色土3%混入。
2. 黒色土 10Y R % 粘性ややあり。しまり中。褐色土5%混入。

床面 当遺跡検出の堅穴住居跡としてはしっかりしている。

壁溝 なし

柱穴、ピット 住居跡内中央に2個、対角線上に2個あるが、明確な柱穴となりうるものは検出されなかった。

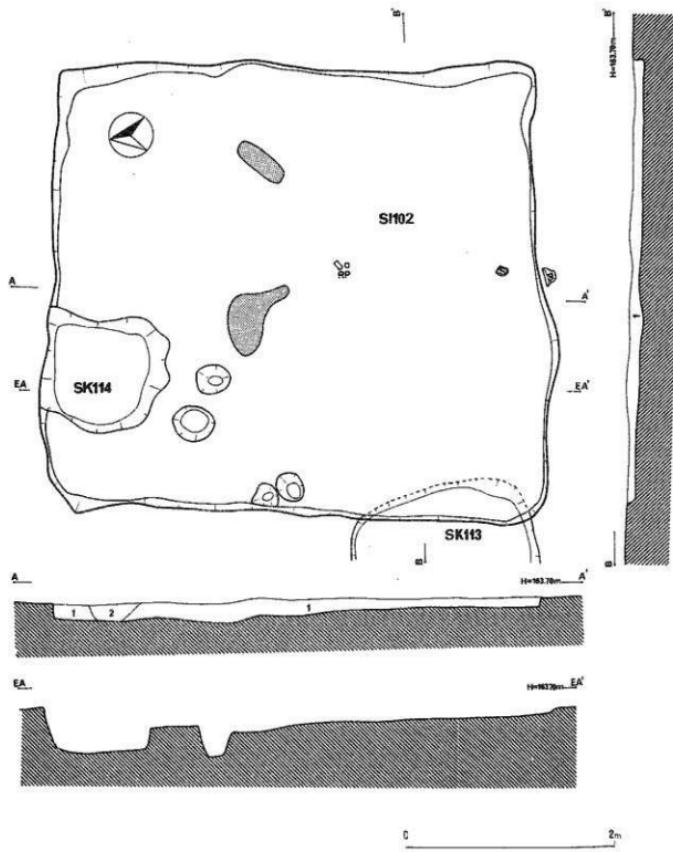
カマド 住居跡内に2ヶ所焼土が検出されたが、かまど・炉跡などは検出されなかった。

遺物とその出土状態 第24図3・4は縄文土器の破片、5は土器飾壙の破片で回転糸切り技法が施されている。その他の遺物は、土師器の表の破片が出土しており、口縁部はほとんどくびれがなく、先端は銳角的なものと肥厚するものが混在している。

第27図46は砥石である。

### S I 103堅穴住跡

第4表		挿図番号	第8図		国版番号	国版6
遺構名	S I 104	検出地区	14-H、14-J、15-H			
法 量	北 東 側 壁		南 西 側 壁		南 東 側 壁	北 西 側 壁
	壁 長	—	(142cm)		—	531cm
	壁 高	—	14.3~20.0cm		—	13.1~27.6cm
	壁 溝 幅	—	—		—	14~21cm
壁 溝 深		—	—		—	5.9~15.9cm
形 態	方 形?		面 積	(23.8m <sup>2</sup> )	主軸方向	
かまど	位 置	な し		構築素材		



第7図 SH102堅穴住居跡

**プラン確認** 地山上面にて黒褐色土の方形プランを確認したが、そのラインは極めて不明確で S I 105 穴住居跡との区別もつかなかった。

**壁面の状態** 北東壁の一部は削平及び S I 105 穴住居跡に切られているため不明。南東壁及び南東壁の一部は S I 105 穴住居跡に切られているため不明。しかし、北西壁はしっかりしており、ほぼ垂直に立ち上がる。

#### 覆土

- 1、褐色土 10Y R 1/2 黏性ややあり。しまり中。にふい黄褐色 (10Y R 1/2)、明黄褐色 (10Y R 1/2) 粒子混入。
- 2、褐色土 10Y R 1/2 黏性ややあり。しまり中。
- 3、暗褐色土 10Y R 1/2 黏性ややあり。しまり中。明黄褐色 (10Y R 1/2) 粒子混入。
- 4、にふい黄褐色土 10Y R 1/2 黏性あり。しまりよし。
- 5、褐色土 10Y R 1/2 黏性ややあり。しまり中。明黄褐色土 (10Y R 1/2)、にふい黄褐色土 (10Y R 1/2) 混入。
- 6、にふい黄褐色土 10Y R 1/2 黏性ややあり。しまり中。
- 7、黒褐色土 10Y R 1/2 黏性ややあり。しまりよし。明黄褐色土 (10Y R 1/2) 多量混入。

**床面** 床面は比較的しっかりしている。その高さは S I 105 穴住居跡とはほぼ同一レベルにある。

**壁溝** 北壁に確認された。

**柱穴、ピット** 3個のピットが確認されたが、南西限のピットが柱穴になると思われる。

**カマド** なし

**遺物とその出土状態** 第24図 6~9に示す上器が出土した。9は鏃の羽口と思われ、スクリーン部分は強い熱変成を受けていた。その他の遺物は大部分が土師の甕の破片で、若干のくびれがあり、先端部が若干薄くなるが鋸角的というほどではない。

#### S I 105 穴住居跡

第5表		検査番号	第8図		国版番号	国版6・7
遺構名		S I 105	検出地区		14-G、14-H、15-G、15-H	
法 量	壁長	—	北東側壁	(215cm)	南東側壁	北西側壁
	壁高	—	—	—	—	397cm
	壁溝幅	—	—	20.6~21.9cm	—	25.2~34.1cm
	壁溝深	—	—	—	—	13~19cm
					8.9~12.9cm	

形態	方形	面積	(3.0m <sup>2</sup> )	土軸方向	
かまど	位置	な	し	構築素材	

**プラン確認** 地山上面にて黒褐色土の方形プランを検出したが、北東壁は削平を受けているため不明、北西壁は S I 104 積穴住居跡を切っているものの平面プランを把握することはできなかった。

**壁面の状態** 南東、南西壁は比較的しっかりしており、壁もほぼ垂直に立ち上がる。他の壁は不明確である。

**覆土** S I 104 積穴住居跡の欄参照

**壁溝** 壁溝は南東壁と北西壁・南西壁の一部に確認された。おそらくは全周するものであろう。

**柱穴、ピット** 隅に 3 個の柱穴、壁溝にそって数箇の柱穴が確認された。その他中央部にも数箇のピットが確認された。

**炉** 住居跡南西部を地床炉として使用していたと思われる。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

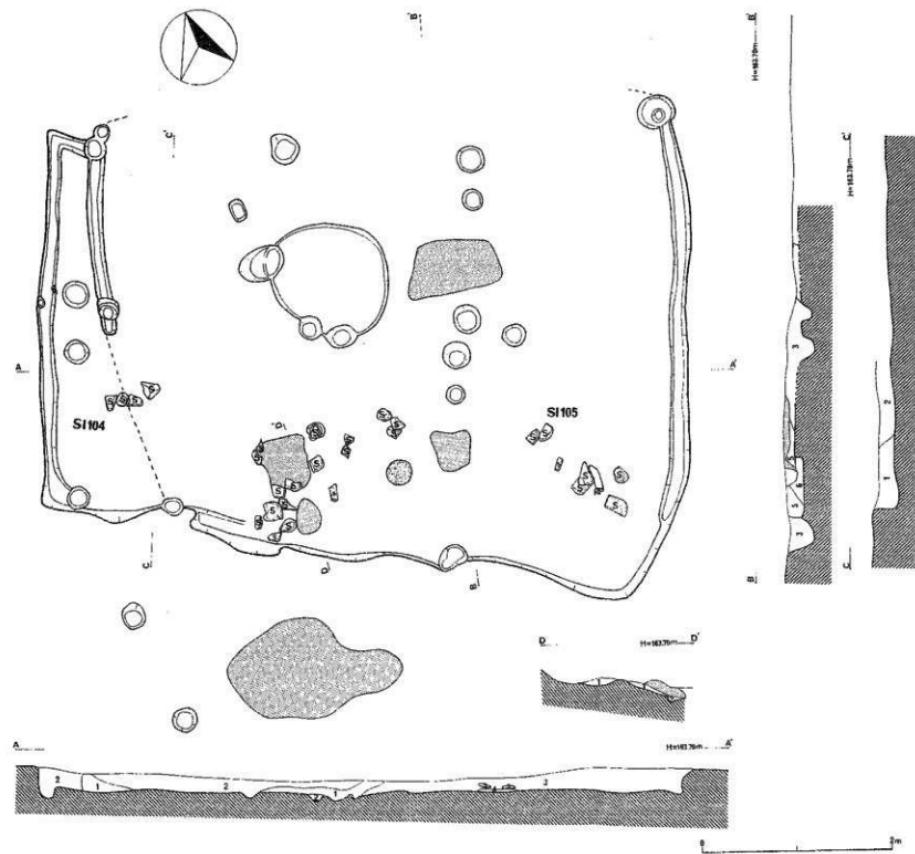
1、褐色土 10Y R 4% 粘性なし。淡黄色(5 Y R %) 姫土粒子混入。

2、暗褐色土 10Y R 4% 粘性なし。

**遺物とその出土状態** 土師器の环の底部が 1 片出土した以外はすべて土師器の壺の破片であり出土量も多くない。环は回転糸切りによるものである。壺の口縁部は若干くびれ、くびれの部分が最も厚く、先端は鋭角的である。多面も S I 104 積穴住居跡出土のものに比べて細かい調整が行われる。

#### S I 106 積穴住居跡

第6表		挿図番号	第9図		図版番号	図版 8
遺構名	S I 106	検出地区	18-I, 18-J			
法 量	東側壁	西側壁	南側壁	北側壁		
	壁長	360cm	370cm	408cm	371cm	
	壁高	18~25.4cm	11.5~26.9cm	—	5.7~16.8cm	
	壁溝幅	18~20cm	17~24cm	—	14~23cm	
	壁溝深	3.9~9.1cm	24~9.2cm	—	5.9~7cm	



第8図 SI104,105竪穴住居跡

形態	方形	面積	16.6m <sup>2</sup>	主軸方向	24° E
かまど位置	南壁に2基検出			構築素材	芯部石組

プラン確認 地山上面にて黒褐色の落ち込みを確認したが切り合いかはげしく、平面にてはつきりとプランを検出することはできなかった。

壁面の状態 切り合っている壁をのぞいては、比較的しっかりしている。

#### 覆土

- 暗褐色土 10Y R % 粘性なし。しまりなし。明黄褐色 (10Y R %) 粒子混入。
- 暗褐色土 10Y R % 粘性なし。しまりなし。明黄褐色 (10Y R %) 粒子混入。
- 暗褐色土 10Y R % 粘性なし。しまりなし。
- 暗褐色土 10Y R % 粘性なし。しまりなし。

床面 床面はほとんど凹凸がなく、しっかりしている。

壁溝 確認されたのはとぎれとぎれであるが、ほぼ全周するものと思われる。

柱穴、ピット 壁溝内に3個の柱穴を確認した。

カマド 南壁に2基検出したが遺存状態は極めて不良である。当初は東寄りに建設し破棄して西寄りに新設したものと思われる。袖部等はほとんど残っていない。

- 暗褐色土 10Y R % 粘性ややあり。しまり中。焼土粒子、赤褐色 (5Y R %) ブロック混入。
- 褐色土 10Y R % 粘性なし。しまりなし。焼土粒子 (5Y R %)、明黄褐色 (10Y R %) 粒子混入。

遺物とその出土状態 第24図10~12の繩文土器片の他は、ほとんどが土師器の破片で、そのうち大部分は甕の破片である。1环も数点ながら出土しており、内面黒色処理を施されたものが多く、ロクロ痕も明確である。底底部がえぐれているものも出土している。甕口縁部はほとんどくびれがなく、先端が鋭角的なものが出土している。

#### S I 107堅穴住居跡

第7表		拂岡番号	第10図		図版番号	図版9
造構名		検出地区	16-I, 16-J, 17-I, 17-J			
法 量	壁長	636cm	東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁高	12.2~15.2cm	24.7~29.6cm	28~31.4cm	—	—

法 量	號	溝幅	—	—	—	—
		壁溝深	—	—	—	—
形 かまど	態	隅丸方形	面積	34m <sup>2</sup>	主軸方向	
位 置	置	な し			構築素材	

プラン確認 地山上面にてプランを確認したが、北壁部は削平を受けており、検出できなかった。北側で S I 108堅穴住居跡を切っている。

壁面の状態 北壁部をのぞいては比較的しっかりしている。

覆土

1. 黒褐色土 10YR 5/2 粘性なし。しまりなし。

2. 黒褐色土 10YR 5/2 粘性なし。しまりなし。

床面 凹凸が激しく床面も堅固ではない。

壁溝 なし。

柱穴、ピット 住居跡北西隅に 1 個、その他に 8 個のピットを検出した。

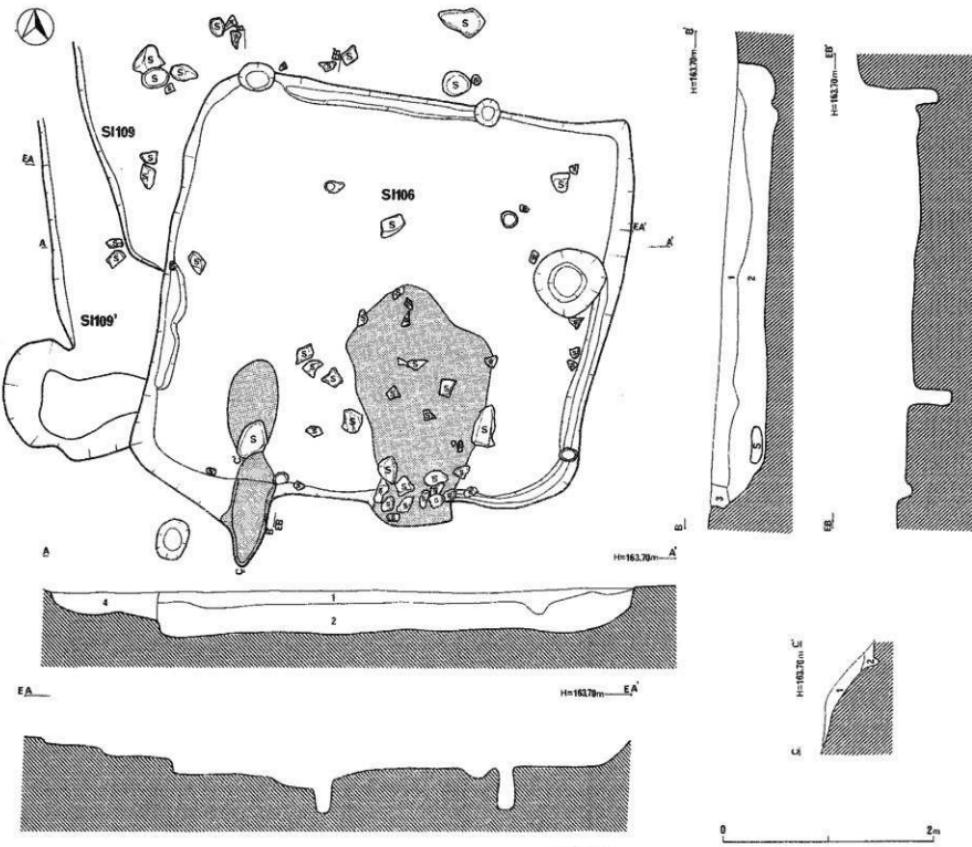
カマド なし。

遺物とその出土状態 第24図13~16に示す土器が出土した。大部分が土師器の壺と甌の破片である。16は壺で回転糸切りの底部で、この壺も含め黒色処理を施したものが多く出土する。甌の口縁部はほとんどくびれがなく、先端が鋭角的なものが多い。1点だけあるが砂粒を底部に付着したいわゆる砂底の土器も出土している。

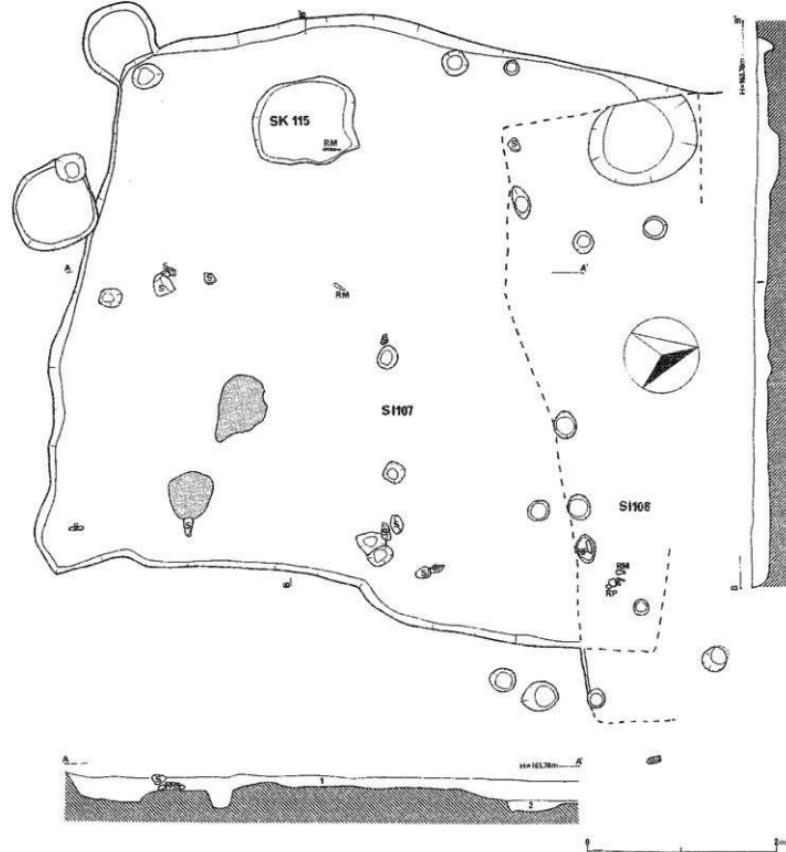
第27図47に示す磨製石斧が出土した。石質は凝灰岩である。

#### S I 108堅穴住居跡

第8表		補圖番号	第11図		図版番号	図版9
遺構名		S I 108	検出地区		16-H、16-I、16-J、17-H、17-I、17-J	
法	壁長	—	東側壁	(378cm)	南側壁	北側壁
量	壁高	—		11.9~33.1cm	(620cm)	(322cm)
	壁溝幅	—			5.4~25.8cm	10.7~13.3cm
	壁溝深	—		—	—	7~20cm
形	態	方形	面積	(32.7m <sup>2</sup> )	主軸方向	N 88° W
かまど	位 置	東壁			構築素材	芯部石組



第9図 SI106, 109, 109' 穂穴住居跡



第10図 SK107堅穴住居跡

**プラン確認** 地山上面にて黒褐色土の落ち込みを確認したが、切り合が激しく S I 107 竪穴住居跡の覆土を剥いて、南壁は検出したが、東壁は確認がほとんどできなかった。S I 106 107 竪穴住居跡によって切られており、これらより古い。

**壁面の状態** 壁面も不明瞭なところが多い。西壁の切られてない箇所のみしっかりしている。

#### 覆土

1. 黒褐色土 10Y R % 粘性なし。しまりなし。
2. 黒褐色土 10Y R % 粘性なし。しまりなし。
3. 明黄褐色土 10Y R % 粘性ややあり。しまり中。
4. 焼土炭化物混入。
5. 黑褐色土 10Y R % 粘性なし。しまりなし。明黄褐色(10Y R%)粒子混入。

**床面** 床面は若干の凹凸があるものの比較的しっかりしている。

#### 壁溝

北壁の一部に確認された。

#### 柱穴、ピット

住居跡壁ぎわに 7 個(内隅に 2 個)、住居跡内に数個のピットを確認した。

#### カマド

東壁に検出された。遺存状態は極めて不良である。

1. 黒褐色土 10Y R % 粘性なし。しまり中。焼土粒子混入。
2. 赤褐色土 5 Y R % 焼土。
3. 暗褐色土 10Y R % 粘性なし。しまりなし。
4. 褐色土 10Y R % 粘性なし。しまりなし。
5. 褐色土 10Y R % 粘性ややあり。しまり中。灰白色及び明黄褐色粒子混入。

**遺物とその出土状態** 第24図17に示す繩文土器片の他は、土師器の环と甌及び須恵器の甌の破片が出土した。土師器の环は内面が黒色処理されているものがほとんどで、底部は回転糸切り技法で切り離す。土師器の甌の口縁部はほとんどくびれがなく先端が観角的なものもあるが、口唇部が肥厚し、くびれを持つものが多く出土する。砂底の土器も 1 点出土している。

#### S I 109 竪穴住居跡

第9表		挿図番号	第9図		図版番号	図版 8
遺構名	S I 109	検出地区	18-J, 19-J			
法		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁	
量	壁長	—	(220cm)	—	—	
	壁高	—	6.4~23.6cm	—	—	

形態	方形?	面積	(3.7m <sup>2</sup> )	主軸方向	
かまど	位置	なし		構築素材	

**プラン確認** 地山上面にて S I 106 竪穴住居跡の西側に検出した。しかしプランは明確でなく、断面から推定した箇所も多かった。S I 106 竪穴住居跡により切られており、これより古い。

**壁面の状態** きわめて不明瞭である。南東隅は掘り過ぎたものであろう。

**覆土** S I 106 竪穴住居跡の欄参照。

**床面** 残存東側に落ち込んだ箇所があり、住居跡の切り合いかとも思われたが、断面観察しても明瞭とはならなかった。

**壁溝** なし。

**柱穴、ピット** なし。

**カマド** 残存部においては検出されなかった。

**遺物とその出土状態** 遺物も出土しなかった。

#### S I 110 竪穴住居跡

第10表		挿図番号	第6図		図版番号	図版5
遺構名	S I 110	検出地区	16-L, 17-L			
法 量		南東側壁	北西側壁	南西側壁	北東側壁	
	壁長	(290cm)	—	(410cm)	—	
	壁高	33.4~38.3cm	—	35.3~45.4cm	—	
	壁溝幅	—	—	—	—	
形 態	壁溝深	—	—	—	—	
	方形	面積	(13.9m <sup>2</sup> )	主軸方向		
かまど	位置	なし		構築素材		

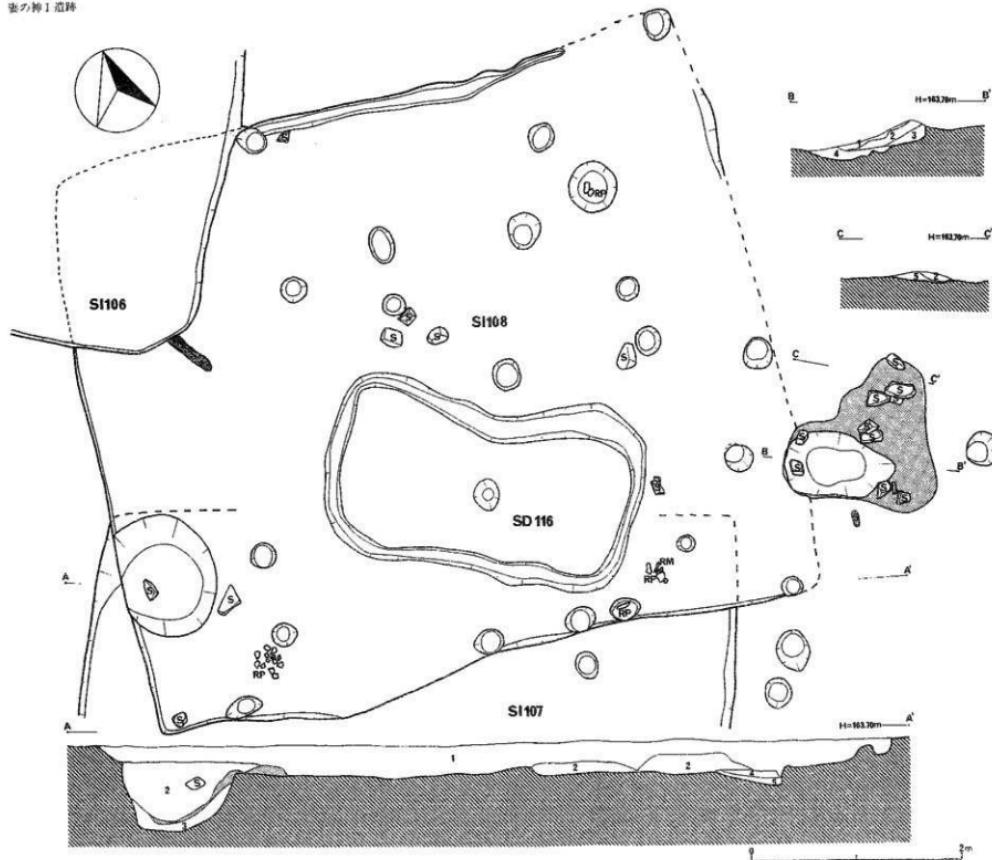
**プラン確認** 地山上面にて S I 101 竪穴住居跡の南東部に黒褐色の落ち込みを確認した。しかし、平面では新旧関係がとらえられず断面にて S I 110 竪穴住居跡が新しいことがわかった。

**壁面の状態** 南東壁を除いて極めて不明瞭である。

**覆土** S I 101 竪穴住居跡の欄参照のこと。

**床面** 若干の凹凸があるが比較的しっかりしている。

**壁溝** なし。



第II圖 SI108堅穴住居跡

**柱穴、ピット** 住居跡内に 2 個確認された。

**カマド** なし。

**遺物とその出土状態** 第24図18~20に示す土器が出土した。19は土師器壺の底部で回転糸切りである。20は鹿角市内の東北縦貫自動車道関係遺跡としては妻の神 I 遺跡でのみ出土した把手付形土器である。外面はヘラケズリ、内面はユビナデによる調整が行われている。把手部分ではなく中空かどうかは不明である。その他の遺物は土師器の杯と甕の破片で、大部分が甕の破片である。甕は内側にユビ状のナデアトが明確に残るものが多く、口縁部はくびれがなく先端部が鋭角的なものが多い。

### S I 121 穴住居跡

第11表		挿図番号	第12図		図版番号	図版10
遺構名		S I 121	検出地区	15-K, 15-L, 16-K, 16-L		
法 量	北東側壁		南西側壁	南東側壁	北西側壁	
	壁長	511cm	510cm	575cm	511cm	
	壁高	36.6~41.1cm	8.6~12.6cm	29~33cm	42.6~50.1cm	
	壁溝幅	—	—	—	—	
形 態	壁溝深	—	—	—	—	
	方形	面積	33.7m <sup>2</sup>	主軸方向	N 59° W	
かまど	位置	東壁	構築素材	芯部石組		

**プラン確認** 地山上面にて検出した。南西壁は極めて不明瞭であった。北東部が S K 122 土壙を切っている。

**壁面の状態** 南西壁は不明瞭で床面の固さからやっと見えられた。その他の壁は比較的しっかりしている。

#### 覆土

- 褐色土 10Y R 4% 粘性なし。しまり中。白色粒子少量混入。
- にじむい黄褐色土 10Y R 5% 粘性なし。しまり中。白色粒子、明黃褐色粒子が共に少量混入している。
- 暗褐色土 10Y R 3% 粘性なし。しまりなし。白色粒子混入。
- 黒褐色土 10Y R 2% 粘性なし。しまりなし。黄褐色、白色極大粒少量混入。
- 褐色土 10Y R 4% 粘性なし。しまり中。白色粒子混入。
- かくらん。

7. 橙灰色土 7.5 Y R % 灰層

床面 比較的しっかりしている。床面は概ね平坦である。

壁溝 北東壁の極一部に確認された。

柱穴、ピット 住居跡の壁に沿って 6 個、住居跡内にも数個のピットが確認された。カマド煙道部の両側にも 2 個確認された。

カマド 妻の神 I 遺跡検出のカマドの中では遺存状態が良好で、南側の袖が流れているものの、北側は比較的しっかりしている。しかし上部は削平を受けており、芯部の石組などは一部しか残っていない。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. にぶい黄褐色土 10 Y R %

2. 褐色土 10 Y R % 粘性ややあり。

3. にぶい黄橙色土 10 Y R %

4. にぶい黄褐色土 10 Y R %

5. 明褐色土 7.5 Y R %

6. 褐色土 7.5 Y R % 粘性ややあり。

7. 橙灰色土 7.5 Y R % 灰層。

8. 橙色土 7.5 Y R % 粘土質。

9. 褐色土 7.5 Y R %

10. 泥黄橙色土 7.5 Y R % 灰黄褐色土 (10 Y R %) 混入。

11. 灰褐色土 5 Y R %

12. 黒色土 10 Y R %

13. 褐色土 10 Y R %

14. 暗褐色土 10 Y R % にぶい黄褐色土 (10 Y R %) 少量混入。

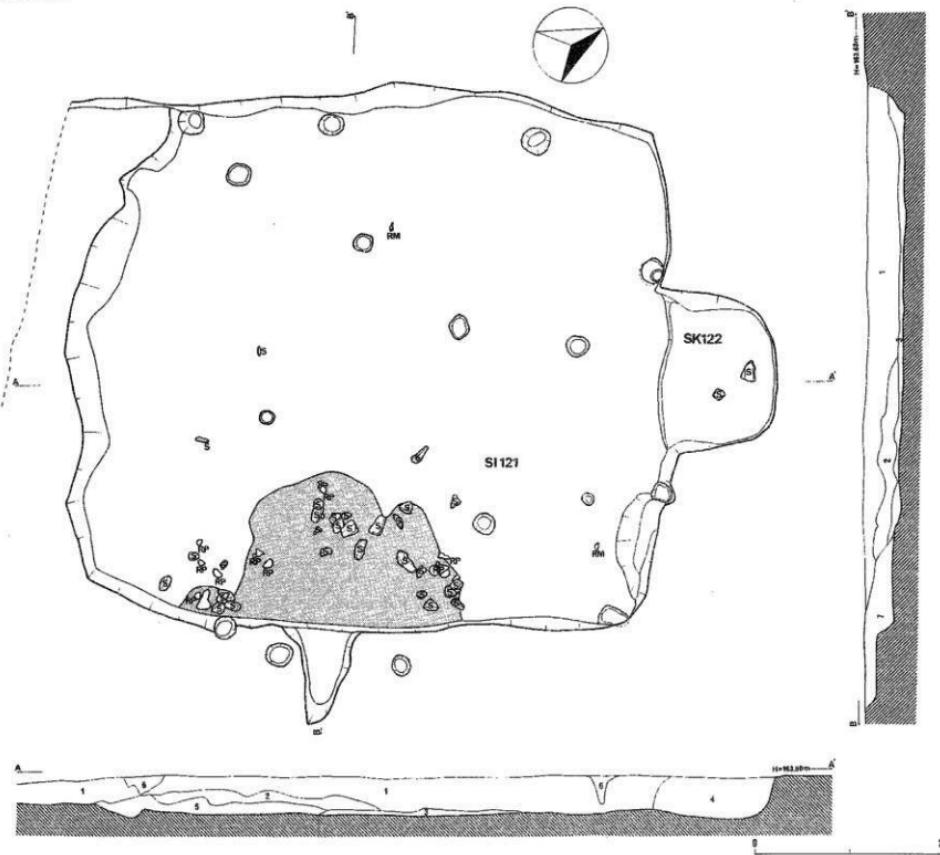
15. 黑褐色土 10 Y R % にぶい黄褐色土 (10 Y R %) 混入。

16. 浅黄色土 2.5 Y R % 明黄褐色土 (7.5 Y R %) 少量混入。粘土質。

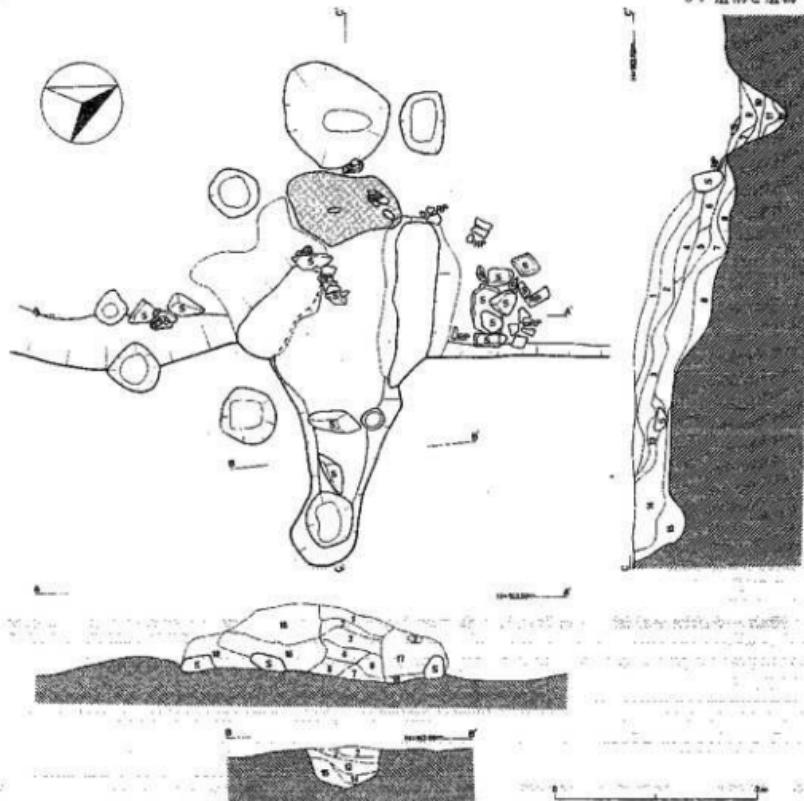
17. にぶい黄褐色土 10 Y R % 粘性ややあり。しまりなし。黄褐色、白色粒子混入。

18. にぶい黄橙色土 10 Y R % 粘性なし。しまり中。赤色粒子上部にやや混入。

遺物とその出土状態 第25図21~26に示す土器が出土した。25、26は把手付土器でいずれも把手部分は中空になっており、断面形はほぼ円形を示す。どちらも二次的焼成を受けているが、25は特に口縁部付近が顕著である。その他の遺物は土師器及び須恵器の壺の破片で、杯は出土していない。土師器壺の破片が大部分であり、その口縁部はくびれのほとんどないものと、若干のくびれのあるものとが約3:2の比率で出土している。また、その先端部はほとんどが鋭角的なものである。



第12図 SI121竪穴住居跡



第13図 SI 123 壁穴住居跡カマド

## SI 123壁穴住居跡

第12表	補岡番号	第14回	図版番号	図版10
遺構名	SI 123	検出地区	14-I、14-J、15-J	
法	壁 長	345cm	南 東 側 壁	340cm
壁 高	36.1~40.9cm	南 西 側 壁	23~29.7cm	北 西 側 壁 33.7~43cm
壁溝幅	—	—	—	—
壁溝深	—	—	—	—
形 態	方形	面 積	15.7m <sup>2</sup>	主軸方向
かまど	位 置	な し	構築素材	

## 妻の神 I 造跡

**プラン確認** 地山上面にて検出した。SK 136 土壙を切っている。

**壁面の状態** どの壁面もあまりしっかりしていない。壁はゆるやかな立ち上がりを呈する。

## 覆土

1. 黒褐色土 10Y R 5% 粘性なし。しまりなし。黄褐色土、明黄褐色土少量混入。
2. 棕色土 10Y R 5% 粘性ややあり。しまり中。炭化物少量混入。
3. 黑褐色土 10Y R 5% 粘性なし。しまり中。
4. 黑褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり。しまり中。黄褐色土少量混入。
5. にふい黄褐色土 10Y R 5% 粘性あり。しまり中。
6. 暗褐色土 10Y R 5% 粘性なし。しまりなし。明黄褐色土、黄褐色土少量混入。
7. にふい黄褐色土 10Y R 5% 粘性なし。しまりなし。
8. 黄褐色土 10Y R 5% 粘性あり。しまり中。黑褐色土少量混入。

**床面** 床面は SK 136 土壙との重複部分以外は比較的しっかりしている。

**盤溝** なし。

**柱穴、ピット** 住居跡内にピット 1 個を確認した。

**カマド** なし。

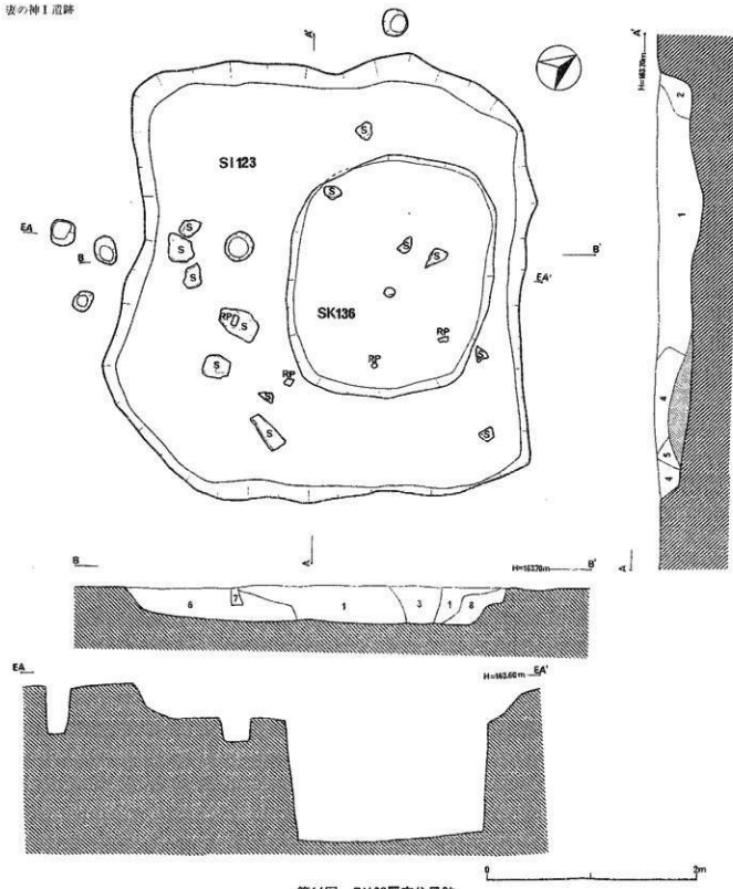
**遺物とその出土状態** 土師器の杯と裏の破片が出土しており、甕が大部分である。土師器甕の口縁部はくびれがないか、若干くびれを持つものが出土している。

## S I 124 積穴住居跡

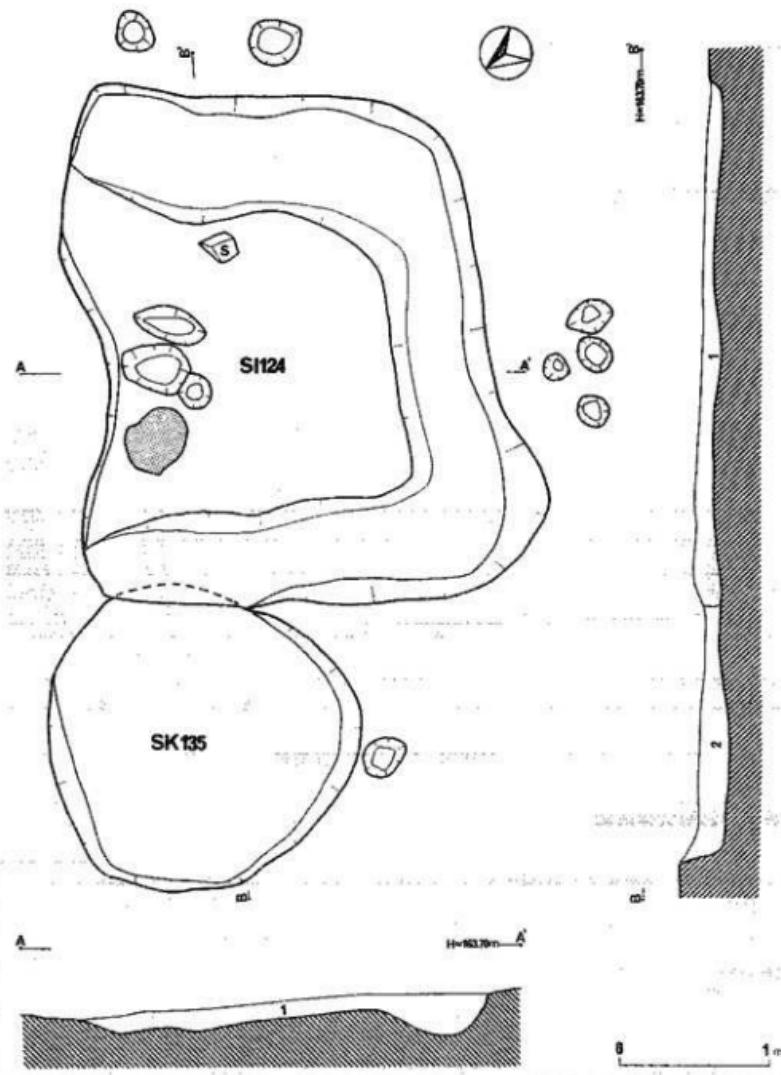
第13表		押図番号	第15図		国版番号	国版11
遺構名		S I 124	検出地区		16-G、17-G、17-H	
法 量	北 東 側 壁	南 西 側 壁	南 東 側 壁	北 西 側 壁		
	騒 長	344cm	295cm	233cm	250cm	
	騒 高	4~10.2cm	21.4~29.9cm	7.4~9cm	28.7~29.6cm	
	騒 溝 幅	—	—	—	—	
形	整	方形	面 積	9.0m <sup>2</sup>	主軸方向	
	かまと	位 置	な し		構築素材	

**プラン確認** 地山上面にて方形プランを確認した。SK 135 土壙を切っている。

**壁面の状態** 南西壁以外はしっかりしていない。



第14図 SI123竪穴住居跡



裏の神 I 住跡

1. 黒褐色土 10Y R % 粘性ややあり。しまり中。

2. 黒褐色土 10Y R % 粘性ややあり。しまり中。明黄褐色 (10Y R %) ブロック混入。

床面 凹凸があり床面もしっかりしていない。

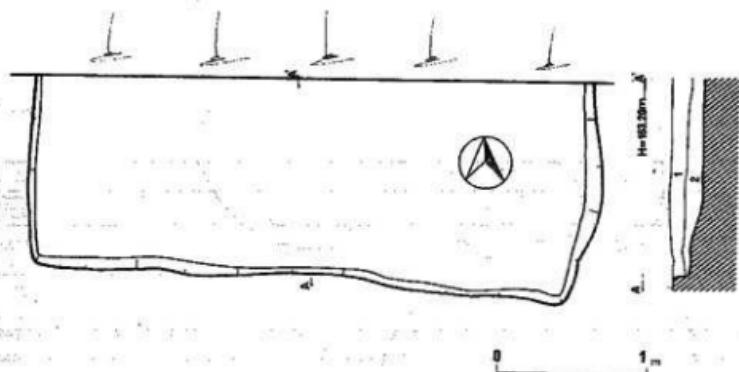
壁溝 なし。

柱穴、ピット 住居跡内に 3 個のピットが確認されたが、住居跡に伴う柱穴とは言い難い。

カマド なし。

遺物とその出土状態 土師器の环と甕の破片が出土しており、甕の破片がほとんどである。

甕の口縁部はくびれは少ないが反りの明確なものが出土している。



第16図 SII 125 竪穴住居跡

S II 125 竪穴住居跡

第14表		押団番号	第16図		図版番号	図版
遺構名	S II 125	検出地区	18-H			
法 量	東側壁	西側壁	南側壁	北側壁		
	壁長	(147cm)	(125cm)	355cm	—	—
	壁高	5.4~12.5cm	12.6~20.8cm	7.1~14.4cm	—	—
	壁溝幅	—	—	—	—	—
形 態	方形	面積	(5 m <sup>2</sup> )	主軸方向		
	かまど位	置	なし	構築素材		

**プラン確認** I郭北端のほぼ中央部にて、地山上面で確認した。北側の半分以上が S D013 崩跡によって切られている。

**壁面の状態** 上部削平を受けているものの壁面は比較的しっかりしており、ほぼ垂直に近く立ち上がる。

#### 覆土

1. 黒褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり。しまり中。

2. 黄褐色土 10Y R 5% 粘性なし。しまりよし。

**床面** 床面は若干の凹凸があり、堅固でない。

**壁溝** なし。

**柱穴** なし。

**カマド** なし。

**遺物とその出土状態** 遺物は出土しなかった。

#### S I 126 竪穴住居跡

第15表		掲図番号	第17図		図版番号	図版 11・12
遺構名		S I 126	検出地区		14-F、14-G、15-G	
法		東側壁		西側壁	南側壁	北側壁
壁長		—		455cm	(350cm)	(100cm)
壁高		—		9.2~22.6cm	9.2~13cm	17cm
壁溝幅		—		—	—	—
壁溝深		—		—	—	—
形態		方形	面積	(14.9m <sup>2</sup> )	主軸方向	—
かまど	位置	なし			構築素材	

**プラン確認** I郭東南端より浮石が大量に混入した不整形プランを確認した。掘り下げたところ方形の竪穴住居跡のところどころに大ブロック状に浮石がはいりこんだものであることが確認された。東部は S D013 崩跡により切られており、北壁は S K134 土壙により切られており、これらの遺構より古い。

**壁面の状態** 西側の壁面には大量の浮石が検出された。北壁は削平を受けているため、不明確である。

**覆土** 覆土の状態からみて浮石降灰時期と比べてそれほどの時間差はないものと思われる。

1. 棕色土 10Y R 5% 粘性なし。しまりよし。浮石(アッシュ)。

2. にふい黄褐色土 10Y R 2/6 粘性なし。しまりよし。
3. 黄褐色土 10Y R 2/6 粘性なし。しまりなし。1mm~2cmの粒子でつぶつぶである。浮石(バークス)。
4. 暗褐色土 10Y R 2/6 粘性なし。しまり中。

床面 床面より若干高いレベルまで浮石が混入している。床面や若干の凹凸があり堅固でない。

壁溝 なし。

柱穴、ピット 住居跡に5個のピットを確認した。

カマド なし。

遺物とその出土状態 第25図28~34、第27図51に示す遺物が出土した。その他の遺物は土師器の壺と甕の破片で、当遺構においては甕の割合がたいへん高い。壺は黒色処理のものが多く底部も回転糸切りで切り離したものが多い。甕の破片はくびれを持っており、反りの明確なものが出土している。

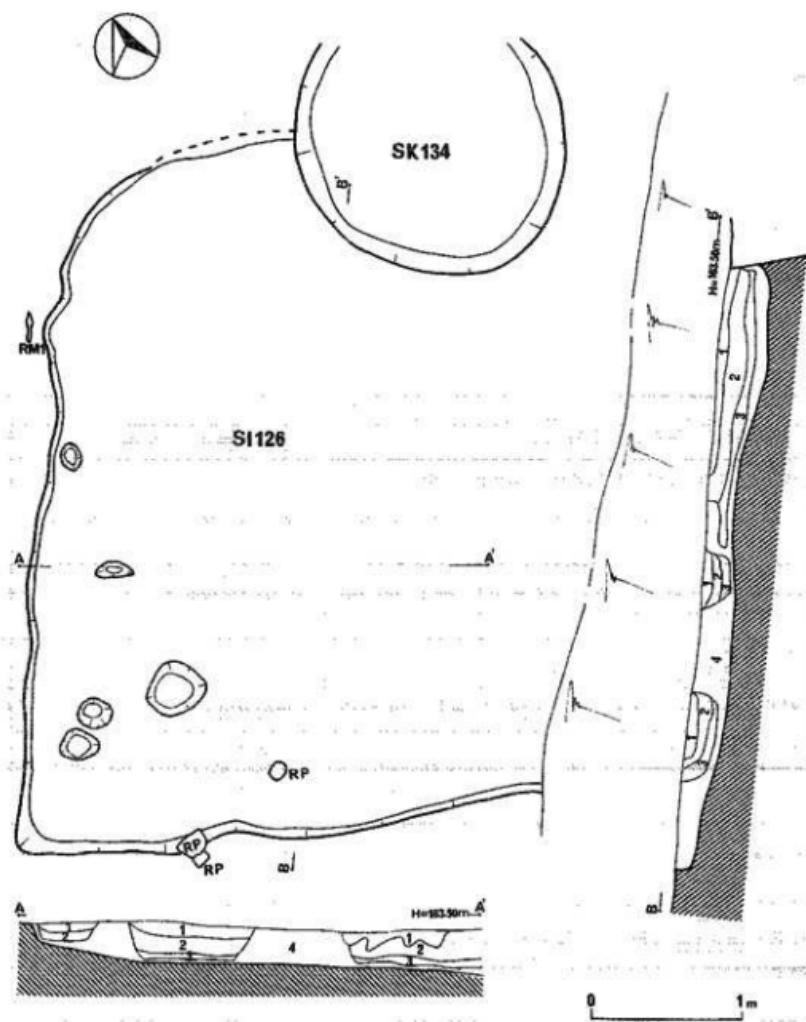
51は勾玉である。材質は比重が小さく琥珀製と思われる。

### S I 127堅穴住居跡

第16表		押印番号	第18図		図版番号	図版11
遺構名	S I 127	検出地区	15-F、15-G			
法 量	東側壁	西側壁	南側壁	北側壁		
	壁長	—	(415cm)	—	(395cm)	
	壁高	—	7.8~11.6cm	—	0~16cm	
	壁溝幅	—	—	—	—	
形 態	方形	面積	(14.8m <sup>2</sup> )	主軸方向		
	かまど位置	不明		構築素材		

プラン確認 S I 126 の北側に方形のプランを確認したが、南側の壁はつかめなかった。掘り下げたところ、さらに落ちこむ部分があり、2軒の重複の可能性が出て来た。しかし断面でもはっきりした新旧関係はつかめなかったため、2つの堅穴住居跡として扱うこととする。削平がひどいため不明確なところも多いが、S I 126・133堅穴住居跡、S K134土塙、S X F120焼土遺構より古い遺構である。

壁面の状態 両壁は比較的しっかりしているが、その他の壁は極めて不明確である。とくに



第17図 SI126堅穴住居跡

妻の神I遺跡

北側は大きく削平されており、ほとんど壁が残存していない。

覆土

1. 黒褐色土 10Y R% 粘性なし。しまり中。植物根が混入。
2. 黒褐色土 10Y R% 粘性なし。しまりなし。
3. にぶい黄褐色土 10Y R% 粘性なし。しまりなし。ザラザラした荒い粒子の砂で構成
4. 黒褐色土 10Y R% 粘性なし。しまり中。

床面 住居跡南部が一段落ちこんでいる。

壁溝 なし。

柱穴、ピット 住居跡内隅に1個、西壁際に3個、北壁際に2個確認された。

カマド 北壁西側の焼土がかまどの可能性があるが、削平がひどく不明である。

遺物とその出土状態 遺物は縄文土器、土師器、須恵器が出土した。土師器は壺と甕の破片で甕が大部分を占る。甕口縁部はほとんどくびれがないか、若干あるものが出土している。須恵器は壺の口縁部破片が1点出土した。

S I 129堅穴住居跡

第17表		挿図番号	第19図		図版番号	図版13
遺構名		SI 129	検出地区		18-F、18-G	
法 量	壁長	東側號 (155cm)	西側號 (132cm)	南側號 205cm	北側號 —	—
	壁高	0~12.9cm	13.1~22.2cm	12.9~22.2cm	—	—
	壁溝幅	—	—	—	—	—
	壁溝深	—	—	—	—	—
形 態	方形	面積 (3.7m <sup>2</sup> )	主軸方向	—		
かまど	位置	なし	構築素材	—		

プラン確認 I郭北東端にて方形プランを確認した。北半分程がS D013 堀跡によって切られている。

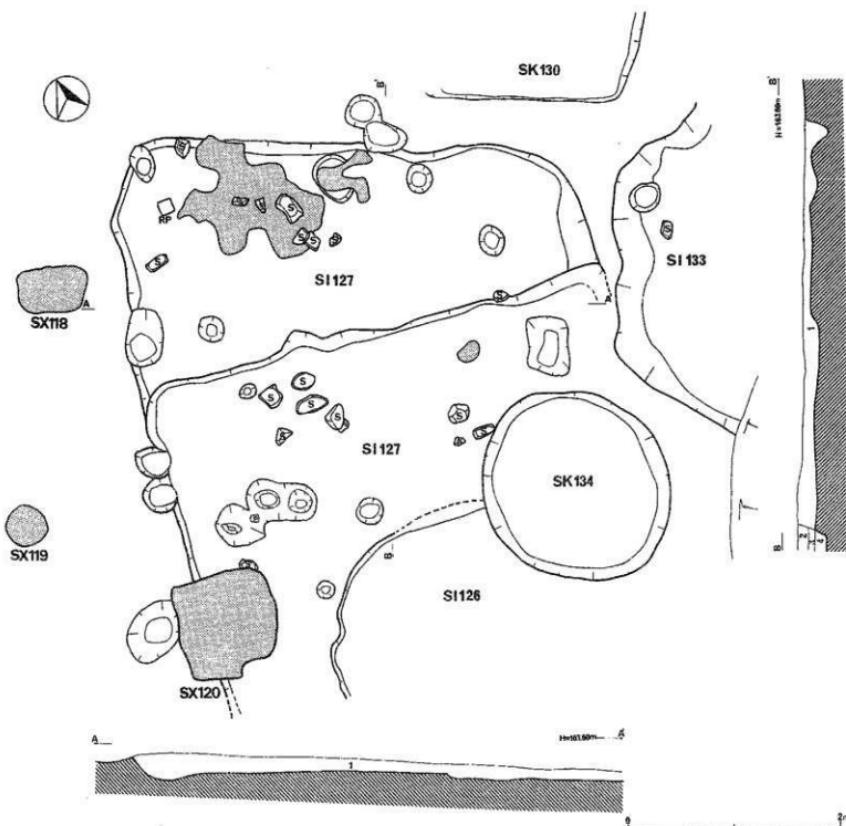
壁面の状態 上面は削平を受けており、いずれの壁面もしっかりしていない。

床面 ほぼ平坦であるが、堅固ではない。

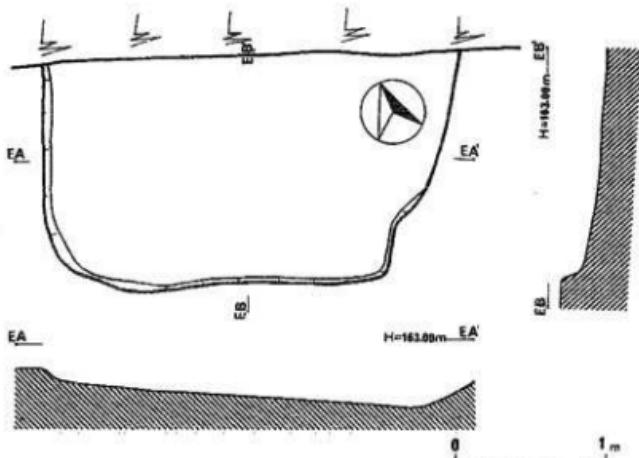
壁溝 なし。

柱穴、ピット なし。

カマド なし。



第18図 SI127堅穴住居跡



第19図 SII 29 穫穴住居跡

遺物とその出土状態 第25図38~40に示した織文土器が3点と土師器の环と甌の破片が出土している。ほとんどが土師器の甌の破片で、その口縁部はほとんどくびれのないものである。环は内面に黒色処理が施されている。

## S I 131 穫穴住居跡

第18表		掲載番号	第20図		国版番号	国版13
造構名		S I 131	検出地区		15-F, 16-F, 16-G, 17-F, 17-G	
法 量	北東側壁		南西側壁		南東側壁	北西側壁
	壁長		513cm		(328cm)	(172cm)
	壁高		16.8~25.5cm		11.5~19.5cm	3.9~7.5cm
	壁溝幅		---		---	---
形態		方形	面積	(15.3m <sup>2</sup> )	主軸方向	
かまど	位置	南西壁		構築素材		

プラン確認 地山上面にて方形プランを確認したが、重複が激しく南西壁以外ははっきり確認できなかった。北側は削平を受けているため不明である。北西部でS I 131' 穫穴住居跡を切

ている。

**壁面の状態** 南西壁以外は不明瞭で、堅固さに欠ける。

**床面** 床面は若干の凹凸がある。堅固ではない。S I 131' 穫穴住居跡の床面よりやや掘り下げる。

**壁溝** なし。

**柱穴、ピット** 住居跡の壁に沿って 6 個、住居跡内に数個のピットが確認された。

**カマド** 上部が削平されており、遺存状態はきわめて不良である。袖部煙道部等もほとんど確認できなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 烧土

2. 暗褐色土 10YR 2% 烧土粒子、灰混入。

3. 黒褐色土 10YR 2% 粘性なし。しまり中。烧土粒子混入。

**遺物とその出土状態** 第26図41~45に示す土器が出土した。41~45は縄文時代の後期のものと思われ、あとから混入した土器であろう。その他の遺物は土師器の壺と甕の破片で、甕の破片が大部分である壺の底部は回転糸切りのあと調整が施されたものである。甕の破片はくびれを持ち、反りのある口縁部を持つものが出土している。

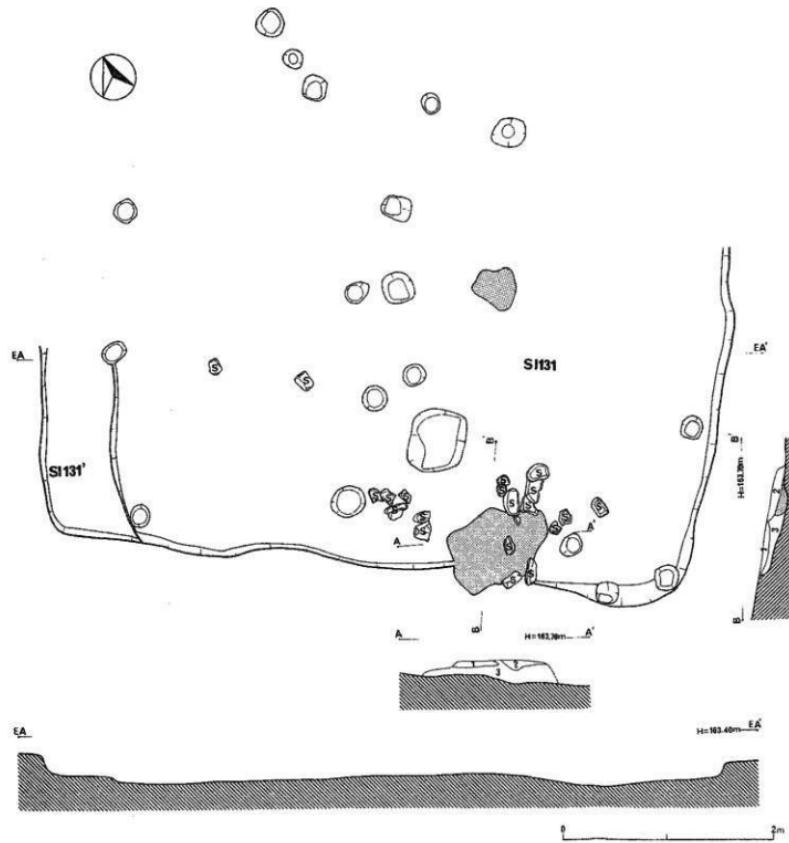
### S I 131' 穫穴住居跡

第19表		押出番号	第20図		図版番号	図版13
遺構名	S I 131'	検出地区	17-G、18-G			
法 量	北東側壁		南西側壁	南東側壁	北西側壁	
	壁長	—	(85cm)	—	—	(180cm)
	壁高	—	13.8~16.2cm	—	—	13.8~18.1cm
	壁溝幅	—	—	—	—	—
壁溝深		—	—	—	—	—
形 態	方形	面積	(1.4m <sup>2</sup> )	主軸方向		
かまど	位置	なし		構築素材		

**プラン確認** 地山上面にて南西壁を検出した。南西部を除く大部分を S I 131' 穫穴住居跡によって切られている。

**壁面の状態** 北側は削平を受けているため不明である。わずかに残存する南西壁以外はしっかりしておらず、床面から推定できるにすぎなかった。

**床面** 堅固でない。



第20図 SI131, I31' 墓穴住居跡

壁溝なし。

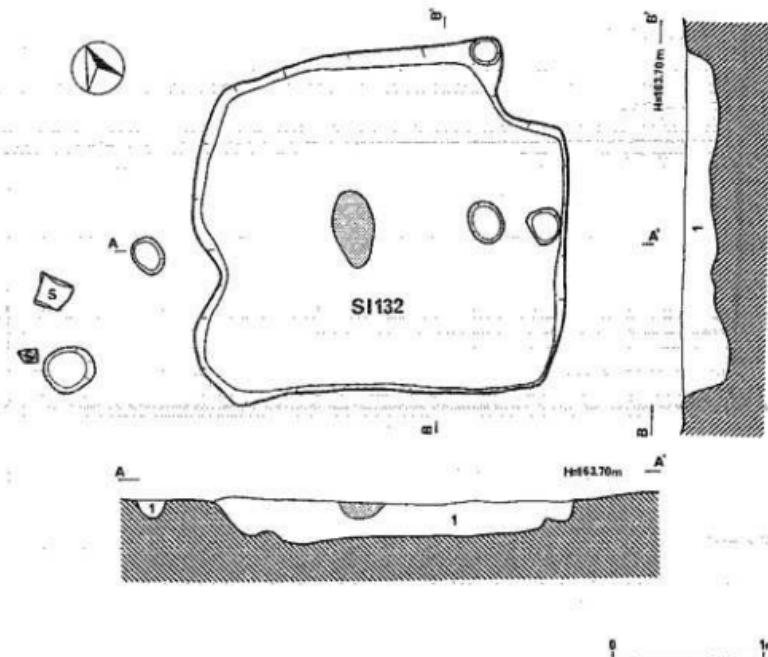
柱穴、ピットなし。

カマドなし。

遺物とその出土状態 土師器の底の破片が出土した。口縁部はほとんどくびれのないものが出土している。

### S I 132 壁穴住居跡

第20表		地図番号	第21図	図版番号	図版22
造構名	S I 132	検出地区	14-I, 15-I		
法		北東側壁	南西側壁	南東側壁	北西側壁
量	壁長	250cm	245cm	232cm	214cm
	壁高	—	—	—	—



第21図 SI132 壁穴住居跡

形 態	方 形	面 積	(5.05m <sup>2</sup> )	主軸方向	
かまど	位 置	な し		構築素材	

プラン確認 地山上面にて方形のプランを確認した。

壁面の状態 削平がひどく、特に北側の壁はほとんどない。その他の壁もしっかりしていない。

#### 覆土

1. 黒褐色土 10Y R 2% 粘性なし。しまりなし。にぶい黄橙色土 (10Y R 8%)、にぶい黄褐色土 (10Y R 2%) 混入。

床面 凹凸が激しくしっかりしていない。

壁溝 なし。

柱穴、ピット 住居跡内隅に 1 個、壁際に 1 個のピットを確認した。

炉 中央部に焼土があり、ここを地炉として使っていたと思われる。

遺物とその出土状態 士師器の窓の破片が出土しており、その口縁部はほとんどくびれがなく先端も鋭角的なものである。

#### S I 133 窓穴住居跡

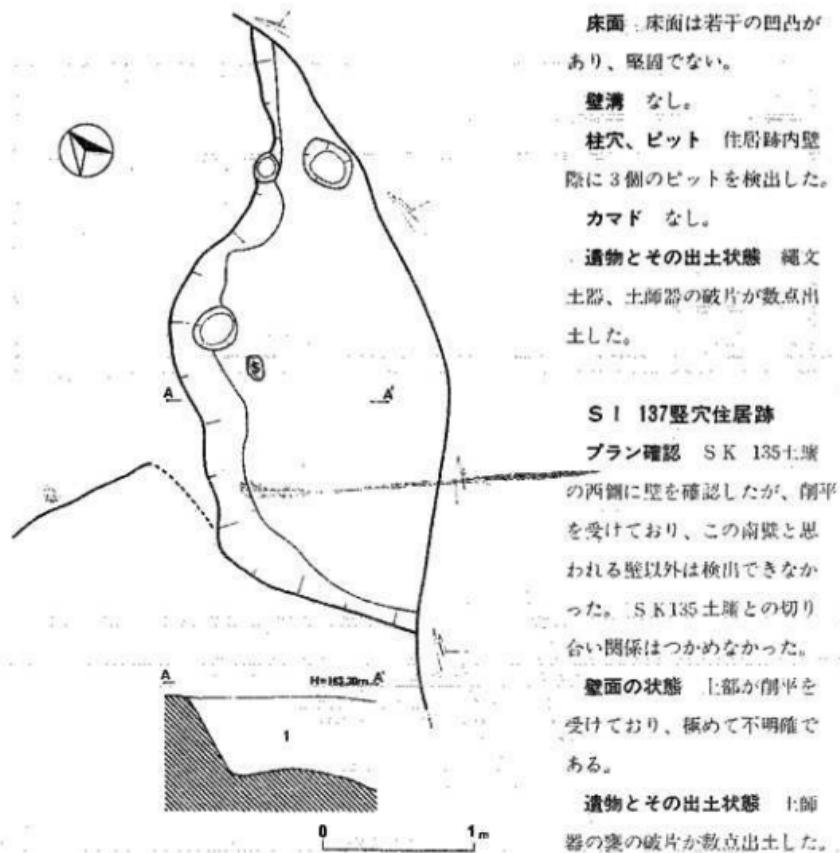
第21表		挿図番号	第22図	図版番号	図版14
遺構名	S I 133	検出地区	15-F		
法 量	壁 長	東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁 高	—	— (155cm)	—	— (300cm)
	壁溝 幅	—	—	—	—
	壁溝 深	—	—	—	—
形 態	方 形	面 積	(4.4m <sup>2</sup> )	主軸方向	
かまど	位 置	な し		構築素材	

プラン確認 I 郭東端中央部から黒褐色土のプランを検出した。東側は S D. 013 堀跡によつて切られている。

壁面の状態 壁面はしっかりしていないが、垂直に近い立ち上がりを呈する。

#### 覆土

1. 黒褐色土 10Y R 2% 粘性なし。しまり中。植物根を多く含む。



第22図 S I 133 穴住居跡

## S I 133 穴住居跡

床面：床面は若干の凹凸があり、堅固でない。

壁溝：なし。

柱穴、ピット：住居跡内壁際に3個のピットを検出した。

カマド：なし。

遺物とその出土状態：縄文土器、土師器の破片が数点出土した。

## S I 137 穴住居跡

プラン確認：S K 135七號

の西側に壁を確認したが、削平を受けており、この南壁と思われる壁以外は検出できなかった。S K 135土塙との切り合はつかめなかった。

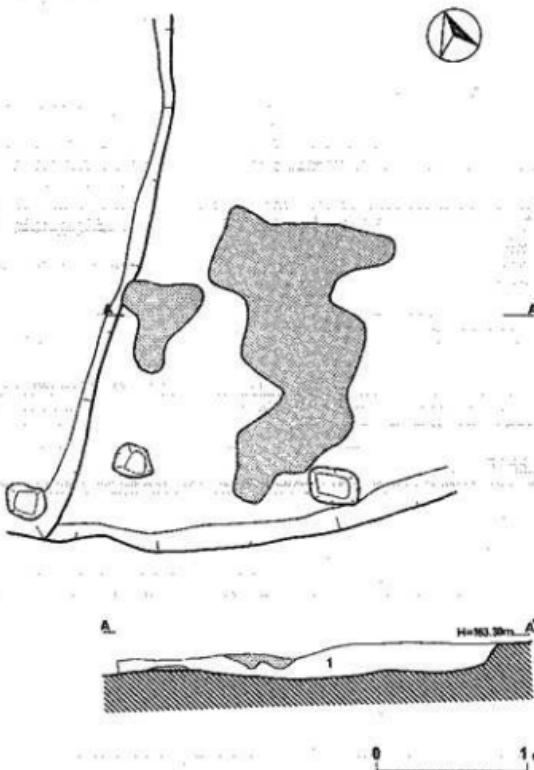
壁面の状態：上部が削平を受けており、極めて不明確である。

遺物とその出土状態：土師器の裏の破片が数点出土した。

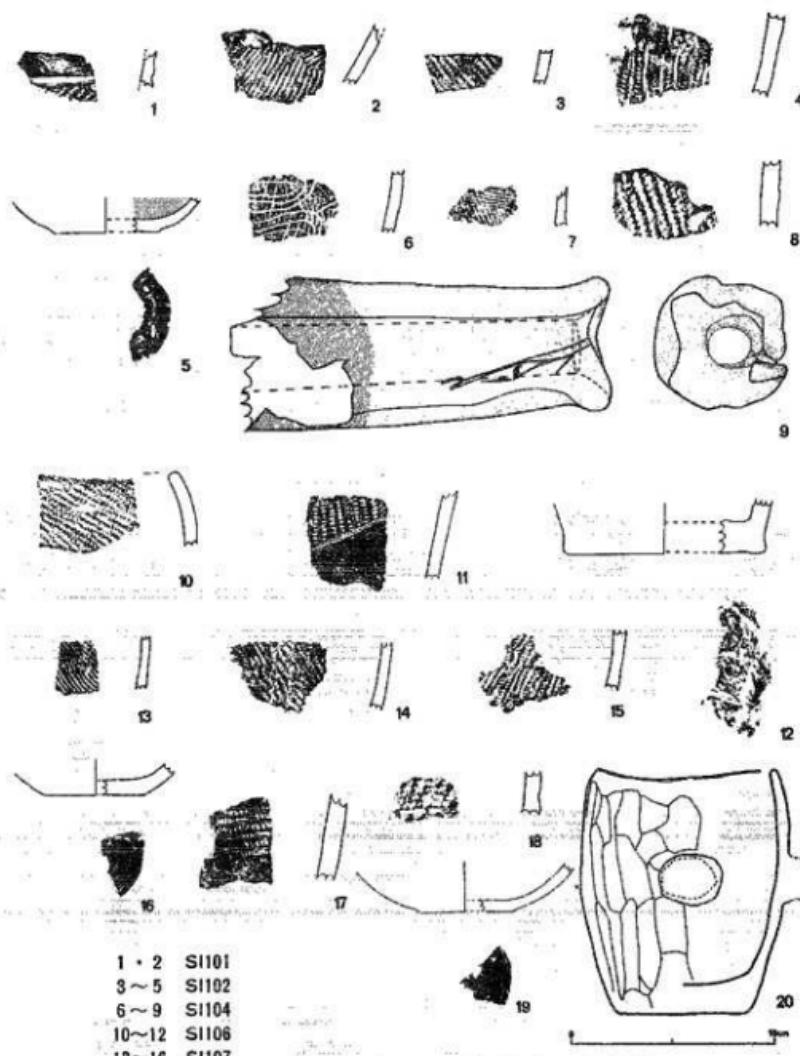
第22表		査定番号				図版番号	
造構名	S I 137	検出地区	17-G、17-H				
法 量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁		
	壁長	—	—	(約300cm)			
	壁高	—	—	—	—		
	壁溝幅	—	—	—	—		
形 態	方形？	面 積	測定不能	主軸方向			

## S I 138 穴住居跡

第23表		地図番号	第24図		図版番号	図版14
造構名	S I 138	検出地区	16-F、17-F			
法 量	東側壁			西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	—			(265) cm	—
	壁高	—			5.3~8.1cm	—
	壁溝幅	—			—	—
壁溝深		—			—	—
形態	方形?	面積	(5.0m <sup>2</sup> )	主軸方向		

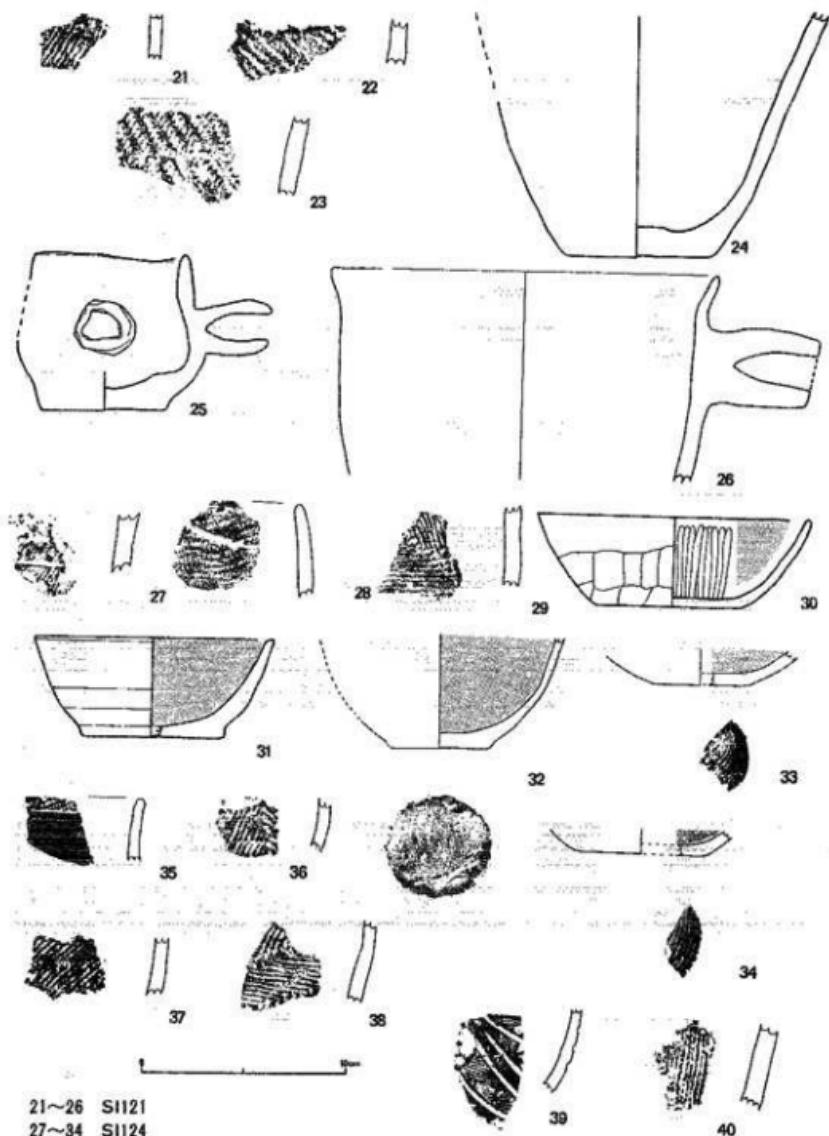


第23図 S I 138 穴住居跡



- 1・2 SI101  
3～5 SI102  
6～9 SI104  
10～12 SI106  
13～16 SI107  
17 SI108  
18～20 SI110

第24図 I郭堅穴住居跡出土遺物(1)



- 21~26 SI121  
 27~34 SI124  
 28~34 SI126  
 35 SI127  
 36 + 37 SI128  
 38~40 SI129

第25図 I郭堅穴住居跡出土遺物(2)



第26図 I-ko 積穴住居跡出土遺物(3)

**プラン確認** I-ko の北東端に、SI 131 積穴住居跡に切られた状態でプランが検出された。東壁は SD 013 挿跡に西壁は SI 131 積穴住居跡にそれぞれ切られ、また北壁は削平をうけているため不明である。

**壁面の状態** 南側のみの検出であるが、若干の削平を受けており堅固ではない。

#### 覆土

1. 黒褐色土 10Y R 2% 粘性なし。しまり中。

床面 2ヶ所の焼土を検出したが、東側のものは埋土上部にあり、この住居跡より新しいものである。西側のものは床面から検出されており、炉として用いられていた可能性がある。床面は堅固でない。

**壁溝** なし。

**柱穴、ピット** 住居跡内壁際に 2 個のピットを確認した。

**カマド** なし。

**遺物とその出土状態** 土師器片 1 片が出土したのみである。

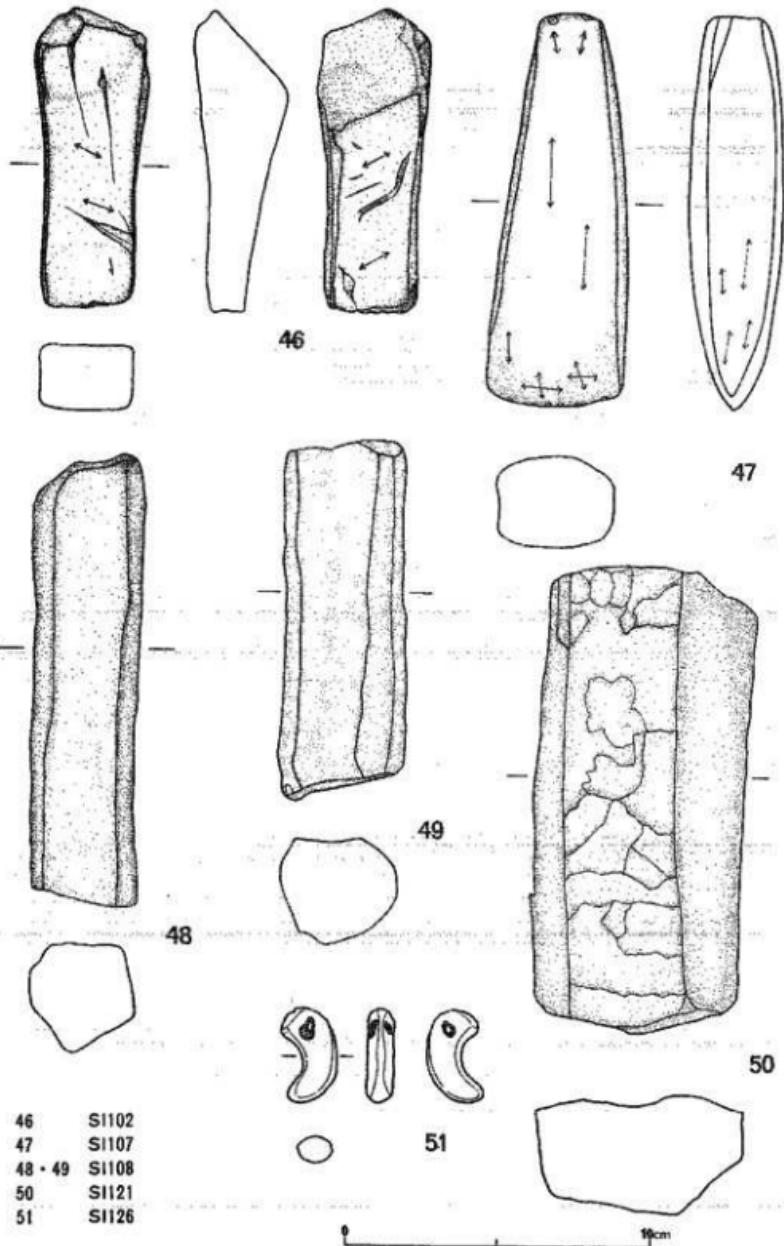
#### (イ) 土壙

##### SK 111 土壙 (第28図 図版15)

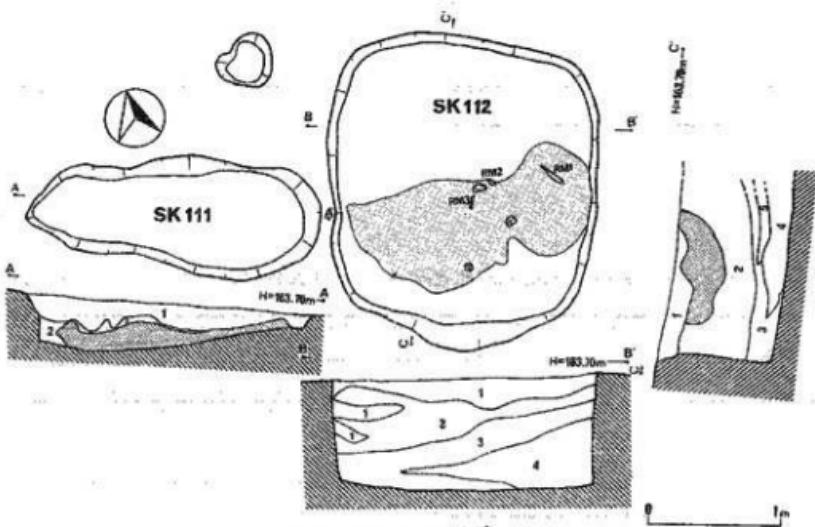
16-H、16-I 地区から地山上面にて検出された。平面形は不整橢円形を呈する。壠口部、213 cm × 80 cm、壠底部 196 cm × 58 cm、深さ 31 cm、面積 1.4 m<sup>2</sup> である。床面には焼土が厚く堆積していた。また SK 112 土壙にも焼土があり、位置埋土等からこれらの 2 つの土壙には何らかの関係があったとも考えられる。断面は西側に深くなる。壁は比較的のしっかりしている。主軸方位は N 75°W である。遺物は出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次の通りである。

1. 黒色土 7.5Y R 2% 粘性なし。しまりなし。粒子がこまかい。

2. 黒褐色土 7.5Y R 2% 粘性ややあり。



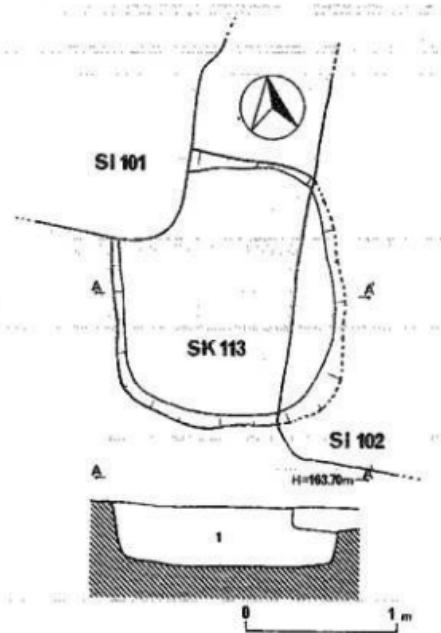
第27図 I郭竖穴住居跡出土遺物(4)



第28図 SK111, 112土壤

## SK 112土壤 (第28図 図版15)

16-H 地区から地山上面にて検出された。平面形は隅九方形を呈する。壇口部 225cm × 188cm、底面 204cm × 175 cm、深さ 82cm、面積 3.9m<sup>2</sup>を計る。埋土に焼土が多量に混入している。また焼土内から鉄器 4 点 (第70図10~13) が出土しており、製鉄に関連のある遺構と思われる。主軸方位は N73°W である。土師器の裏と壺の破片が出土している。壺は黒色処理のもの 1 点、黒色処理されていないもの 2 点が出土した。その他は甕の破片で、口縁部はほとんどくびれてないか、若干のくびれを持つもので、先端部は鋭角的である。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。



第29図 SK113土壤

### 妻の神遺跡

- |          |           |                                 |
|----------|-----------|---------------------------------|
| 1. 黒褐色土  | 10Y R 2%  | 粘性なし。しまり中。明黄褐色土（10Y R 6%）少量混入。  |
| 2. 黄褐色土  | 10Y R 5%  | 粘性なし。しまり中。粒子荒い。                 |
| 3. 黒色土   | 7.5Y R 3% | 粘性なし。しまり中。明赤褐色（5 Y R 5%）ブロック混入。 |
| 4. 明赤褐色土 | 5 Y R 8%  | 粘性なし。しまりなし。                     |
| 5. 明黄褐色土 | 10Y R 6%  | 粘性なし。しまり中。褐色土（10Y R 4%）少量混入。    |

### SK 113土壤 (第29図 図版16) (測定値のカッコづけは測定可能な値である。以下同じ)

16-K、17-K 地区から地山上面にて検出された。平面形は隅丸方形を呈する。壠口部 180 cm × (150) cm、壠底部 163cm × 138cm、深さ 40cm、面積 (2.5) m<sup>2</sup> である。床面は凹凸がなく、壁面は垂直に近い立ち上がりをし、堅固である。東部を S I 102 竪穴住居跡に北西部を S I 101 竪穴住居跡によってそれぞれ切られている。遺物は出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒褐色土 10Y R 2% 粘性ややあり。

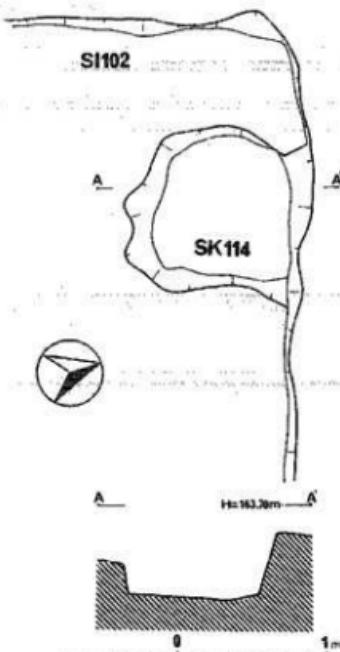
しまり中。黄褐色土少量混入。

### SK 114土壤 (第30図 図版17)

17-J、17-K 地区から地山上面にて検出され立。平面形は不整円形を呈する。壠口部 (123) cm × (105) cm、壠底部 92cm × 86cm、深さ (27) cm、面積 (1.1) m<sup>2</sup> である。床面は凹凸がなく比較的しっかりしている。上半分を S I 102 竪穴住居跡により切られている。遺物は出土しなかった。

### SK 115土壤 (第31図 図版17)

16-J 地区から地山上面にて検出された。平面形は梢円形を呈する。壠口部 (104) cm × (85) cm、壠底部 90cm × 80cm、深さ (80) cm、面積 (0.8) m<sup>2</sup> である。床面はほとんど凹凸がなく、壁は垂直に近い立ち上がりを呈する。上半分を S I 107 竪穴住居跡によって切られている。遺物は出土しなかった。断面



第30図 SK 114土壤

観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒褐色土 10Y R 5% 粘性なし。しまりなし。
2. 明黄褐色土 10Y R 5% 粘性なし。しまり中。
3. にふい黄褐色土 10Y R 5% 粘性なし。しまりなし。
4. にふい黄橙色土 10Y R 5% 粘性ややあり。しまりなし。

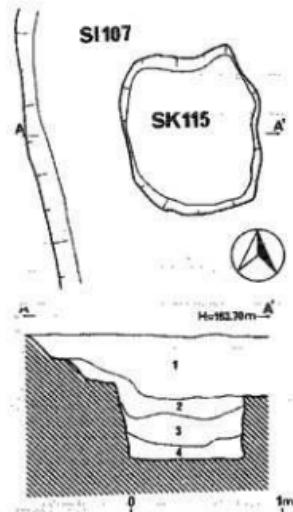
#### SK 122 土壌 (第32図 図版18)

16-K 地区から地山上面にて検出された。平面形は隅丸方形?を呈する。壠口部 163cm × (134) cm、壠底部 140cm × (115) cm、深さ43cm、面積 (1.8) m<sup>2</sup>である。床面は若干の凹凸があり、壁はゆるく立ち上がる。南西部を S 1121 壁穴住居跡により切られている。遺物は出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

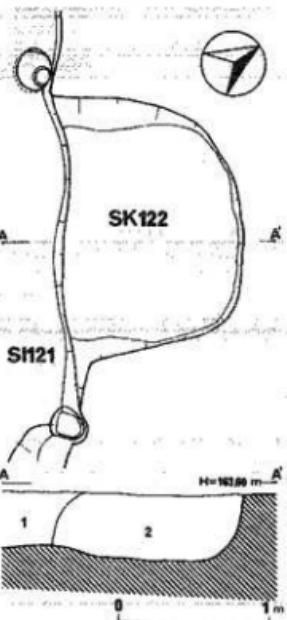
1. 黒褐色土 10Y R 5% 粘性なし。しまりなし。黄褐色、白色極大粒少量混入。
2. にふい黄褐色土 10Y R 5% 粘性なし。しまり中。白色、明黄褐色粒子少量混入。

#### SK 130 土壌 (第33図 図版18)

15-F, 16-F 地区から地山上面にて検出された。平面形は方形を呈する。壠口部 187cm × 160cm、壠底部 181cm × 166cm、深さ87cm、面積 3.2m<sup>2</sup>である。床面は凹凸が少なくかなり堅固である。壁はほぼ垂直で北側はえぐれている。焼土が少量検出されており、SK 112 土壌と形態等に共通点も多い。しかし、



第31図 SK 115 土壌



第32図 SK 122 土壌

### 妻の神 I 造跡

遺物は第39図に示

す土器が出土した

のみであった。1

は縄文土器で単節

R L が回転施文さ

れている。2、3

は須恵器甕の破片

で叩き目文が認め

られる。断面観察

による埋土の状態

は次のとおりであ

る。

#### 1. 黒褐色土

10Y R % 粘

性ややあり。

しまり中。

#### 2. 黒褐色土

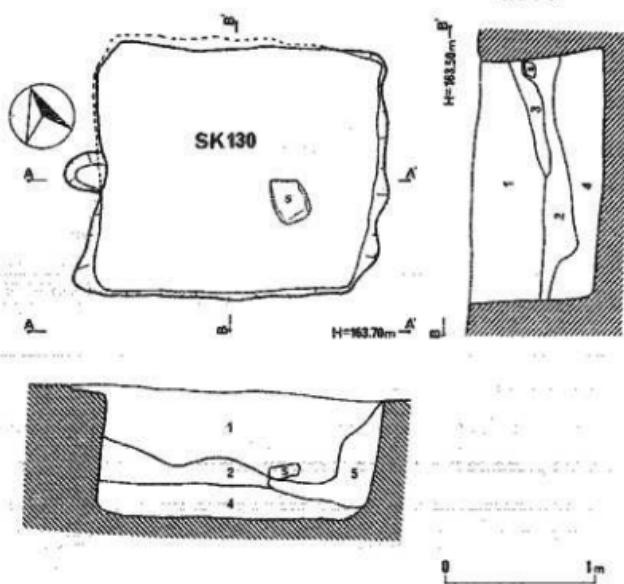
10Y R % 粘

性ややあり。

しまり中。

#### 3. 黒色土 10Y R % 粘性ややあり。しまり中。少々焼土や灰らしきもの混入。

#### 4. 暗褐色土 10Y R % 粘性ややあり。しまり中。少々焼土や灰らしきもの混入。



第33図 SK130土壤

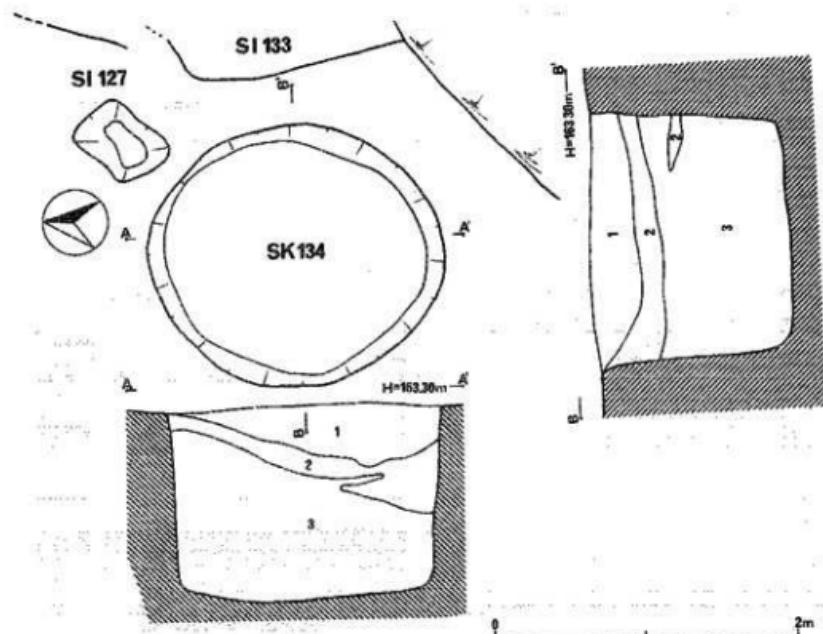
### SK 134土壤 (第34図 図版19)

15-F、15-C 地区から地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。廻口部 195cm × 173 cm、壇底部 172cm × 145cm、深さ 130cm、面積 2.6m<sup>2</sup>である。床面は凹凸が少なく堅固である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。S 1126、127竪穴住居跡を切っており、これらより新しい。遺物は土師器甕の破片が数点出土した。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. にふい黄褐色土 10Y R % 粘性なし。しまり中。明黄褐色 (10Y R %) 中粒がブロック状に少量混入。

2. 黒色土 10Y R % 粘性ややあり。しまりなし。

3. にふい黄褐色土 10Y R % 粘性なし。しまり中。明黄褐色 (10Y R %) 中粒がブロック

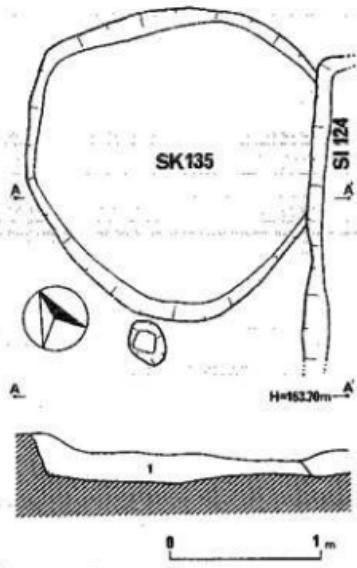


第34図 SK134土壤

ク状に少量混入。

**SK 135土壤 (第35図)**

17-G、17-H地区から地山上面にて検出された。平面形は不整円形を呈する。塚口部206cm×186cm、塚底部178cm×(182)cm、深さ(21)cm、面積(3.1)m<sup>2</sup>である。上部は削平を受けている。床面、壁面ともしっかりしている。SI124 穹穴住居跡により切られている。SI137 穹穴住居跡との切り合ひ関係は不明である。遺物は出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。



第35図 SK135土壤

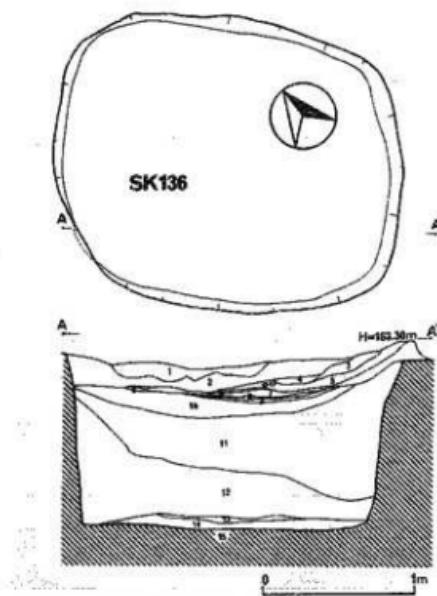
1. 黒褐色土 10Y R% 粘性やや

あり。しまり中。

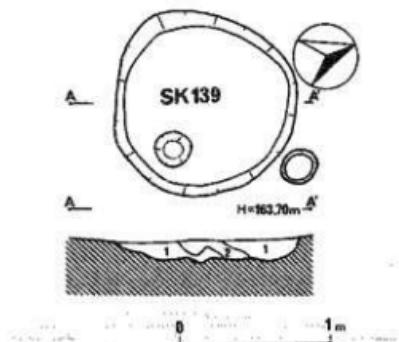
**SK 136土壌** (第36図 図版19)

14-I、14-J 地区から地山上面にて検出された。平面形は不整橢円形を呈する。底11部 (231) cm × (192) cm、墳底部 216cm × 176cm、深さ 113cm、面積 3.8m<sup>2</sup>である。床面は凹凸が少なくて堅固である。壁も垂直に近く立ち上がり、深さのある土壌である。焼土が上層部に細い帯状に堆積している。SK 112、130土壌と形態的に共通するところも多い。SI 123 竪穴住居跡によって切られている。主軸方位は N50°W である。遺物は出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

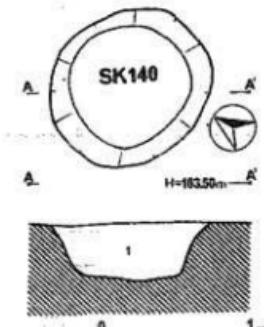
- |             |         |                             |
|-------------|---------|-----------------------------|
| 1. 黒褐色土     | 10Y R%  | しまりなし。上面に黄褐色大粒、下面に炭化物極小粒混入。 |
| 2. 暗褐色土     | 10Y R%  | しまり中。炭化物小粒が多量混入している。        |
| 3. 黒褐色土     | 10Y R%  | しまりなし。焼土。黄褐色小粒混入。           |
| 4. 暗褐色土     | 7.5Y R% | しまりなし。焼土。                   |
| 5. 黒色土      | 10Y R%  | 黄褐色極小粒混入。わずかに6層を混入。         |
| 6. 黒色土      | 10Y R%  | しまりよし。混入物なし。                |
| 7. 明黄褐色土    | 10Y R%  | しまりよし。黒褐色小粒混入。              |
| 8. 暗赤褐色土    | 5 Y R%  | しまりよし。上面に炭化物少量混入。焼土。        |
| 9. にぶい黄褐色土  | 10Y R%  | SI 123 の床面と思われる。黄褐色小粒混入。焼土。 |
| 10. にぶい黄橙色土 | 10Y R%  | しまりなし。炭化物極小粒、黄褐色小一中粒混入。     |
| 11. にぶい黄橙色土 | 10Y R%  | しまり中。炭化物小粒混入。黄褐色小一中粒やや混入。   |
| 12. にぶい黄橙色土 | 10Y R%  | しまりなし。炭化物小粒混入。黄褐色粒子わずかに混入。  |
| 13. 黒色土     | 10Y R%  | しまりなし。赤色小粒混入。               |



第36図 SK 136土壌



第37図 SK139土壤



第38図 SK140土壤

14. 浅黄色 2.5Y R ½ 上面しまりよし。黒褐色小粒混入。

15. にぶい黄橙色土 10Y R ½ 地山。きめ細かい。

#### SK 139土壤 (第37図 図版20)

14-1 地区から地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。縁口部 (127) cm × (120) cm、底部 111cm × 107cm、深さ (12) cm、面積 (1.2) m<sup>2</sup>である。床面は凹凸が激しく、上半分は削平されている。床面、壁面とも堅固でない。遺物は出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 暗褐色土 10Y R ½ 粘性なし。しまりなし。明黄褐色 (10Y R ½) 粒子混入。

2. にぶい黄褐色土 10Y R ½ 粘性なし。しまりなし。

#### SK 140土壤 (第38図 図版20)

16-F 地区から地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。縁口部 112cm × 97cm、底



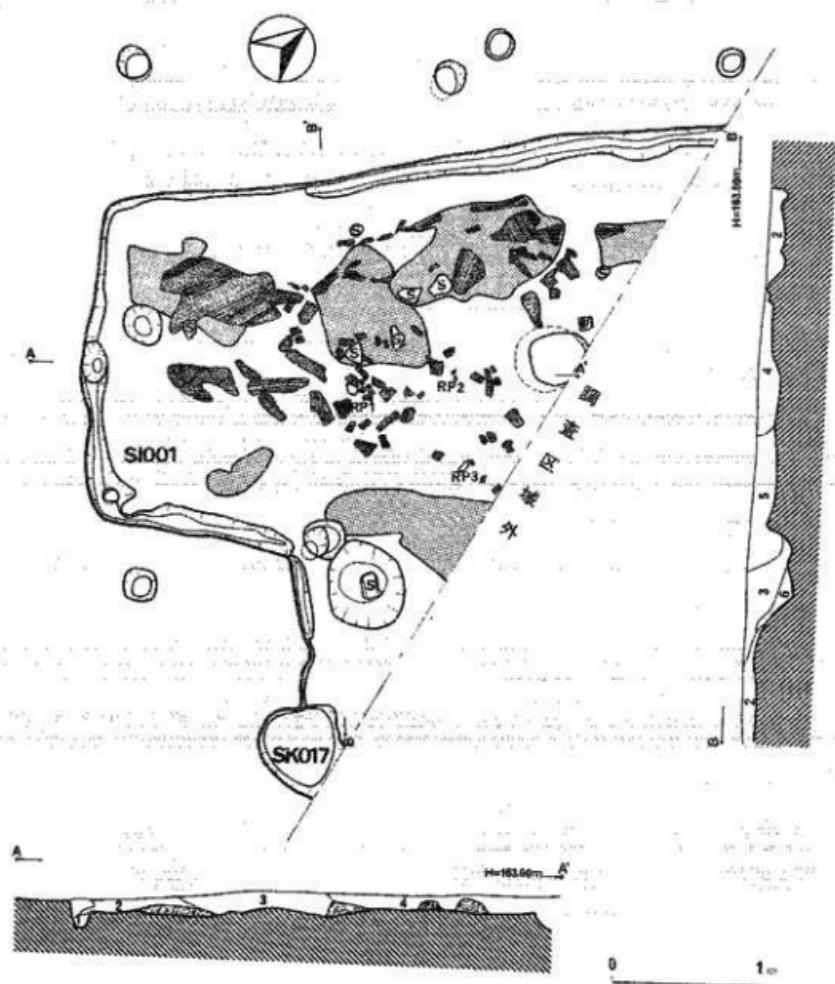
1~3 SK130

第39図 I-no-toge site excavated artifacts

妻の神I遺跡

底部78cm×76cm、深さ36cm、面積 0.89m<sup>2</sup>である。床面は若干の凹凸がある。壁はゆるやかに立ち上がる小土塹である。遺物は出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒褐色土 10YR 5% 明黄褐色粒子混入。



第40図 SI001竪穴住居跡

## (ウ) 溝跡

## SD116溝跡 (第11図 図版45)

SI 108 竪穴住居跡内より検出された。方形に塑っており、その規模は 181cm × 299cm、溝幅 11cm ~ 36cm、深さ 3cm ~ 6cm である。溝の放向、規模などから SI 108 竪穴住居跡の施設とは考えにくく、単独のものと思われる。

遺物は土師器の瓶の破片が出土した。

## イ. II郭の造構

## (ア) 竪穴住居跡

## SI 001 竪穴住居跡

第24表		挿図番号	第40図	図版番号	図版21
遺構名		SI 001	検出地区	10-C, 10-D, 11-C, 11-D	
法 量	壁長	—	(207 ± 10') cm	—	(410) cm
	壁高	—	6.6 ~ 11.3cm	—	6.3 ~ 10.4cm
	壁溝幅	—	(8 ~ 17) cm	—	(10 ~ 18) cm
	壁溝深	—	5 ~ 7.8cm	—	3.1 ~ 3.5cm
形態	方形(張出あり)?	面積	(9 m <sup>2</sup> )	主軸方向	—
かまど	位置	なし		構築素材	

**プラン確認** 地山上面にてプランを確認したが、上部は削平を受けている。また東部は路線外のため不明である。このため南西部が張出部のようにも思われるが不明である。SK017 土壙を切って構築されている。

**壁面の状態** 壁はしっかりしている。上部が削平を受けている。

## 覆土

- 暗褐色土 10YR% 粘性なし。しまり中。明黄褐色(10YR%) 松子混入。
- 褐色土 10YR% 粘性なし。しまり中。明黄褐色(10YR%) ブロック状に混入。
- 褐色土 10YR% 粘性なし。しまり中。明黄褐色(10YR%) ブロック状に混入。

炭化物混入。

- 暗褐色土 10YR% 粘性なし。しまり中。明黄褐色(10YR%) ブロック状に混入。

炭化物混入。

## 妻の神 I 遺跡

5. 黒褐色土 10YR 5/2 粘性なし。しまり中。明黄褐色 (10YR 5/6) ブロック状に混入。

6. 黄褐色土 10YR 5/2 粘性なし。しまりなし。

**床面** 床面は凹凸が激しく、堅固でない。床面は炭化材と焼土が広く分布しており、焼失家屋と思われる。

**壁構** 南西部が確認できなかったが、その他はほぼ全周するものと思われる。

**柱穴、ピット** 壁溝にそって 3 個のピットが検出された。東部にある 2 個の大きめのピットは住居跡に付属しないものと思われる。

**カマド** なし

**遺物とその出土状態** 土師器の甕の破片が 5 点出土した。土師器甕の口縁部はほとんどくびれがなくその先端部も鋭角的である。

## SI 002 積穴住居跡

第25表		地図番号	第41図		図版番号	図版22
遺構名	S I 002	検出地区	9-C, 10-C			
法 量	東側壁		西側壁	南側壁	北側壁	
	壁長	—	(442) cm	(277) cm	(190) cm	
	壁高	—	6.5~9.1cm	1~3.4cm	12~22.6cm	
	壁溝幅	—	—	—	—	
壁溝深		—	—	—	—	
形態	方形	面積	(17.5m <sup>2</sup> )	主軸方向		
かまど	位置	なし		構築素材		

**プラン確認** 地山上面にて方形のプランを確認したが、削平がひどく南西部は壁が確認できなかった。また東側は路線外のため不明である。SK014, 015 土礫を切っており、これらより新しい。

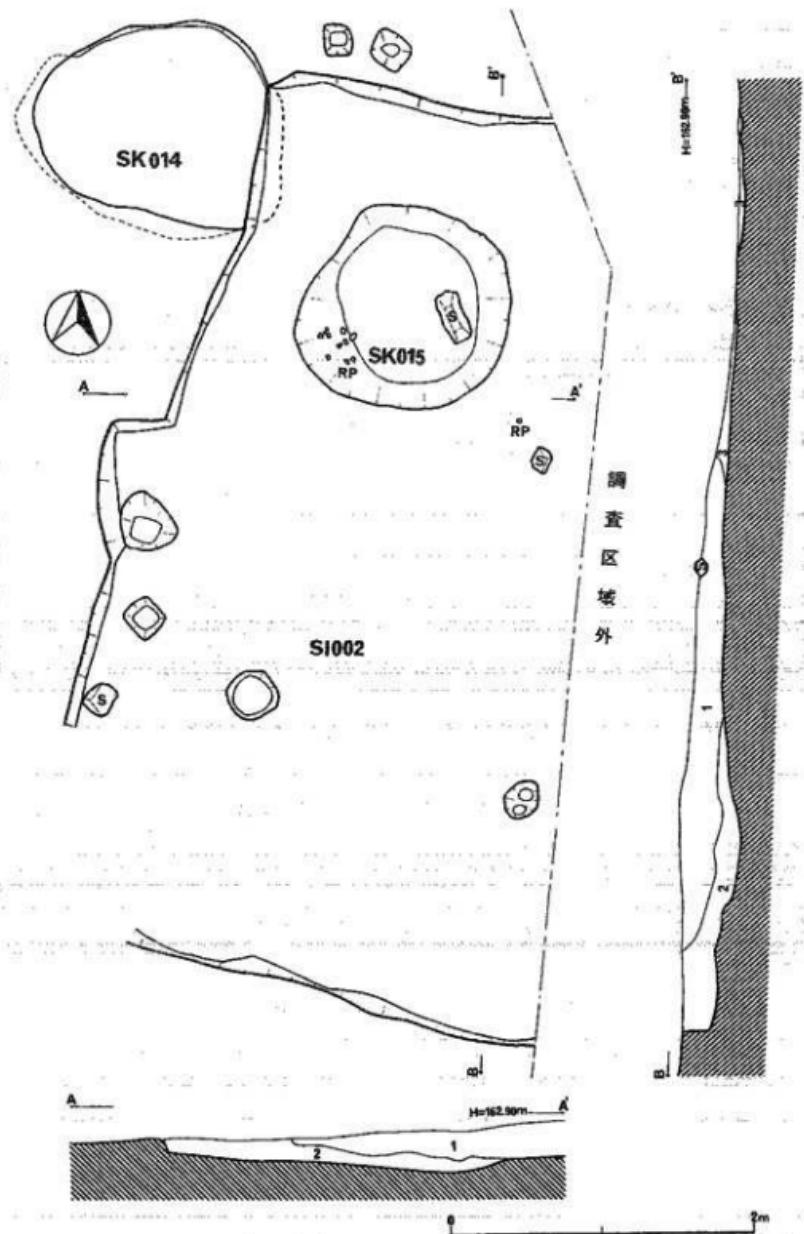
**壁面の状態** 南西部は削平されていて不明である。その他の壁もごくわずかしか確認されなかった。

**覆土**

1. 黒褐色土 10YR 5/2 粘性なし。しまり中。黄褐色土 (10YR 5/6) 少量混入。黒色土 (10 YR 5/2) 少量混入。

2. 黑褐色土 10YR 5/2 粘性なし。しまり中。黄褐色粒子少量混入。

3. 黄褐色土 10YR 5/2 粘性ややあり。しまり中。



第41図 SI002竪穴住居跡

**床面** 床面は若干の凹凸があり、堅固でない。

**壁溝** なし

**柱穴、ピット** 住居跡西壁に 1 個、北に 4 個のピットが確認された。

**カマド** なし

**遺物とその出土状態** 遺物は数点の土師器表の破片が出土したのみである。土師器表の口縁部はほとんどくびれのないものが出土している。

### SI 003 穫穴住居跡

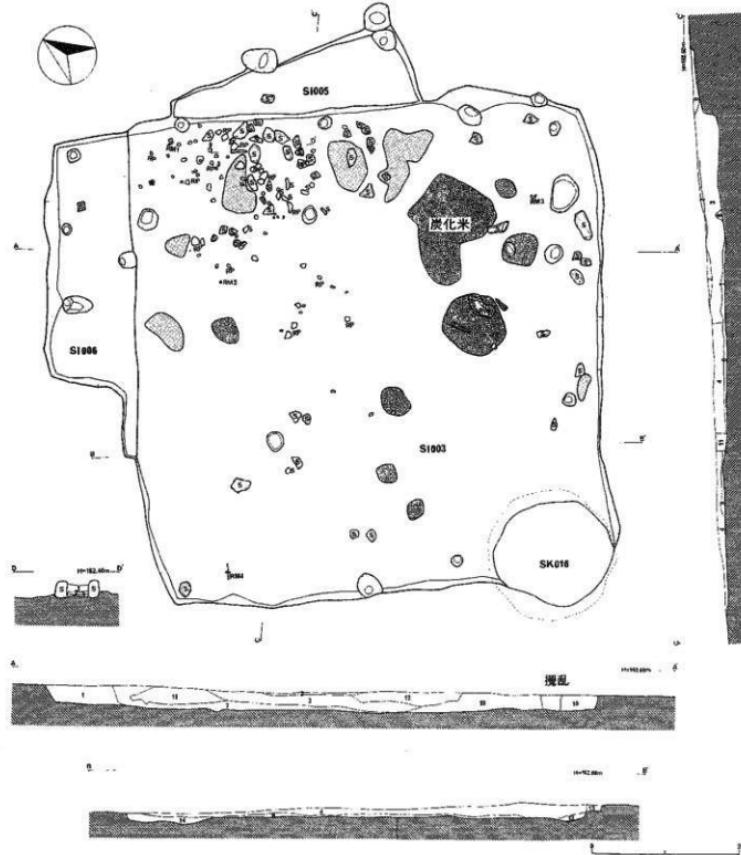
第26表		挿図番号	第42図			図版番号	図版22~24	
遺構名		SI 003	検出地区			9-D, 9-E, 9-F, 10-D, 10-E, 10-F		
法 量	壁長		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁		
	壁高	14.4~39.8cm		4.6~10.9cm	10.3~25.4cm	10.2~14.9cm		
	壁溝幅	—	—	—	—	—		
形 かまと	壁溝深	—	—	—	—	—		
	位置	方形 な し	面積	40m <sup>2</sup>	主軸方向			
					構築素材			

**プラン確認** 地山上面にて不整形のプランを確認したが、精査の結果 SI 003, 005, 006 穫穴住居跡、SK016 土壙の重複であることがわかった。SI 003 穫穴住居跡はこれらの遺構を切っておりこれらより新しい。また南例の一部を SI 008 穫穴住居跡に切られており、これより古い。

**壁面の状態** 削平を受けており、壁が全部遺存する箇所はないが、北部の方が若干良好である。

### 覆土

1. 黄褐色土 10YR% 粘性なし。しまり中。褐色土混入。
2. 暗褐色土 10YR% 粘性なし。しまり中。
3. 褐色土 10YR% 粘性なし。しまり中。軽石少量、褐色土少量混入。
4. 黄褐色土 10YR% 粘性なし。しまり中。炭化物少量、褐色土少量混入。
5. にぶい黄褐色土 10YR% 粘性なし。しまり中。
6. 黒色土 10YR% 粘性なし。しまりなし。
7. 黑褐色土 10YR% 粘性なし。しまり中。炭化物少量混入。



第42図 S1005, 005, 006竪穴住居跡

8. 黒褐色土	10YR%	粘性ややあり。しまり中。
9. にぶい黄褐色土	10YR%	粘性ややあり。しまりよし
10. にぶい黄橙色土	10YR%	粘性なし。しまり中。軽石、黒褐色土少量混入。
11. 明黄褐色土	10YR%	粘性なし。しまり中。軽石、黒褐色土少量混入。
12. にぶい明黄褐色土	10YR%	粘性なし。しまり中。炭化物少量混入。
13. 明黄褐色土	10YR%	粘性なし。しまりよし。
14. にぶい黄橙色土	10YR%	粘性なし。しまり中。軽石少量混入。

床面 床面は比較的堅固で理も多い。住居跡北側に焼土が検出されている。また概して住居跡南東半分側から多量の炭化米が検出された (P. 195参照)。

壁溝 なし。

柱穴、ビット 住居跡内に数個のビットが検出されたが、明確な柱穴となるものはなかった。

カマド なし。

遺物とその出土状態 第48図3~5に示す遺物が出土した。4、5は把手付土器で5は把手が中空のものである。その他の遺物としては土師器、須恵器、鉄器、木器、炭化米が出土している。土師器は环、甕の破片が出土している。土師器甕の破片は1点だけで、内面黒色処理、底部は回転系切りである。土師器甕の破片は多く、90点以上を数える。その口縁部はくびれのないものとあるものが5:3の割合で出土する。須恵器は甕の破片が1点出土した。

床面上から炭化木が出土しており、その直下から木皿が出土した。木皿は遺存状態が極めて悪く、完全に炭化していた。

#### SI 005竪穴住居跡

第27表		挿図番号	第42図		図版番号	図版22・23
遺構名		S 1005	検出地区		9-D, 10-D	
法			北東側壁	南西側壁	南南側壁	北北側壁
駆	長	317cm	—	—	(142)cm	—
量	壁高	10.5~11.9cm	—	—	5.7~11cm	—
	壁溝幅	—	—	—	—	—
	壁溝深	—	—	—	—	—
形	態	方形?	面積	(2.5m <sup>2</sup> )	主軸方向	—
かまど	位置	なし			構築素材	

プラン確認 地山上面にて不整形のプランを確認したが、S 1003竪穴住居跡などのと重複

表の神 I 進跡

であった。SI 005 竪穴住居跡は SI 003 竪穴住居跡に切られており、これより古い。

**壁面の状態** 削平を受けており、壁はほとんど残っていない。

**床面** 床面は若干の凹凸があるが、比較的堅固である。

**壁溝** なし。

**カマド** なし。

**遺物とその出土状態** なし。

SI 006 竪穴住居跡

第28表		挿図番号	第42図		図版番号	図版22・23
造構名		SI 006	検出地区		10-E	
法			北東側壁	南西側壁	南南側壁	北北側壁
壁長		(118)cm	(100)cm	—	—	320cm
壁高		32.1~32.3cm	10.5~14.4cm	—	—	20.6~31cm
壁溝幅		—	—	—	—	—
壁溝深		—	—	—	—	—
形態		方形 (?)	面積	(4.1m <sup>2</sup> )	主軸方向	
かまど	位置	なし	なし	なし	構築素材	なし

**プラン確認** 地山上面にて不整形のプランを確認し、精査の結果3棟の重複であることが確認された。南東側を SI 003 竪穴住居跡によって切られており、これより古い。

**壁面の状態** 上面は削平されている。

**床面** 比較的堅固である。

**壁溝** なし。

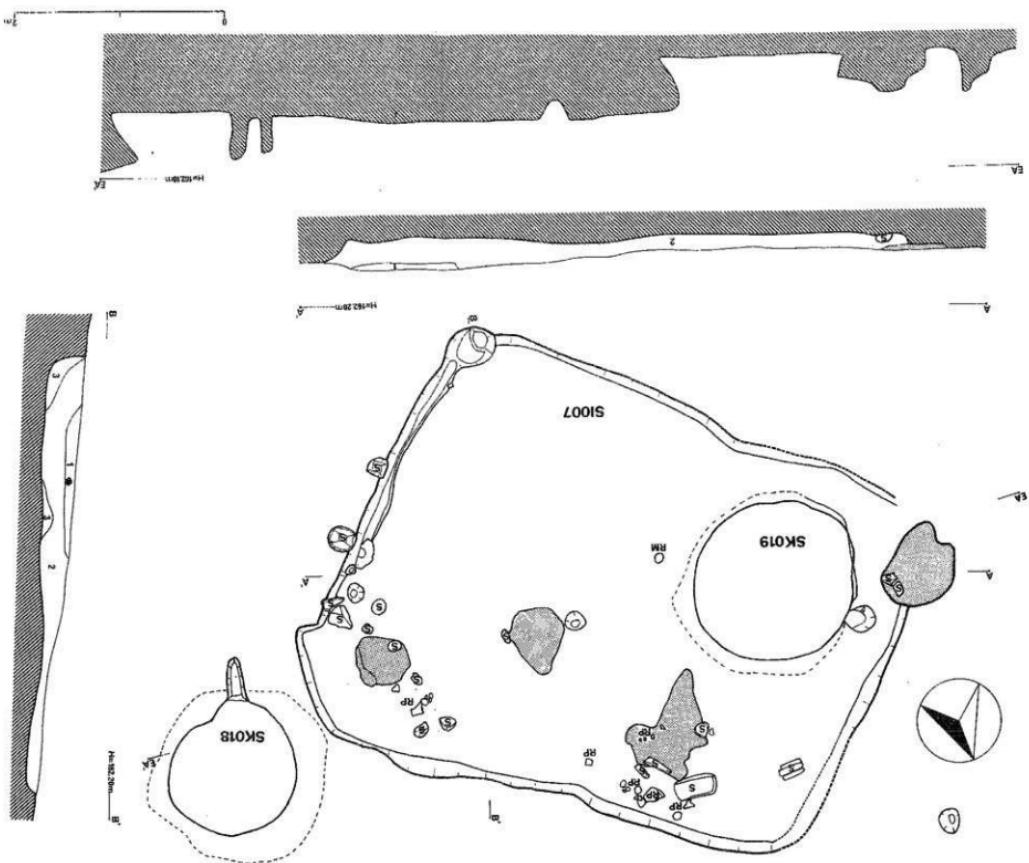
**カマド** なし。

**遺物とその出土状態** なし。

SI 007 竪穴住居跡

第29表		挿図番号	第43図		図版番号	図版25
造構名		SI 007	検出地区		7-D、7-E、8-D、8-E	
法			北東側壁	南西側壁	南東側壁	北西側壁
壁長		440cm	(240)cm	40.9cm	140cm	
壁高		41.1~43.4cm	6.7~7.9cm	18.7~24.5cm	24.3~33.9cm	

图43图 SK07号头生复瓣



量	壁溝幅	—	—	10~20cm	—
	壁溝深	—	—	?	—
形態	方形	面積	(19.5m <sup>2</sup> )	主軸方向	
かまど	位置	なし		構築素材	

**プラン確認** 地山上面にて方形プランを確認したが、南西部は SI 008 壁穴住居跡に切られしており、これより古い。また SK019 上廻を切っており、これより新しい。

**壁面の状態** 上面が削平されている。特に北部及び西部は著しい。

#### 埴土

1. 黒褐色土 10YR% 粘性ややあり。しまり中。
2. 暗褐色土 10YR% 粘性ややあり。しまり中。にぶい黄褐色土 (10YR%) 70%混入。
3. 褐色土 10YR% 粘性ややあり。しまり中。

**床面** 比較的堅固である。焼土がみられるが灰とは思われない。西隅の焼土は SI 008 壁穴住居跡カマドのものである。

**壁溝** 南果壁にわずかに確認された。

**柱穴、ピット** 住居跡内東南部にピット 1 個を確認した。

**カマド** なし。

**遺物とその出土状態** 遺物は土師器、須恵器が出土している。土師器は环と甕の破片で、环は内面黒色処理のものと非処理のもの、裂口縁部はくびれのないものとあるものが混在する。

須恵器は甕の破片が出土した。

#### SI 008 壁穴住居跡

第30表		挿図番号	第44図		図版番号	図版25・26
遺構名	SI 008	検出地区	7-E、7-F、7-G、8-E、8-F、8-G			
法 量	壁長	595cm	北西側壁	630cm	南西側壁	667cm
	壁高	55.3~63.6cm		38.1~69.6cm	48.2~62.1cm	42.9~85.6cm
	壁溝幅	10~40cm		18~32cm	21~51cm	17~58cm
	壁溝深	24~38cm		3~7.5cm	16.4~35.1cm	4~8.3cm
形態	方形	面積	48.4m <sup>2</sup>	主軸方向	N 47°E	
かまど	位置	北東壁中央		構築素材	不明	

**プラン確認** 地山上面にて方形のプラン及びカマドを検出した。S I 007 竪穴住居跡、SK 022、023、024、025土壤を切っており、これらより新しい。

**壁面の状態** 検出された住居跡中では遺存状態が比較的良好である。しかし東壁隅及び南西壁は大きく削平を受けている。南西壁以外の壁は堅固で、ほぼ垂直に立ち上がる。

#### 覆土

1. 暗褐色土 10Y R % 粘性なし。しまり中。
2. 褐色土 10Y R % 粘性なし。しまり中。にぶい黄褐色 (10Y R %) 粒子混入。  
明黄褐色 (10Y R %) 粒子混入。
3. にぶい黄褐色土 10Y R % 粘性なし。しまりなし。
4. 明黄褐色土 10Y R % 粘性なし。しまりなし。にぶい黄褐色 (10Y R %) 粒子、  
にぶい黄橙色 (10Y R %) 粒子混入。
5. 黒褐色土 10Y R % 粘性なし。しまり中。明黄褐色 (10Y R %) 粒子少量混入。
6. 暗褐色土 10Y R % 粘性なし。しまりなし。
7. 褐色土 10Y R % 粘性なし。しまりなし。にぶい黄褐色 (10Y R %) 粒子混  
入。
8. 暗褐色土 10Y R % 粘性なし。しまりなし。赤褐色 (5 Y R %) 焼土粒子混入。
9. 暗褐色土 10Y R % 粘性なし。しまり中。明黄褐色 (10Y R %) 粒子多量混入。
10. 暗褐色土 10Y R % 粘性なし。しまり中。明黄褐色 (10Y R %) 粒子混入。

**床面** 床面は若干の凹凸があるものの、堅固である。また貼床である。

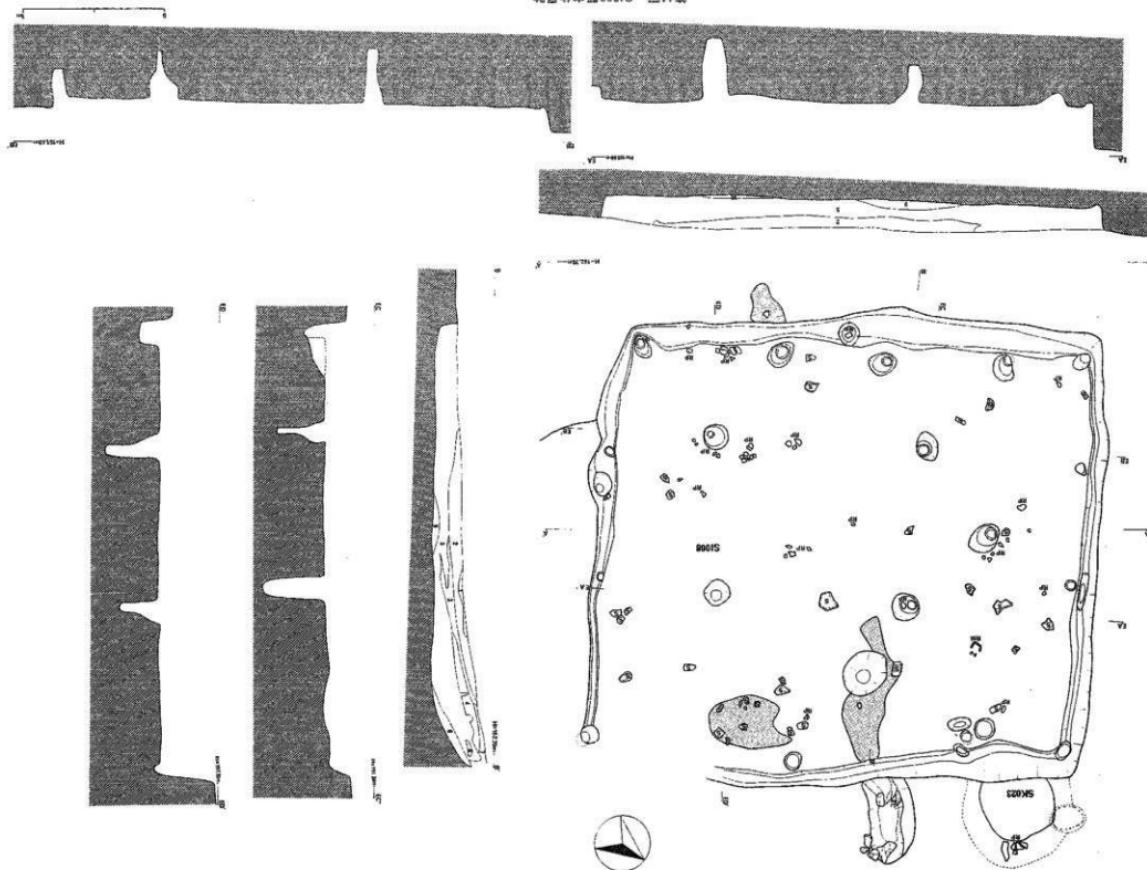
**壁溝** 住居跡内をほぼ全周している。

**柱穴、ピット** 壁溝にそって各壁 3 個ずつカマドのある壁のみ 4 個及び住居跡対角線上に 4 個の柱穴を配していたと思われる。さらに南西壁には壁溝際に 3 個のピットが確認された。

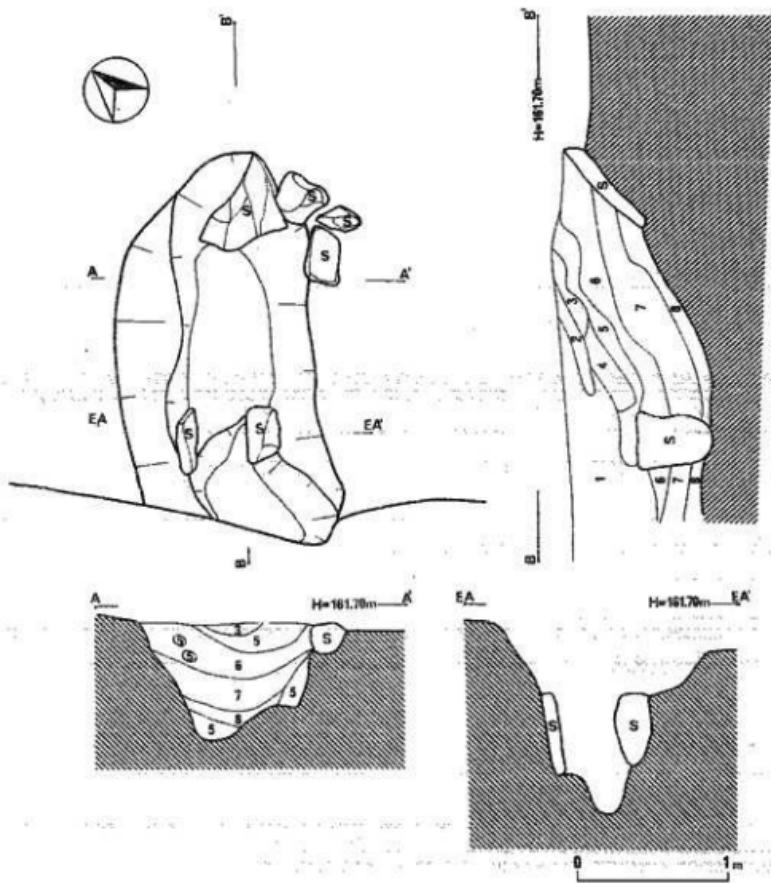
**カマド** 住居跡北東壁ほぼ中央から検出された。上面が削平されており、また袖部はほとんど確認できなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 褐色土 10Y R % 粘性なし。しまりよし。
2. にぶい黄褐色土 10Y R % 粘性ややあり。しまり中。
3. 暗褐色土 10Y R %
4. 黒褐色土 7.5Y R % 粘性なし。しまりなし。
5. 明褐色土 7.5Y R % 粘性なし。しまりよし。粒子さらさらしている。
6. 褐色土 7.5Y R % 粘性なし。しまりなし。
7. 黑褐色土 10Y R % 粘性ややあり。しまりなし。
8. 暗褐色土 7.5Y R % 粘性ややあり。しまりよし。

图44 S1008型大齿锯链



遺物とその出土状態 遺物の出土量は妻の神 I 遺跡検出竪穴住居跡中多い方である。しかし、復元できたものはわずか 1 点で、残りは小破片であった。第48図 6 は把手付土器の把手部分と思われるが、中空となっていない。その他の遺物は土師器の小破片である。土師器は壺と甕の破片が出土しているが、甕はわずか 2 点だけで、内面黒色処理が施されている。その他は土師器甕の破片が 100 点以上で、その口縁部はほとんどのものがくびれのないものである。



第45図 SI008竪穴住居跡カマド

## S I 009 竪穴住居跡

第31表		地図番号	第46図		図版番号
遺構名		S I 009 検出地区	7-G、7-H、8-G、8-H		
法 量	壁長	東側壁 (405) cm	西側壁 —	南側壁 —	北側壁 (562) cm
	壁高	11.2~42.2cm	—	—	16.8~38.1cm
	壁溝幅	—	—	—	—
	壁溝深	—	—	—	—
形態	方形	面積 (21.7m <sup>2</sup> )	主軸方向 N 68° W		
かまど	位置 東壁		構築素材 粘土	不明	

**プラン確認** II郭南西端部に方形の落ち込みと2基のカマドを検出。2棟の重複であることが確認されたのでこれを S I 009、009' 竪穴住居跡とした。S I 009 竪穴住居跡は S I 009' 竪穴住居跡に切られしており、これより古い。

**壁面の状態** 全長が検出される壁はなかった。また上面は削平を受けている。

**覆土**

1. 黒色土 10Y R 5% 粘性なし。しまり中。黄褐色(10Y R 5%)白色粒子10%混入。
2. 黒色土 10Y R 5% 粘性なし。しまり中。白色粒子5%混入。
3. 黒色土 10Y R 5% 粘性なし。しまり中。白色粒子1%混入。
4. 黒色土 10Y R 5% 粘性なし。しまりなし。大湯浮石層(アッシュ)50%混入。
5. 黑褐色土 10Y R 5% 粘性なし。しまりなし。白色粒子混入。
6. 黒色土 10Y R 5% 粘性なし。しまりなし。植物根渦入。
7. 黑褐色土 10Y R 5% 粘性なし。しまりなし。明黄褐色(10Y R 5%)ブロック状粒子混入。

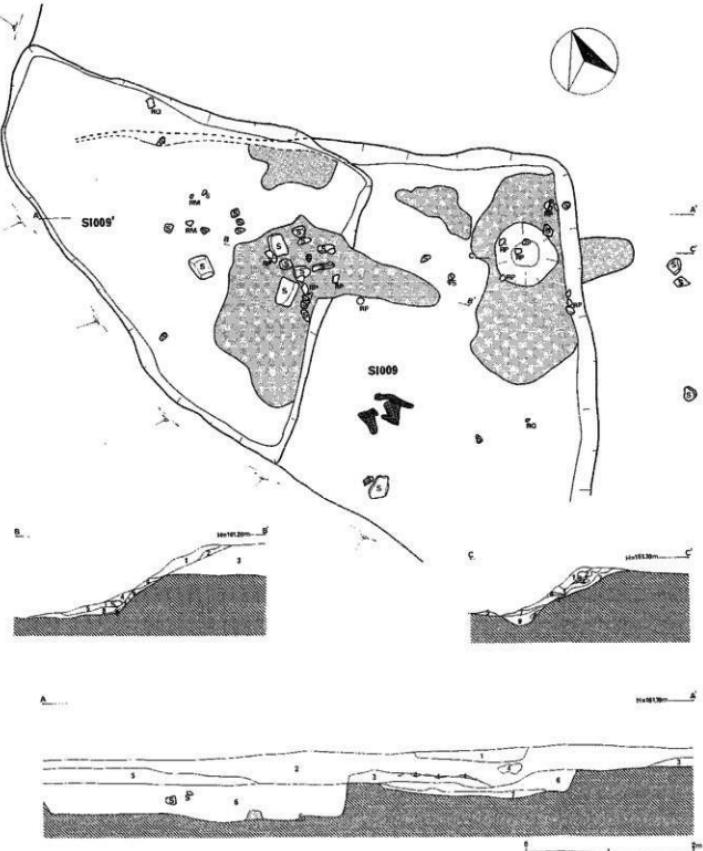
**床面** 床面は若干の凹凸があり、堅固でない。炭化材が床面直上から検出された。

**壁溝** なし。

**柱穴、ピット** なし。

**カマド** 東側北寄りに検出されたが遺存状態は極めて不良である。袖部は崩落していくて不明、焼道部は悪い。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒色土 10Y R 5% しまりよし。白色、紫色粒子1%混入。表土。
2. 増褐色土 10Y R 5% しまりよし。1層と5層の中間層。表土。
3. 明褐色土 7.5Y R 5% 粘性あり。しまりよし。4と5の中間層。



第46図 SI009, 009'堅穴住居跡

4. 赤褐色土 5 YR 5% しまり中。焼土。  
 5. 明黄褐色土 10 YR % 粘性あり。しまりよし。  
 6. 黒褐色土 10 Y R %  
 7. 明赤褐色土 5 Y R % しまりよし。焼土。  
 8. 橙色土 7.5 Y R % 焼土。  
 9. 褐色土 10 Y R % しまりなし。焼土をブロック状に混入。

**遺物とその出土状態** 遺物出土量は極めて多いが、復元できるものは少ない。第48図7は土師器の甕で、カマドの掘り込み部分から出土したものであり、熱を受け変質している。外面はヘラケズリ、内面はハケ目の調整痕がみられる。その他遺物はすべて土師器の破片で、壺の多いことがこの住居跡の特徴である。壺は内面黒色処理と非処理のものが半々の割合で出土し、底部は回転糸切りである。甕は口縁部にくびれのほとんどないものが多く出土する。また砂底の土器が1点出土している。

### S I 009' 穹穴住居跡

第32表	挿図番号	第46図	図版番号	図版27
遺構名	S I 009	検出地区	8-H、9-H	
法 量	東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	(350) cm	—	— (440) cm
	壁高	35.7~40.4cm	—	— 56~71.3cm
	壁溝幅	—	—	—
形 態	柱溝深	—	—	—
	方形	面積	(12.5m <sup>2</sup> )	主軸方向 N51° W
かまど	位置	なし	構築素材	芯部石組

**プラン確認** II郭南西端に方形の2棟重複した穹穴住居跡プランを確認、新しい方をS I 009' 穹穴住居跡とした。

**壁面の状態** 上面は削平されている。また堀跡によって切られているため、全長が確認された壁もない。

**覆土** S I 009 穹穴住居跡覆土の項参照のこと。

**床面** 若干の凹凸があり、堅固でない。南西側は堀跡に切られている。

**壁溝** なし。

**柱穴、ピット** なし。

**カマド** 南東壁北寄りに確認されたカマドは S I 009 竪穴住居跡を切って構築されている。上面は削平され、遺存状態は極めて悪い。袖部も原型をとどめなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 褐色土 10Y R 1/2 しまりよし。焼土混入。
2. 暗赤褐色土 5 Y R 1/2 しまりなし。焼土。III層と混入。
3. 黒色土 10Y R 1/2 黒色、白色粒子混入。
4. 褐色土 7.5Y R 1/2 粘土。
5. 黑褐色土 10Y R 1/2 炭化物、黄褐色粒子混入。
6. 暗赤褐色 5 Y R 1/2 烧土。
7. 赤褐色土 5 Y R 1/2 しまりなし。焼土。
8. 明黄褐色土 10Y R 1/2 しまりよし。黄褐色粒子混入。焼土。
9. 黑色土 10Y R 1/2 しまりよし。炭化物混入。
10. 黑褐色土 10Y R 1/2 しまりなし。黄褐色粒子、浮石粒混入。

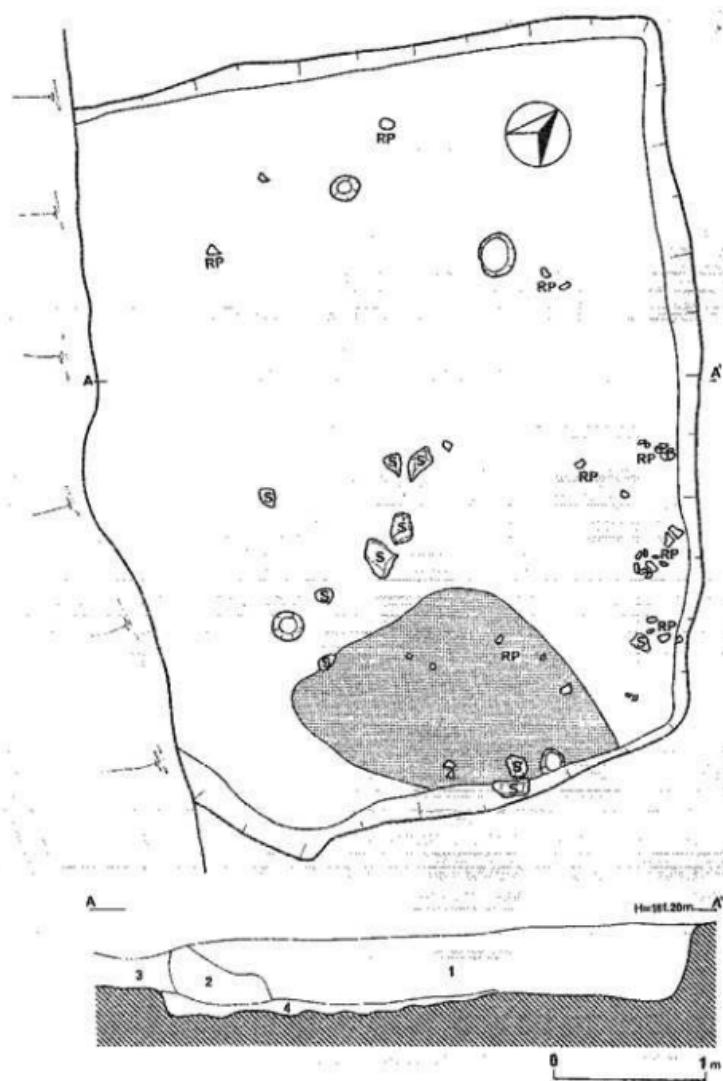
**遺物とその出土状態** 第48図8、9に示す土器が出土した。8は把手付土師器で、S I 009' 竪穴住居跡の煙道部の焼土付近から出土した。全体的に熱変成を受けており、特に把手の根元部分が著しい。9は土師器の調でヘラケズリによる調整が行われている。この他の遺物は土師器の甕の破片が数点出土しただけである。

### S I 020 竪穴住居跡

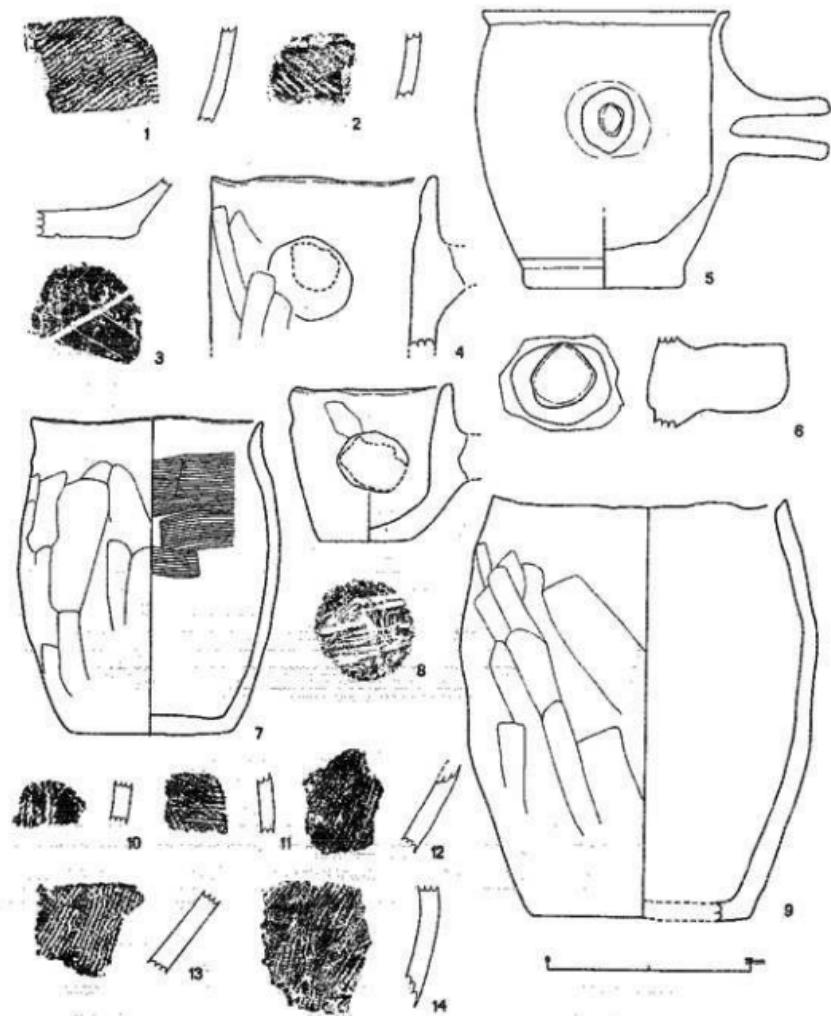
第33表		挿図番号	第47図		図版番号	図版28
造構名		S I 020	検出地図		6-F、7-F、7-G	
法			東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
長		(320) cm	(371) cm			(457) cm
高		43.5~47.5cm	45.2~48.1cm			42~48.4cm
壁溝幅		—	—	—	—	—
壁溝深		—	—	—	—	—
形態	方形	面積	(18.8m <sup>2</sup> )	主軸方向		
かまど位	置	東部に地床か		構築素材		

**プラン確認** II郭南端部から方辺のプランを検出した。南側は台地縁辺部の崩落によって不明である。S K 026 土壘を切っており、これより新しい。

**壁面の状態** 上面が削平されている。壁面は垂直に近い立ち上がりを呈する。

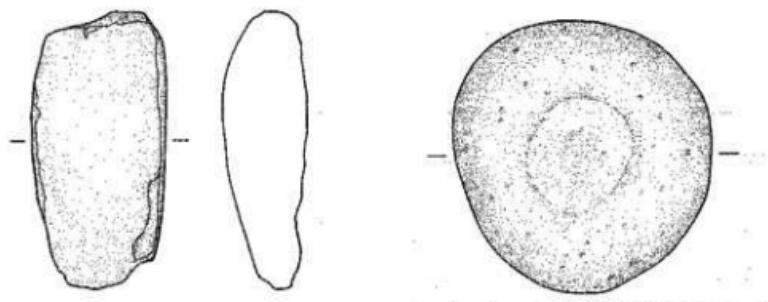


第47図 SI020整穴住居跡



- 1・2 SI002  
 3～5 SI003  
 6 SI008  
 7 SI009  
 8・9 SI009'  
 10～14 SI020

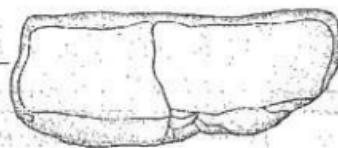
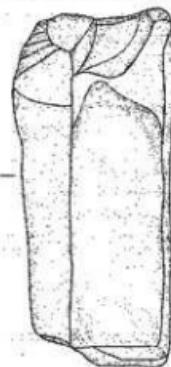
第48図 II 郷堅穴住居跡出土遺物(1)



15

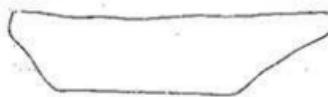
16

0 10cm



18

17



0 20cm

15~18 SI009

第49図 II 郷堅穴住居跡出土遺物(2)

## 覆土

1. 黒褐色土 10Y R<sub>7/8</sub> 粘性ややあり、しまり中。明黄褐色粒子、植物根混入。
2. 黒褐色土 7.5Y R<sub>7/8</sub> 粘性ややあり。しまり中。
3. 黒色土 10Y R<sub>7/8</sub> 粘性ややあり。しまり中。
4. 黒色土 10Y R<sub>7/8</sub> 粘性ややあり。しまり中。

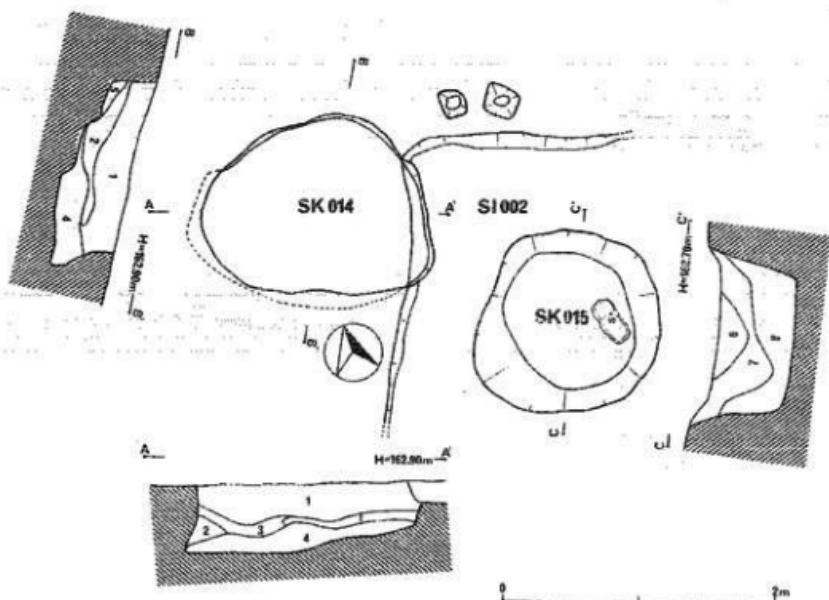
**床面** 床面は若干の凹凸があり、堅固でない。

**壁溝** なし。

**柱穴、ピット** 住居跡壁際に 1 個、他に 3 個のピットを確認した。明確な柱穴となりうるものはない。

**炉** 住居跡東部に焼土痕がみられ、ここを地床炉として使用していたものと思われる。

**遺物とその出土状態** 第48図10~14の縄文土器が出土した。この他の遺物としては土師器の壺と甕の破片が出土している。壺は内面黒色処理のものと非処理のものがある。甕の口縁部はほとんどくびれのないものが出土している。



第50図 SK014, 015土壙

## (イ) 土壙

## SK 014土壙 (第50図 図版29)

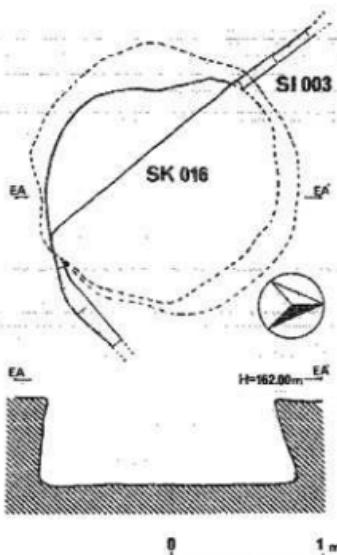
10-C 地区から地山上面にて検出された。平面形は不整円形を呈する。壙口部 164 cm × 130 cm、壙底部 173 cm × 140 cm、頭部 154 cm × 126 cm、深さ 51 cm、面積 1.9 m<sup>2</sup> である。いわゆるフラスコ状ピットである。S I 002 竪穴住居跡によって切られている。床面は凹凸が多い。主軸方位は N 72° W である。遺物は出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり。しまりよし。黄褐色土中～少量混入。
2. 黄褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり。しまり中。黒褐色土中量混入。
3. 黒褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり。しまり中。黄褐色土やや混入。
4. 黒色土 10Y R 5% 粘性ややあり。しまりよし。黄褐色土少量混入。
5. 褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり。しまり中。

## SK 015土壙 (第50図 図版29)

10-C 地区から地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。壙口部 (147) cm × (128) cm、壙底部 106 cm × 90 cm、深さ (54) cm、面積 (1.5) m<sup>2</sup> である。断面は逆台形を見する。床面はほぼ平坦で堅固である。壙土内に礫がはいっていた。遺物は土師器甕の破片が数点出土した。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

6. 褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり。しまり中。にふい黄褐色土、黑色土少量混入。
7. にふい黄褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり。しまりなし。黄褐色土、黑色土少量混入。
8. にふい黄褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり。しまりなし。黑色土少量混入。



第51図 SK 016土壙

**SK 016土壤** (第51図 図版30)

8-E、9-E地区から地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。壙底部 177cm × 171cm、頸部 (152) cm、深さ (56) cm、面積 (2.4) m<sup>2</sup>である。いわゆるプラスコ状ピットで、S I 003竪穴住居跡によって切られている。床面はほぼ平坦であるが、あまり堅固でない。頸部より上は削平のため不明である。遺物は出土しなかった。

**SK 017土壤** (第52図)

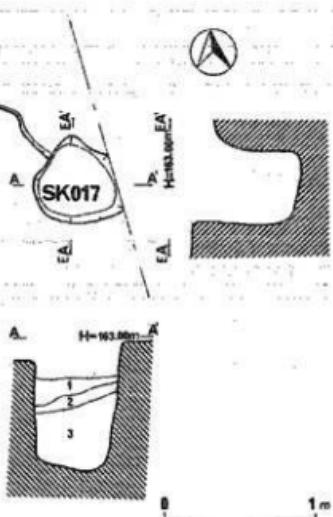
10-C地区から地山上面にて検出された。平面形は不整円形を呈する。壙口部 57cm × (53) cm、頸底部 47cm × 48cm、深さ 60cm、面積 0.3m<sup>2</sup>である。路線外のため東側の一部は不明である。断面は垂直に近い立ち上がりを呈する。S I 001竪穴住居跡によって切られている。遺物は出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 暗褐色土 10Y R % 粘性なし。しまり中。明黄褐色 (10Y R %) 粒子混入。
2. 褐色土 10Y R % 粘性なし。しまり中。明黄褐色 (10Y R %) 粒子混入。
3. 褐色土 10Y R % 粘性なし。しまり中。明黄褐色 (10Y R %) 粒子ブロック状に混入。炭化物混入。

**SK 018土壤** (第53図 図版30)

8-D地区から地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。壙底部 180cm × 174cm、頸部 (126) cm × (117) cm、深さ (55) cm、面積 (2.2) m<sup>2</sup>である。いわゆるプラスコ状ピットである。床面はほぼ平坦で、堅固である。頸部より上は削平のため不明である。遺物は出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒褐色土 10Y R % 粘性ややあり。  
しまり中。明黄褐色 (10Y R %) 粒子混入。
2. 暗褐色土 10Y R % 粘性ややあり。  
しまり中。明黄褐色 (10Y R %) 粒子混入。
3. 褐色土 10Y R % 粘性ややあり。



第52図 SK 017土壤

しまり中。明黄褐色 (10 YR %) 粒子ブロック状に混入。  
4. 明黄褐色土 10 YR % 地山。

#### S K019土壤 (第54図 図版31)

8-E地区から地山

上面にて検出された。

平面形は円形を呈する。

壌口部 (164) cm × (

150) cm、壌底部 182

cm × 160cm、頭部 143cm

× (141) cm、深さ

(53cm)、面積 (2.3) m<sup>2</sup> である。いわゆるフラスコ

状ピットである。床面はほぼ平坦で堅固である。

頭部より上は S I 007 竪穴住居跡によって切られ

ている。遺物は出土しなかった。断面観察による

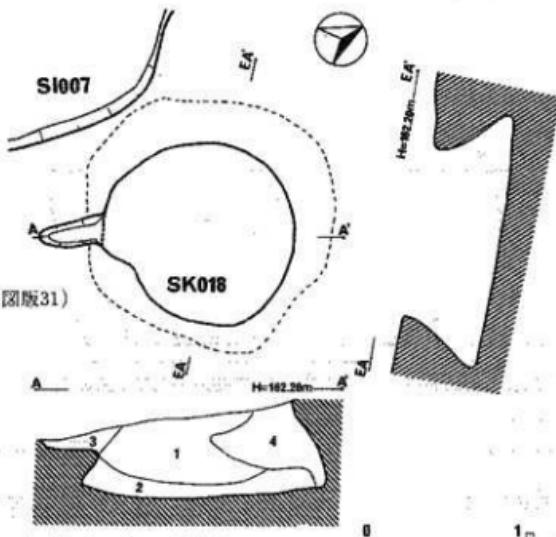
埋土の状態は次のとおりである。

1. 黄褐色土 10 YR % 粘性なし。しまりなし。

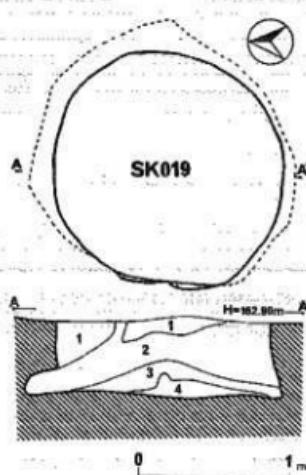
2. 黒色土 … 10 YR % 粘性あり。しまりなし。黄褐色 (10 YR %) 白色粒子少量混入。

3. 黄褐色土 10 YR % 粘性なし。しまりなし。白色粒子混入。

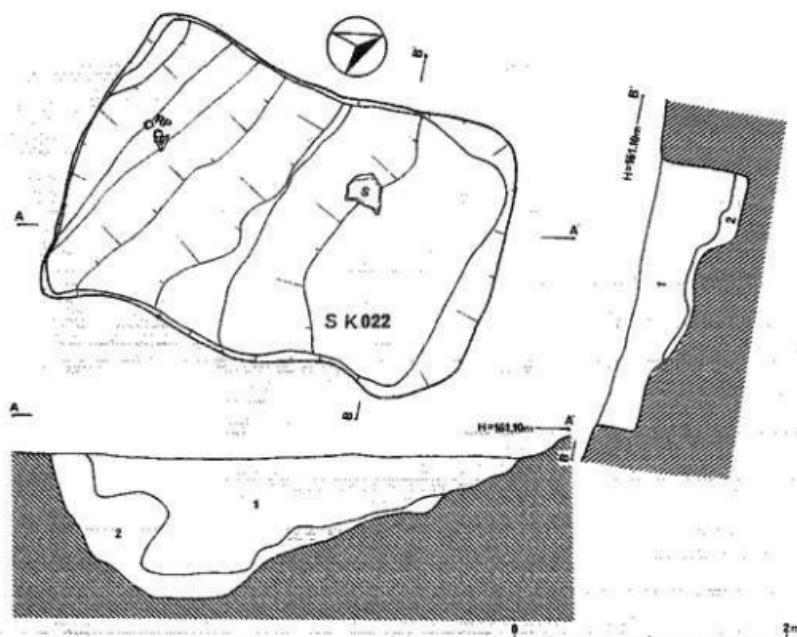
4. 黒色土 10 YR % 粘性なし。しまりなし。黄褐色 (10 YR %) 粒子少量混入。



第53図 SK018土壤



第54図 SK019土壤



第55図 SK022土壤

**SK022土壤** (第55図 図版34)

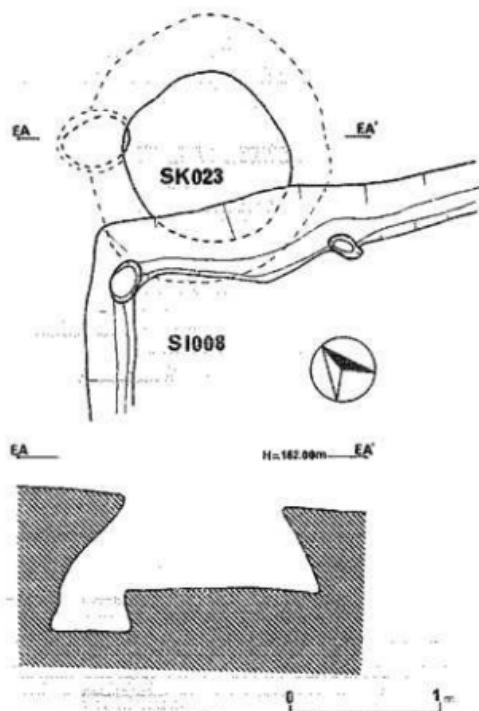
7-E地区から地上面にて検出された。壙口部  $318\text{cm} \times (207)\text{cm}$ 、深さ103cm、面積(6.4) m<sup>2</sup>である。南東部が台地縁辺部のため全体の形は不明である。溝状遺構の先端部とも考えられるが不明のため、ここでは土壤としておく。S-I 008 穴穴住居跡によって切られており、住居跡構築時に土壤を切って貼床が作られている。第60図4-6に示す遺物が遺構底面から出土した。4・5は縄文土器の底部である。6は石匙で、石質は頁岩である。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒色土 10Y R 2% 粘性なし。しまり中。
2. 黑褐色土 10Y R 3% 粘性なし。しまり中。明褐色土(10Y R 3%) ブロックが小粒状に少量混入。

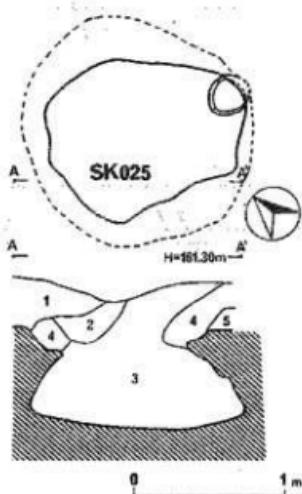
**SK023土壤** (第56図 図版31)

8-F地区から地山上面に検出された。平面形は(円形)を呈する。壙底部  $157\text{cm} \times (171)$

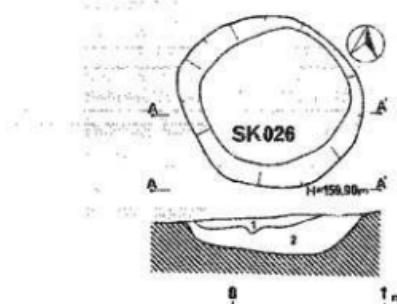
cm、頭部 (110) cm × 101 cm、深さ57cm、面積 (2.2) m<sup>2</sup>である。S I 008 穫穴住居跡の北東壁北寄りの壁面に黒褐色土の掘込み及び土器の胸部を検出した。しかし、平面観察では壇口部が確認できなかったため、底面から掘り進めた。底面から3個の土器が出土。第59図1・2、第60図3に示す土器がそれらである。1は台付鉢形土器である。口唇部にB突起が4組配され、貼瘤がそれらのうち1対の下に施される。口縁部にはいわゆる羊齒状文が施される。胸部は単節LR原体を横位回転施文している。2は単節RL施文が縦位回転施文されている。



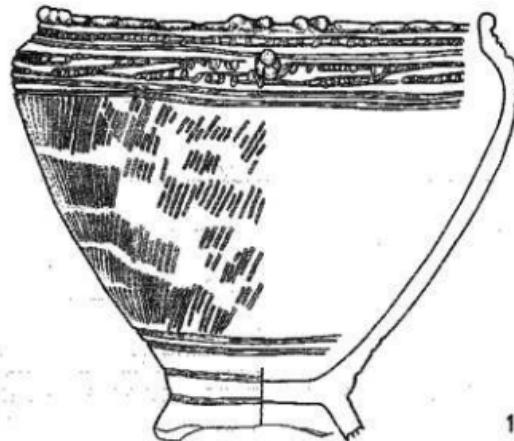
第56図 SK023土壤



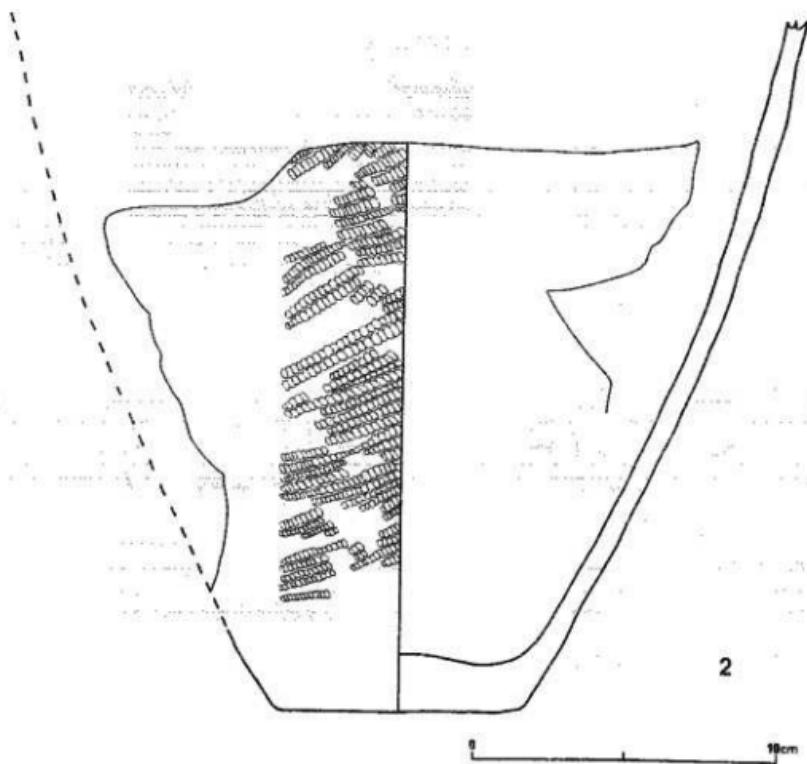
第57図 SK025土壤



第58図 SK026土壤

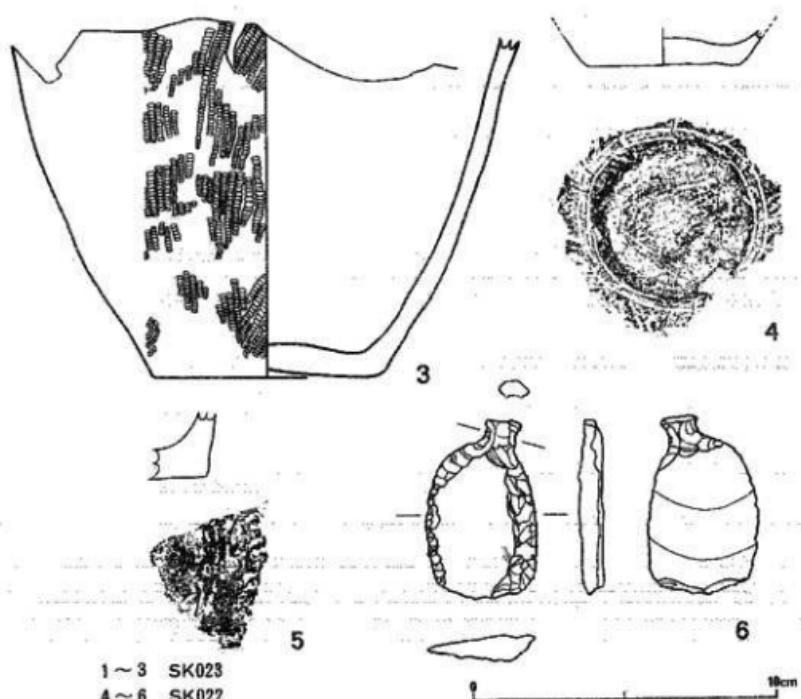


1



2

第59図 II 郭土壤出土遺物(1)



第60図 II 郡土壤出土遺物(2)

3は単節L.R織文が横位回転施文されている。いずれも織文時代晩期のものと思われる。

いわゆるフラスコ状ピットで、底面にさらに小ピット上が1個確認された。床面はほぼ平坦で堅固である。

#### S K024土壤

8-F地区から地山上面にて検出された。S I 008 整穴住居跡の北西壁面上にわずかに長梢円形の掘り込みを確認した。フラスコ状ピットの底縁部がわずかに削平されずに残ったものと思われる。したがって法量等はほとんど計測不可能であった。遺物も出土しなかった。

#### S K025土壤 (第57図 図版33)

### 妻の神 I 遺跡

7-F 地区から地山上面にて検出された。平面形は横円形を呈する。壇口部 (130) cm × (99) cm、壇底部 153 × 140cm、頸部 83cm × 83cm、深さ 86cm、面積 (1.8) m<sup>2</sup> である。いわゆる フラスコ状ピットである。床面はほぼ平坦で堅固である。頸部や上部より上は S I 008 竪穴住居跡によって切られている。また底部に小ピット 1 個が確認された。遺物は出土しなかった。  
断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒褐色土 10Y R % 粘性なし。しまり中。
2. 暗褐色土 10Y R % 粘性なし。しまり中。
3. 黒色土 10Y R % 粘性なし。しまり中。明黄褐色粒子混入。
4. 褐色土 10Y R % 粘性ややあり。しまり中。黄褐色土 (10Y R %) 多量に混入。
5. 黄褐色土 10Y R % 粘性ややあり。しまり中。

### S K 026 土壙 (第58図 図版34)

7-F 地区から地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。壇口部 (125) cm × (106) cm、壇底部 100cm × 85cm、深さ 25cm、面積 (1.1) m<sup>2</sup> である。主軸方位は N 76° W である。断面は鍋底状を呈し、床面は堅固でない。上面を S I 020 竪穴住居跡によって切られている。遺物は出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

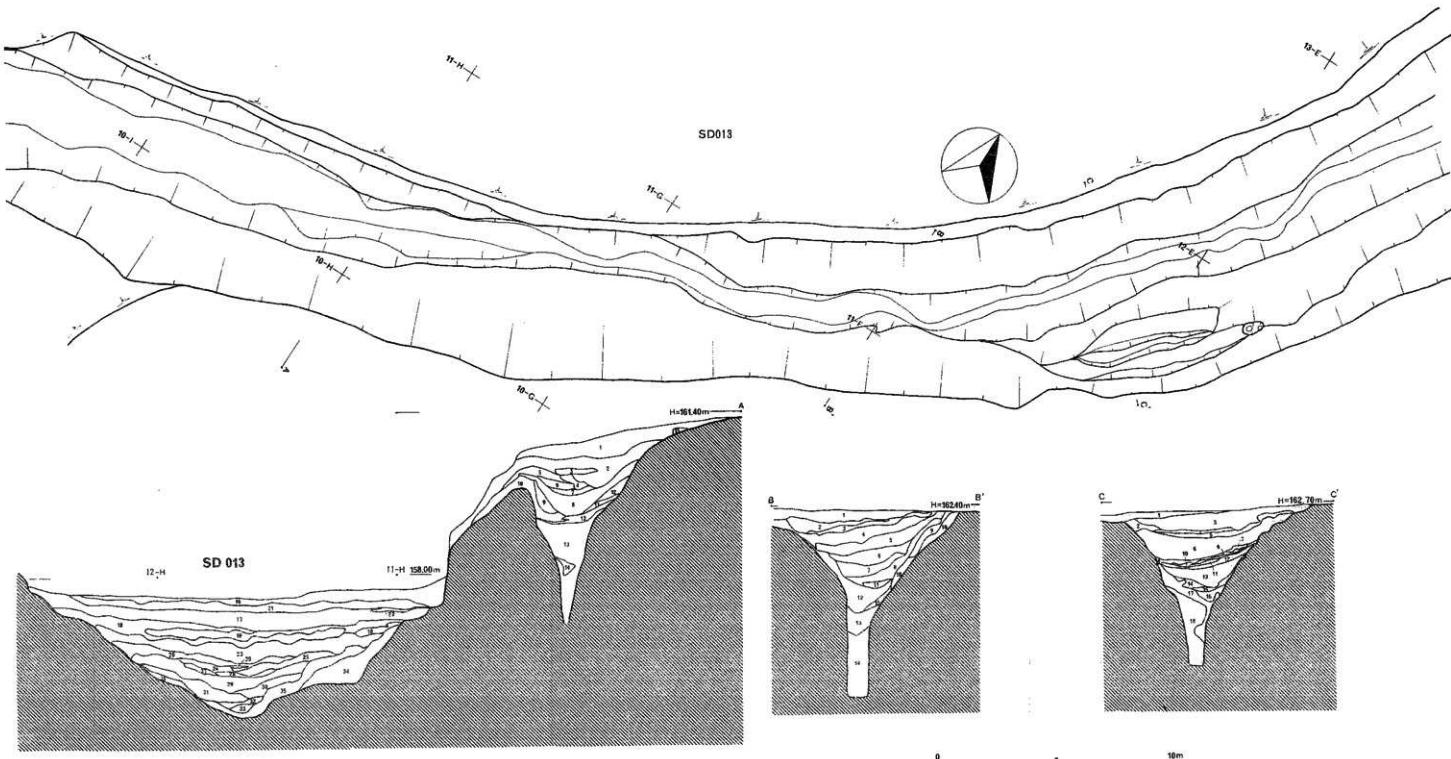
1. 暗褐色土 10Y R % 粘性ややあり。しまり中。明黄褐色 (10Y R %) 粒子混入。
2. 褐色土 10Y R % 粘性ややあり。しまり中。明黄褐色 (10Y R %) 粒子混入。

### ウ. 堀跡

妻の神遺跡では 4 つの堀跡が確認された。一番外側が S D 010 と S D 011 であり、その内側が S D 012、最も内側が S D 013 である。新旧関係は S D 010 が S D 013 に切られている。S D 012 と S D 013 の間ではほぼ同時に使用されていたと思われる。

### S D 010 堀跡 (第61図 図版35 36)

II郭の内側の縁辺部に、内側の S D 013 堀跡に沿って溝状の落ち込みを確認した。内側の壁は S D 013 堀跡構築時に削平されている。空堀として使用されていたものと思われるが絶えず若干の水流があったらしくそれによって底部は深くえぐりこまれていた。埋土中から繩文土器、土師器等がまとまりなく出土した。(第65・66図) 出土量は堀跡の中では最も多い。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。



第61図 SD010断跡

## 〈断面A〉

1. 黒褐色土	10Y R %	粘性ややあり。しまり中。黄褐色少量混入。
2. 黒色土	10Y R %	粘性なし。しまり中。黄褐色土少量混入。
3. 黒色土	10Y R %	粘性ややあり。しまり中。
4. 黒褐色土	10Y R %	粘性なし。しまりなし。軽石多量に混入。
5. 褐色土	10Y R %	粘性なし。しまりなし。暗褐色土少量混入。
6. にぶい黄褐色土	10Y R %	粘性あり。しまりよし。黒褐色土少量混入。
7. にぶい黄褐色土	10Y R %	粘性なし。しまりなし。黄褐色土少量混入。
8. 黒褐色土	10Y R %	粘性ややあり。しまりなし。黄褐色土少量混入。さらさらしている。
9. 明黄褐色土	10Y R %	粘性ややあり。しまり中。暗褐色土少量混入。
10. にぶい黄橙色土	10Y R %	粘性ややあり。しまり中。地山土。
11. 黒色土	10Y R %	粘性なし。しまりなし。
12. にぶい黄橙色土	10Y R %	粘性ややあり。しまり中。黒褐色土少量混入。
13. にぶい黄橙色土	10Y R %	粘性ややあり。しまり中。
14. 黒色土	10Y R %	粘性なし。しまりなし。にぶい黄橙色土少量混入。
15. 明黄褐色土	10Y R %	粘性なし。しまりなし。黒褐色土少量混入。
16. 暗褐色土	10Y R %	粘性なし。しまり中。
17. オリーブ褐色土	2.5Y R %	粘性なし。しまり中。軽石大粒混入。
18. にぶい黄褐色土	10Y R %	粘性なし。しまりなし。軽石極大粒混入。
19. 暗オリーブ褐色土	2.5Y R %	粘性なし。しまりなし。軽石小粒少量混入。
20. にぶい黄褐色土	10Y R %	粘性なし。しまりなし。
21. 暗褐色土	10Y R %	粘性なし。しまりなし。軽石混入。
22. 黒褐色土	10Y R %	粘性なし。しまりなし。白色礫小粒少量混入。
23. 黑褐色土	10Y R %	
24. 黑褐色土	10Y R %	
25. 黑褐色土	10Y R %	
26. 黑褐色土	10Y R %	
27. 暗褐色土	10Y R %	粘性なし。しまり中。白色粒子少量混入。
28. 黒色土	10Y R %	粘性ややあり。しなりなし。
29. 黑褐色土	10Y R %	粘性なし。しまりなし。
30. 黑褐色土	10Y R %	粘性ややあり。しまり中。軽石混入。

31. 灰黄褐色土 10Y R % 粘性あり。しまりなし。黒褐色土(10Y R %)ごく少量混入。
32. にぶい黄褐色土 10Y R % 粘性なし。しまり中。白色粒子少量混入。
33. 黒褐色土 10Y R % 粘性あり。しまりなし。
34. 灰黄褐色土 10Y R % 粘性なし。しまりよし。白色粒子極小粒混入。
35. にぶい黄褐色土 10Y R % 粘性なし。しまりなし。火山性怪石混入。下部に粘土混入。

## &lt;断面B&gt;

1. 黒褐色土 10Y R % 粘性ややあり。しまり中。
2. 暗褐色土 10Y R % 粘性なし。しまりなし。にぶい黄褐色土少量混入。
3. にぶい黄橙色土 10Y R % 粘性なし。しまりなし。褐色土少量混入。
4. 暗褐色土 10Y R % 粘性なし。しまり中。褐色土少量混入。
5. にぶい黄褐色土 10Y R % 粘性あり。しまり中。黑色土褐色土少量混入。
6. にぶい黄褐色土 10Y R % 粘性あり。しまりよし。黒褐色土褐色土少量混入。
7. にぶい黄橙色土 10Y R % 粘性ややあり。しまり中。黒褐色土褐色土少量混入
8. 褐色土 10Y R % 粘性ややあり。しまり中
9. にぶい黄褐色土 10Y R % 粘性あり。しまり中。
10. にぶい黄橙色土 10Y R % 粘性なし。しまりなし。
11. 黑褐色土 10Y R % 粘性なし。しまりなし。褐色土少量混入。
12. 暗褐色土 10Y R % 粘性なし。しまりなし。軽石中粒少量混入。
13. 褐色土 10Y R % 粘性ややあり。しまり中。黒褐色土少量混入。
14. 黑褐色土 10Y R % 粘性なし。しまりなし。褐色土少量混入。
15. にぶい黄褐色土 10Y R % 粘性ややあり。しまり中。

## &lt;断面C&gt;

1. 黑褐色土 10Y R % 粘性ややあり。しまりなし。
2. 暗褐色土 10Y R % 粘性ややあり。しまり中。
3. 黑褐色土 7.5Y R % 粘性ややあり。しまり中。
4. 黑褐色土 10Y R % 粘性ややあり。しまり中。
5. 黑褐色土 10Y R % 粘性ややあり。しまり中。
6. 黑褐色土 10Y R % 粘性ややあり。しまり中。
7. 明褐色土 7.5Y R % 粘性ややあり。しまりなし。
8. 黑褐色土 10Y R % 粘性ややあり。しまりなし。

9. 黒褐色土	10 Y R 1/2	粘性ややあり。しまりなし。
10. にぶい黄褐色土	10 Y R 1/2	粘性ややあり。しまり中。
11. 暗褐色土	10 Y R 1/2	粘性ややあり。しまりなし。
12. 褐色土	10 Y R 1/2	粘性ややあり。しまり中。
13. 黒褐色土	10 Y R 1/2	粘性ややあり。しまり中。
14. 黒褐色土	10 Y R 1/2	粘性ややあり。しまりなし。
15. 黄褐色土	10 Y R 1/2	粘性ややあり。しまりなし。
16. 暗褐色土	10 Y R 1/2	粘性ややあり。しまり中。
17. にぶい黄褐色土	10 Y R 1/2	粘性ややあり。しまり中。
18. 暗褐色土	10 Y R 1/2	粘性ややあり。しまり中。

**S D011堀跡 (第62図 図版37・38)**

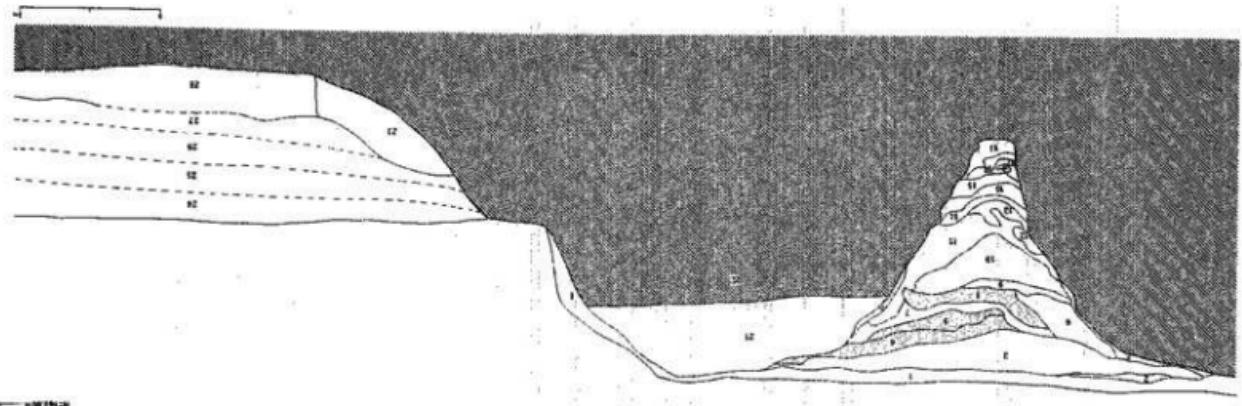
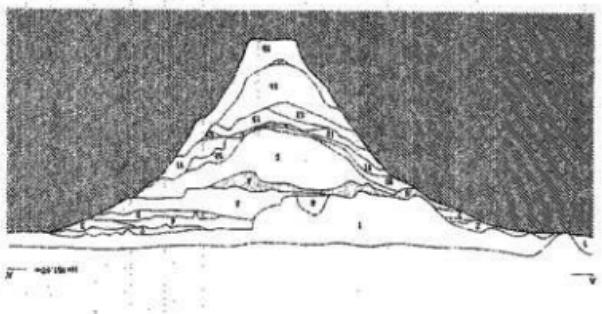
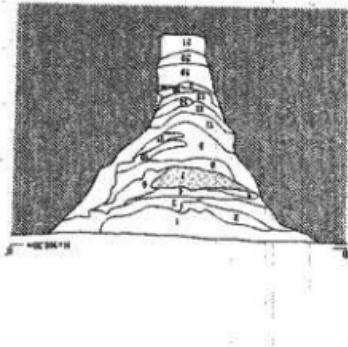
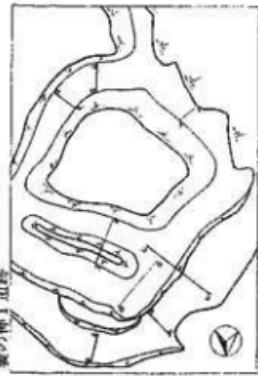
遺跡北端部から検出された。現況では堀は埋もれていた。最も外側を廻る堀である。両端とも調査区外のため総延長・形態等は不明である。遺物は若干の縄文土器片、土師器片、磨石等が出土した(第65・66図)。遺物の出土量は極めて少なく、数点が出土したのみである。

**S D012堀跡 (第63図 図版39・40)**

1郭を廻る S D013 堀跡とあまり時間的差異を持たず、その北側に土壘状に地山を残し、部分的に二重に堀を構築した部分がある。これを S D012 堀跡とした。湧水が激しく断面図実測は困難を極めたが、S D013 堀跡との切り合い関係はつかめず、ほぼ同時に構築されたものと思われる。S D013との境にある土壘状の構造は盛土ではなく、まわりを掘り下げて地山を土壘状に残して構築されたものである。遺物はほとんど出土しなかった。

**S D013堀跡 (第63・64図 図版40~44)**

1郭を廻る大きい堀跡である。S D012 堀跡とともに発掘前の現況においてもその存在が確認されていた堀跡である。S D012 堀跡同様湧水があり、空堀として使用されていたものの若干の水の流れがあり、それらを南側の方から流出させていたようだ。遺物は縄文土器片、土師器片が若干出土した。第65図10~16は縄文時代後期の土器である。17は土師器の底部で回転糸切りによる切りはなしが行われている。また、断面下から焼けた木材が出土している。



第62図 横浜断面図 断面A、B、C

断面 A

土色	上色	成因
1. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。明黄褐色土(10Y R 5%) 40%~50%混入。
2. 赤褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。上部に黒褐色土(10Y R 5%) 部分に少量混入。
3. 黄褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。
4. 黄褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。明黄褐色土(10Y R 5%) 1%混入。
5. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。黄褐色土(10Y R 5%) 40%~50%混入。
6. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性ややあり。しまりなし。明黄褐色土(10Y R 5%) 5%混入。
7. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。
8. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性あり。しまり中。火山性軽石 2%混入。
9. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。黄褐色土(10Y R 5%) 大きな2%混入。
10. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。明黄褐色土(10Y R 5%) 部分 5%混入。
11. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性ややあり。しまり中。
12. 黄褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。明黄褐色土(10Y R 5%) 10%混入。
13. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。白色粒子混入。
14. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。白色粒子混入。
15. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。白色粒子混入。
16. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。白色粒子混入。
17. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。
18. 黄褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまり中。黄褐色土(10Y R 5%) 中程度 5%混入。

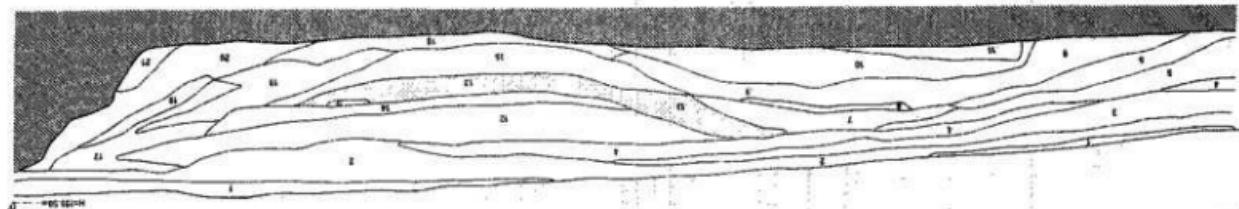
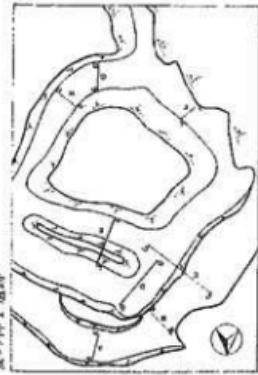
断面 B

土色	10	上色	成因
1. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまり中。明黄褐色土 1%混入。	
2. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性ややあり。しまり中。黒褐色土 10%混入。	
3. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性ややあり。しまりよし。	
4. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性ややあり。しまりよし。	
5. 黄褐色土	10Y R 5%	粘性ややあり。しまり中。	
6. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性ややあり。しまりよし。	
7. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性ややあり。しまりよし。	
8. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性ややあり。しまり中。	
9. 黑褐色土	7.5Y R 5%	粘性あり。しまり中。砂子多い。	
10. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性あり。しまり中。	
11. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性あり。しまりなし。	
12. 黄褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりよし。目の荒い砂子。	
13. 黄褐色土	10Y R 5%	粘性ややあり。しまり中。	
14. 黄褐色土	10Y R 5%	粘性ややあり。しまりよし。	
15. 黄褐色土	10Y R 5%	粘性ややあり。しまり中。さらさらした砂子。	
16. 黄褐色土	10Y R 5%	粘性ややあり。しまりよし。荒い砂子。	
17. 明黄色土	10Y R 5%	粘性あり。しまりなし。	
18. 明黄色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。	
19. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。白色粒子も 1%混入。	
20. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。白色粒子も 1%混入。	
21. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。白色粒子も 1%混入。	

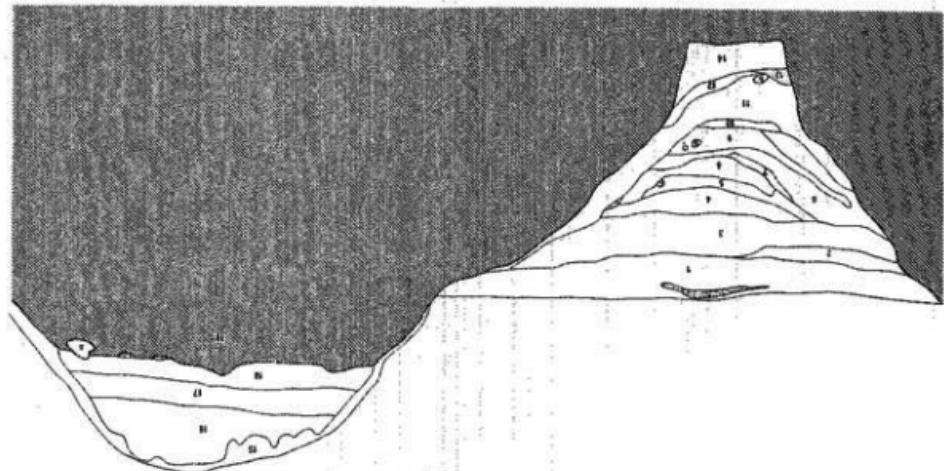
断面 C

土色	上色	成因
1. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。モースス系明黄褐色土(10Y R 5%) 40%~50%混入。
2. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。モースス系明黄褐色土(10Y R 5%) 5%混入。
3. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。モースス系明黄褐色土(10Y R 5%) 10%混入。
4. 黄褐色土	10Y R 5%	粘性ややあり。しまり中。
5. 黄褐色土	10Y R 5%	粘性ややあり。しまり中。モースス系明黄褐色土(10Y R 5%) 6%混入。
6. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。英褐色(10Y R 5%) 5%混入。
7. 黑褐色土	2.5Y R 5%	粘性あり。しまり中。赤褐色(10Y R 5%) 10%混入。
8. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性あり。しまり中。英褐色(10Y R 5%) 10%混入。
9. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性あり。しまり中。英褐色(10Y R 5%) 10%混入。
10. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性あり。しまり中。英褐色(10Y R 5%) 10%混入。
11. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。モースス系明黄褐色土(10Y R 5%) 10%混入。
12. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性あり。しまりなし。モースス系明黄褐色土(10Y R 5%) 5%混入。
13. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。モースス系明黄褐色土(10Y R 5%) 5%混入。
14. 黄褐色土	10Y R 5%	粘性ややあり。しまり中。モースス系明黄褐色土(10Y R 5%) 10%混入。
15. 黄褐色土	10Y R 5%	粘性あり。しまり中。モースス系明黄褐色土(10Y R 5%) 10%混入。
16. 黄褐色土	10Y R 5%	粘性あり。しまり中。モースス系明黄褐色土(10Y R 5%) 10%混入。
17. 黄褐色土	10Y R 5%	粘性あり。しまり中。モースス系明黄褐色土(10Y R 5%) 10%混入。
18. 黑褐色土	2.5Y R 5%	粘性あり。しまりなし。モースス系明黄褐色土(10Y R 5%) 10%混入。
19. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性ややあり。しまりなし。モースス系明黄褐色土(10Y R 5%) 5%混入。
20. 明黄色土	10Y R 5%	粘性ややあり。しまりなし。モースス系明黄褐色土(10Y R 5%) 5%混入。
21. 黄褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。モースス系明黄褐色土(10Y R 5%) 5%混入。
22. 白色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。モースス系明黄褐色土(10Y R 5%) 5%混入。
23. 黄褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。モースス系明黄褐色土(10Y R 5%) 5%混入。
24. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。モースス系明黄褐色土(10Y R 5%) 5%混入。
25. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。モースス系明黄褐色土(10Y R 5%) 5%混入。
26. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。モースス系明黄褐色土(10Y R 5%) 5%混入。
27. 黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。しまりなし。モースス系明黄褐色土(10Y R 5%) 5%混入。
28. 黄褐色土	2.5Y R 5%	粘性なし。しまりなし。モースス系明黄褐色土(10Y R 5%) 5%混入。

は浮石混入層。



断面 D, E



第63図 横断面図 断面D, E

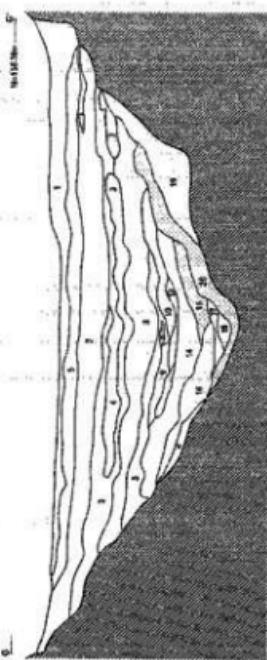
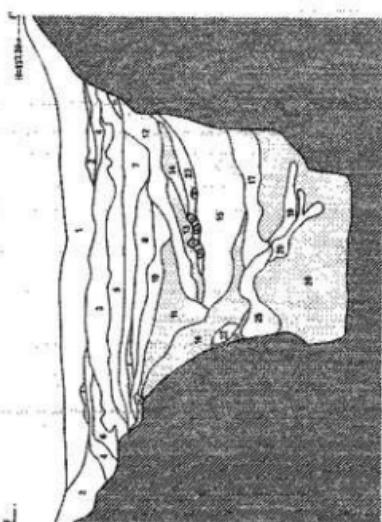
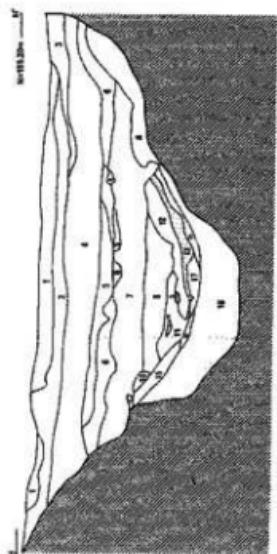
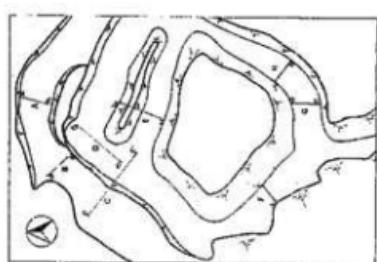
断面 D

土 色	土 色 説 明
1. 黒 極 色 土 10Y R 5%	粘性ややあり。 しまりよし。 錫石 5%混入。
2. 姫 極 色 土 10Y R 5%	粘性なし。 しまり中。 炭化物小量 5cm程度の鉄石 3%混入。
3. にふい黄褐色土 10Y R 5%	粘性なし。 しまり中。 錫石小量混入。
4. 姫 極 色 土 10Y R 5%	粘性あり。 しまり中。 錫石混入。
5. 黒 極 色 土 10Y R 5%	粘性あり。 しまり中。 錫石混入。
6. 黑 極 色 土 10Y R 5%	粘性ややあり。 しまり中。 明黄褐色土 3%混入。
7. 黑 極 色 土 10Y R 5%	粘性あり。 しまりよし。 黑褐色土。 明黄褐色土 20%混入。
8. 黑 極 色 土 上 10Y R 5%	粘性あり。 しまりよし。 錫石小量 4. 小量混入。
9. 黑 極 色 土 10Y R 5%	粘性あり。 しまりよし。 そびたような色の土 7%混入。
10. 黑 極 色 土 10Y R 5%	粘性あり。 しまり中。 姫褐色土 (7.5Y R 5%) 10%混入。
11. にふい黄褐色土 10Y R 5%	粘性あり。 しまり中。 黑褐色土 (7.5Y R 5%) 40%混入。
12. 黑 極 色 土 10Y R 5%	粘性あり。 しまり中。
13. 黑 極 色 土 10Y R 5%	粘性なし。 黑褐色土 5%錫石 5%混入。
14. 黑 極 色 土 10Y R 5%	粘性ややあり。 しまり中。 黄褐色粒子 1%混入。
15. 黑 極 色 土 10Y R 5%	粘性あり。 しまりよし。 黄褐色粒子 1%、 明褐色土 (7.5Y R 5%) 小量混入。
16. 黑 極 色 土 上 10Y R 5%	粘性あり。 しまり中。
17. 黑 極 色 土 10Y R 5%	粘性ややあり。 しまり中。 黄褐色土 1%混入。
18. 黑 極 色 土 10Y R 5%	粘性なし。 しまりなし。 黄褐色土 10%混入。
19. 黑 極 色 土 上 10Y R 5%	粘性あり。 しまりよし。 黑褐色土 2%混入。
20. にふい黄褐色土 10Y R 5%	粘性ややあり。 しまり中。 黄褐色土 40%混入。
21. 黑 極 色 土 上 10Y R 5%	粘性なし。 しまりなし。 黄褐色土 20%混入。
22. 黑 極 色 土 10Y R 5%	粘性ややあり。 しまり中。 黄褐色土 10%混入。

断面 E

上 土 色	土 色 説 明
1. 姫 極 色 土 10Y R 5%	しまりよし。 ザラザラしている。 炭化物混入。
2. 黑 極 色 土 10Y R 5%	上部の粒子こまかい。
3. 黑 極 色 土 10Y R 5%	しまりよし。 粒子こまかい。
4. 黑 極 色 土 10Y R 5%	しまりよし。
5. 黑 極 色 土 上 10Y R 5%	しまりよし。 粒子は黒い。 にふい黄褐色土 (10Y R 5%) のアローハー混入。
6. 黑 極 色 土 7.5Y R 5%	粘性あり。
7. にふい黄褐色土 10Y R 5%	しまりよし。
8. 黑 極 色 土 10Y R 5%	粘性あり。
9. 黑 極 色 土 5Y R 5%	粘性あり。 粒子が黒い。
10. 黑 極 色 土 5Y R 5%	しまりなし。
11. 成熟褐色土 10Y R 5%	粘性あり。 粒子が黒い。
12. 黑 極 色 土 10Y R 5%	しまりなし。 粒子を高くザラザラしている。
13. 黑 極 色 土 10Y R 5%	浮石混入。 粒子を高くザラザラしている。
14. 黑 極 色 土 10Y R 5%	明褐色土 (7.5Y R 5%) 混入。
15. 黑 極 色 土 10Y R 5%	粘性なし。 しまりなし。 ザラザラした粒子。
16. 明 褐 色 土 10Y R 5%	粘性ややあり。 しまりよし。 粘土質。
17. にふい黄褐色土 10Y R 5%	粘性ややあり。 しまり中。
18. にふい黄褐色土 10Y R 5%	粘性なし。 しまり中。 火山性錫石 7%混入。
19. にふい黄褐色土 10Y R 5%	粘性なし。 しまりよし。 大山性錫石大粒 10%混入。

■は浮石混入層。



第64図 堀跡断面図 断面F, G, H

## 断面 F

土 色	土 色	説 明
1. 黄 色 土	10Y R 5%	粘性なし。
2. にふい黄褐色土	10Y R 5%	粘性なし。
3. 棕 色 土	10Y R 5%	粘性なし。
4. 紫 棕 色 土	10Y R 5%	粘性なし。
5. にふい紫褐色土	10Y R 5%	粘性なし。
6. にふい紫褐色土	10Y R 5%	粘性なし。
7. 黑 棕 色 土	10Y R 5%	粘性ややあり。
8. 黑 棕 色 土	10Y R 5%	粘性なし。
9. 黑 棕 色 土	10Y R 5%	粘性なし。
10. 黑 棕 色 土	10Y R 5%	粘性なし。
11. 黑 棕 色 土	10Y R 5%	粘性なし。
12. にふい黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。
13. 黑 棕 色 土	10Y R 5%	粘性ややあり。
14. 黑 棕 色 土	10Y R 5%	粘性なし。
15. 黑 黄 棕 色 土	10Y R 5%	粘性なし。
16. 黑 黄 棕 色 土	10Y R 5%	粘性ややあり。
17. にふい黄色土	10Y R 5%	粘性なし。
18. 黑 黄 棕 色 土	10Y R 5%	粘性なし。
19. 黑 黄 棕 色 土	2.5Y R 5%	粘性なし。
20. 黑 棕 色 土	2.5Y R 5%	粘性ややあり。
21. にふい黄褐色土	10Y R 5%	粘性なし。
22. 黄 棕 色 土	10Y R 5%	粘性なし。
23. にふい黄褐色土	10Y R 5%	粘性ややあり。
24. 黑 棕 色 土	10Y R 5%	粘性なし。
25. 黑 黄 棕 色 土	2.5Y R 5%	粘性なし。
26. 黑 黄 棕 色 土	10Y R 5%	粘性なし。

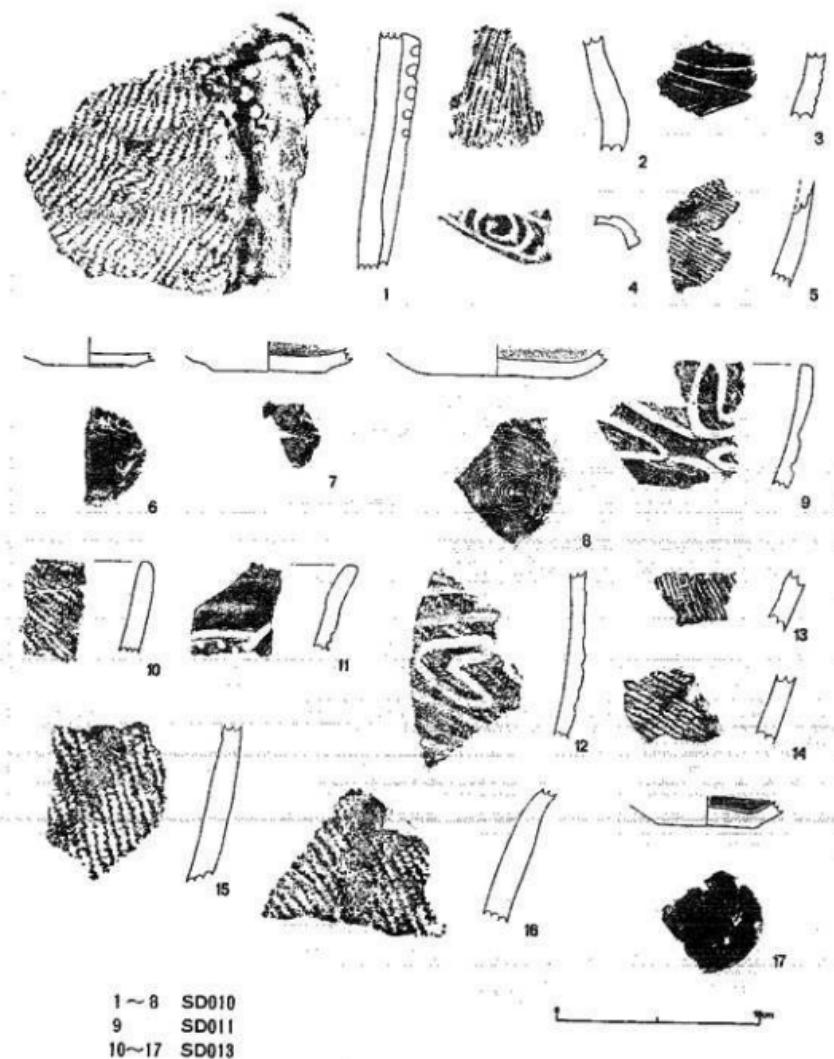
## 断面 G

土 色	土 色	地 名
1. 黄 棕 色 土	10Y R 5%	粘性なし。
2. オリーブ褐色土	2.5Y R 5%	粘性なし。
3. にふい黄褐色土	10Y R 5%	粘性なし。
4. 紫オーライト褐色土	2.5Y R 5%	粘性なし。
5. にふい黄褐色土	10Y R 5%	粘性なし。
6. 黑 棕 色 土	10Y R 5%	粘性なし。
7. 黑 棕 色 土	10Y R 5%	粘性なし。
8. 黑 棕 色 土	10Y R 5%	粘性ややあり。
9. 黑 棕 色 土	10Y R 5%	粘性ややあり。
10. 黑 棕 色 土	10Y R 5%	粘性ややあり。
11. 黑 棕 色 土	10Y R 5%	粘性ややあり。
12. 黑 棕 色 土	10Y R 5%	粘性なし。
13. 黑 棕 色 土	10Y R 5%	粘性ややあり。
14. 黑 棕 色 土	10Y R 5%	粘性なし。
15. 黑 棕 色 土	10Y R 5%	粘性ややあり。
16. にふい黄褐色土	10Y R 5%	粘性なし。
17. 黑 棕 色 土	10Y R 5%	粘性あり。
18. 黑 黄 棕 色 土	10Y R 5%	粘性なし。
19. 黑 黄 棕 色 土	10Y R 5%	粘性なし。
20. にふい黄褐色土	10Y R 5%	粘性なし。

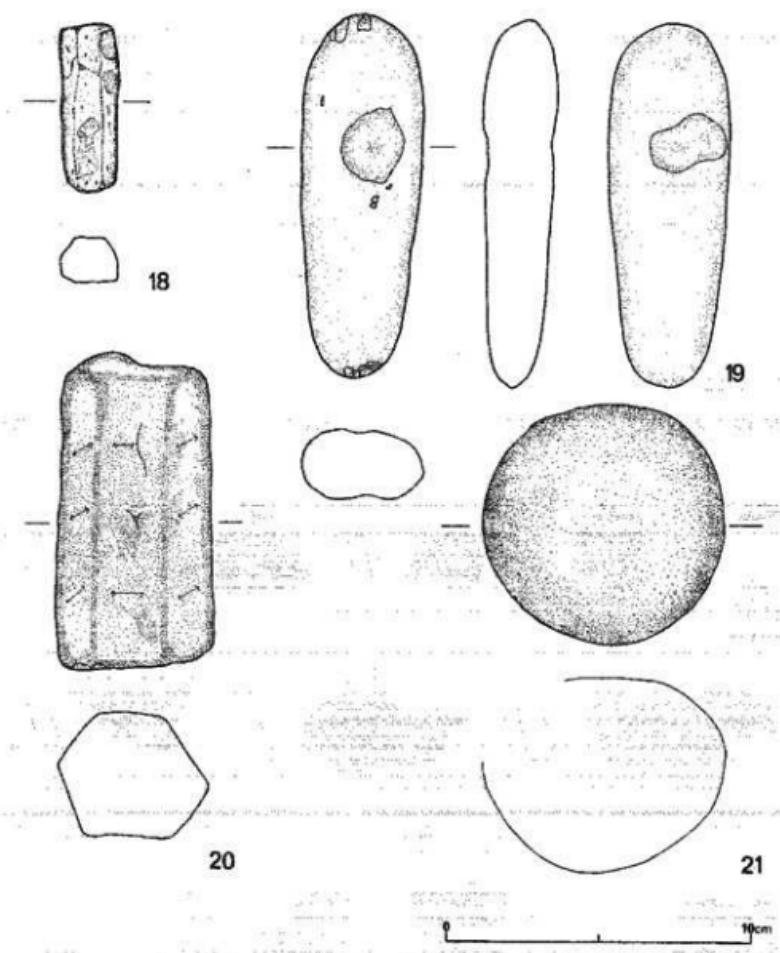
## 断面 H

上 色	上 色	説 明
1. 黑 棕 色 土	10Y R 5%	しまりよし。粒子はこまかい。
2. 黑 棕 色 土	10Y R 5%	しまりよし。
3. にふい黑褐色土	10Y R 5%	しまりよし。ザガザラした粒子である。
4. にふい黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。
5. にふい黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。
6. にふい黑褐色土	10Y R 5%	粘性なし。
7. にふい黑褐色土	10Y R 5%	しまりよし。粒子はこまかい。
8. にふい黑褐色土	2.5Y R 5%	粘性あり。
9. 成 黄 色 土	2.5Y R 5%	しまりよし。ザガザラして粒子は荒い。
10. にふい黄褐色土	10Y R 5%	しまりよし。ザガザラして粒子は荒い。
11. 黑 棕 色 土	10Y R 5%	しまりよし。ザガザラして粒子は荒い。
12. 明 黄 棕 色 土	2.5Y R 5%	青苔層。
13. 浅 黄 色 土	2.5Y R 5%	しまりよし。
14. 黑 棕 色 土	2.5Y R 5%	しまりよし。
15. 黑 棕 色 土	2.5Y R 5%	しまりよし。
16. 深 黄 色 土	2.5Y R 5%	しまりよし。粒子は荒くザガザラしている。
17. 黑 棕 色 土	10Y R 5%	しまりよし。
18. 超 黑 色 土	2.5Y R 5%	しまりよし。ザガザラして粒子が荒い。

■は浮石混入層。



第65図 堀跡出土遺物(1)



第66図 堀跡出土遺物(2)

## (2) 遺物

## ア. 土器

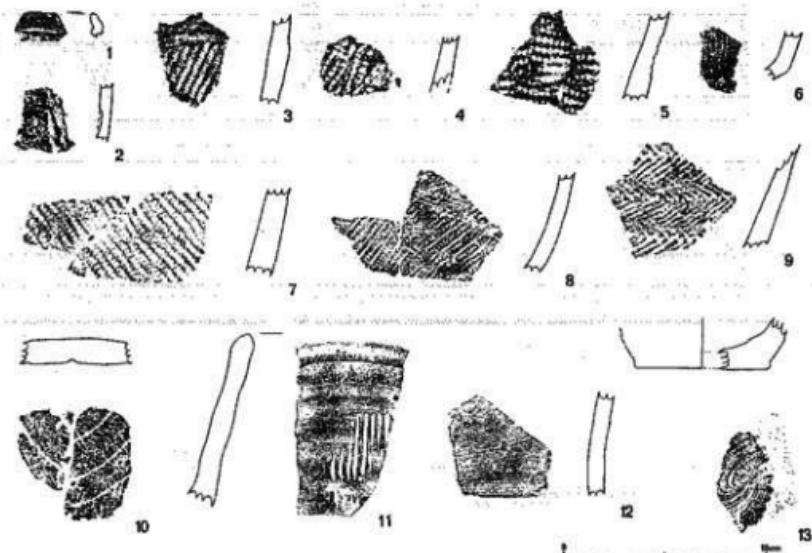
妻の神I遺跡から出土した土器は非常に少なく、遺構外出土のものはコンテナ1箱程度である。第67図に示す土器が出土した。1~10は縄文時代の土器で、1~3は磨消縄文の施されたものである。10は木葉痕のある土器底部である。

11~13は平安時代の土器で、11・12は須恵器裏の破片である。13は土師器壺の底部で、回転糸切りである。

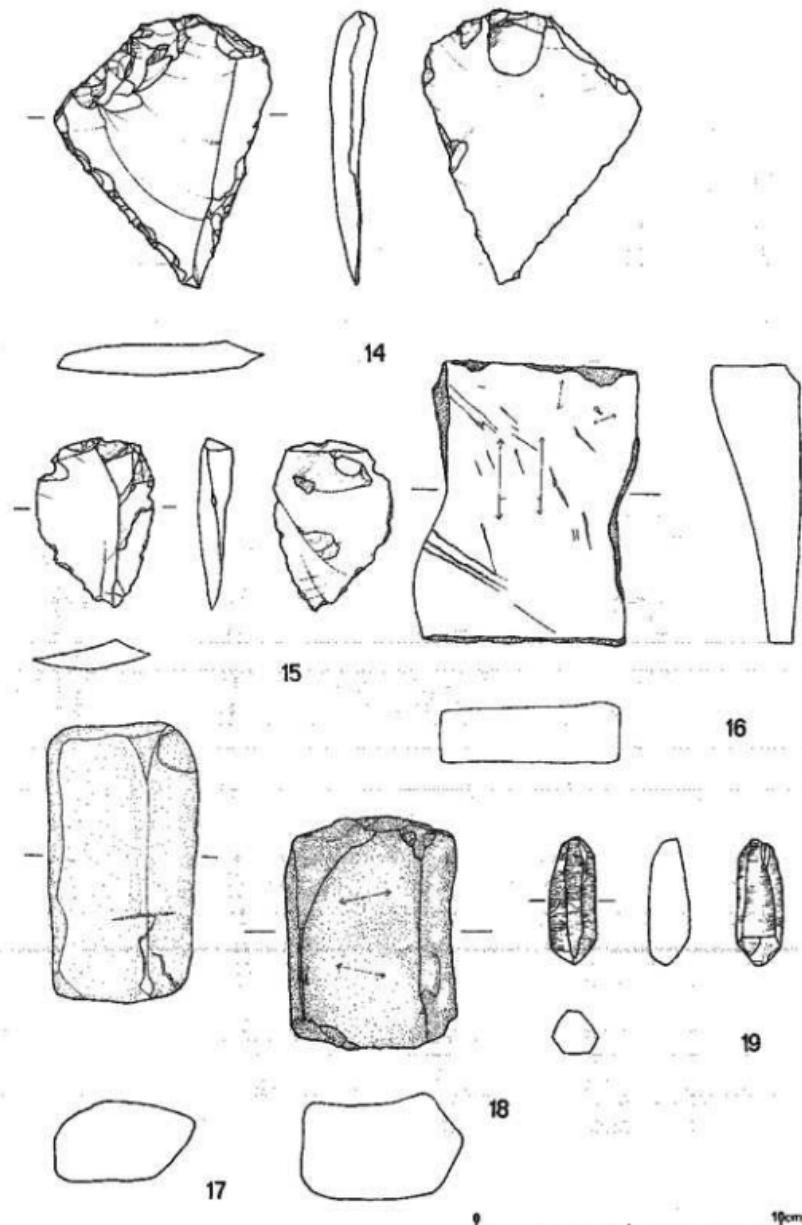
これ以外の遺物はほとんどが土師器底の破片であり、完形に近く復元できるものはなかった。また、その口縁部は、①頭部がくぼみ、外反するもの、②頭部が若干くぼみ、外反するが、最大径は胴部にあるもの、③ほとんど頭部がくびれないもの、の3種に大別される。これらの比率は③が最も多く、②はその半分程度、①は少ない。

## イ. 石器

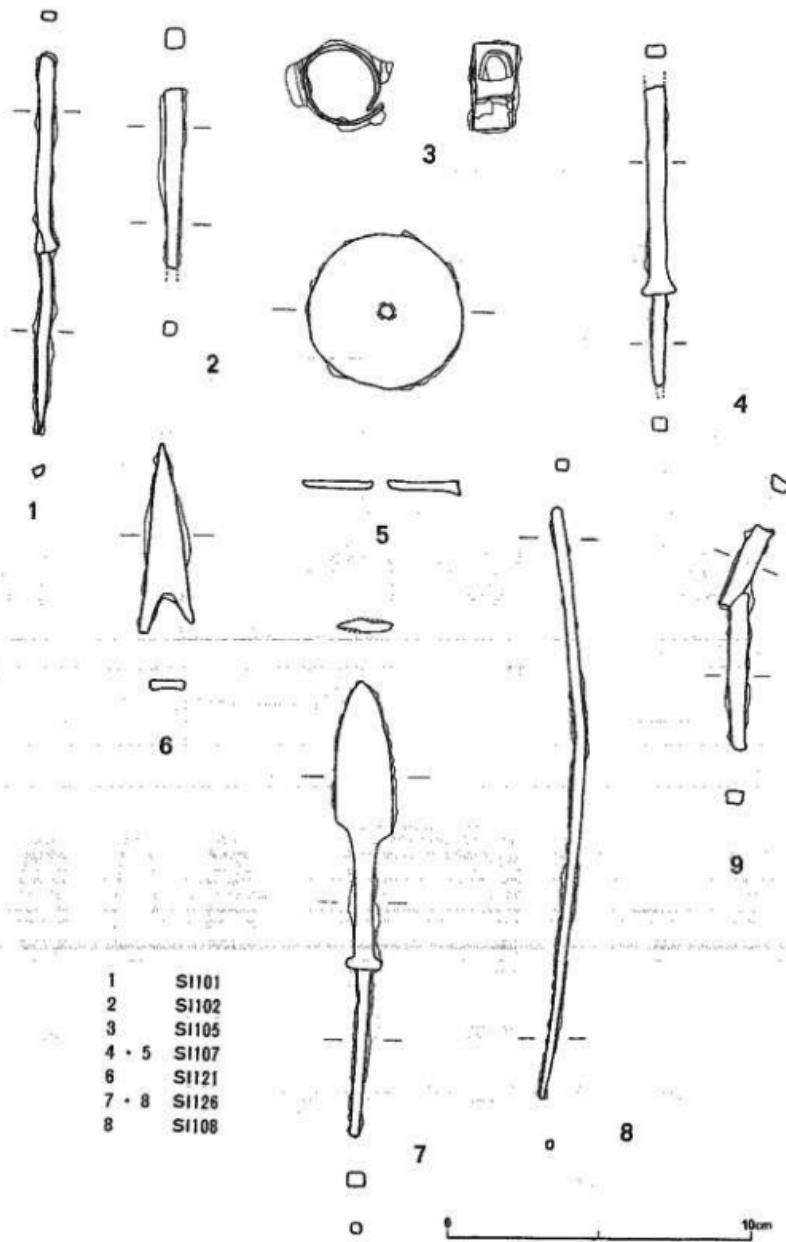
第68図に示した。石器の出土量も少なく、この6点のみである。14は搔器で、左下辺に調整



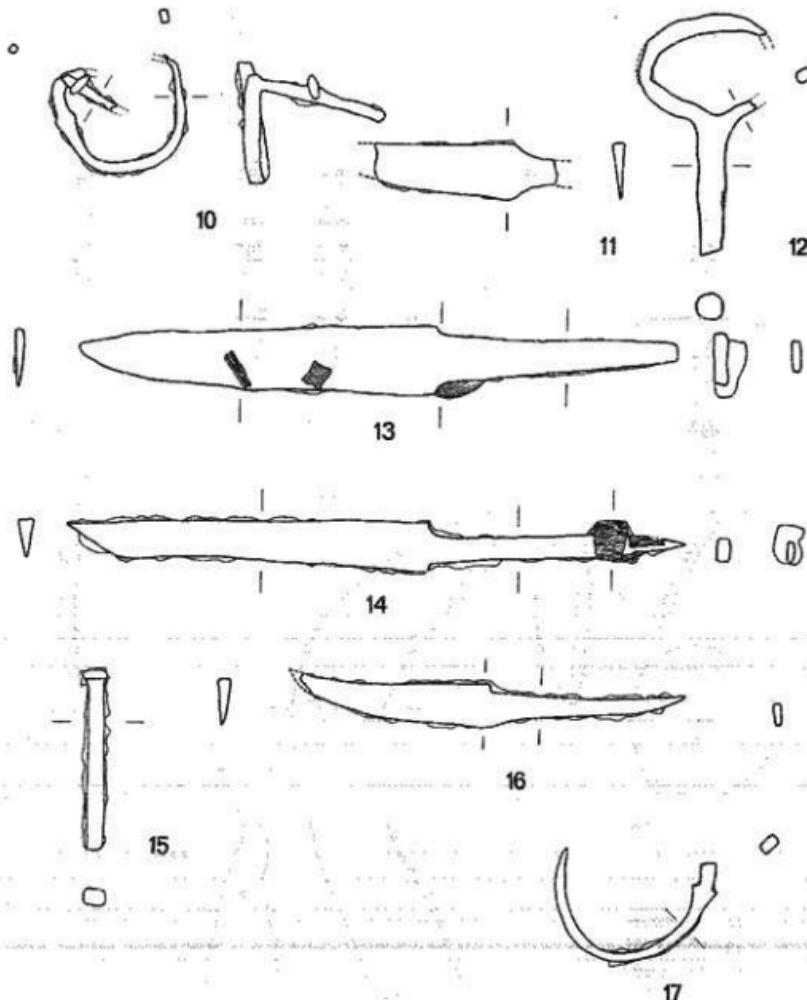
第67図 遺構外出土遺物(1)



第68図 遺構外出土遺物(2)



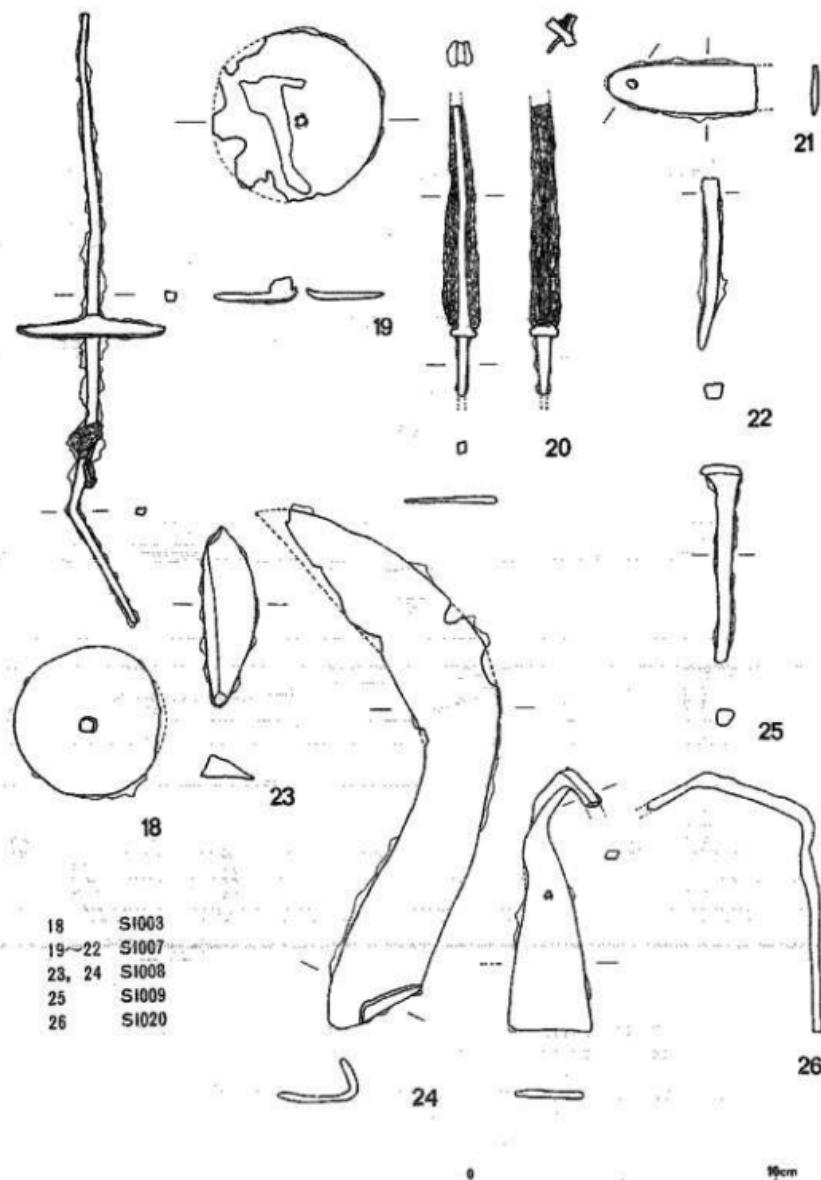
第69図 鉄器実測図(1)



10~13 SK112  
14 SK114  
15 SI 001  
16・17 SI 003

10cm

第70図 鉄器実測図(2)



第71図 鉄器実測図(3)

がみられる。石質は頁岩。16-18は砾石である。石質は16が凝灰岩、17・18が石英安山岩である。19は水晶の結晶体である。

#### ウ. 鉄器

鉄器と確認されたものは30点出土しており、そのほとんどは堅穴住居跡内からの出土である。この他にも鐵滓状のものが数点出土した。

**鎌** (第71図24) 紗に對し純角に使用する湾曲刃の鎌で、全長は20.0cm程と推定される。

**手鏡** (第71図21) 弧の残存で、目釘も一部残存する。また目釘付近に木質部が残る。

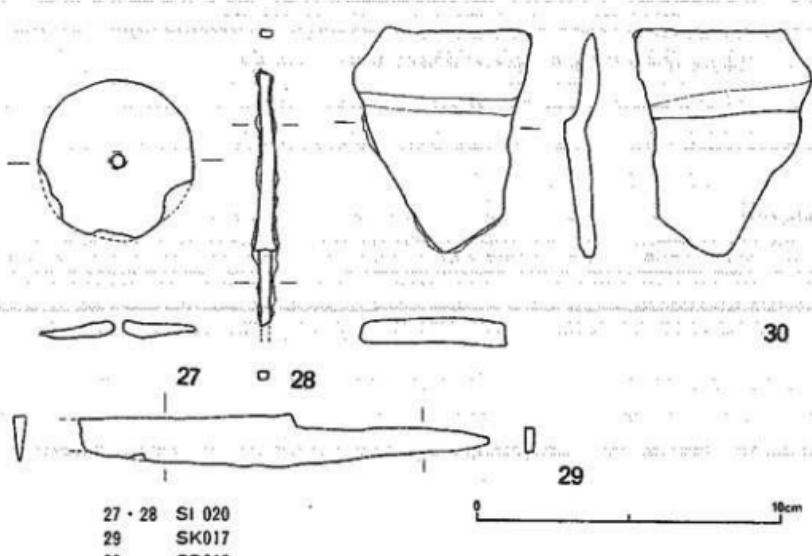
**鎗鉢車** (第69図5、第71図18・19、第72図27) 18のみほぼ完存するが、その他は円盤部のみである。いずれも片側からの打ち抜きで、中央部は若干の盛り上がりを持つ。18は、軸部から木質部を確認した。

**刀子** (第70図11・13・14・16、第72図29) 13・14から木質部が確認された。

**釘** (第69図2・9、第70図15、第71図25) 9は頭部欠損で不明だが、他は平釘である。

**鉄鎌** (第69図1・4・6・7、第71図20、第72図28) 20は木質部が残存する。

**鉄鍋** (第72図30) II郭堀内埋土上部出土のものである。



第72図 鉄器実測図(4)

## 6.まとめ

妻の神 I 遺跡は縄文、平安、中世の複合遺跡であり、発掘は約50m幅でその一部を掘ったにすぎない。現況として空堀とそれによって独立した郭があるのを確認できたが、表土は浅く、平安期の遺構・遺物が大きな割合を占めた。検出遺構は次のとおりである。縄文時代フラスコ状ピット7基(いずれも II 郭)、縄文時代土壙1基(II郭)、平安時代竪穴住居跡33棟(I郭23、II郭10)、平安時代土壙6基(I郭5、II郭1)、時期不明土壙10基(I郭7、II郭3)、時期不明溝1条(I郭)、中世空堀跡4条。

確実な縄文時代の遺構はフラスコ状ピットと土壙でいずれも II 郭から検出されている。空堀構築以前の段階では II 郭は南西に突き出た舌状台地の先端部にあたり、ここに遺構が構築されたことになる。SK023 フラスコ状ピットからは縄文晩期前業の遺物が3点出土しているが、その他のフラスコ状ピットからは遺物は出土しなかった。

平安時代の竪穴住居跡は33棟検出されているが、表土が薄く、切り合が激しく、遺物も少ないなどのことから、大湯浮石層との新旧関係はもちろん、遺構間の新旧関係や壁をつかむのに困難な箇所も多かった。よって形態分類も推定によるところが多いが、その点を加味した上で以下のように形態分類することができる。

1. かまと、壁溝を有し、柱穴も明確なもの……106, 108, 121, 008
2. かまと、壁溝を有するが、柱穴の不明確なもの……009, 009'
3. かまとを有するが、壁溝の不明確なもの……131
4. 壁溝を有するが、かまとをもたないもの……104, 105, 001, 007
5. かまとをもたず、壁溝も不明確だが、柱穴が確認できるもの……107, 110, 127, 132, 133, 138, 002
6. かまと、壁溝、柱穴とも不明確なもの……101, 101', 102, 109, 123, 124, 125, 126, 129, 131', 137, 003, 005, 006, 020

以上6類に分類され第6類が多いが、これは前述したように遺構の検出状態の悪さも関係していると思われる。遺物の出土状態をみてみると第1~3類は例外なく多くの遺物を出土している。しかし、その他の類については遺物の出土量にバラツキがみられる。かまとが確認された住居跡は7棟であるが、その位置は南、東、北といろいろであり、何時期かの変遷が考えられる。

また、いくつかの住居跡内からは東北北半部にみられる把手付土器が出土している(ゴシック体とした住居跡)。住居跡の形態をみてみるとバラツキはあるが、いくつかの共通点もみられる。まず第一に、土器はいずれも二次的火熱を受けていることで、S I 009' 竪穴住居跡出土

のものはかまど煙道部から出土した。特に口縁部付近に強い火熱を受けている。第二に、作出遺物として壺の出土が極端に少ないことがあげられる。第三に鐵器の共伴（S I 110は除く）があげられる。以上のことから、この把手付土器は製鉄に関連ある遺物という可能性も考えられる。また、この時期と前後して壺にかわるもの、おそらく木碗のようなものが普及していくものと思われる。

平安時代のものと思われる土壤は6基確認された。いずれも土層中央部に焼土が帶状に分布している。鐵器も共伴することから、製鉄に関連したものと思われる。

S I 003竪穴住居跡の床上面から出土の炭化米と床底上面から検出された炭化材を<sup>14</sup>C分析したところ、570年の差がでた。S I 003竪穴住居跡は遺存状態が不良で、壁等も削平されていてそこからみると、炭化米は床面上とはいえ、検出面上にも極めて近いので、中世の遺物と言えるかもしれない。しかし、確實に中世の遺物と思われるものはほとんど出土しておらず、中世の館と考えると常駐しない例れば見張り小屋のような施設であり、常駐する郭となる部分が別にあると考えられる。この観点からみると本遺跡は北方の妻の神Ⅲ、乳牛平遺跡とは違った用途をもつものといえよう。また、それらの遺跡との間を区切る沢は深く、妻の神Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ及び乳牛平遺跡までを一つの館とみることは、まだ困難な点も多い。今回の調査は乳牛館のごく一部を総断したにすぎず、乳牛館の範囲、妻の神Ⅲ遺跡等との関連等は今後の総合的判断を待っての研究課題としたい。

第34表 竪穴住居跡内出土遺物一覧表

遺構名	土					石					陶					金					漆					漆										
	日式・削底					瓦					圓錐形					錐					成形					砂					木					
	基色	表面處理	被毛	裏毛	切打	1	2a	2b	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	
S I 001						1										4																			5	
S I 002						1										1																			1	
S I 003	1	1	1	1	1	4	6	1	4	79		1				2					1					1					100					
S I 007	1	1				1				1	43																							31		
S I 008						10	1	1	1	2	26																					137				
S I 009	3	5	1			10	12	5	1	40	1	1	1	1	1	1	5																	143		
S I 009'																																				22
S I 010																																				55
S I 020	1	1	4	2							42						5																	39		
S I 101			2	2							26						2																	3		
S I 101'																																				39
S I 102			1	1							18						1																	29		
S I 104						1	1				11						1																	14		
S I 105			1	1		1	1	2			20						2																26			
S I 106	3	1				5					63						2																	26		
S I 107	2	2	3			18	3			154	4					6																189				
S I 108	16	1	2			13	7	3		100	11	1				6															237					
S I 110	1					16				60						2																	46			
S I 121						14	9			206						10	2															244				
S I 123			3	1		1				28	2					4																	29			
S I 124						12	15	2		31						2																	30			
S I 126	9	3								33						2																		51		
S I 127	1	2				3	1			39	1					3																	32			
S I 129	1					3				25						3																		30		
S I 131						4	1			36	1					4																	36			
S I 131'						1				1						5																		5		
S I 132						2				13						13																		15		

1種：ほとんどくびれないもの。2種：若干くびれるもの。（ヨード紙先端  
灰青色、ホーロ紙先端黒色）3種：くびれる地圖なもの

付 1  $^{14}\text{C}$  年代測定結果

昭和57年4月2日に受取りました  $\text{C}-14$  試料5個の測定結果ができましたのでご報告します。

当方のコード	依頼者のコード	$\text{C}-14$ 年代
N-4445	TW22 S I 001床面	1030±80 y B.P. (995±75 y B.P.)
N-4446	TW22 S I 108床面	1210±80 y B.P. (1180±80 y B.P.)
N-4447	TW22 S I 003床面	970±75 y B.P. (945±70 y B.P.)
N-4448	TW22 S I 010壁上下	820±75 y B.P. (795±75 y B.P.)
N-4449	TW22 S I 003炭化米	400±60 y B.P. (390±60 y B.P.)

年代は  $^{14}\text{C}$  の半減期5730年（カッコ内は Libby の値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（years B.P.）として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読み取の誤差から計算されたもので、 $^{14}\text{C}$  年代がこの範囲に含まれる確率は約70%です。この範囲を2倍に拡げますと確率は約95%となります。なお  $^{14}\text{C}$  年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。（御希望の方にはこれに関する参考文献を差し上げます。）

日本アイソトープ協会

## 発掘調査参加者（妻の神 I 遺跡）

浅利雄造、阿部藤次郎、阿部安五郎、阿部理一、海沼仁太郎、川又吉弥、川又喜代治、工藤伊代治、齊藤五十二、田中勇吉、田村勝弥、津江広、山本富恵、吉村明、浅石キガ、浅石サキ、浅石ミサ、阿部弘子、安保ヨシ、石川一枝、海沼栄子、金沢良子、川又リサ、木村ツギ、児玉ミツエ、齊藤イエ、齊藤節子、佐藤末子、佐藤スミ、佐藤ミツ、高田チオ、田中スミ、奈良ミワ、成田ウメ、成田笑里子、成田ヒサ、根本キタ、根本スエ、畠山サカエ、前田エミ、間藤美代、宮沢イサエ、柳沢照子、山本エツヨ（50音順）



図版1 妻の神I遺跡航空写真（上が北）



図版2 妻の神I遺跡遠景 (上) 発掘前(東▶西) 22:妻の神I 23:妻の神II  
24:妻の神III 25:乳牛平 26:下乳牛 27:西町  
(下) 発掘後(東▶西)



図版3 I 郭近景 (上) 発掘中(東南▶北西)  
(下) 発掘後(東南▶北西)



図版4 II 郡近景 (上) 発掘後(東▶西)  
(下) 造構検出状態(東▶西)

圖版 5 (上) S I 101、110 穹穴住居跡(東►西)  
(下) S I 101、101 穹穴住居跡(東►西)





図版6 (上) S1102 穫穴住居跡(北西▶南東)

(下) S1104、105 穫穴住居跡(西▶東)



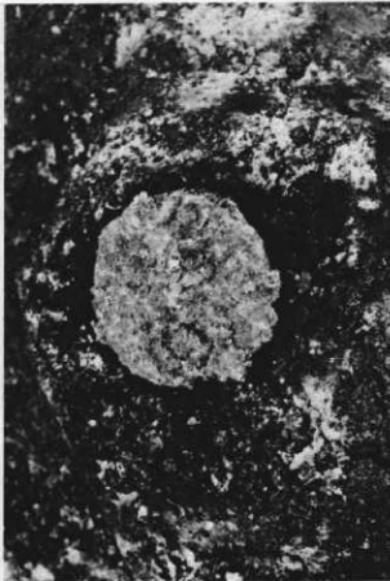
圖版 7 (上) S I 104、105、126 竪穴住居跡(東►西)

(左下) S I 104 竪穴住居跡遺物出土狀態

(右下) S I 105 竖穴住居跡遺物出土狀態



図版8 S1106、109 竪穴住居跡 (上) 掘り下げ中(南西▶北東)  
(下) 完 挖 状 態(南西▶北東)



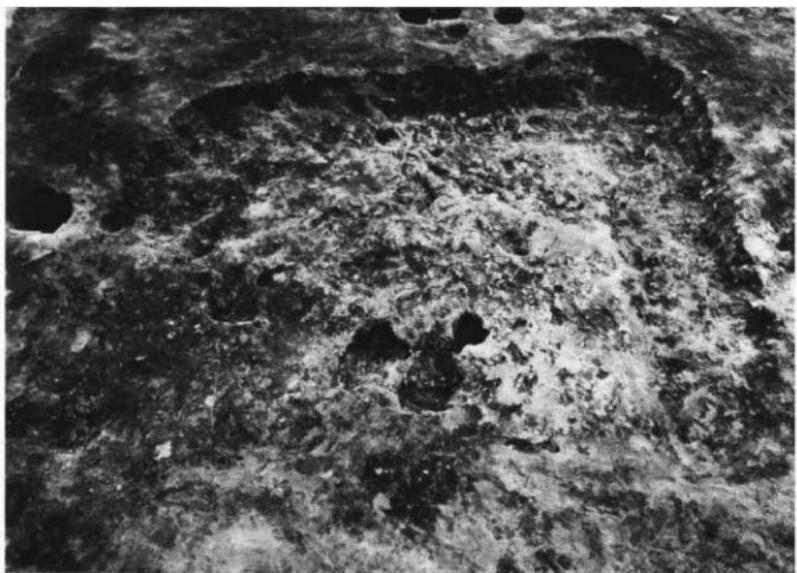
図版9 (上) S1107、108竪穴住居跡(西▶東)

(下) S1107 竪穴住居跡遺物出土状態 (左) 磨製石斧

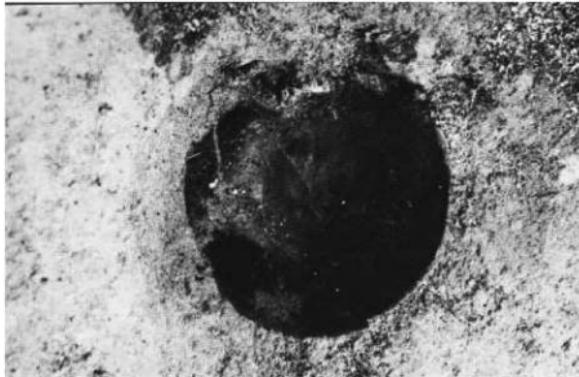
(右) 紡錘車

圖版10 (上) S1121堅穴住居址(東▲西)  
(下) S1123堅穴住居址(北西◆南東)





図版11 (上) SI 124 穫穴住居跡(北▶南)  
(下) SI 126、127 穫穴住居跡(南東▶北西)



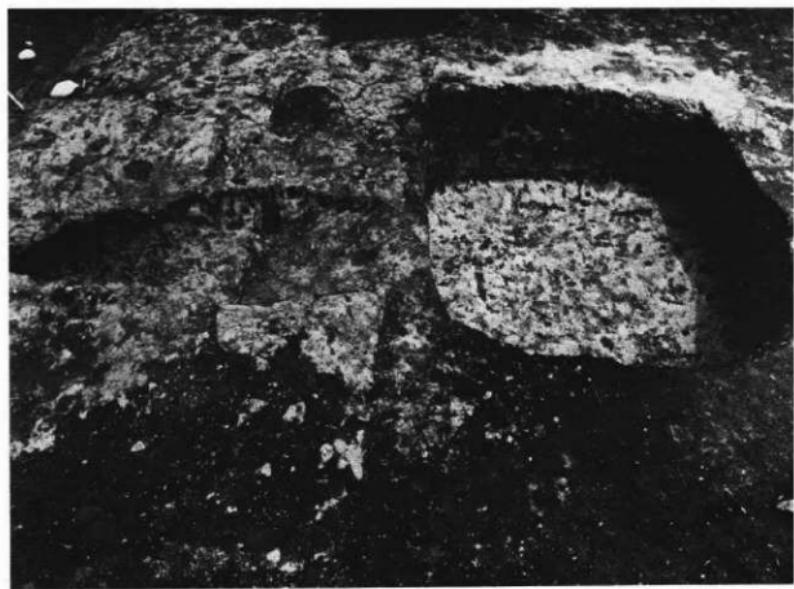
图版12 S1126竖穴住居遗物出土状态  
(上) 土器坏  
(中) 铁 器  
(下) 铁 器



図版13 (上) SI 129 窪穴住居跡(南▶北)  
(下) SI 129、131、131' 窠穴住居跡(南西▶北東)

圖版14 (上) S1133 壓穴住居跡(東►西)  
(下) S1138 壓穴住居跡(西►東)





図版15 (上) SK 112 土壙焼土検出面(西▶東)  
(下) SK 111、112 土壙(西▶東)



図版16 (上) SK112土壤鉄器出土状態  
(下) SK113土壤(北▶南)

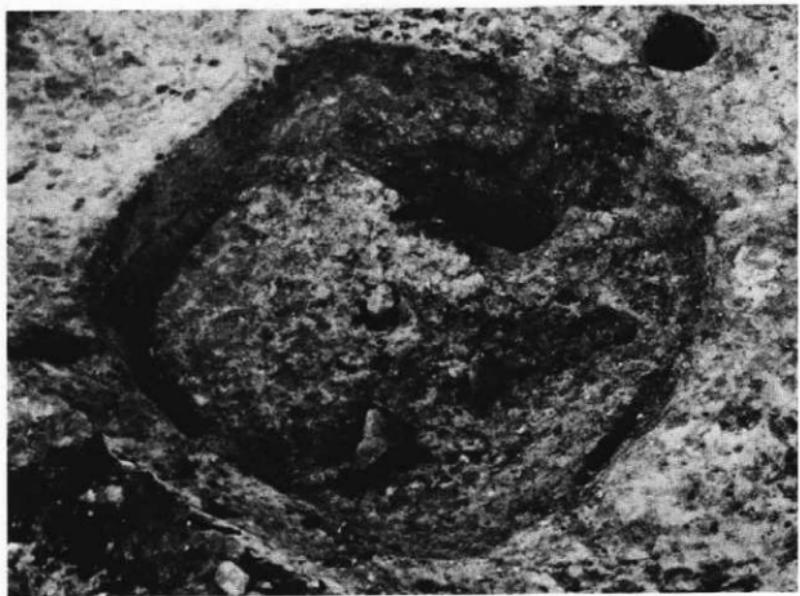


圖版17 (上) SK 114 土壤(北▶南)

(下) SK 115 土壤(北▶南)



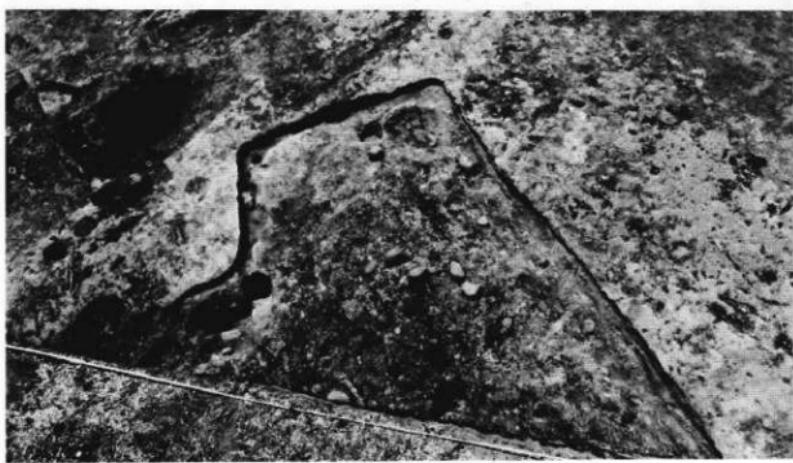
図版18 (上) SK122 土壠(東▶西)  
(下) SK130 土壠(東▶西)



図版19 (上) SK 134 土壠(西▶東)  
(下) SK 136 土壠(北西▶南東)

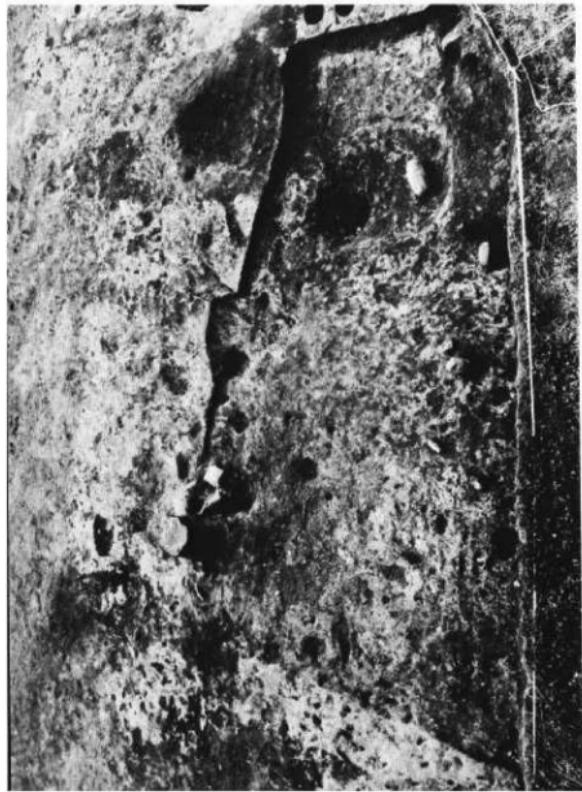
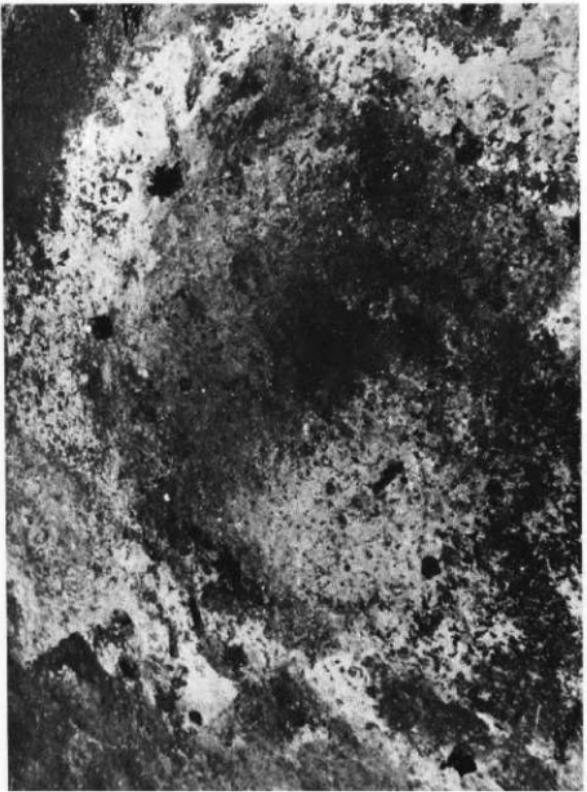
圖版20 (上) SK 139 土壠(南西▶北東)  
(下) SK 140 土壠(南西▶北東)





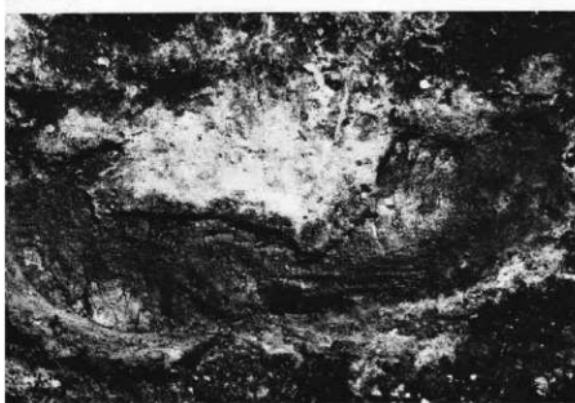
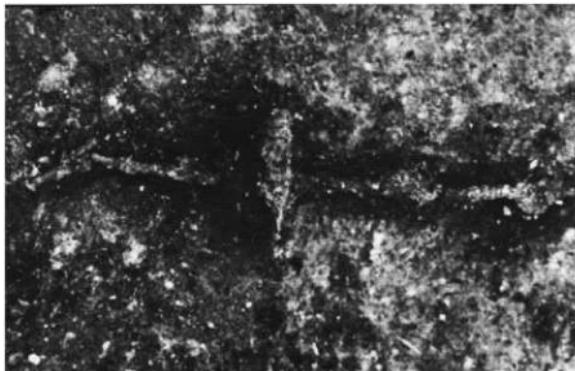
図版21 S1001 穹穴住居跡 (上) 炭化材出土状態(東▶西)  
(下) 完掘状態(東▶西)

图版22 (上) S1002竖穴生层(东►西)  
(下) S1003、005、006竖穴生层探出状態(東►西)





図版23 S1 003、005、006 積穴住居跡 (上) 炭化材出土状態(東▶西)  
(下) 完掘状態(東▶西)



图版24 S1003 壁穴住居遺物出土状態  
(上) 紡錘車  
(中) 木皿  
(下) 炭化米



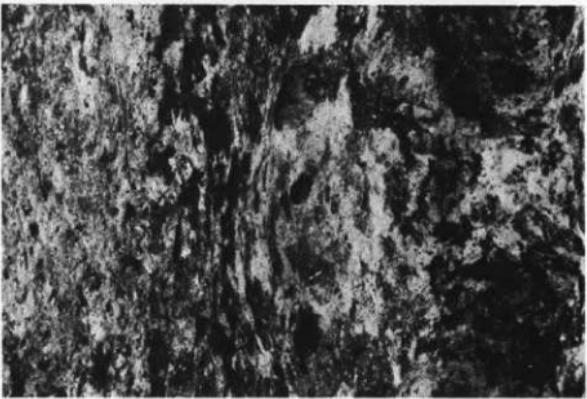
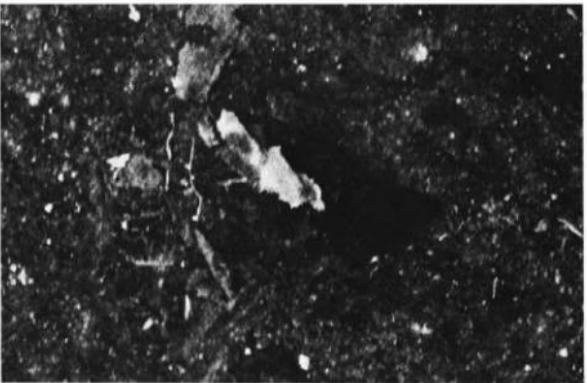
図版25 (上) S1007 竪穴住居跡(東▶西)

(下) S1008 竪穴住居跡検出状態(南西▶北東)



図版26 S1008 堅穴住居跡 (上) 完掘状態(北▶南)  
(左下) カマド(南西▶北東)  
(右下) 鉄器出土状態

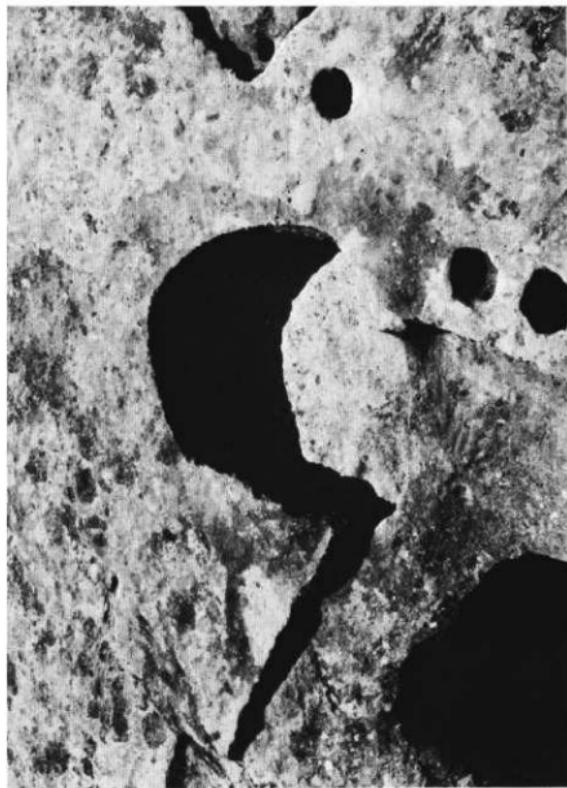
図版27 S1009、S1009號穴住居跡 (上) 完掘状態(北西▲・南東)  
(左下) フマド(北西◆・南東)  
(右下) 布出土状態

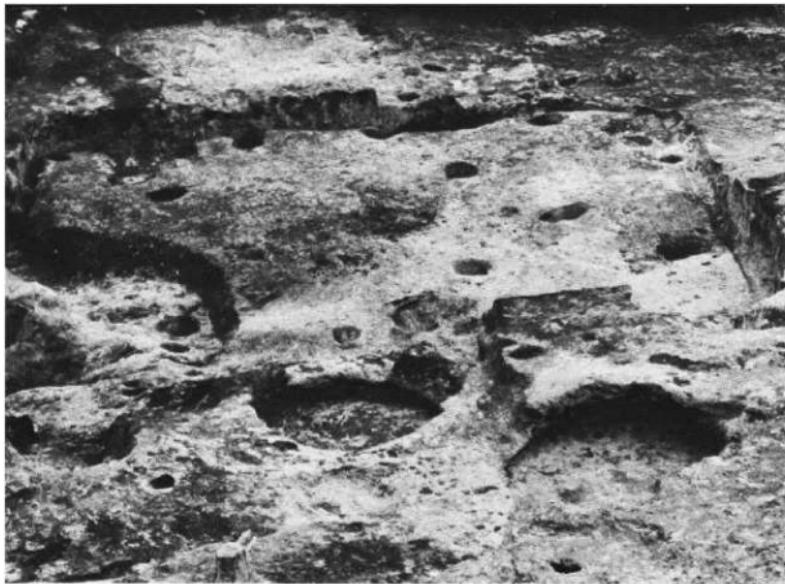




図版28 S1020堅穴住居跡 (上) 完掘状態(北▶南)  
(下) 鉄器出土状態

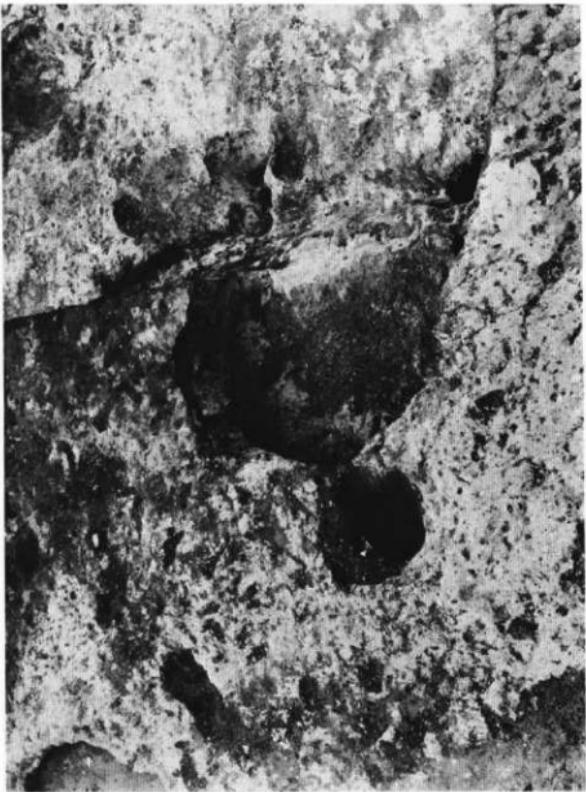
圖版29 (上) SK014 土壞(東►西)  
(下) SK015 土壞(東►西)

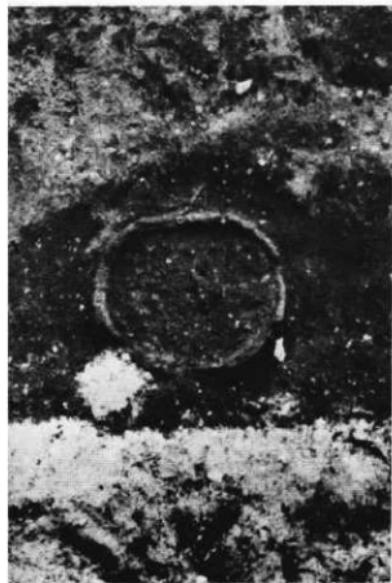
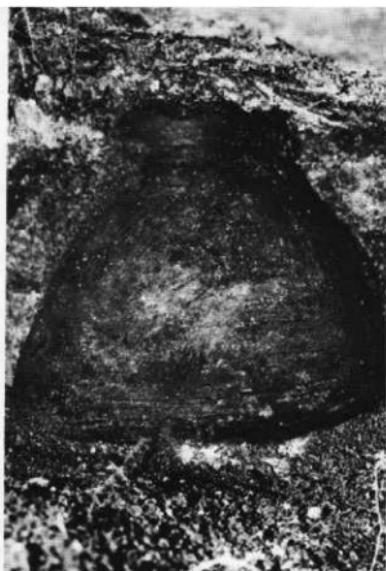




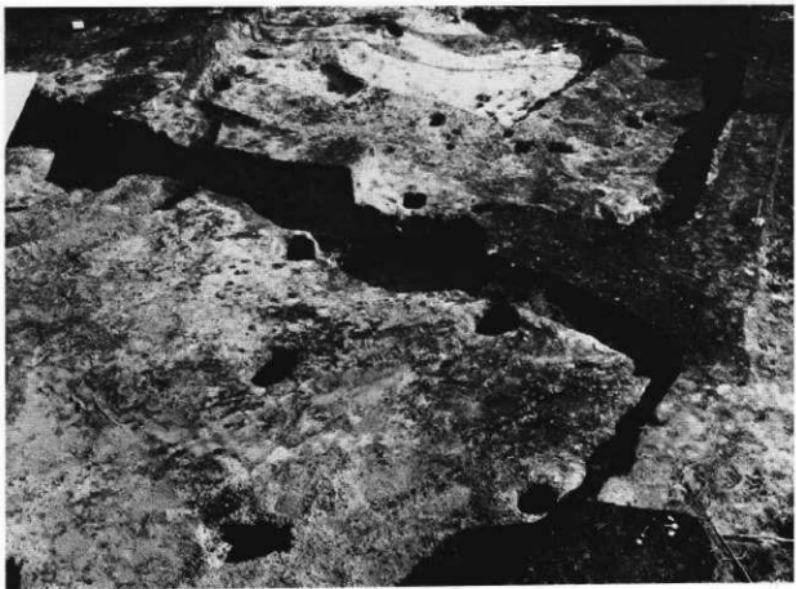
図版30 (上) SK016 土壠(東▶西)  
(下) SK018 土壠(北▶南)

図版31 (上) SK019 土壠(北▲南)  
(下) SK023 土壠(西●東)





図版32 SK 023 土壙土器出土状態  
(上) RP 1  
(左下) RP 2  
(右下) RP 3



図版33 (上) SK 024 土壌(南西▶北東)  
(下) SK 025 土壌(北▶南)

圖版34

(上) SK 026 土壤(北►南)



(下) SK 022 土壤(北西►南東)



圖版35

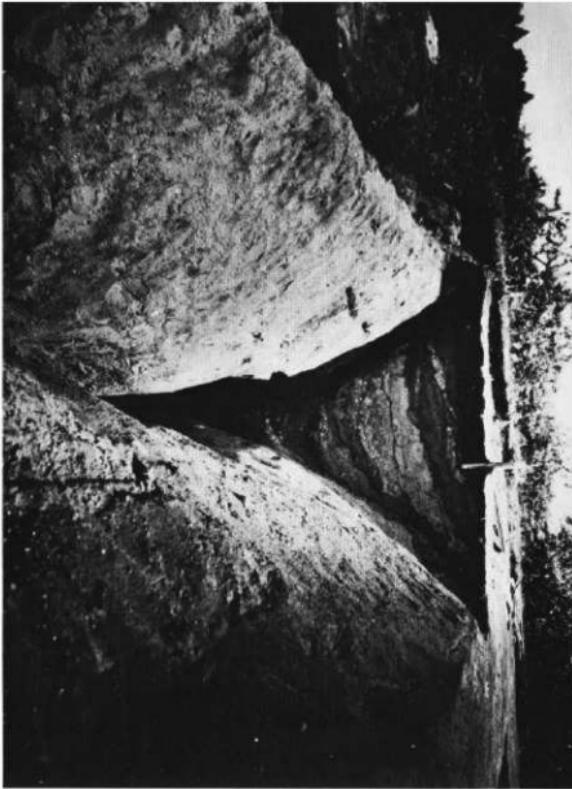
SD010 堀跡

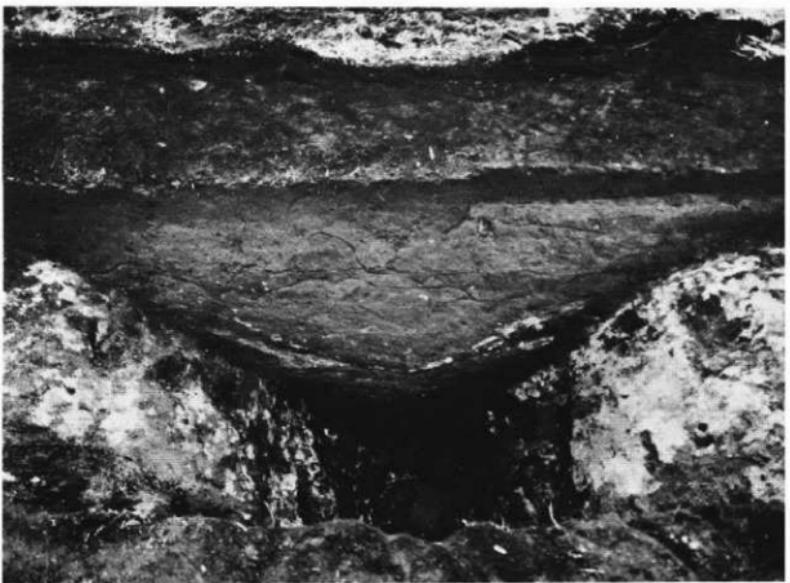
(上) 全景  
(北東▶南西)

(下) 断面A  
(東▶西)



圖版36 SD 010 煤層  
(上) 斷面B(西→東)  
(下) 斷面C(西→東)





図版37 SD 011堀跡 (上) 全 景(南▶北)  
(下) 断面A(西▶東)



図版38 SD 011 堀跡 (上) 断面B(西▶東)  
(下) 断面C(南東▶北西)

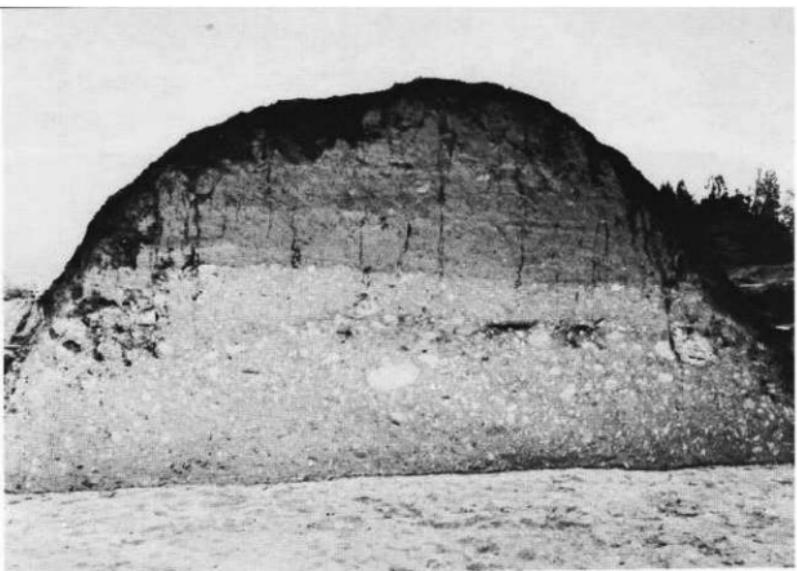


図版39 (上) SD 011、013 間断面C (南▶北)  
(下) I 郭北側、SD 012、013 堀跡 (南東▶北西)



図版40 (上) SD 012 堀跡断面D (南西▶北東)

(下) I 郭南側、SD 013 堀跡 (北▶南)



图版41 (上) SD012、013向断面E(东→西)  
(下) SD013墙脚断面E(东→西)



図版42 SD 013 堀跡 (上) 断面C 西側(南▶北)  
(下) 断面C 東側(南▶北)



図版43 SD013 堀跡 (上) 断面F (東▶西)  
(下) F付近木材出土状態(東▶西)

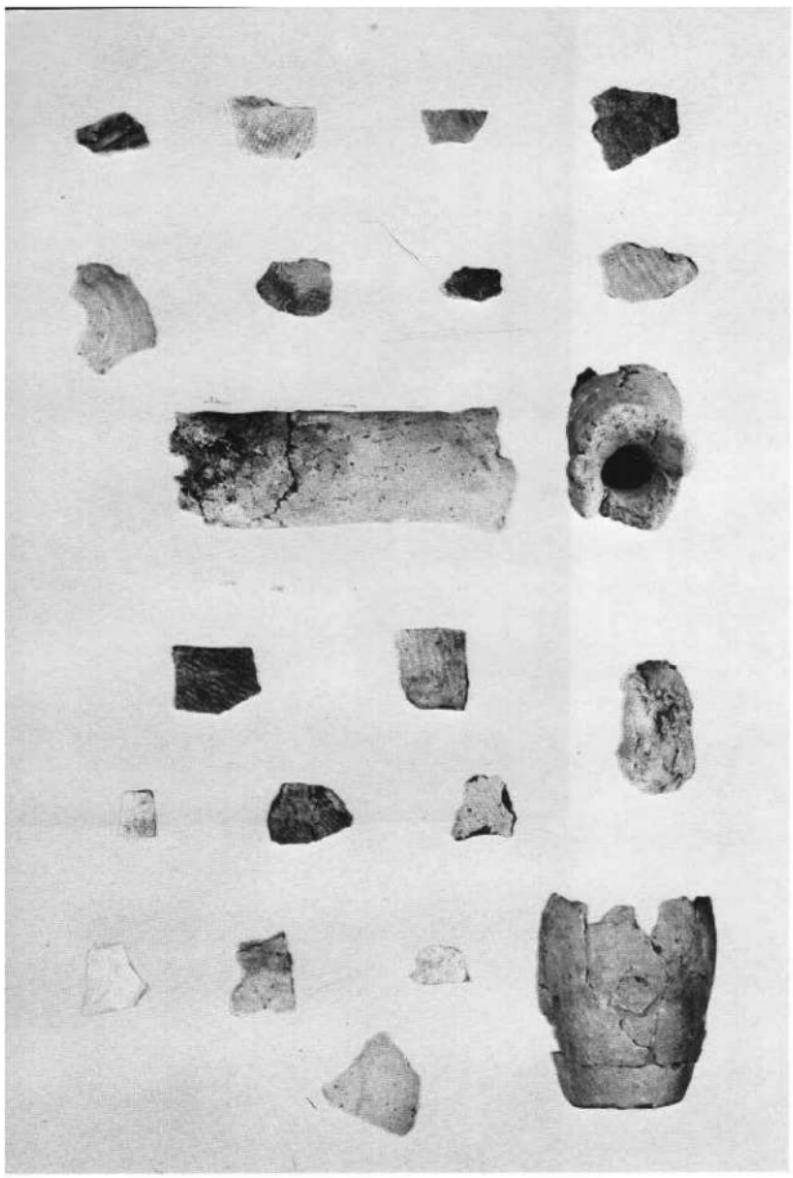


図版44 SD 013 堀跡 (上) 断面G(西▶東)

(下) 断面H(北▶南)



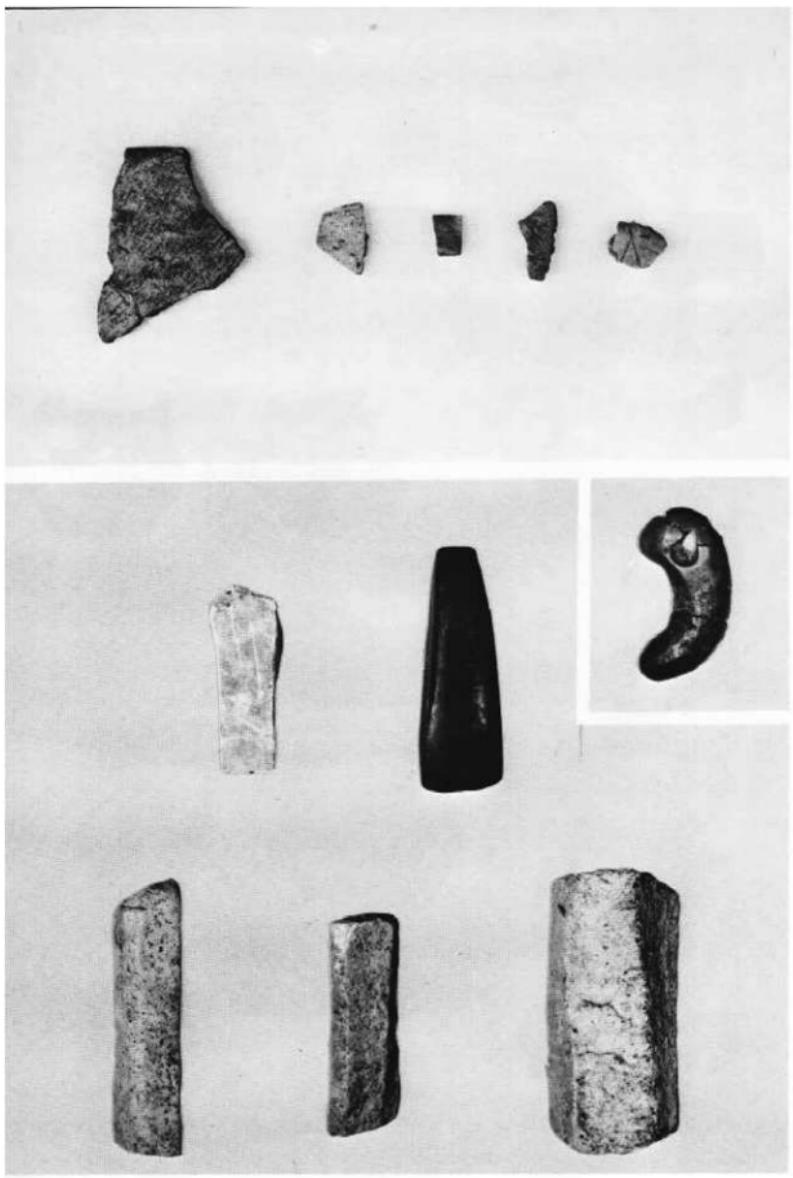
図版45 SD116溝（西▶東）



图版46 I 郭翌穴住居跡出土遺物(1)

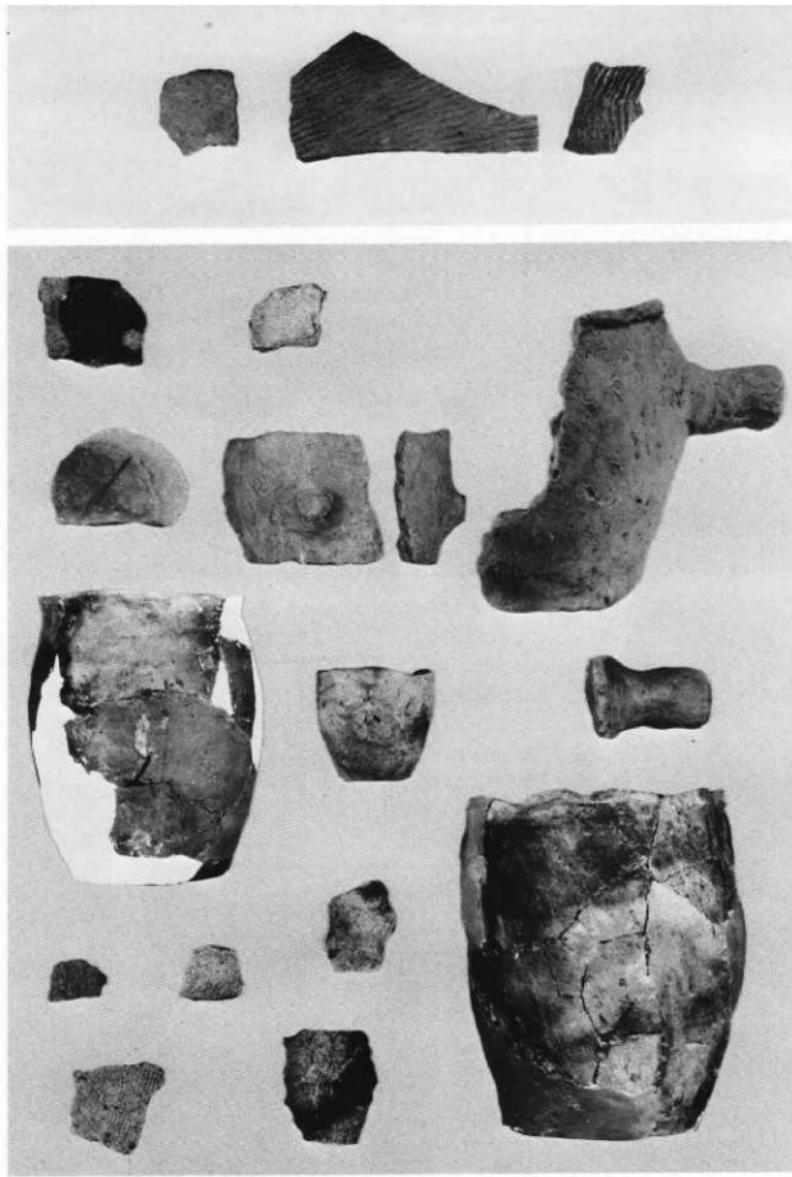


图版47 I 郭壁穴住居跡出土遺物(2)



图版48 (上) I 郭竖穴住居跡出土遺物(3)

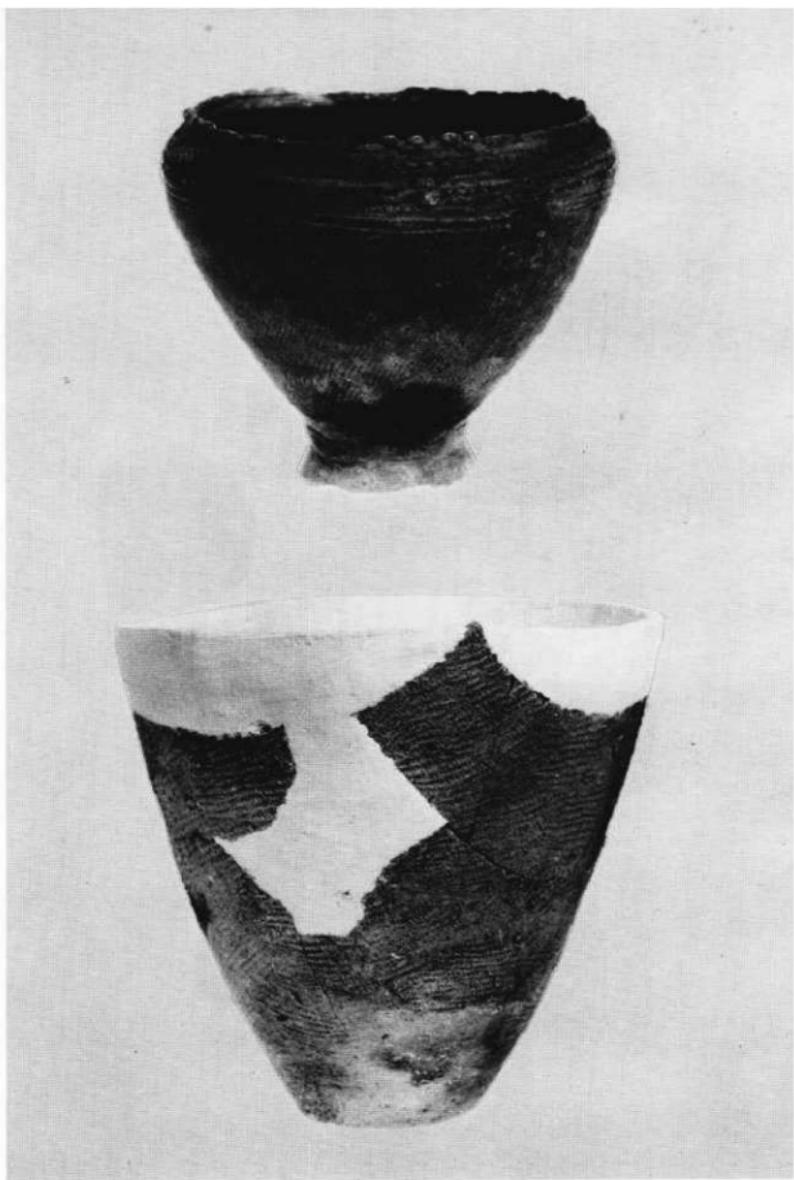
(下) I 郭竖穴住居跡出土遺物(4)



圖版49 (上) I 郭土壤出土遺物  
(下) II 郭堅穴住居跡出土遺物(1)



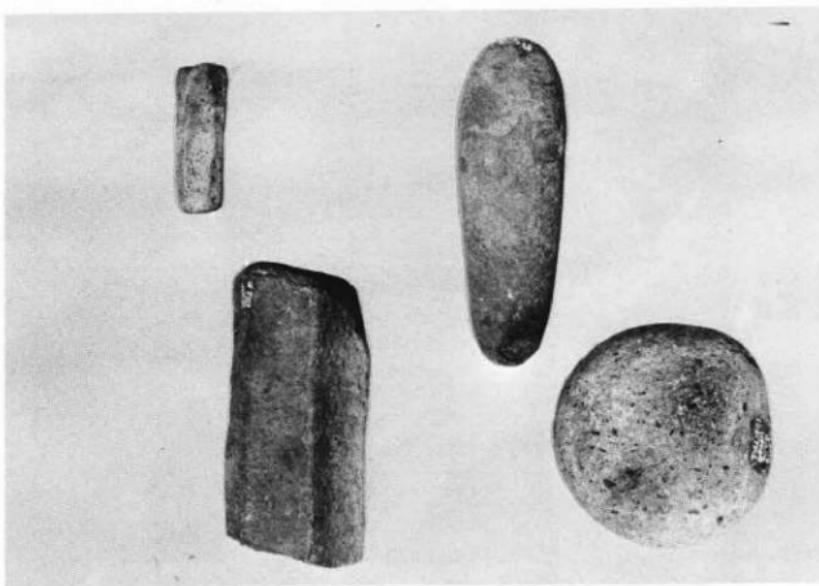
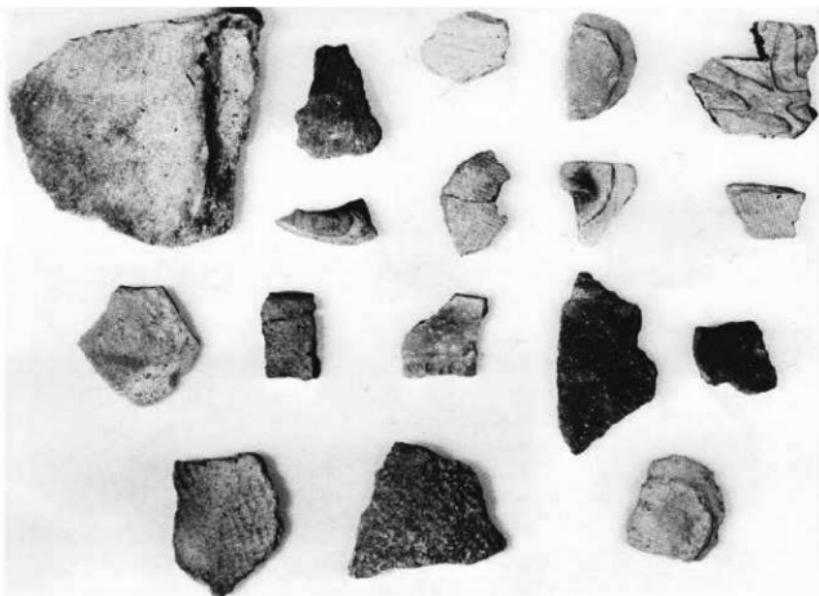
图版50 II 郭竖穴住居跡出土遺物 (2)



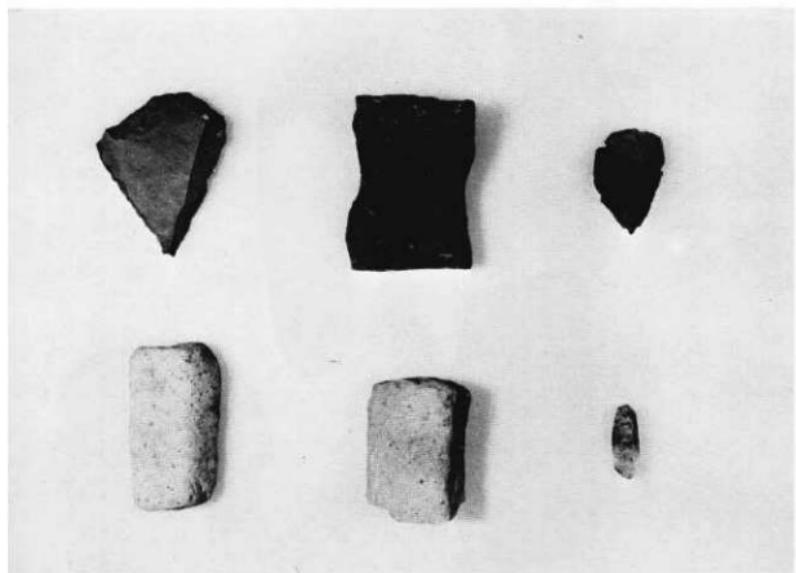
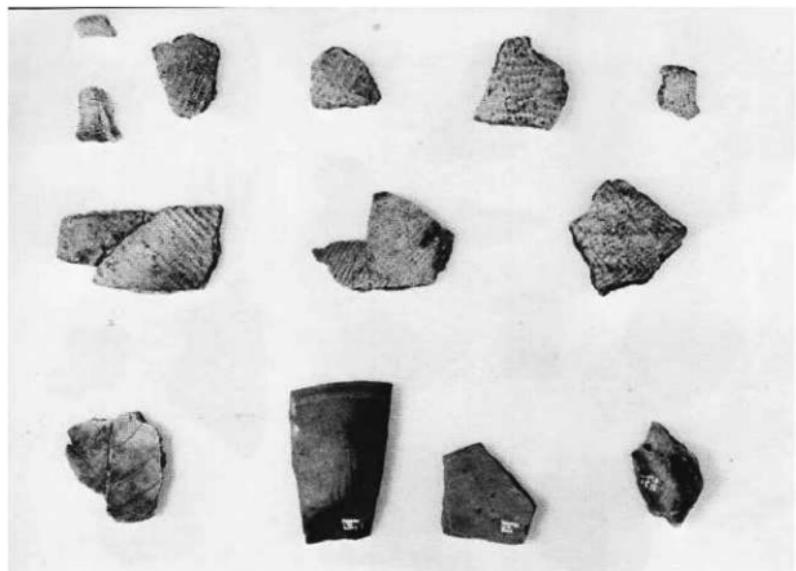
图版51 II 郭土壤出土遗物(1)



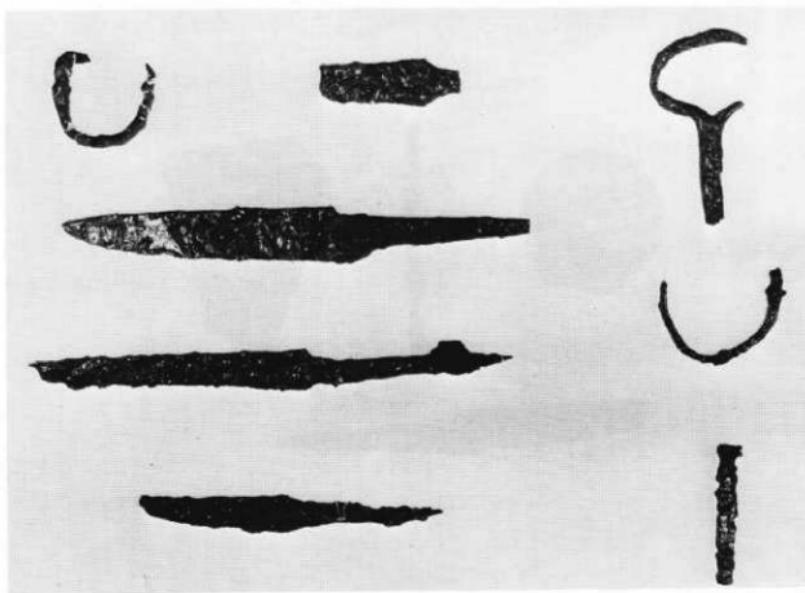
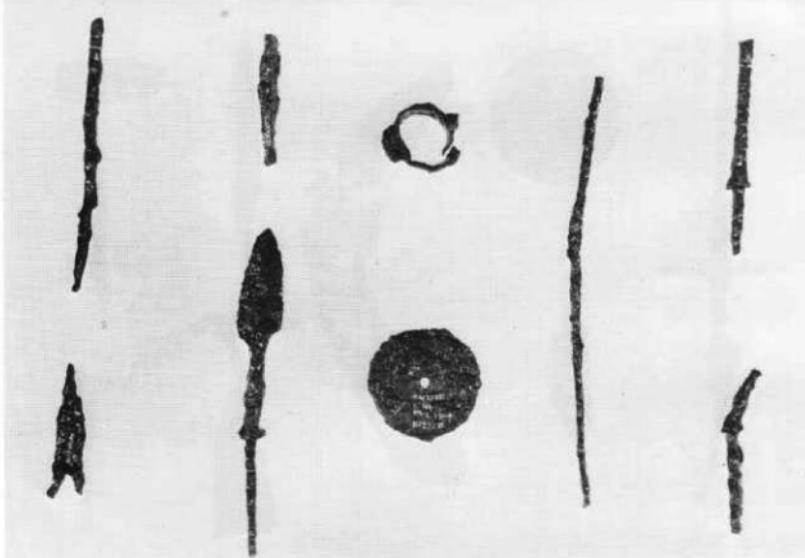
图版52 II 郭土壤出土遗物(2)



圖版53 (上) 墓葬出土遺物(1)  
(下) 墓葬出土遺物(2)



図版54 (上) 造構外出土遺物(1)  
(下) 造構外出土遺物(2)



図版55 (上) 出土 鉄 器 (1)  
(下) 出土 鉄 器 (2)



図版56 (上) 出土 鉄 器 (3)

(下) 出土 鉄 器 (4)



図版57 発掘調査風景



図版58 発掘調査風景

# 別編 妻の神 I、III および案内 III 遺跡出土の 炭化穀と豆の同定

## カラーライフ写真目次

カラーライフ	妻の神 I 出土炭化粒	c 焼穀米とアワ粒塊
	a 焼稻米	d 焼アワ粒と茎葉(得)塊
	b 焼玄米	案内 III 出土炭化粒
カラーライフ	妻の神 III 出土炭化粒	a 焼米塊
	a 焼アズキ	b 同上
カラーライフ	妻の神 III 出土炭化粒	c 焼豆
	a 焼アワ粒塊	d 膨張粒、大粒、中粒、小粒
	b 焼稻穀塊	d 烧米の筋別け 4 mm以上 2.5 ~ 4 mm

## 走査電子顕微鏡写真目次

第1図	妻の神 I 出土炭化粒	第12図	案内 III 出土炭化粒
	a 穗(×10)		a アズキ(幼芽と子葉)(×10)
	b 穗穂片(×100)		b 同上(子葉)(×250)
	c 穗と玄米(×10)	第13図	案内 III 出土炭化粒
第2図	妻の神 I 出土炭化粒		a アズキ(膨張粒)(×10)
	a 玄米(丸)(×10)		b 同上(大粒)(×2,500)
	b 同上(細長)(×10)		c 同上(中粒)(×10)
	c 同上(普通)(×10)		d 同上(中粒)(×10)
	d 同上横断面(×10)	第14図	案内 III 出土炭化粒
第3図	妻の神 III 出土炭化粒		a マメ類(小粒)(×10)
	a 穗片のある膨張粒(×10)		b 同上(×500)
	b 同上の膨張米(×100)		c マメ類(小粒)(×10)
第4図	妻の神 III 出土炭化粒		d 同上(×500)
	a 穗軸と穂米(×10)	第15図	案内 III 出土炭化粒
	b 同上の穂片(×100)		a マメ類の種皮の内側(×10)
第5図	妻の神 III 出土炭化粒		b 同上(×500)
	a 玄米と穂片(×10)		c マメ類の(中粒)や不正形(×10)
	b 同上の穂片(×100)		d 同上(アズキ?)(×1,500)
	c 同上の穂片(×100)	第16図	現生アズキ種子
	d 同上の玄米の一部分(×200)		(×10)(×500)
第6図	案内 III 出土炭化粒		(×1,000)(×2,000)
	a 玄米と穂片(×10)	第17図	現生リョクトウ種子
	b 同上(×500)		(×10)(×200)
	c 玄米(×10)		(×1,000)(×2,500)
	d 膨張玄米(×10)	第18図	現生ケツルアズキ種子
第7図	妻の神 III 出土炭化粒		(×20)(×250)
	a アワ(×25)		(×1,000)(×2,500)
	b 同上(×500)	第19図	現生雜草アズキ種子
	c 同上(×150)		(×10)(×2,500)
	d 同上(×500)	第20図	現生アカミ種子
第8図	妻の神 III 出土炭化粒		(×20)(×1,500)
	a アワ(×50)	第21図	現生ヤブツルアズキ種子
	b 同上(×250)		(×10)(×150)
	c アワ塊(×10)	第22図	現生焼畑ダイズ種子
	d 炭化木片(×200)		(×10)(×100)
第9図	妻の神 III 出土炭化粒	第23図	現生ダイズ種子
	a シソ類の粒片の表面(×50)		(×10)(×250)
	b 同上(×50)	第24図	案内 III 出土炭化粒
	c シソ類粒の内果皮片(×50)		a ダイズ能登粒(1)(×20)
	d 同上(×250)		b ダイズ能登粒(2)(×20)
第10図	案内 III 出土炭化粒	第25図	現生ツルアズキ種子
	a アズキ(小粒)(×10)		(×10)(×1,000)
	b 同上(中粒)(×10)		(×10)(×2,500)
	c 同上(膨張粒)(×10)		
	d ダイズ?(膨張粒)(×10)		
第11図	妻の神 III 出土炭化粒		
	a アズキ(大粒)(×10)		
	b 同上(×1,000)		

## 秋田県鹿角市妻の神Ⅰ・Ⅲおよび案内Ⅲ遺跡 出土の炭化穀類と豆の同定

笠原 安夫

### はじめに

秋田県鹿角市における東北縦貫自動車道路の予定線上に横たわる34の遺跡は、秋田県教育委員会によって昭和54~56年にかけて発掘された。うち、同市花輪字妻の神にある(1)妻の神Ⅰ(№22)、(2)妻の神Ⅲ(№24)遺跡は、陸中花輪駅の北東2.8kmの地点にあり、乳牛川右岸の盆地内段丘にあって、これらを合せて台地縁辺部を利用し中世の郭と堀がつくられている。(3)案内Ⅲ(№34)遺跡は、同字案内にあり陸中花輪駅東方2.1kmに位置し、標高200mの台地、南と西側の斜面を立地に利用した遺跡である。

(1)妻の神Ⅰ遺跡は、昭和56年4月20日~8月12日の間に橋本高史文化財主事が発掘を担当し、平安時代堅穴住居跡(S.I.003)の床面直上から焼炭化米が採集された。その炭化米の上に焼けた木膚が検出されている。

(2)妻の神Ⅲ遺跡は同年4月20日~8月31日の間に、桜田隆文化財主事が発掘を担当し、中世館跡の主要平坦面の大湯浮石(十和田a降下火山灰)層上面で、確認された掘立柱建物群の柱穴と考えられるビットの擴底から次の5資料を採集した。

- a) 13-Aグリッド pit 1229……ナタネ粒のような小粒炭化物の塊
- b) 13-Cグリッド pit 1138……炭化物塊で稲穂か
- c) 14-Eグリッド pit 中……こぶし大の炭化物塊で初か
- d) pit 9999-(1)……ナタネのような小粒と茎葉の炭化物塊か
- e) pit 9999-(2)……焼けた小豆(アズキ)か

(3)案内Ⅲ遺跡は、同年4月20日~8月22日の間に小林克文化財主事が担当した発掘において、平安時代の堅穴住居跡(S.I.010)の床面から炭化物を採集した。この試料は良好に保存されていた壁材、床材の焼材があり、この直上に櫛と思われる焼けた曲物に入った圧迫された焼米塊や、おにぎり状塊で出土し、また、焼炭化豆はバラバラの状態で出土し、両炭化物は混在していたので、一応発掘者において炭化米と豆とを粒別した。

なお、(1)妻の神Ⅰ遺跡では、平安時代の堅穴住居跡33棟、フラスコ状ビット7基、土壙17基、

縄文土器、土師器、須恵器、鉄器、木器が、(2)妻の神Ⅲ遺跡では、縄文時代の堅穴住居跡2棟、フラスコ状ビット1基、Tビット13基、中世の住居跡38棟、土壙86基、貨幣、銅鏡片、鉄製馬具や土器、および(3)案内Ⅲ遺跡では縄文時代の堅穴住居跡5棟、同土壙15基、縄文前、後期の土器や、平安時代の土師器、須恵器の壺、鉄器(鎌、穂摘具、小刀、手斧)、銅鏡などが出土している。

筆者は、昭和57年2月に秋田県農業試験場須藤孝久氏を通じて、同県教育委員会文化課からこれら炭化種実の同定を依頼された。同年3月同県埋蔵文化財センター小林克氏から、(1)妻の神Ⅰおよび(3)案内Ⅲ遺跡の試料は、約0.6～1.4kgの炭化物を、(3)妻の神Ⅲ遺跡の5資料は、0.2～2.5gを送付された。なお、その後筆者はそれらの遺跡を視察し説明をうけた。

## 調査方法

(1)妻の神Ⅰ遺跡の試料は、第1表のように100gを任意5区分し全部で約11,000粒を、(3)案内Ⅲ遺跡の炭化物は第3表のように約90gの試料を炭化米2,000粒ずつ数えながら混入している炭化豆(中、小、半片粒)と膨脹粒に分け、粒数と重量を計った。以上の試料は1粒ずつルーペで見ながらより分けた。なお、(1)、(3)遺跡とも、一部を細長、普通、丸粒にわけ走査電子顕微鏡で撮影した。また、案内Ⅲ炭化豆は第4表のように、1サンプルは約220gを標準範囲(4mm、2.5mm、1mm)を用いて篩別したもの(粒幅によってわけられる)と、2)、3)サンプルは肉眼またはルーペで見ながら炭化米と豆を膨脹粒、大、中、小、半片粒に5区分し、粒数と重量を調べた。(2)妻の神Ⅲ遺跡の5資料は、第2表のようにルーペまたは実体顕微鏡下で各炭化塊の表面にある粒数を数えた。なお、初、米とくに豆については、代表的な粒形のものを現生豆類と比較して同定のため走査電子顕微鏡で調査した。また第5表には妻の神Ⅰ、案内Ⅲの焼けた米を、第6表には焼けた豆を大小中粒にわけて粒の大きさを測定した。

## 調査結果と考察

佐藤敏也氏の“日本の古代米”には、各地遺跡から出土した古代米について多くの米粒の大きさが測定され、米粒の混合パターン(姿)の検索表の執告がある。それによれば、日本型の米(*Rizus sativa subsp japonica*)には、米粒の長さが3.2～5.3mmのものを第I群とし、粒長が5.3mm以上のものを第II群とした。そして第I群を粒幅によってAは2.8～3.7mm、Bは2.1～2.8mm、Cは2.1mm未満としてグループし、粒の長幅指数(長/幅)が日本型の米はいずれも1.3～2.0mmの間に介在し、各地遺跡の出土米の細粒、丸粒の混合のパターンがわかり、それによって古代米の系列が示されるとした。第5表妻の神Ⅰの炭化米パターンはIA(50%)、IIb(30%)、III(20%)で、案内ⅢのそれはIA(50%)、IIA(50%)である。すなわち、前者がやや大粒であり、長幅比は平均1.6～1.7で、それは20粒では、1粒ずつを除き、両者日本型に属している。前者は玄米で、

## 別編Ⅰ 炭化穀と豆の同定

後者は胚を欠く搗精米が多い（カラー1図a, b, 第1、2、4、5、6図）。

妻の神Ⅰ遺跡の出土米には、第1表に示されたように焼粉米が平均粒比6.3%（重比7.3）あり、取扱中に糊穀が破れ易いのでこの比はさらに大きかったと思われ。玄米での貯蔵であるが、糊摺程度は現在のものより悪かった。それが臼で搗いての脱穀か糊摺具があったのか不明であるが、炭化糊穀の表面は摩擦の段階がいろいろある（カラー1、2図、第1、3、4、5図）。熱のための膨張粒（第3図）は平均8.6%であり、炭化米の1,000粒重は平均8.6gである。また、1、2粒のマメ片は床上で混ったか、この周辺で豆栽培があったと考えられる。

第2表に示された妻の神Ⅲ遺跡の炭化物のうちナタネのような小粒炭化物はアワ粒が囲ったものであり、pit 1229のものは木材片を伴い、pit 9999-(1)にはアワの茎葉の1部分とみえるものが混在し、また14-Eのpit中に出土した炭化物にはアワと粉米の塊が認められた。それらのアワ粒の拡大では、その粒の特徴である山脈型の乳頭が確認できる（カラー3図、第7、8図）。また14-E pit中から初めアワ粒と間違った破片が、後でエゴマまたはシソの粒形の不明瞭な破片とわかった。それは傷ついた粒面と内表皮の多孔と厚膜細胞の穴が見える（第9図）。pit 1138出土の糊米は穂軸を混じて糊が穂の状態で並んでいる。おそらく、穂刈りして穂が束ねられたものの一部が火災に遭って焼かれて落ちたもので種糊用の保存かと思われる。（カラー3図b、第4図）、またpit 9999-(2)の炭化豆には粒の大小はあるが、かなり揃っていてアズキの炭化粒と考えられた（カラー2図）。

案内Ⅲ遺跡の出土炭化物は、曲物の櫃内に入っていた炭化米塊と炭化豆が散乱し、周辺に稻藁で編れた籠状の炭化物が出土している（カラー4図a-d）。それらは一応発掘者において豆粒と米粒を区別し送付されたが、第3表に示されているように、なお炭化米には肉眼では米粒と区別できないような小さい豆が混入していた。それを小中粒と半分ずつに分離した半片粒と膨張炭化物（大部分は米粒だが若干豆も混入）に分け、粒数比と重量100分比を示した。その比はサンプル別でかなり違いがあるが、炭化米が粒数で平均81.9%、重量で平均68.8%であり（第6図）、豆ではそれぞれ15.1と26.6%である。第4表の(1)サンプルでは、粒数重量比とも中粒のものが最大で全体の%を占め、ついで半片粒と熱での膨張粒で、炭化米、大・小粒豆は少なかった。同(2)サンプルでは中・小粒が多く、ついで半片粒、膨張粒、大粒炭化米であった。これら炭化豆は大小、粒形が不揃いであり、うち大・中粒は現在アズキ粒に似ている（第10~13図）。しかし、最も小粒のものは現生アズキにはない（カラー4図c-d、第14、15図）。おそらく、この時代には雑多な品種で多系統が混在しているため、このような極小形のものまであったのではなかろうか。現在のものでも筆者が20年余前、岡山県中北部のアズキ畑で農家が品質不良のものとして除去していた、やや早産で小草本のもの（筆者は雑草アズキと呼んだ）は、種子の大きさは中粒であるが、第19図に示したように、本出土品

とかなり似たものがある。また、小・中粒のものは、リョクトウやケツルアズキなどの栽培種にその粒形が似たものもある。しかし、その表面の拡大写真に網状細胞がなく確認できなかった（第14、17、18図）。また栽培型とされるツルアズキのような細長粒のものはなかった（第25図）。野生種のヤブツルアズキ（アズキの原種？）と似た粒はあるが（第21図）、他の野生豆のツルマメ、ノアズキ、ヤブマメに似たものはなかった。また第4表の1,000粒調査で、膨張粒が大・中粒よりも30~70%も重い。これは、大中粒が加熱で容積の増すことは考えられても重量の加重は考えにくい。アズキの大粒以外に重いダイズ粒の混在があったと考え、ヘそのある膨張粒を丹念に探した結果、数粒のアズキより短かいへそをもち、ヘその中央が大きく裂目のある粒が見付かったので、ダイズの膨張粒と推定した（カラー第4図c・d、第22~24図）。

近藤萬太郎博士の「農林種子学（後）」にはアズキ、リョクトウ、ダイズなどの種子の記述がある。備中綠豆が長さ3.5~5.1mm、幅2.8~3.9mm、厚さ2.7~3.9mm、1,000粒重35.4gであり、小粒の備中白アズキが長さ3.7~6.2mm、幅2.7~4.4mm、厚さ2.5~4.2mm、1,000粒重51.4gと大粒には朝鮮彦大納言が長さ5.2~8.3mm、幅3.8~6.4mm、厚さ3.3~6.0mm、1,000粒重129gとなる。ダイズ粒のへそはアズキなどちがって、種瘤がなく、ヘその中央に裂目があり、粒の重さは最小が1,000粒重90gで、最大は250gのように変種、品種による違いが大きい、とある。

第6表に示されたように、案内Ⅲの大・中粒は、アズキ、リョクトウに相当する大きさや形のものはあるが、小粒のものは現生の小形アズキやリョクトウよりもさらに小さい。また大形の膨張粒と同形のものが、前述の佐藤氏の書には秋田城跡南方地区第1号壁穴住居跡から出土した大豆様遺物としての描図・写真がある。その焼ふくれ粒には、A粒長7mm、幅5.5mm、厚さ5mm、B粒長7.7mm、幅5.5mm、厚さ5mm、しかし、へそが見えないので、同定は困難であるが、脂肪の多いダイズの形の方はアズキやインゲンと違っているのでダイズ粒と推定されている。

アズキ (*Phaseolus angularis*) は、佐藤正巳氏の「有用植物分類学」には、山間または日本の原産と言われる1年生作物で日本では極めて古くから栽培されている。種子の色はいわゆる小豆色の他に白、淡黄、黒、黒斑などの変異がある。赤飯、餡、汁粉、羊かんなどの原料とするなど日本人の食生活と深い関係がある。また、尾川清親氏の書には、アズキは中国、朝鮮、日本原産で中国では2,000年前から栽培され、日本でも農耕文化が始ったころからの作物で中国から渡来したと推測される。アズキは日本人以外にはあまり好まれないらしく、中国、朝鮮でも歴史が古いわりには栽培は少なく、もっぱら日本への輸出用である。リョクトウはインド原産、一部は栽培される *P. radiata* から変ったと見られ、野生はない。中国南部には古くから入り、中国北部へはB.C.5世紀に栽培された。日本へは中国から入った。最近まで各地方に広く作られてきたが、今はほとんど栽培されなくなった。

## 別編 I 炭化穀と豆の同定

渡部忠世、森脇曉氏らの報文には、インド大陸のリョクトウ (*Phaseolus aureus*) と類似種ケツルアズキ (*P. mungo*) の諸系統をインド各地で採集し、日本で栽培結果から、系統的な諸特性を報告されている。

ダイズ (*Glycine max*) は、前述の二書にその栽培化は、中国北部、シベリア、日本に自生するツルマメ（ノマメ *G. soja*）が原生種で、古くから人間の食料とされ、東アジアの北部で栽培されるようになり、今日の栽培ダイズが発祥したらしい。それがやがて中国へ伝播し、五穀の一つとして重要視された。日本では縄文時代の遺跡からダイズが出土しているが、たぶん、野生ノマメを採集したもので、作物としては弥生初期に中国から伝來したものであろう。記紀には大びが明記され、すでに普及していた。種子は、蛋白質や脂肪に富み、日本人の食生活に欠くことのできない重要な食品であり、現在は世界的な食品になりつつある。

筆者はアズキ・ダイズやリョクトウなどの出土種子同定の対照のため、森脇氏より前述の2種の他に沖縄県産のアカマミやダイズなどを、また、宮崎大学藤原宏志氏から宮崎県椎葉村の焼畑のダイズ・アズキの分譲をうけた。それらと栽培種のツルアズキおよび野生種のヤブツルアズキ、雜草と見られるアズキなどの種子表面構造の走査電顕像を示し、出土炭化豆と現生アズキやそれらと比較した結果、たとえば、アカマミは種子表皮に星状様の低く乳頭が並び他と違いが大きいようである（第20図b）。それほどは目立たないが、現生アズキおよび出土の妻の神島、案内Ⅲの表皮の500～1,500倍の拡大図にも乳頭が見える（第11、15、16図）。一方、リョクトウ豆、ケツルアズキには200～1,000倍の拡大で表皮に顕著な短形の網状、後者は皿状細胞が見え、この点アズキ、アカマミとリョクトウ、ケツルアズキの区別点となろう（第17、18図）。またダイズの粒面には穴が並列している（第22、23図）。さらにこれら現生マメ類と出土豆の種皮表面を1,000～2,500倍に拡大し顕鏡して見るにいずれも表皮下には錯綜した網状細胞がざっしりつまっている（第13、16、17、18、19、25図）。

アワ (*Setaria italica*) は、戸辺義次、管六郎氏の「食用作物」および佐藤正巳氏の前掲書には、欧亜大陸に広く野生しているエノコログサから発したと考えられる作物で、北支を中心として極めて古くから栽培されている。一部にはインド原産説があるが、Roxburgh がインドにはエノコログサが分布しないし、Körnicke らもインドが原産でなく北方の、しかも冬の厳寒でない地とした。Vavilov の原産地は日本を含む東部アジアであり、キビの原産地とほぼ一致するか、キビよりは冬の温暖な海洋的気候の地域とした。中尾佐助氏の「栽培植物の世界」には、キビは近縁野生種かインドにあるので、そうしたものが中國や近東で見出されないことなどからインドで栽培化されたと結論して問題はないが、アワは事情が違う、中国説が一般だが、しかし、中国のアワが最初からキビと相伴っていたという事実を重く見て、アワもキビについて印度で栽培化したとみる方が説明しやすいとしている。

筆者は先に、大分県二本木跡弥生後期の住居跡の焼けた家屋の床上からバラバラに散らばった多量の塊状炭化物の中から若干のヘソのあるアズキ粒を見付け走査電顕検査で同定した。また復時点での最初の水田遺構と言わわれている唐津市菜畠遺跡の縄文晩期山の寺層から稲穀の他に炭化したアワ粒、アズキ粒、ゴボウ粒、未炭化の雑草メロン（マクワウリ）種子などを同定している。それ以前の遺跡として福井県鳥浜貝塚縄文前期層から西田正規、松本豪氏によってリョクトウとされた豆を、その翌年の発掘された同断面から一粒の炭化豆を検出した。その粒は本報告の小粒の豆（第14図c）と同形で、その種皮の網状斑文は、本報告リョクトウの表皮（第17図b）と同じであった。一応発表時にはリョクトウ（？）としたが、網状斑文からリョクトウとしてよい。なお同遺跡からエゴマ、シソの炭化・未炭化粒を検出した。それは従来、長野県縄文中期農耕遺跡でアワの証拠品とされたタール状炭化物がエゴマ・シソ粒の特有な果表面の網目と流線文、内果皮の多孔細胞、肥厚細胞の配列穴および種皮の“わらじ細胞”的発見から、松谷氏と筆者によって、エゴマ・シソ粒であることを確認した。本報告の妻の神III 14-E グリッドのpit 中からの小破片には、種皮の“わらじ細胞”は見られないが、炭化粒（はじめアワ粒と誤認）の拡大像が松谷氏による大石遺跡のエゴマ粒面や筆者のなすな原出土エゴマの内果皮に酷似した。すなわち、炭化内果皮の多孔および肥厚細胞の穴の配列が見られた（第9図）。おそらくこの周辺で栽培または生えていたものを収穫後に焼け、pit に落ち込んだ炭化片が一部のこぶし大に塊った糊米やアワ粒塊に付着していたものであろう。

炭化米や畑作物の炭化豆は、縄文・弥生時代に出土しているが、竹えられた状態での発掘例は弥生後期～中世時代に多い。たとえば筆者は中世の尾道市街地の埋糞跡から焼けたアワ、ソバ、コメ、オオムギを、大分県二本木跡後期遺跡のアズキの焼粒を同定している。また、東北地方でも早くから青森県田舎館村亞柳遺跡で土器での糊穀や炭化米の出土が報ぜられていたが、300枚近い弥生時代の水田跡が発掘されたのは昨年（1982年）のことである。中世における本遺跡からの多量の米、豆（アズキ・ダイズ）や少量だがエゴマ（シソ）が揃って出土は当時の農耕文化の貴重な資料と考えられる。

## ま と め

本報告では、古代中世の住居跡で焼落ちたと見られた炭化材や柱穴から採集された米・アワ・豆類を同定した。それらは炭化物塊または、ばらばらの粒として、貯蔵用の櫃、木皿の内やその周囲の床上に散在していた。なお、周囲には焼かれた稻葉で作られた筵があった。送られた妻の神I の焼（炭化）米と案内III の同じく炭化米と豆、および妻の神III の塊状のアワ、玄米をサンプリングして、量的調査と粒形の走査電顕像（写真）と現生種実とを比較し同定した。

妻の神I 遺跡の炭化米には6～8%の炭化糊が混じ、搗精または糊のよくない玄米を貯えた

#### 別編Ⅰ 炭化粒と豆の同定

ようであり、火事による膨張米が3~11%であった。案内Ⅲ遺跡の炭化米には、粒数で平均15%、重量で27%の炭化豆を混じているし、炭化豆では粒数で8%、重量で3%の炭化米を混えている。これはもともと別々に貯えられたものが火災時に混合したのか、玄米の膨張粒は2~7%、豆では8~13%あり、相当強い火力で膨張したものと思われる。炭化米の大きさの測定で、粒の長幅比から日本型であるが、妻の神Ⅰが案内Ⅲの米より少し大粒であり、前者は玄米であるが、後者は胚の欠けた粒が多く、膨張粒に横の割目があり、搗精米の貯えではなかったか、案内Ⅲの粒が小さいにも拘らず1,000粒重がやや重いのは、粒に黄褐色の土粉が付着していると考えられる。なお炭化米はどちらも細粒、丸粒を含み、不揃であった。

炭化豆にも大小さまざまなものがあったが、案内Ⅲのものの大・中粒は形、大きさ、残された僅かのへその形、表皮細胞の低い乳頭などからアズキと同定した。しかし、現生アズキ品種には見られないような極小粒のものがあるが、品種、系統が雑多なままの栽培と考えた。なお膨張粒は最初はアズキが火災のため膨大したと考えられたが、1,000粒重が大きいところから大粒で重いダイズの混入がへその形から推定された。また小粒のものにリョクトウ、ケツルアズキの混入はあるかどうか、出土粒には表皮細胞に網状が見付からず、今のところアズキの小粒と考えざるを得ない。

また妻の神Ⅲの塊状粒には、表面に山脈状の乳頭が並んでいるのでアワ粒と同定した。なお古くから五穀とされているキビ・ヒエ粒がないかと小粒種子を丹念にしらべてみたがこれらの中には見当らなかった。しかし、エゴマまたはシソの破片が認められた。

いずれにしても、この遺跡周辺にこれらが栽培、貯蔵されていたことが確実であり、稻米がフェノール反応で水稻か陸稻かの調査は炭化粒のためできなかった。なお、アズキの小粒に近似するヤブツルアズキは混入が考えられるが、焼烟に栽培されていたと考えられる細長粒のツルアズキの種子ではなく、また野生のツルマメ（ノマメ）、ノアズキ、ヤブマメなどは粒形、表皮細胞模様から見てなかったようである。

#### 謝　　辞

本調査試料を送付いただいた秋田県教育委員会ならびに発掘担当された小林克氏はじめ各位および、本試料の対照として各種のリョクトウ・ダイズ類種子の送付をいただいた京都大学農学部森脇勉氏・宮崎大学農学部藤原宏志氏ならびに前秋田農業試験場の須藤孝久氏、走査電子顕微鏡で本試料の撮影に協力を得た岡山大学農業生物研究所藤沢浅氏、調査に援助された武田潤子氏などに本文を草するに当たり感謝いたします。

1983・2・14

農学博士　元岡山大学農業生物研究所教授

第1表 妻の神I (S 1 003) の炭化物

サンプル	炭化米	炭化穀	炭化膨張米	炭化豆	計
1) 粒 g	1193(90.2) <sup>a</sup> 10.1(84.9)	84( 6.3) <sup>a</sup> 0.8( 6.7)	45( 3.4) <sup>a</sup> 1.0( 8.4)	1 ( 0.1) <sup>a</sup>	1323 (100) <sup>a</sup> 11.9 (100)
2) 粒 g	3080(89.1) 25.1(82.6)	159( 4.6) 2.0( 6.6)	215( 6.2) 3.3(10.9)	4 ( 0.1)	3458 (100) 30.4 (101)
3) 粒 g	2248(89.7) 18.2(87.5)	184( 7.3) 1.9( 9.1)	75( 2.9) 0.7( 3.4)	3 ( 0.1)	2507 (100) 20.8 (99.9)
4) 粒 g	2071(87.6) 17.3(82.7)	196( 8.3) 1.6( 7.7)	92( 3.8) 2.0( 9.6)	4 ( 0.2)	2363 (99.9) 20.9 (100)
5) 粒 g	1082(88.9) 9.2(82.9)	65( 5.3) 0.7( 6.3)	68( 5.6) 1.2(10.8)	2 ( 0.2)	1217 (100) 11.1 (100)
計 粒 g	9679(89.1) 9.2(83.9)	688( 6.3) 7.0( 7.3)	495( 4.6) 8.2( 8.6)	14 ( 0.1)	10868 (101) 95.2 ( 99)

備考 1) 約 100 g の試料を採り、任意 5 試料にわけ、炭化米、炭化穀、炭化膨張米、炭化豆を数えそれぞれ重量をしらべた。

2) その他、各粒以下で粒形が不明の炭化粉屑が全部で 6.2 g あった。

3) 炭化米 1,000 粒重は 8.0 ~ 8.7 g、炭化穀は 9.0 ~ 10.4 g

第2表 妻の神IIIの炭化物

- a) 13-A グリッド pit 1229 ..... 炭化アワ粒が  $2 \times 2.5 \text{ cm}$  魁ぐらの一面上に約 270 粒が認められ (カラー 3 図)、炭化材片と共に存している (第 8 図)。炭化塊の中の各粒は約  $1.3 \times 1.6 \text{ mm}$ 、 $1.4 \times 1.8 \text{ mm}$ 。
- b) 13-C グリッド pit 1138 ..... 麦刈りしたままの穂を貯えていたものが、火災にあらたらしく、 $2 \sim 2.5 \text{ cm}$  の炭化塊に穀米、初穂跡が 95 粒と約  $1 \sim 2 \text{ cm}$  の軸軸が 12 つについていて (カラー 3 図、第 4 図) アワ粒は多分 120 粒ぐらゐの塊である (カラー 3 図 a)。
- c) 14-E グリッド pit 1 .....  $1.5 \sim 2 \text{ cm}$  の炭化塊は、元はこぶし大の穀米とアワ粒塊があった。(カラー 3 図 c、第 3 図) 粒形は不明瞭だが破片の電顕像からシソ属 (エゴマまたはシソ) が少数ある (第 9 図)。
- d) pit 9999-(1) .....  $2 \sim 2.5 \text{ cm}$  の炭化アワ粒がアワ稈をはさんで 1 ~ 数列に並び、一面に約 80 粒が見られる (カラー 3 図 d、第 7 図)。
- e) pit 9999-(2) ..... 炭化アズキ粒 18 粒 (大粒 1、中粒 3、小粒 5、半片 9 粒) がある (カラー 2 図)。

## 別編 I 炭化穀と豆の同定

第3表 案内Ⅲの炭化物(その1)

	炭化米	炭化豆	炭化豆の区分			膨張炭化物 (米・豆)	割 合
			中粒	小粒	半片粒		
1) 粒 g	2000 (87.3) 19.4 (77.6)	196 ( 8.6) 4.1 (16.4)	27 ( 1.2) 0.8 ( 3.2)	107 ( 4.7) 1.9 ( 7.6)	62 ( 2.7) 1.4 ( 5.6)	93 ( 4.1) 1.5 ( 6.0)	3 2292 ( 100) 25.0 ( 100)
2) 粒 g	2000 (74.3) 19.1 (57.2)	632 (23.5) 12.8 (38.3)	120 ( 4.5) 4.1 (12.3)	300 (11.1) 6.0 (18.0)	212 ( 7.8) 2.7 ( 8.0)	59 ( 2.1) 1.5 ( 4.5)	2 2693 ( 9.9) 33.4 ( 100)
3) 粒 g	2000 (85.4) 18.3 (72.6)	279 (11.9) 5.1 (20.2)	33 ( 1.4) 1.0 ( 4.0)	181 ( 7.7) 3.1 (12.3)	65 ( 2.8) 1.0 ( 4.0)	60 ( 2.6) 1.8 ( 7.2)	1 2340 (99.9) 25.2 ( 100)
計 粒 g	6000 (81.9) 56.8 (68.8)	1107 (15.1) 22.0 (26.6)	180 ( 2.5) 5.9 ( 7.1)	588 ( 8.0) 11.0 (13.3)	339 ( 4.6) 5.1 ( 6.2)	212 ( 2.9) 1.8 ( 4.6)	6 7325 ( 9.9) 82.6 ( 100)

- 備考 1) 試料から炭化米 2,000 粒を数えながら、その中から炭化米と膨張炭化物にわけて、それぞれ粒数、重量を計った。その他、炭化屑が全部で 6.2 g であった。
- 2) 炭化米 1,000 粒重は 9.5、9.6、9.0、9.3、9.5 g、平均 9.4 g である。
- 3) 炭化豆の 500 粒重は中粒 20.1 g、小粒 11.3 g、半片粒 6 g である。
- 4) 本遺跡の出土炭化物塊、米、豆には 黄褐色の土がかなりまぶれていた。

第4表 案内Ⅲの炭化物(その2)

炭 化 豆					炭化米	計	
1)	膨張粒 (4 mm 以上)	大粒 (4 mm 以上)	中粒 (2.5~4 mm)	小粒 (1~2.5 mm)			
粒 g	675 ( 7.8) 27.8 (12.8)	334 ( 3.9) 17.6 ( 8.2)	5340 (61.9) 141.5 (65.6)	268 ( 3.1) 3.5 ( 1.6)	1222 (14.2) 18.9 ( 8.8)	789 ( 8.1) 6.5 ( 3.0)	8628 (100) 215.8 (100)
炭 化 豆					炭化米	計	
2)	膨張粒	大粒	中粒	小粒			
粒 g	47 (11.0) 3.7 (28.2)	22 ( 5.1) 1.0 ( 7.6)	114 (26.7) 3.8 (29.0)	138 (32.3) 3.2 (24.4)	87 (20.4) 1.2 ( 9.2)	19 ( 4.4) ( 1.5)	427 (100) 13.1 (100)

炭 化 豆 1000 粒重 (500粒重×2)

3)	膨張粒	大粒	中粒	小粒	半片粒
g	60.6	46.7	35.5	21.2	15.4

- 備考 1) サンプル 220 g を籠でおろし、膨張、半片、炭化米をより出した。  
2) 膨張粒の多くがダイズ、その他はアズキの炭化豆と推定できる。

第5表 焼(炭化)米粒の大きさ測定

サンプル	妻の神 I				案内室				備考
	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	長／幅	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	長／幅	
1	4.8	2.5	2.2	1.9	4.5	2.5	2.0	1.8	両試料とも無傷の粒約200粒の中から細丸、普通粒を採って測定した。
2	5.3	3.9	2.5	1.4	4.1	3.0	2.1	1.4	
3	5.0	3.0	2.3	1.7	4.0	2.5	2.2	1.6	
4	5.4	2.7	2.1	2.0	4.0	3.1	2.2	1.3	
5	5.5	3.8	2.5	1.4	4.2	2.2	2.1	1.9	
6	3.8	2.2	2.0	1.7	4.5	2.5	2.0	1.8	
7	5.5	3.1	2.4	1.8	3.8	2.8	2.0	1.9	
8	4.5	3.1	2.1	1.5	4.3	3.0	2.3	1.4	
9	4.3	3.7	2.2	1.2	4.5	3.0	2.5	1.5	
10	5.0	3.0	2.1	1.7	4.1	2.8	2.0	1.5	
平均	4.9	3.1	2.2	1.6	4.2	2.7	2.1	1.6	
11	4.7	3.0	2.1	1.6	4.9	2.6	2.4	1.9	
12	4.9	2.5	1.9	2.0	4.7	2.8	2.3	1.7	
13	3.8	2.4	2.1	1.6	3.8	3.0	2.7	1.3	
14	3.9	2.3	2.1	1.7	4.0	3.4	2.2	1.2	
15	5.0	2.6	2.1	1.9	4.3	2.4	2.1	1.8	
16	4.1	3.0	2.0	1.4	4.5	3.1	2.3	1.5	
17	4.8	3.0	2.1	1.6	4.3	2.2	2.0	2.0	
18	5.2	3.0	2.2	1.7	3.8	2.2	2.0	1.7	
19	5.4	2.7	2.5	2.0	4.1	2.2	2.1	1.9	
20	5.1	2.6	2.4	1.9	3.9	2.3	2.1	1.7	
平均	4.7	2.7	2.2	1.7	4.2	2.6	2.2	1.6	

第6表 焼(炭化)豆の大きさ測定

サンプル	大粒			中粒			小粒		
	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	長さ mm	幅 mm	厚さ mm
1	7.0	5.5	5.0	5.0	3.2	3.0	4.0	3.0	2.7
2	7.0	5.3	4.8	5.1	3.1	3.0	3.1	2.7	2.5
3	7.0	5.0	4.5	5.0	3.1	3.0	4.0	3.1	3.1
4	7.5	5.5	5.5	4.0	3.5	3.1	3.7	3.0	2.2
5	7.2	5.1	5.0	4.5	3.2	3.0	4.0	2.6	2.5
6	7.0	5.0	4.8	4.6	3.2	3.1	4.1	3.0	2.8
7	8.3	7.5	5.5	5.2	4.0	3.5	3.1	2.7	2.5
8	8.7	5.7	5.5	4.2	4.1	3.5	3.8	2.8	2.7
9	7.5	6.0	5.4	4.1	3.1	3.1	3.1	3.0	2.9
10	7.0	5.2	4.8	5.0	3.5	3.2	3.5	2.3	2.4
平均	7.4	5.6	5.1	4.77	3.4	3.2	3.6	2.8	2.6

備考 炭化豆は大・中・小粒の500粒重測定の中から平均的な粒を測定した。

- 星川清親；栽培植物の起源と伝播。P. 275 (1977) 二宮書店
- 笠原安夫；二本木遺跡、33号住居跡内出土のアズキ状種子について  
大野原の遺跡 P. 233～234 (1980)
- 笠原安夫；走査電子顕微鏡で見た雑草種実の造形。P. 130 (1976) 養賢堂
- 笠原安夫；鳥浜貝塚の植物種実の検出とエゴマ・シソ種実・タール状塊について  
鳥浜貝塚 P. 65～87 (1981) 1980年度発掘調査概報、福井県教育委員会
- 笠原安夫；草戸千軒町遺跡および尾道市街地地下遺跡における種実の検出・同定について  
第28、29次草戸千軒町発掘調査概要 P. 98～162 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所  
(1980)
- 笠原安夫、武田満子；岡山県津島遺跡の出土種実の種類同定の研究  
— 日本地遺跡間の残存種実の比較とそれから見た農耕の伝播と形態の推定  
農学研究 58卷、3、4号、P. 117～179、(1979)
- 近藤萬太郎；日本農林種子学、後編、P. 885 (1934) 養賢堂
- 前田和美；縄文遺跡出土の豆類。とくにリヨクトウについて、文部省特定研究  
「古文化財シンポジウム」縄文農耕の実証性、1月20日 東京中野サンプラザにて(1981)
- 松谷曉子、笠原安夫；縄文農耕出土タール状小種子塊を炭化エゴマと同定するまでの経過と各地  
出土のアワ、ヒエ、キビの状態および走査電子顕微鏡について  
文部省特定研究「古文化財」1980年次報告書 P. 128～134 (1981)
- 松木 嶽；绿豆、鳥浜貝塚、第3節、P. 162～163 (1979) 福井県教育委員会
- 中尾佐助；栽培植物の世界。P. 250 (1975) 中央公論社
- 佐藤敏也；日本の古代米、P. 346、雄山閣
- 西山正規；植物遺体、鳥浜貝塚、第3節、P. 162～163 (1979) 福井県教育委員会
- 佐藤正己；有用植物分類学 P. 530 (1957) 養賢堂
- 菅原清康；煙草農法の中における雑草防除対策。雑草研究 25 (4) P. 300～303 (1980)
- 戸刈義次、音六郎；食用作物 P. 497 (1957) 養賢堂
- 渡辺忠世、森脇勉；インド亜大陸産リヨクトウ類の栽培学的諸特性 P. 47～92 (1977)  
日本豆類基金協会
- 垂柳遺跡 昭和57年度発掘調査会議資料 (1982) 青森県埋蔵文化財調査センター
- 笠原安夫；菜畠縄文晩期(山の寺)層から出土の炭化ゴボウ、アズキ、エゴノキと未炭化メロン  
種子の同定 P. 447～453、唐津市菜畠遺跡 (1983) 唐津市教育委員会

カラー1図 妻の神I出土炭化粒

a 焼稲米



b 焼玄米



カラー2図 妻の神III出土炭化粒

a 焼アズキ



カラー3図 妻の神III出土炭化粒

a 焼アワ粒塊



b 焼稻穂塊



c 焼稲米とアワ粒塊



d 焼アワ粒と茎葉(稈)塊



カラー4図 案内III出土炭化粒

a 焼米塊



b 焼米塊



c 焼豆



膨脹粒

大粒



中粒 小粒

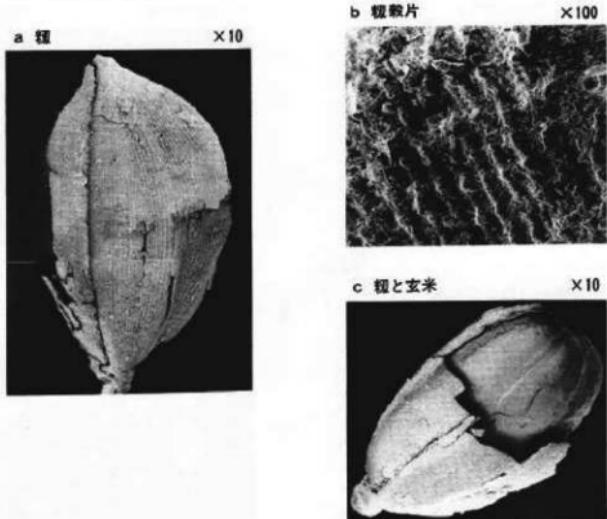
d 焼豆の筛别け



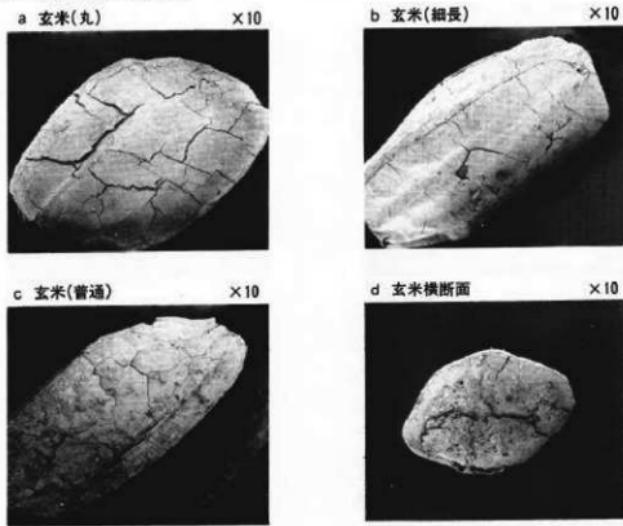
4 mm以上

2.5~4 mm

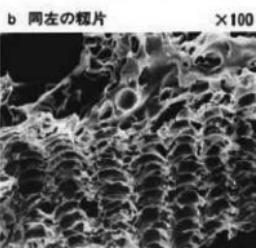
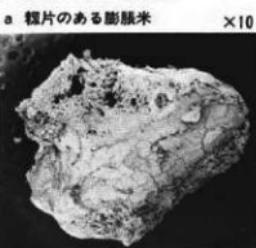
第1図 妻の神I出土炭化粒



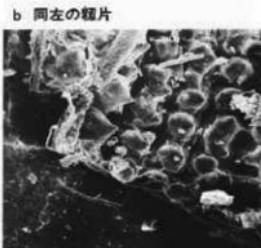
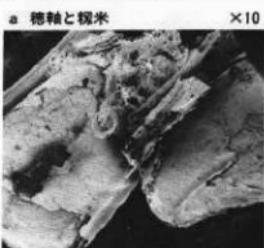
第2図 妻の神I出土炭化粒



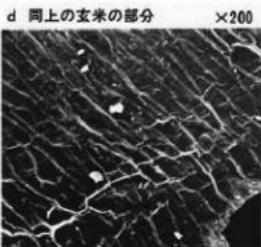
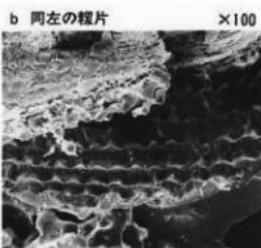
第3図 妻の神III出土炭化粒



第4図 妻の神III出土炭化粒



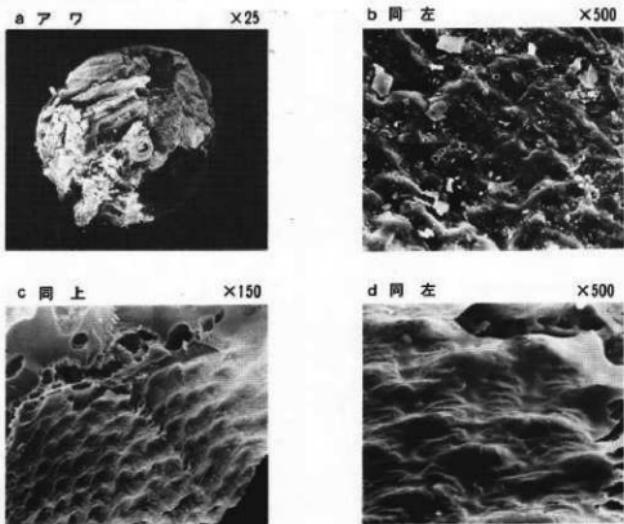
第5図 妻の神III出土炭化粒



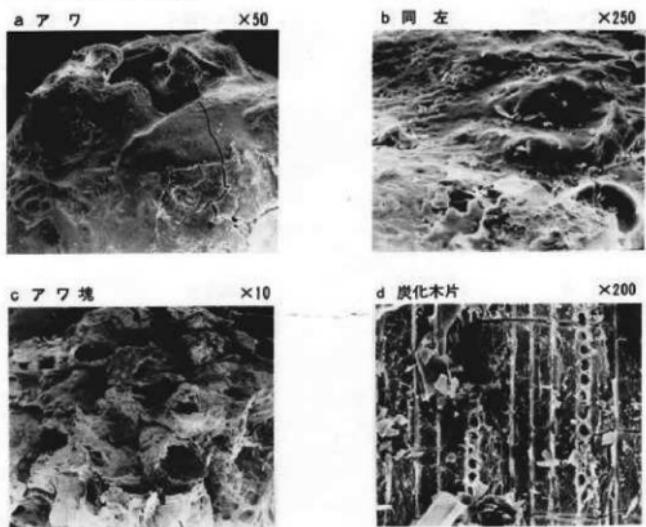
第6図 案内Ⅲ出土炭化粒



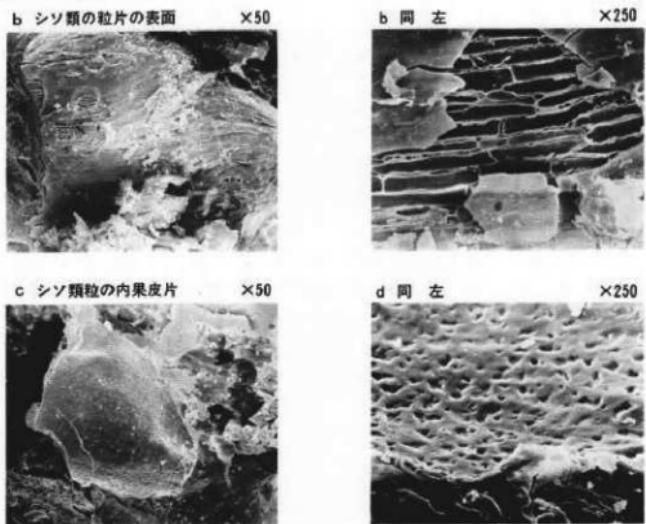
第7図 妻の神III出土炭化粒



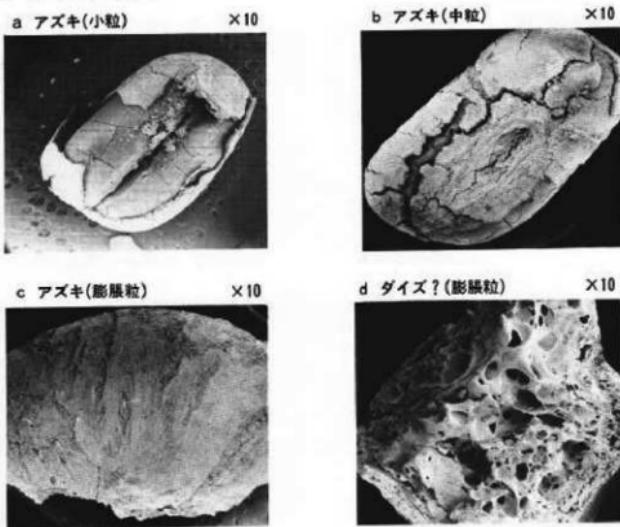
第8図 妻の神III出土炭化粒



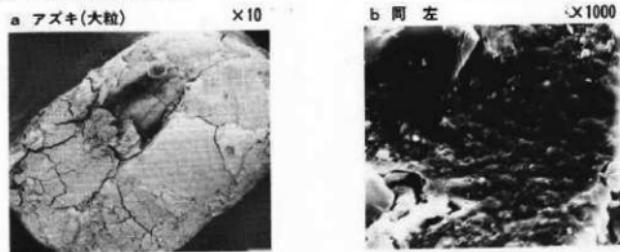
第9図 妻の神III出土炭化粒



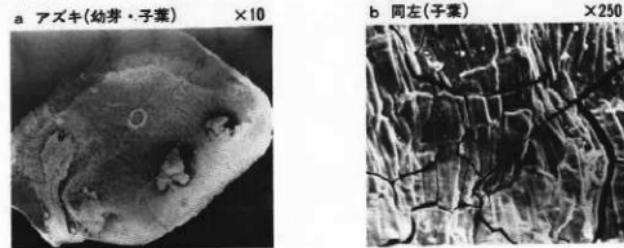
第10図 案内Ⅲ出土炭化粒



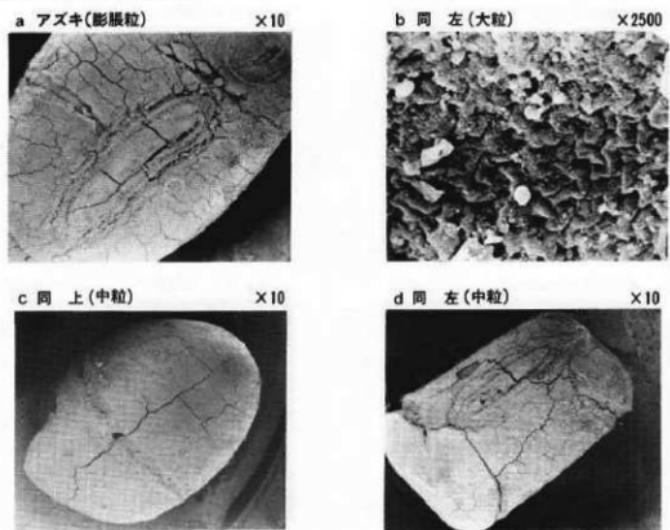
第11図 妻の神Ⅲ出土炭化粒



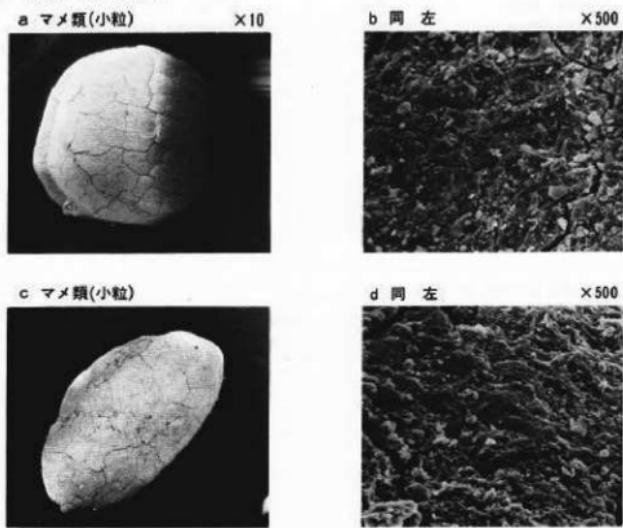
第12図 案内Ⅲ出土炭化粒



第13図 案内Ⅲ出土炭化粒

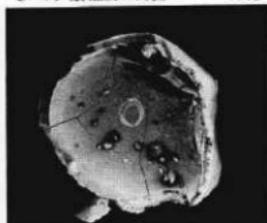


第14図 案内Ⅲ出土炭化粒

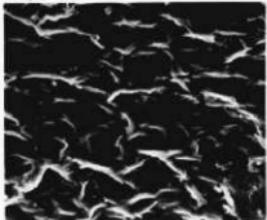


第15図 案内Ⅲ出土炭化粒

a マメ類種皮の内側  $\times 10$



b 同 左  $\times 500$



c マメ類(中粒)やや不正形  $\times 10$

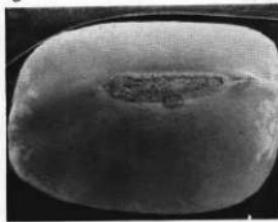


d 同左(アズキ?)  $\times 1500$

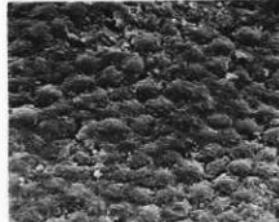


第16図 現生アズキ種子

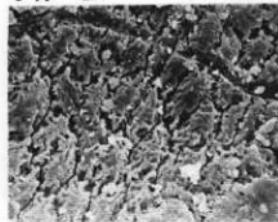
a  $\times 10$



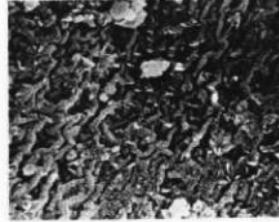
b 同 左  $\times 500$



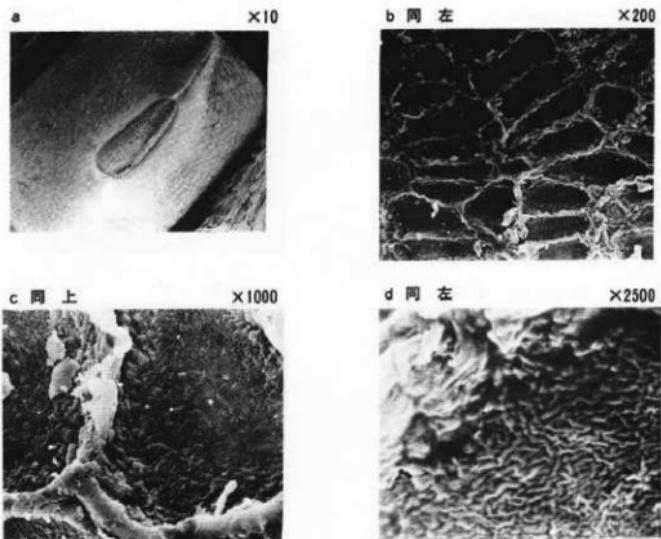
c 同 上  $\times 1000$



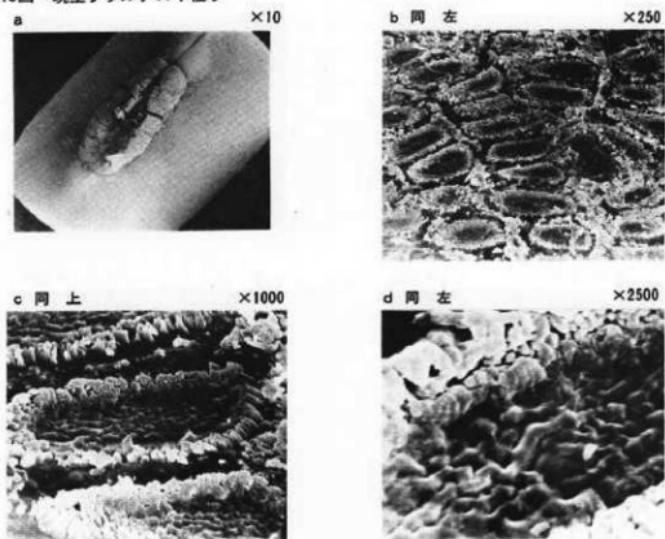
d 同 左  $\times 2000$



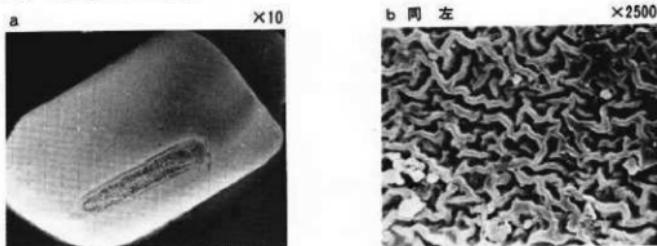
第17図 現生リョクトウ種子



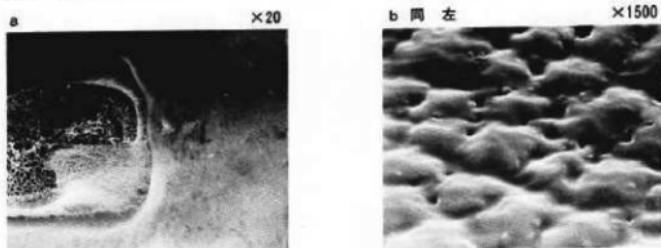
第18図 現生ケツルアズキ種子



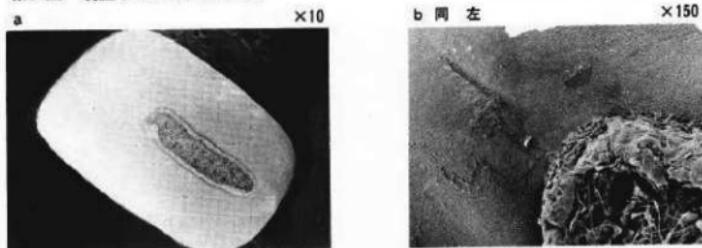
第19図 現生雄草アズキ種子



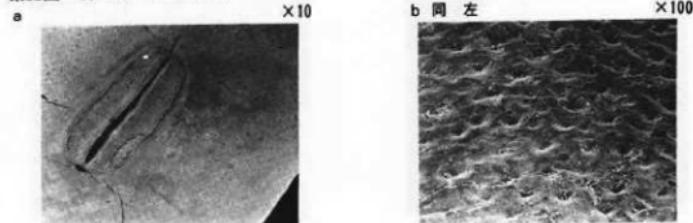
第20図 現生アカマミ種子



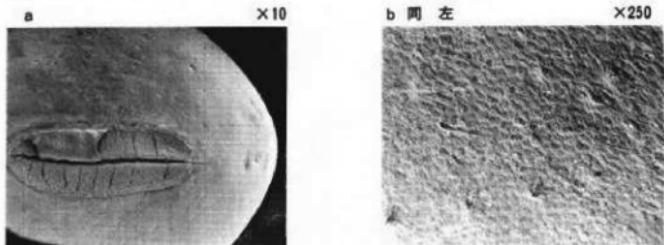
第21図 現生ヤブツルアズキ種子



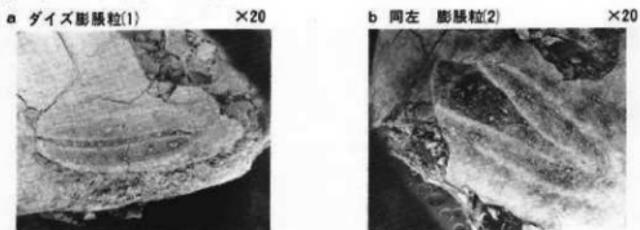
第22図 現生焼焔ダイズ種子



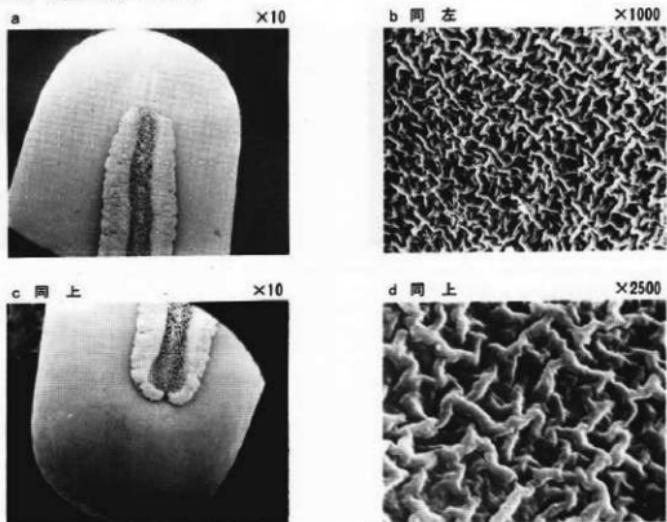
第23図 現生ダイズ種子



第24図 案内III出土炭化ダイズ種子



第25図 現生ツルアズキ種子



# ち 乳牛平 遺跡

遺跡番号 No.25  
所在地 鹿角市花輪字乳牛平16番地他  
調査期間 昭和56年4月16日～8月11日  
発掘調査予定面積 5,622m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 3,000m<sup>2</sup>

## 1. 遺跡の概観

花輪盆地北東部には、奥羽山脈と盆地平野部との間に標高150～160mの平坦かつ広大な台地があり、草木川、間瀬川、不動川その他の中小河川がこれを開拓して、東から西へ向かって細長く延びる舌状地形を発達させている。

この台地上には縄文遺跡の他、その後の平安・中世遺跡も多く、殊に平野部に臨む舌状地形末端部には、乳牛平遺跡から北わずか4kmの間に柴内、高市、小平、新斗米の各館が開拓谷を挟んで指呼の間に連続するという状況である。

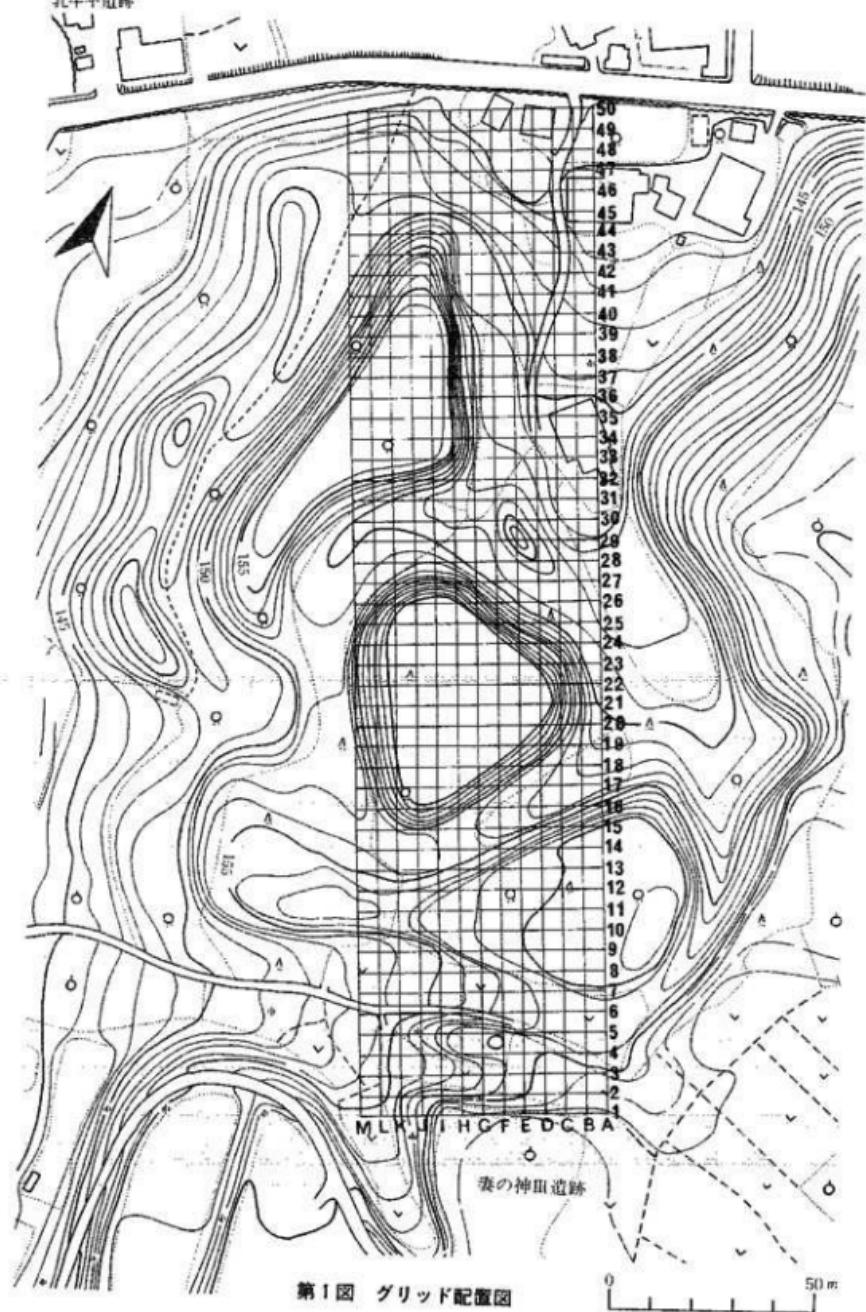
乳牛平遺跡は、国鉄花輪線陸中花輪駅の北東2.5kmに位置し、標高155～160mの台地末端部にある。偏西側を乳牛川が北流し、現水田面と郭平場との比高は20mほどを計る。遺跡南方には妻の神III・II・I遺跡が連続し、北方には谷を挟んで乳牛・西町I・II遺跡が存在する。I郭平場からは柴内館が北東方向に見られる。

## 2. 調査の方法

乳牛平遺跡は妻の神III遺跡も含めて、郭と掘との地形観察からおおよその範囲を推定できるが、調査前には南に隣接する妻の神III遺跡とは別個の遺跡と考えられ、III・IV郭の南側に東西に走る小道あたりがその境として考えられていた。したがって、グリッドの設定もこの付近を南限として、県道大湯・花輪線をその北限とすべく、II郭上のS T A 159+20とI郭上のS T A 159+60を結ぶ線を南北の基線とし、この基線に対して直交する東西ラインをもって設定したのである。

グリッドの呼称は東西ラインには南からアラビア数字、南北ラインには東からアルファベットを付し、両者の組み合わせで呼ぶこととし、各グリッド東南隅の杭をグリッド呼称のために用い、東西60m、南北245mの拡長な範囲をその中に組み入れた。

この中には郭と掘の存在が明らかで、郭は北から順にI郭・II郭・III郭と呼称し、III郭西側にある低平な郭をIV郭、またI郭西側にありながら既に土取工事によって破壊を受けている南北に細長い小山をV郭とし、このうち調査範囲内に含まれるI郭東半、II郭全域、III郭西半、IV郭の一部、及びIII郭と妻の神III遺跡との間にある土壠状の小山までを調査した。郭周囲の堀はI郭北側にAトレント、I・II郭間にBトレント、II・III郭間にCトレント、III郭から妻の神III遺跡との間にDトレントを設定し、その形状と規模の把握に努めた。しかし堀内堆積土層の崩壊が激しく、堀底面までの調査は完遂できなかった。



第1図 グリッド配置図

I～Ⅲ郭上の表土除去は、調査の迅速化を図るために重機を用いて行ない、その後人力による粗斬、精査を行なって遺構、遺物の取出にあたった。

遺構等の実測にあたっては各グリッド隅の杭を利用して簡易造り方測量によったが、一部で平板も用いた。

遺構は35mm判と6×4.5吋カメラを用い、モノクロ、カラーリバーサル写真を撮影した。また、航空写真測量により、遺構配置図、地形図を作成した。

### 3. 調査の経過

調査は昭和56年4月16日から8月11日まで行なったが、7月2日からは明堂長根遺跡の表土除去作業と並行した。調査経過の概略は以下のとおりである。

4月16～21日 立木伐採後の枝の処理

4月22日～ II郭粗査作業開始

4月24日～ I郭重機導入、抜根作業

5月1日～ II郭精査開始

5月8日～ I郭精査開始

5月13日～ III郭精査開始

5月30日～ III郭精査開始

7月22日～ IV郭精査開始

7月23日～ 航空写真撮影

8月11日 調査完了

### 4. 遺跡の層序

Ⅲ郭中央部を南北に通るAラインで上層断面図を作成したが、それによると基本層位はほぼ以下のとおりである。

第I層：10Y R 5% 黒褐色土、粘性中、黄褐色土粒子少量混入、植物根多い。耕作土である。

第II層：10Y R 5% 黑褐色土、粘性強、色調は第I層と同じであるが、径1mm以下の白色浮石粒が全体に混入している。中世の遺構はこの層を掘り込んで構築されている。

第III層：10Y R 5% 黄褐色土 10Y R 5% 棕褐色土及び10Y R 5% 黑褐色土が層全体に少量混入する。第II層と地山の漸移層である。縄文時代の遺構はこの土層より掘り込まれている。

第IV層：10Y R% 灰黃褐色、地山シラス層

## 5. 遺構と遺物

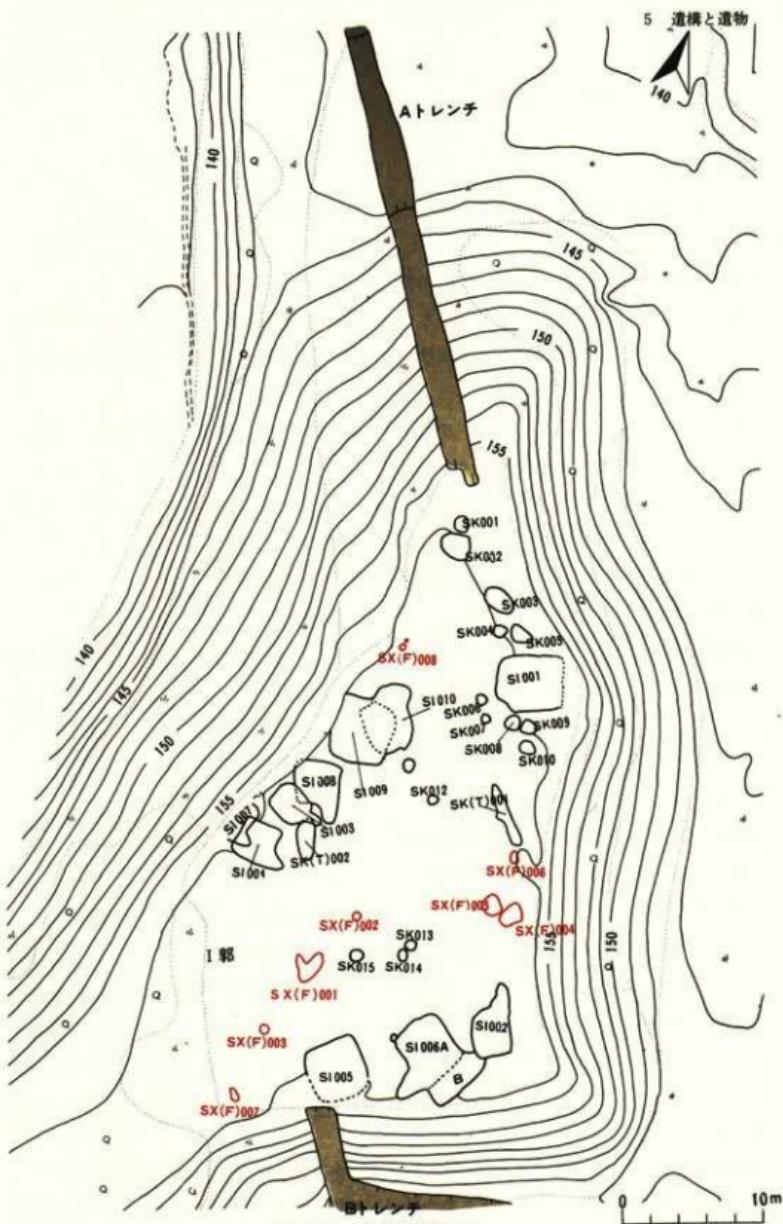
前述の様に、乳牛平遺跡は妻の神III遺跡に連続し、南北に細長い形状を示している。V郭西側斜面はI~III郭の斜面に比べ、かなり緩やかとなっており、恐らく削り出しによらない自然地形であろうと思われる。I・II郭中間部の東側には土壘状の小山があるが、この西側は壠の構築による削り出しを受けているが、東側は自然地形のままの斜面であり、妻の神III遺跡から延びる標高160mほどの台地との間に自然の沢が入り込む。

こうしたことから、乳牛平遺跡はおよそ幅120mほどの南北に延びる舌状台地を利用して堀を巡らし、郭を造築したことがわかる。

郭、壠自体も館の一部分を構成する遺構であるが、郭上の平場からは館に付随する遺構の他、繩文時代の遺構、遺物、弥生時代の遺物が検出された。遺構は郭ごとに発見順に番号を付し、通常の遺構番号の前に郭番号を付し、例えばI・S I 001のように標示した。館に付隨すると考えられる遺構に確実に伴って出土した遺物は皆無であり、むしろ、繩文・弥生土器の方が量的に多い。しかし遺物総量はコンテナ3箱に収まり、極めて少ないと見える。

郭平場から検出された遺構、遺物は以下のとおりである。

I郭	竪穴遺構	10	焼土遺構	8			
	土 壙	2	T ピット	2			
II郭	竪穴遺構	18	焼土遺構	33	柱 列	1	土 壙 24
	T ピット	6	溝	2	その他の遺構	4	
III郭	竪穴遺構	4	焼土遺構	10	柱 列	1	掘立柱建物跡 2
	溝	6	土 壙	6	T ピット	6	その他の遺構 4
IV郭	溝	1					



第2図 I郭遺構配置図

## (1) I郭検出遺構

## ①豎穴遺構

## 1・S I 001 豊穴遺構(第3図、図版4)

位置 38H・I グリッド

平面形・規模 東西 430cm、南北 370cmの長方形である。面積14.3m<sup>2</sup>。

壁 外方に傾斜しながらも、しっかりとしている。西壁31~37cm、南壁10~34cm、北壁は0~36cmの高さを測るが、東壁は平場の崩壊も加わって消失している。南壁に若干の歪みが見られる。

床 東に向かってわずかに傾斜し、中央より東側に凹凸が見られる。中央に炉跡と思われる凹みがあるが、焼土、焼面が確認できず断定はしがたい。

ピット 壁に沿う形で16個のピットが検出された。P1~10がこの遺構の柱穴と考えられる。

Pit No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12
深さ(cm)	64	64	54	65	89	55	65	62	69	76	19	15

遺物 なし。

その他の観察 南壁に歪みがあるが、上層断面の観察と柱穴の配置状況から、別棟の豎穴遺構の重複ではなく、改築によるものであると考えられる。

## 1・S I 002 豊穴遺構(第4図、図版4・5・6・11)

位置 33・34 I グリッド

平面形・規模 東西 270cm、南北 340cmの長方形を呈する。面積9.7m<sup>2</sup>

壁 四壁ともにはば垂直に立ち上がり、しっかりとしている。

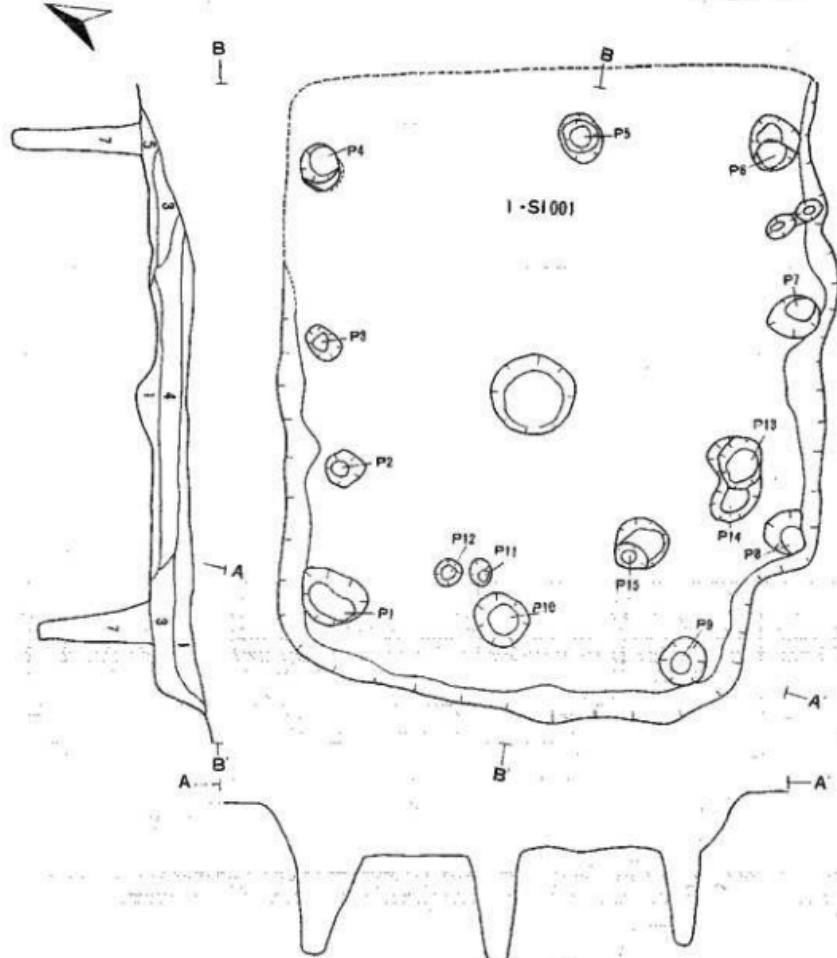
床 中心に向かって若干傾斜しているが、全体的にはおおよそ平坦で堅い。中央部北寄りから自然石が多数検出された。出入口部の床面は内部から外方へ向かってだいに立ち上がる。

ピット P1・2・4・5・9・11~13は柱穴、P7・8は出入口部の柱穴である。住居中央部にも2個のピットがあるが炉ではない。

Pit No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15
深さ(cm)	43	66	30	31	53	9	41	37	46	49	31	58	67	24	7

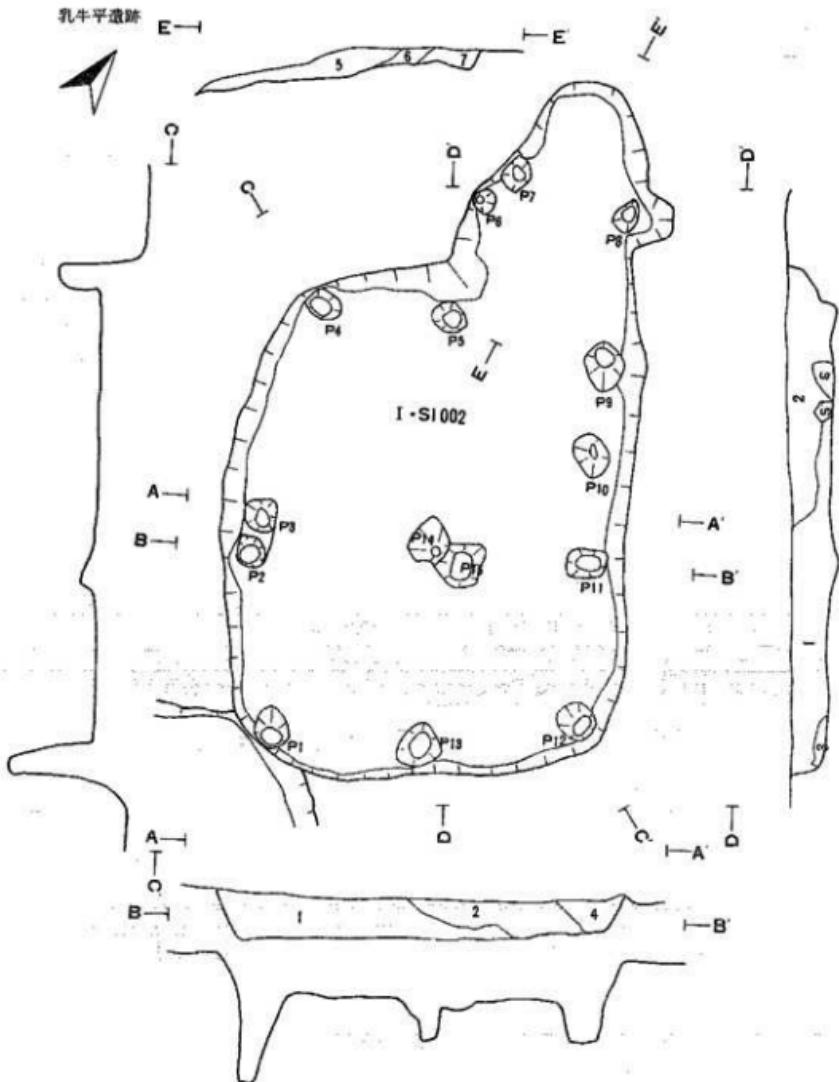
遺物 なし。

その他の観察 北壁に出入口部が付設されている。南西部に炭化物を含んだ焼土が確認され、中央部には炭化材も見られることから焼失家屋と判断される。出入口部からは灰が検出された



層	土 色	備 考
1	黒 色 (10YR 5/2)	粘性強。白色粒子、黄褐色粒子微量混入
2	黑褐 色 (10YR 4/2)	粘性強。白色粒子微量。黄褐色粒子微量混入
3	黑 褐 色 (10YR 4/2)	粘性強。白色粒子微量。黄褐色小アロ。タマゴ状混入
4	黑 褐 色 (10YR 4/2)	粘性強。白色粒子。黄褐色粒子微量混入
5	黑 褐 色 (10YR 4/2)	下部に黄褐色粒子微量混入
6	にごい黄褐色 (10YR 5/2)	粘性弱。白色粒子微量。黑色土多量混入
7	褐 色 (10YR 5/2)	上部に砂混入

第3図 I・S100 穴遺構実測図



層	土 色 (10Y R %)	備 考
1	黑褐色(10Y R %)	粘性強，黃褐色粒子微量混入
2	暗褐色(10Y R %)	黃褐色粒子少量混入
3	明黃褐色(10Y R %)	粘性強，黃橙色粒子微量混入
4	明黃褐色(10Y R %)	褐色土少量混入
5	黑褐色(10Y R %)	粘性強，黃褐色粒子微量混入物少量混入
6	黑褐色(10Y R %)	粘性強，炭化物多量混入
7	褐 色(10Y R %)	黑褐色土多量混入

0 1m

第4圖 I・SI 002竪穴遺構実測図

が、住居内部に近い所では2~3cmの厚さに堆積していた。

I・SI 003 積穴遺構（付図3、図版7~9・13・14・16）

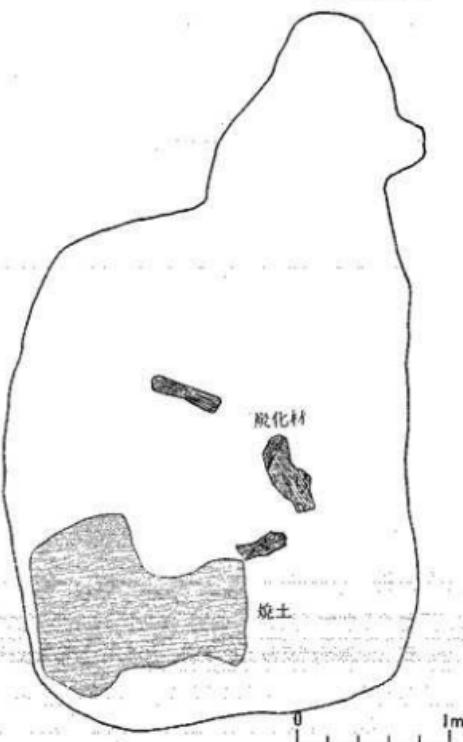
位置 36K・L、37Lグリッド

平面形・規模 東西 250cm、南北 240cmの方形である。面積6.6m<sup>2</sup>

壁 南壁はほぼ垂直に立ち上がり、その他の壁も急角度で立ち上がり、しっかりとしている。東壁14~26cm、西壁10~17cm、南壁13~28cm、北壁17~24cmの高さを測る。

床 西壁に向かってやや傾斜しているが、おおよそ平坦である。地山が床面になっており堅い。出入口部床面は遺構内から外方へしだいに浅くなる。

ピット P 1~8が柱穴である。P 8は重複するSI 008の柱穴を再使用している。



第5図 I・SI 003積穴遺構焼土・炭化材分布図

Pit No	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
深さ(cm)	64	70	61	65	51	76	51	28

遺物なし。

その他の観察 東壁に山入口が付設されている。焼失家屋で北側と東、内壁に沿って焼上が検出され、床面一帯に炭化材、炭化カヤが分布する。炭化材の方向は、ほぼ南北方向に一定している。SI 008、SK (T) 002と重複しており、これら遺構よりも新しい。

I・SI 004 積穴遺構（第6図、図版9・10・13・14）

位置 36Lグリッド。

平面形・規模 東西 270cm、南北 270cmの方形である。面積 8.2m<sup>2</sup>

壁 四壁ともほぼ垂直に立ち上がりしっかりしている。東壁11~18cm、西壁9~14cm、南壁9~18cm、北壁7~19cmの高さを測る。

## 乳牛平遺跡

**床** 北西コーナーに向って傾斜しているが、おおよそ平坦である。地山を床面としており堅いが、S I 007との重複部分は軟弱である。出入口部は造構中央部から緩やかに立ち上がり、外方末端部はほとんど壁をなさない。

**ピット** P 1・3・7～12が柱穴。P 5・20は出入口部の柱穴である。

Pit No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
深さ(cm)	45	26	66	17	38	16	34	40	47	50	37	32
Pit No	P 13	P 14	P 15	P 16	P 17	P 18	P 19	P 20	P 21	P 22	P 23	...
深さ(cm)	21	14	22	17	8	48	19	40	70	32	39	

遺物なし。

**その他の観察** 車駆に出入口が付設されている。中央南側と東側に焼土の塊が検出され、炭化材、炭化カヤも見られることから焼失家屋と判断される。S I 007と重複しており、S I 007よりも新しい。

## I・S I 005 穫穴造構(第7図、図版11・12)

**位置** 33K グリッド。

**平面形・規模** 東西 380cm、南北 340cm の方形を呈する。面積 12.9m<sup>2</sup>

**壁** 全体的に立ち上がりは小さい。北・西壁はほぼ確認できるが、南壁は木根によって擾乱されており、東壁は検出できない。西壁 8～16cm、南壁 0～12cm、北壁 4～18cm の高さである。

**床** 南壁に向かってやや傾斜している。南側が木根によって擾乱されているが全体的に平坦である。地山が床面になっており堅い。

**ピット** P 1～9はこの住居跡の柱穴と思われるが、東西の柱穴が不揃いである。南壁 P 1・2 間にも存在したはずであるが消失している。P 8 の掘り方も木根によって破壊されている。

Pit No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9
深さ(cm)	52	69	70	52	60	59	63	82	28

遺物なし。

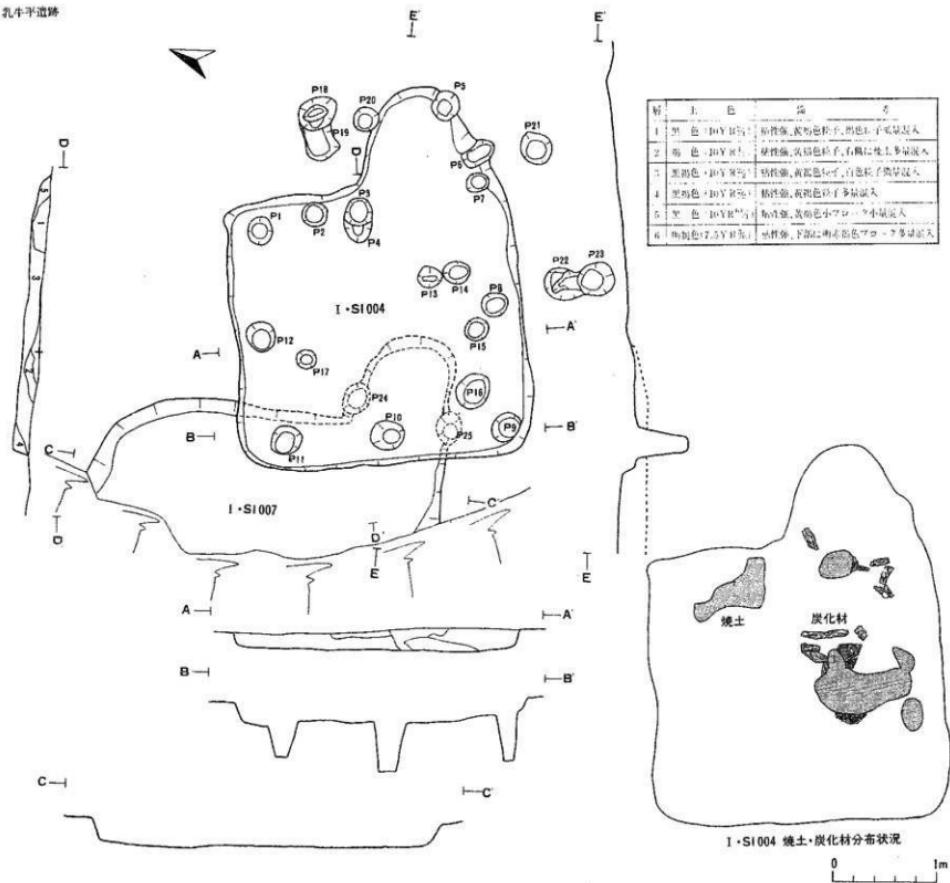
**その他の観察** 北東隅も木根により擾乱を受けている。

## I・S I 006-A 穫穴造構(第8図、図版11・12)

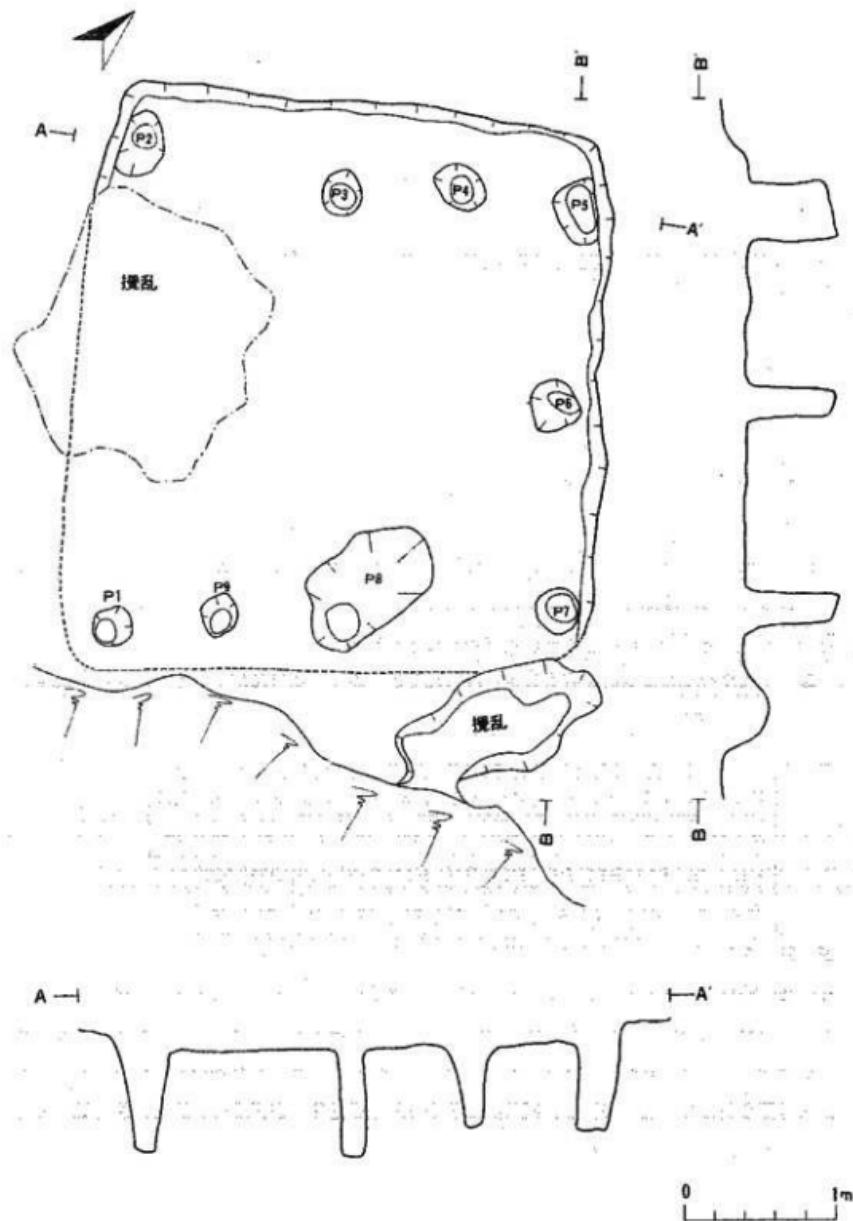
**位置** 32J・33I・J グリッド。

**平面形・規模** 東西 420cm、南北 350cm の長方形を呈する。面積 16.4m<sup>2</sup>

**壁** ほぼ垂直に立ち上がり、しっかりしている。東壁は改築によって消失している。西壁 23～32cm、南壁 19～27cm、北壁 18～32cm の高さである。



第6図 I-SI004-007整穴造構実測図



第7図 I-S1005竪穴造構実測図

**床** 地山が床面となっており、全体的に平坦である。東側の炉は建て替え後に付設されたものである。

**ピット** P 1 ~ 7、17 ~ 19 ~ 22がこの住居の柱穴で、P 15 ~ 16は出入口部の柱穴である。

Pit No	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P15
深さ(cm)	76	70	76	60	37	36	60	29
Pit No	P16	P17	P18	P19	P20	P21	P22	P23
深さ(cm)	33	69	33	73	57	51	66	29

**遺物** なし。

**その他の観察** 南壁に出入り口が付設されている。北壁でSK 016と重複しているが、新旧関係は不明である。

#### I・SI 006-B 積穴遺構（第8図、図版11・12）

**位置** 32I・J、33I・J グリッド。

**平面形・規模** 東西 580cm、南北 430cmの長方形を呈する。面積21.6m<sup>2</sup>

**壁** 南東コーナーは郭の崩壊によって消失している。北壁がやや突出しており、SI 002と切り合っている。確認できる壁は急角度で立ち上がり、しっかりしている。東壁11~18cm、西壁23~32cm、南壁18~27cm、北壁18~32cmの高さである。

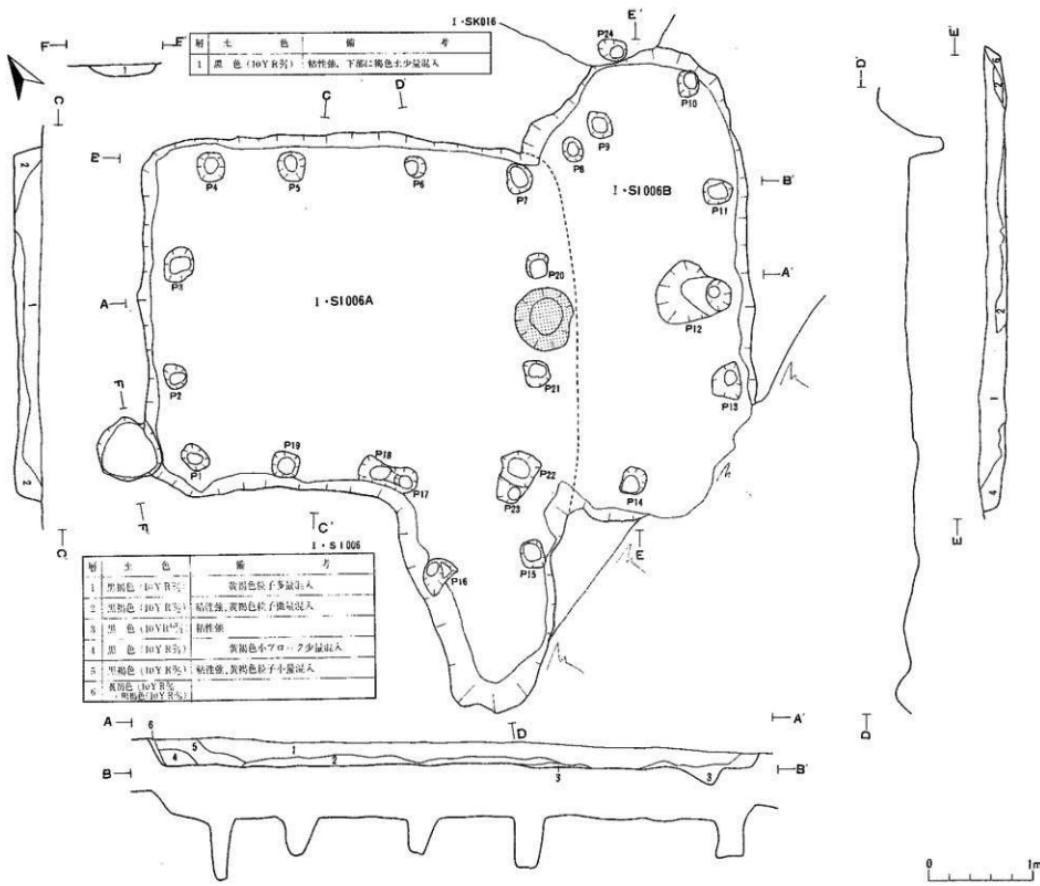
**床** 中央やや東側に焼面を有する炉がみられるが、焼土・灰は確認できない。全体的に平坦である。地山が床面になっており堅い。

**ピット** P 1 ~ 7・11・14・18・19・23はこの遺構の柱穴と思われる。

Pit No	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11
深さ(cm)	76	70	76	60	37	36	60	13	39	58	36
Pit No	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18	P19	P20	P21	
深さ(cm)	72	76	61	63	33	73	57	51	66	29	

**遺物** なし。

**その他の観察** 南壁のP 17と18及びP 22と23は各々重複しているが、この新旧関係は、ピット内の土層断面観察からP 18とP 23が各々新しく、柱穴を西寄りに移築したことが知られる。炉は位置的に見てSI 006Aに伴うものではない。これらのことから当初南向に付設されていた出入口部を廃絶して北に移築し、同時にSI 006A東壁を東に移動させ、新たに炉を設けるという改築を行ったと判断される。



第8図 I-SI006堅穴造構・SK016土壤実測図

## I・SI 007 穫穴造構（第19図、図版13・14）

位置 36Mグリッド。

平面形・規模 南北 340cmを測るが、東側は崩壊しており、全体の規模は不明である。

壁 東壁の全体と北・南壁のごく一部が確認されるのみで、その他は郭の崩壊により、消失している。確認できる部分はほぼ垂直に立ち上がってしっかりとしている。東壁のほとんどもSI 004によって切られているが、壁高が35cm以上を測るので、重複部分も現存している。

床 半分以上崩壊しているが、確認できる部分は平坦で、北壁に向かってやや傾斜している。地山が床面になっており堅い。

ピット P 25・26は出入口の柱穴と思われる。床面には検出されなかった。

Pit No	P 24	P 25
深さ(cm)	48	68

遺物 なし。

その他の観察 東壁に出入口が付設されている。SI 004と重複しており、SI 004より古い。

## I・SI 008（付図3、図版13・14・16）

位置 36K、37K・Lグリッド。

平面形・規模 東西 300cm、南北 320cmの方形を呈する。面積10.4m<sup>2</sup>。

壁 東壁はほぼ全体を確認できるが、17cmほどの高さに緩やかに立ち上がっている。北壁は全く検出されず、南壁、西壁も一部が検出されただけであるが、それぞれ11~17cm、3cmの高さである。

床 およそ平坦であるが、東壁に向かってやや傾斜している。地山が床面になっており堅い。

ピット P 8~10・13・14・20・30・32・37・39・41と崩壊部の一側を含んだ12本が柱穴である。

Pit No	P 9	P 10	P 11	P 12	P 13	P 14	P 15	P 16	P 17	P 18	P 19	P 20	P 21	P 22	P 23	P 29
深さ(cm)	26	25	47	15	24	43	39	10	41	15	14	20	45	42	48	37
Pit No	P 30	P 31	P 32	P 33	P 34	P 35	P 36	P 37	P 38	P 39	P 40	P 41	P 42	P 43	P 44	P 45
深さ(cm)	28	28	42	61	37	15	66	42	32	40	28	26	31	20	21	26

遺物 なし。

その他の観察 南壁に出入口が付設されている。出入口部の壁は外方に緩やかな立ち上がりを示すが、90cmほどの高さを有する。この出入口部と竪穴床面に焼土を含む盛り上がりが見られ、

炭化材はないが、焼失家屋であると判断される。北西隅は郭の崩壊によって消失し、南西隅がSI 003によって切られている。SI 009との新旧関係は定かでない。

### I・SI 009 壁穴遺構（付図3、図版13・14・15）

位 置 37J・K、38J・K グリッド。

平面形・規模 東西 425cm、南北 410cm の方形を呈する。面積16.6m<sup>2</sup>。

壁 東壁は遺構確認面では全く確認できなかったが、土層断面ではSI 010との間に土色の違いが見られた。西壁は郭の崩壊で確認できない。南壁は大部分が残っているが立ち上がりはそれほど急角度ではない。北壁では一部であるがしっかりとした状況がみられる。東壁12~20cm、南壁11~22cm、北壁22~38cmの高さである。

床 中西部に炉があり、炭化物、灰、焼土が確認できる。全体的に平坦である。地山が床面になっており堅い。

ピット P 46・50・52・55~58・64・65・67・69~72・76~78がSI 009の柱穴であるが、重複状況から、P 64よりもP 65が、P 84よりもP 85が、P 77よりもP 78がそれぞれ新しい。このことと柱穴の配列状況から2度の建て替えが知られる。

Pit No	P24	P25	P26	P46	P47	P48	P49	P50	P51	P52	P53	P54	P55	P56	P57
深さ(cm)	62	22	71	99	60	37	59	43	23	42	76	36	52	36	41
Pit No	P58	P59	P60	P61	P62	P64	P65	P66	P67	P68	P69	P70	P71	P72	P73
深さ(cm)	28	64	38	43	40	70	61	54	36	37	36	29	44	70	68
Pit No	P74	P75	P76	P77	P78	P79	P80	P81	P82	P83	P84	P85	P86		
深さ(cm)	15	18	63	57	82	72	47	67	10	31	90	19	27		

遺 物 なし。

その他の観察 SI 010と重複しており、本遺構の方が新しい。

### I・SI 010 壁穴遺構（付図3、図版13・14・15）

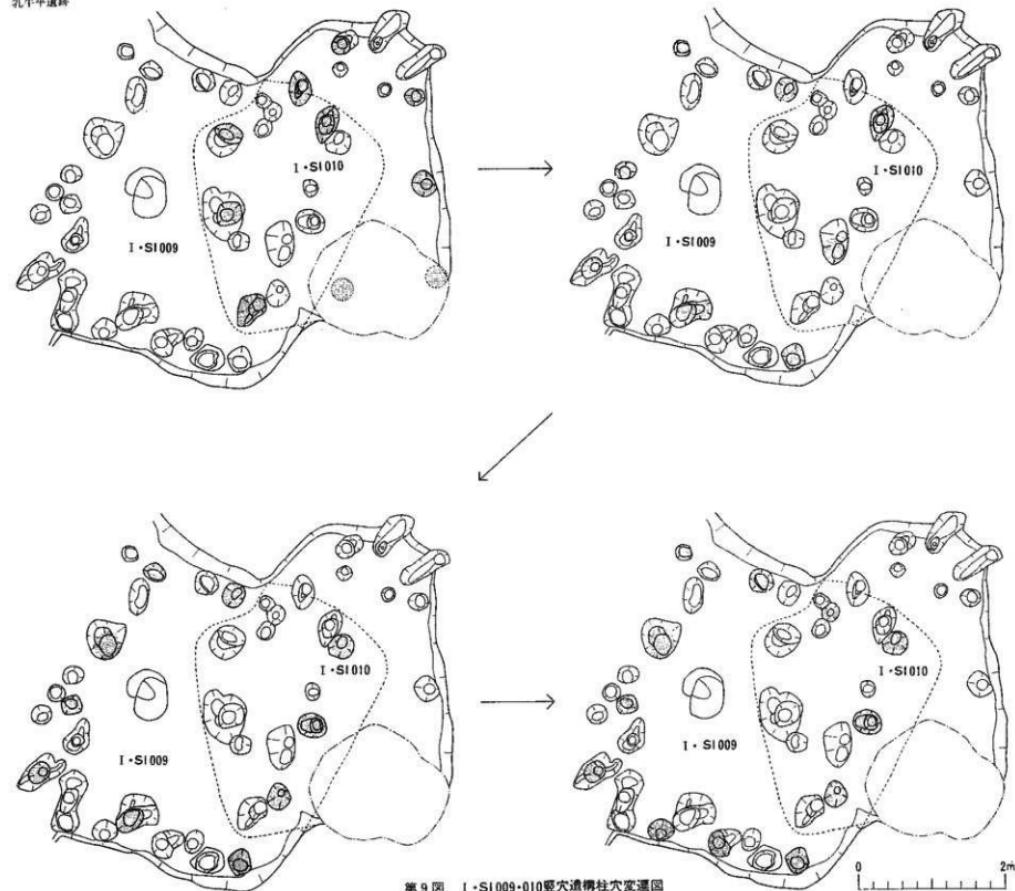
位 置 37・38J グリッド。

平面形・規模 東西 390cm、南北 330cm の方形を呈する。面積11.2m<sup>2</sup>。

壁 SI 009と木根の擾乱によって大部分が破壊されており、東壁と出入口部の壁しか残存しない。東壁は低く、外方に緩やかに傾斜している。

床 地山が床面になっており堅いが、全体的に若干の凹凸がみられる。

ピット P 59・64・71・84・94・95が柱穴であるが、南側の2個を欠く。P 63・88・91・92は出入口部の柱穴と思われるが定かでない。



第9図 I-SI009-010暨穴道構柱穴変遷図

Pit No	P 63	P 87	P 88	P 89	P 90	P 91	P 92	P 93	P 94	P 95	P 96
深さ(cm)	40	28	40	25	39	35	34	10	11	39	49

遺物なし。

その他の観察 北壁に出入口が構築されている。他の遺構の出入口部とは若干形態を異にし、壁は10cm前後を測る。SI 009と重複しており、SI 009より古い。

### ②焼土遺構 (第10・11図、図版20)

焼土遺構は8基確認された。他の遺構との重複ではなく、特定地点への集中も見られない。

第1表 I・SX(F)焼土遺構観察表

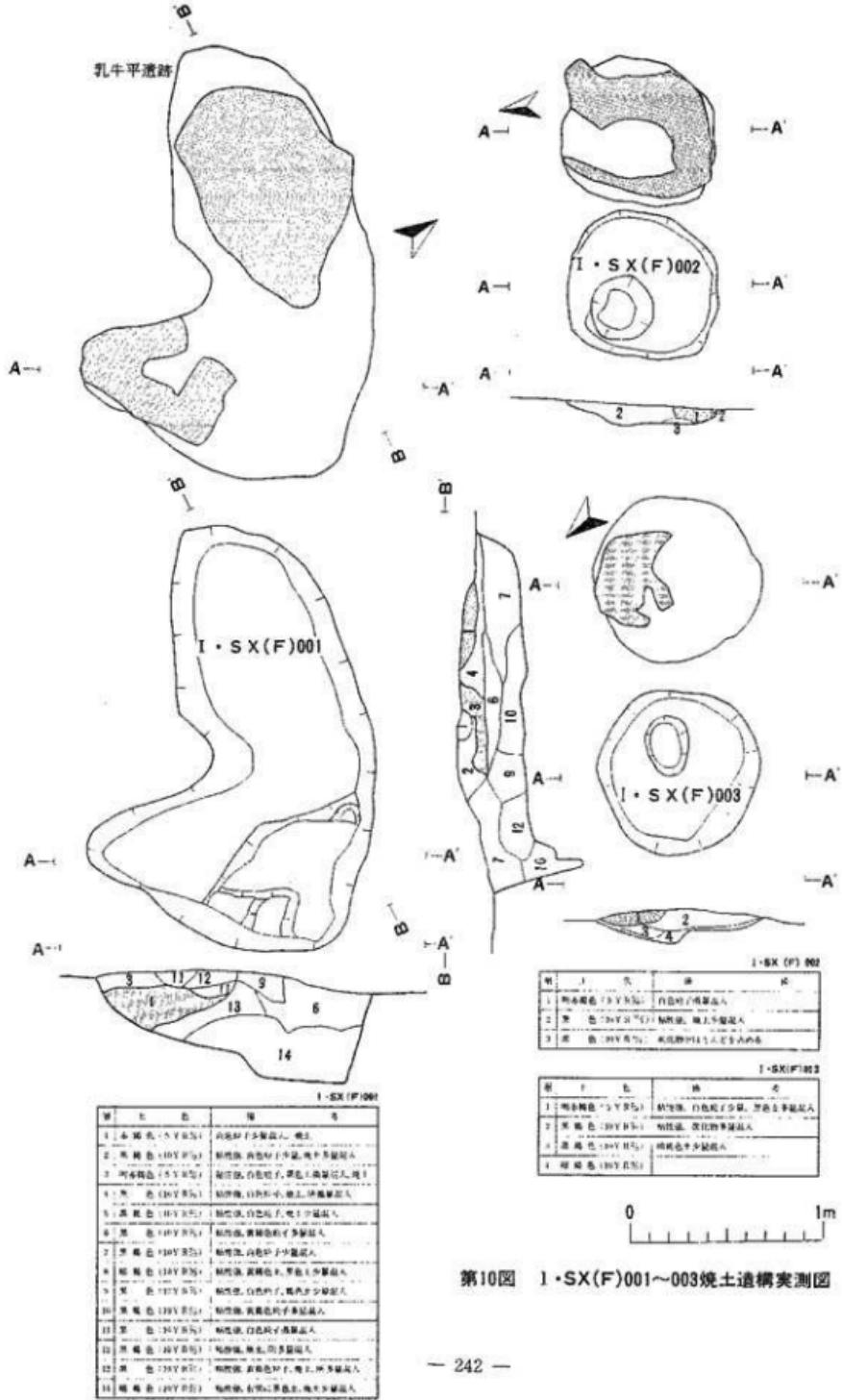
遺構番号	検出位置	法量			遺物
		長径	短径	深さ	
SX(F) 001	34-K, 34-L	226cm	157cm	19~50cm	なし
SX(F) 002	35-K	79cm	75cm	4~11cm	なし
SX(F) 003	33-L	85cm	84cm	8~17cm	なし
SX(F) 004	35-H, 35-I	191cm	129cm	9~13cm	なし
SX(F) 005	35-I	147cm	140cm	6~42cm	なし
SX(F) 006	35-II, 36-II 35-I, 36-I	79cm	54cm	5~9cm	なし
SX(F) 007	32-L, 32-M	127cm	88cm	2~12cm	なし
SX(F) 008	38-J, 39-J	49cm 22cm	41cm 18cm	3~6cm 7cm	なし

### ③Tピット (第15図、図版21)

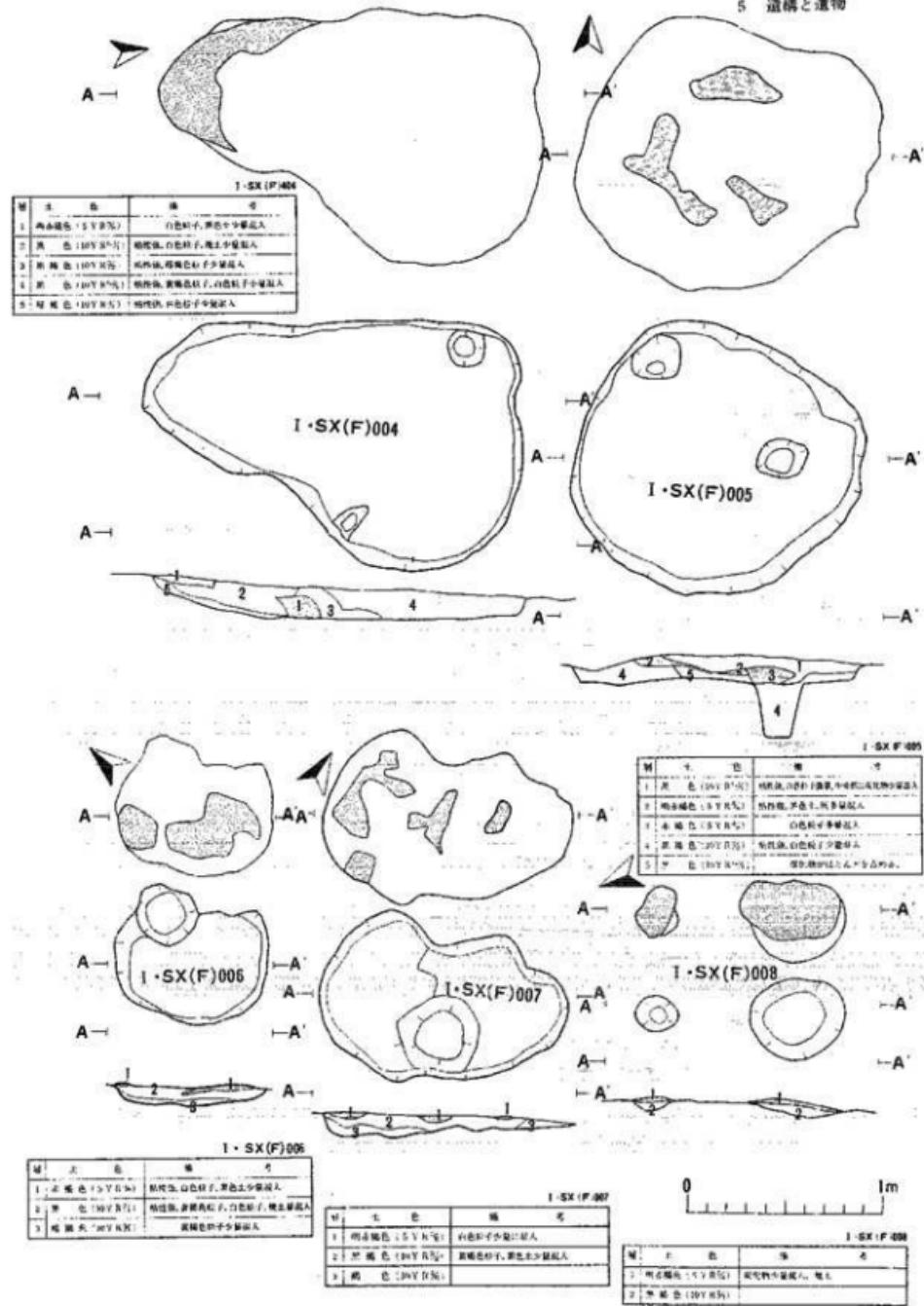
縄文時代のTピットが2基検出された。

第2表 I・SK(T)Tピット観察表

遺構番号	検出位置	法量			長軸方位	遺物
		長径	短径	深さ		
SK(T) 001	36-H, 36-I 37-I	463cm	69cm	90~107cm	N-54.5°-W	なし
SK(T) 002	36-K, 36-L	234cm	132cm	79~102cm	N-29.5°-E	なし

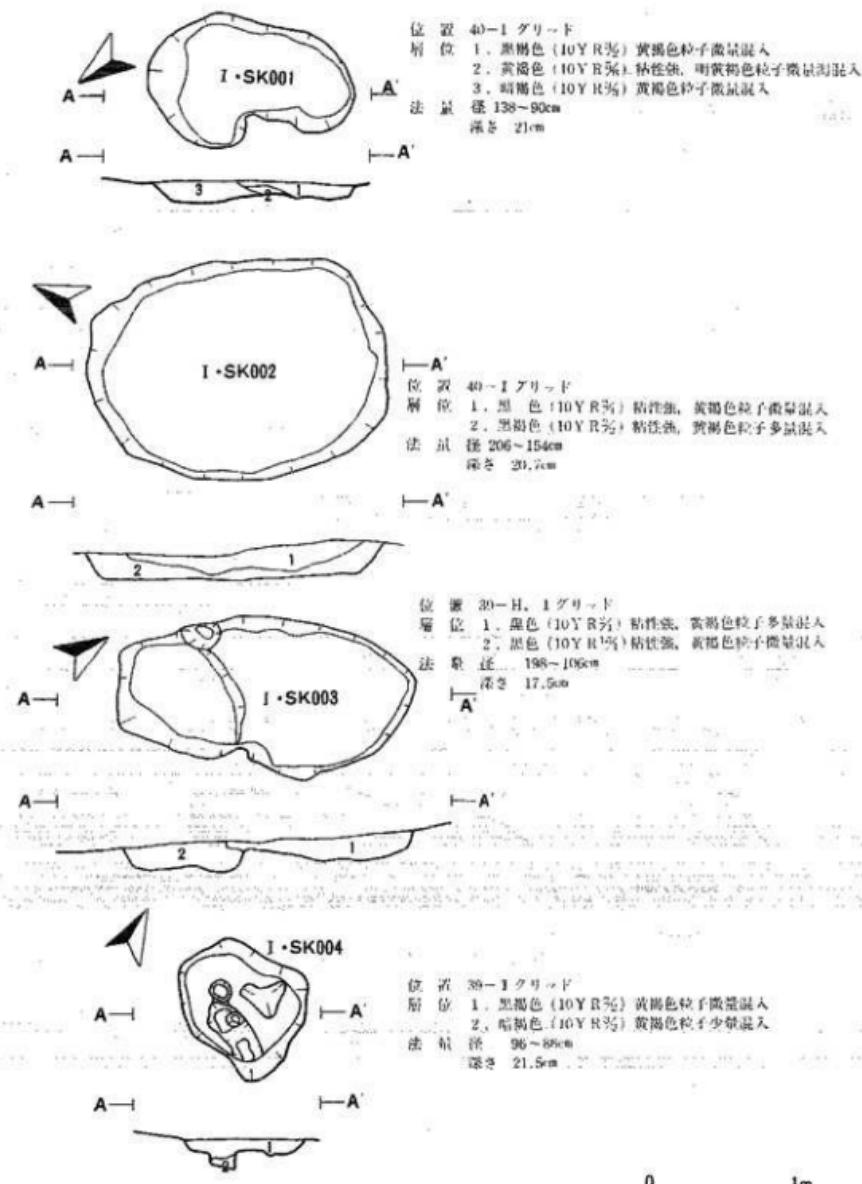


第10図 I-SX(F)001~003焼土造構実測図

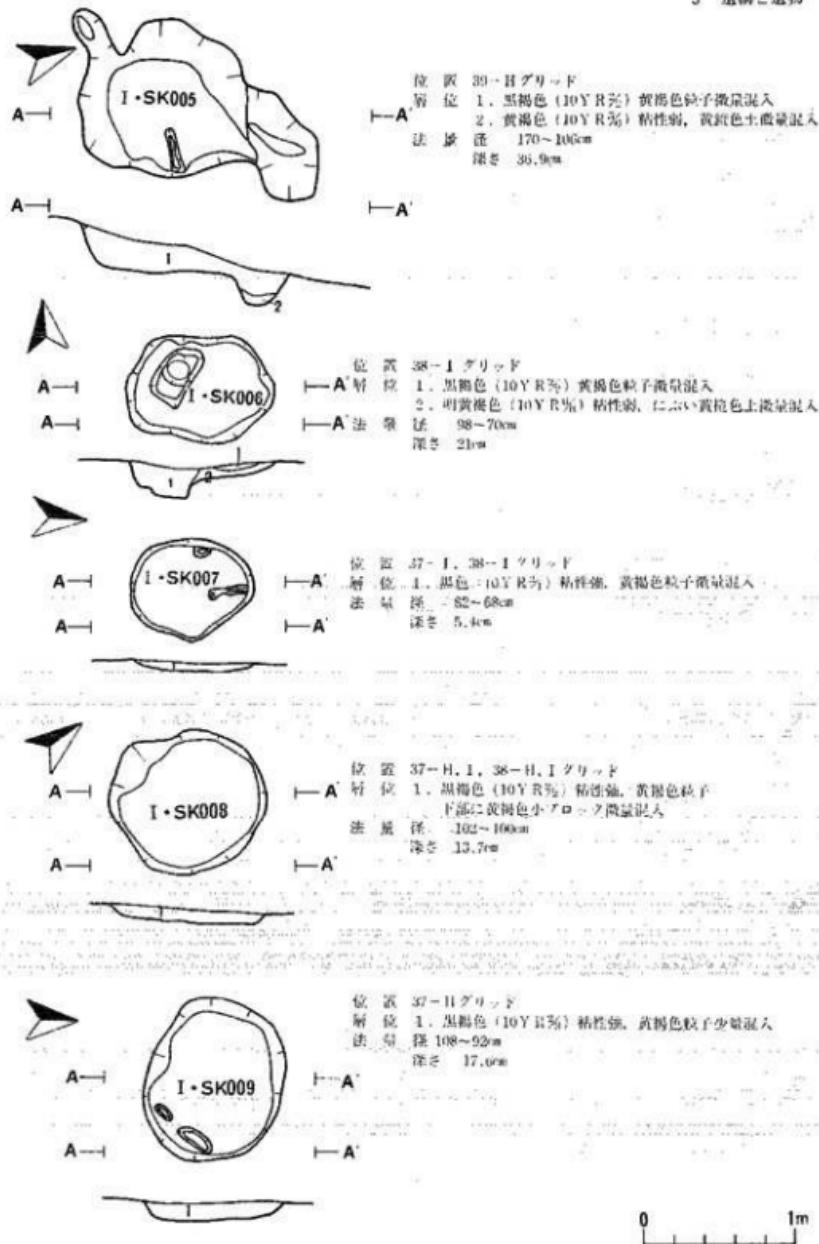


第11図 I-SX(F)004~008焼土造構実測図

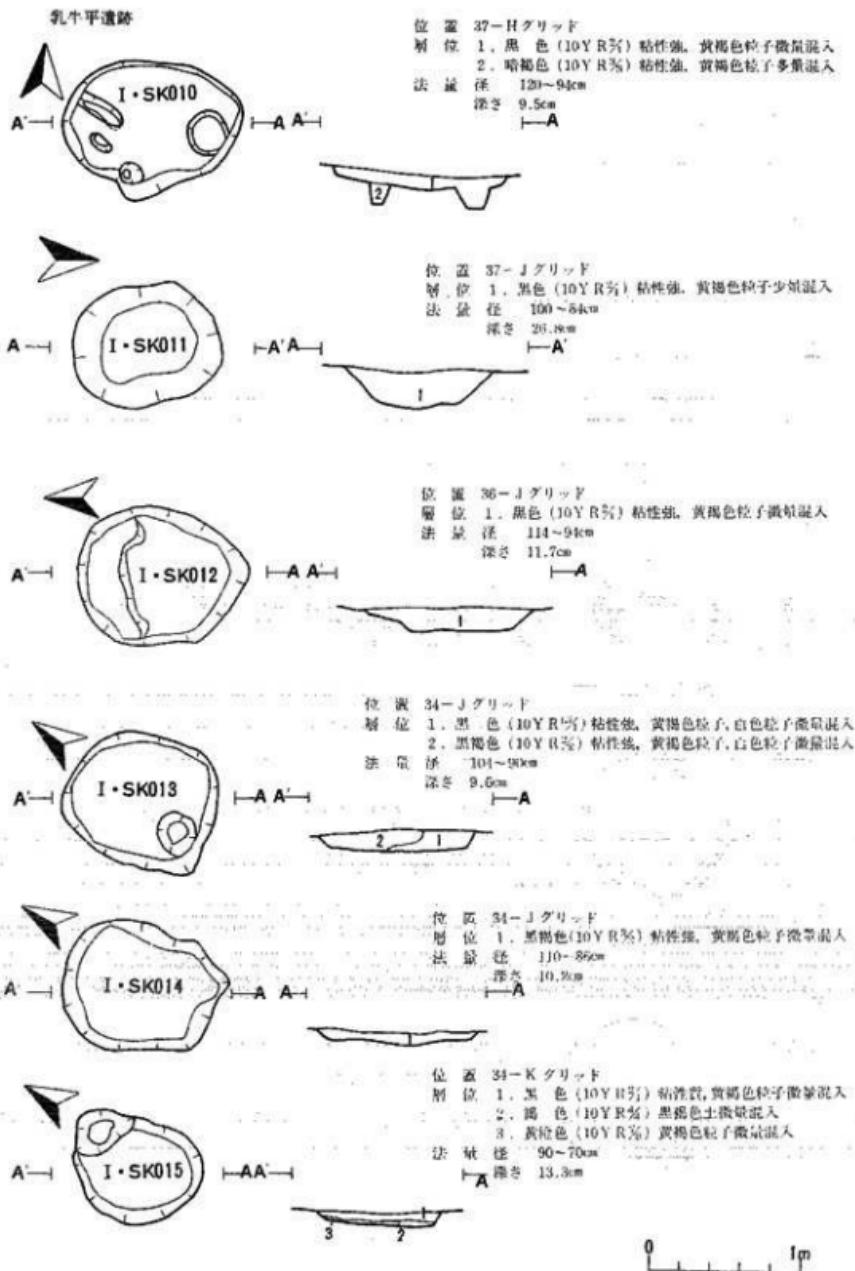
## ④土 塵 (12・13・14・17図、図版16・17・18・19・20)



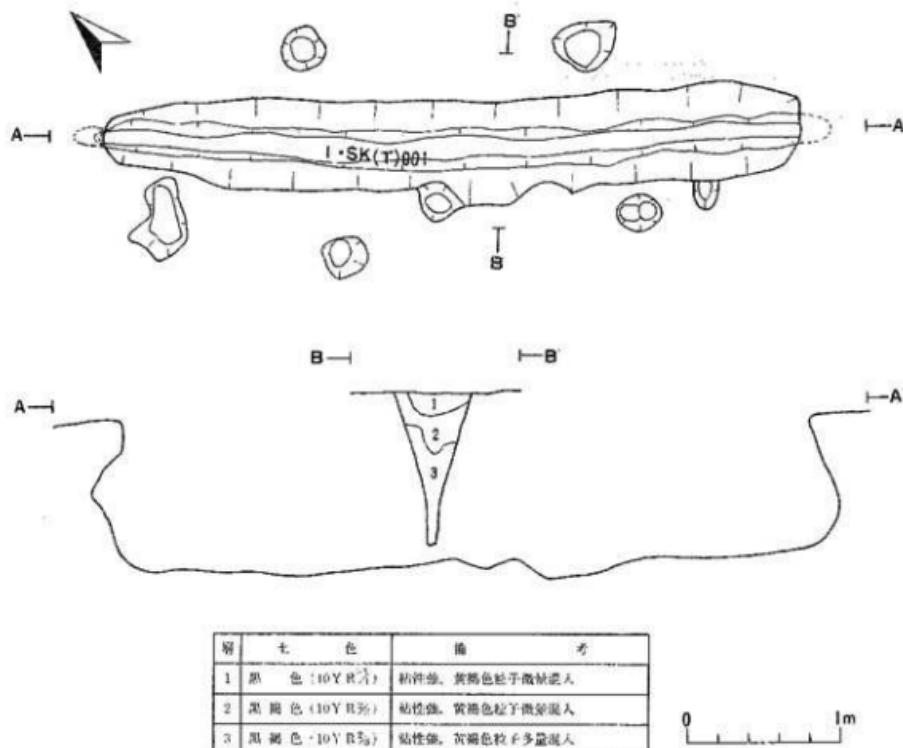
第12図 I SK001~004土壤実測図



第13図 I-SK005~009土壤実測図



第14図 I-SK010~015土壤実測図



第15図 I-SK(T)001 Tピット実測図

## (2) II郭検出遺構

## ① 竪穴遺構

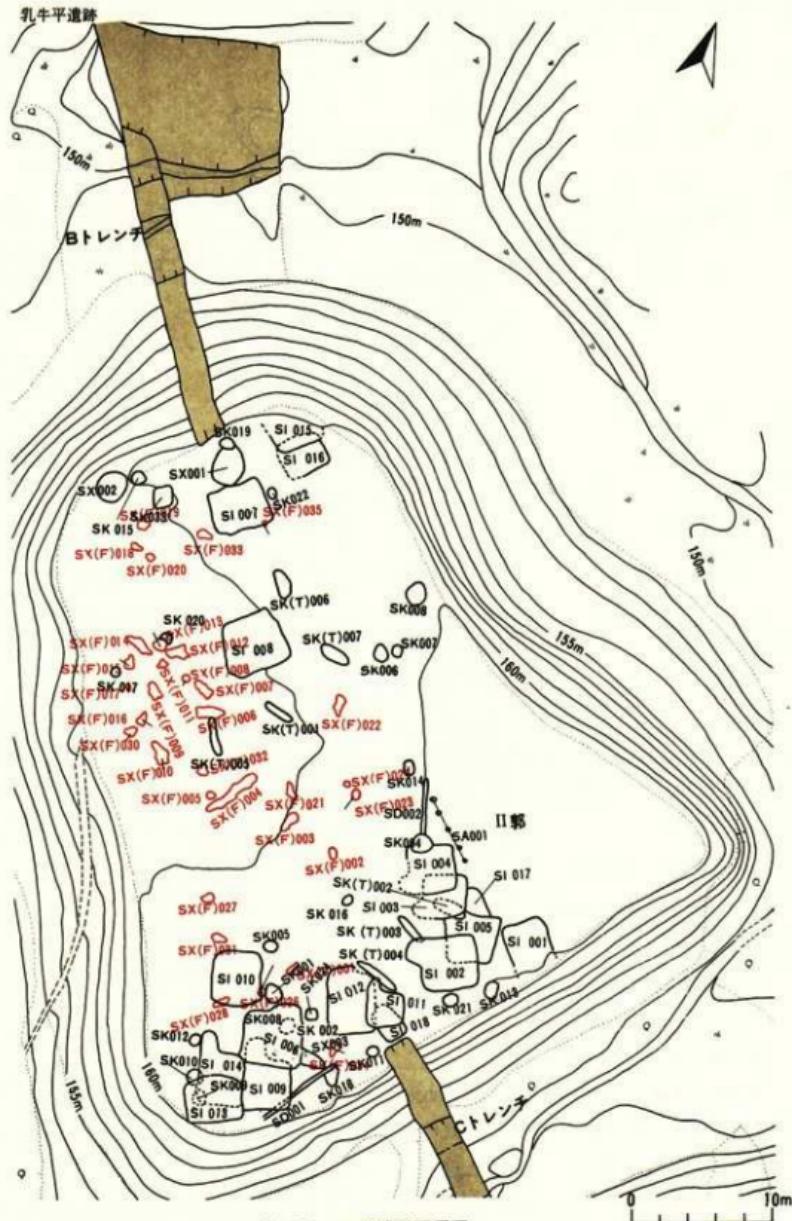
II-SI001 竪穴遺構 (第17・18図、図版24・25)

位置 18・19E グリッド

平面形・規模 東西推定 380cm、南北 300cmの長方形を呈する。

壁 東壁は郭の崩壊で消失しているが、他の壁は急角度で立ち上がり、しっかりとしている。西壁は12~20cm、南壁は3~16cm、北壁は18~27cmの高さである。

床 東側に向かってやや傾斜している。西側にSKJ23による凹みが見られるが、およそ



第16図 II・郭遺構配置図

平坦である。地山を床面としているが、それほど堅くない。

ピット	Pit No	P 1	P 2	P 3
	深さ(cm)	62	44	55

P 1 ~ 3 はこの遺構の柱穴であるが、北東隅の柱穴は消失している。

遺物なし。

その他の観察 西壁に住居床面を掘り凹めて焼土・炭化物を含む盛り上がりが見られ、付近の床に  $40 \times 42\text{cm}$  の範囲で焼面がある。袖・煙道部・煙出はなく、カマドとは断定し難い。遺構確認面から SK 023 が掘り込まれている。

#### II・SI 002 竪穴遺構（付図4、図版24・25）

位置 18F・Gグリッド

平面形・規模 東西  $320\text{cm}$ 、南北  $220\text{cm}$  の正方形を呈する。面積  $16.7\text{m}^2$ 。

壁 四壁とも緩やかな立ち上がりであるが、しっかりしている。

床 全体的に平坦で傾斜もみられない。地山を床面としているが、それほど堅くない。

ピット P 1・2・5・7・9・10・15・29・32・36・37・40は柱穴で一様に深い。P 21・28 は出入口部の柱穴である。

遺物なし。

その他の観察 西壁に出入り口が付設されている。SI 1005 と重複しており、SI 605 より新しく、床面も低い。

#### II・SI 003 竪穴遺構（付図4、図版25）

位置 19F・Gグリッド

平面形・規模 東西  $315\text{cm}$ 、南北  $325\text{cm}$  の方形を呈する。面積推定  $12.2\text{m}^2$ 。

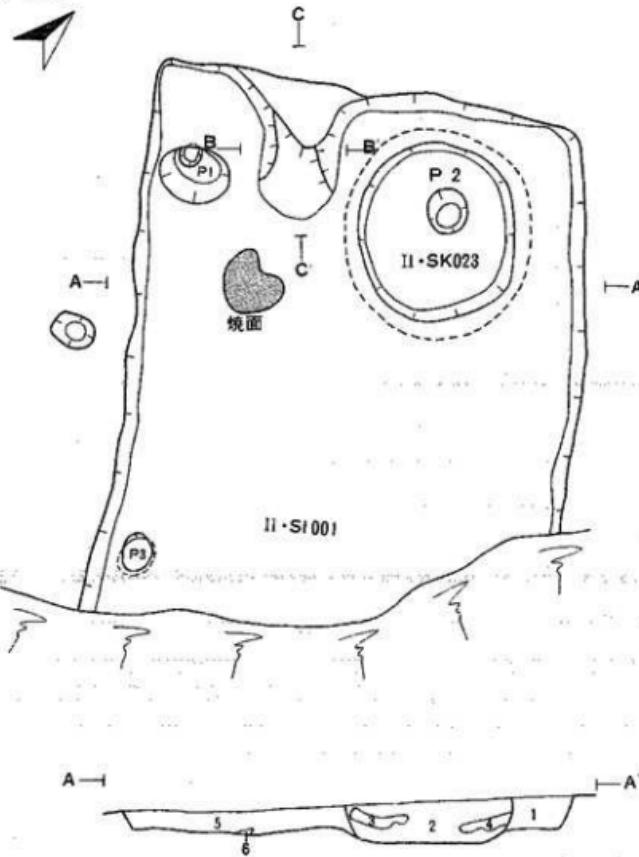
壁 東壁は急角度で立ち上がり、しっかりした状況で確認できるが、西壁と北壁は大部分 SI 004 に切られて確認できない。南壁は一部確認できるが緩やかな立ち上がりで、西に向かって漸次低くなり消失している。東壁  $17 \sim 32\text{cm}$ 、南壁  $4 \sim 14\text{cm}$ 、北壁  $23\text{cm}$  の高さである。

床 中央南寄り床面下に SK (T) 002 があり、この埋土上に粘質土で貼床を施している。同じ粘質土で出入口部にも小範囲の貼床が見られる。他は地山をそのまま床面としており堅い。

ピット P 63・65・66・67・73・120・125は柱穴と思われる。北壁は切られているためか、中間の柱穴が確認できない。P 75・82は出入口部柱穴である。

その他の観察 柱穴配置と貼床の状況から、出入口部は西側に付設されていることがわかる。

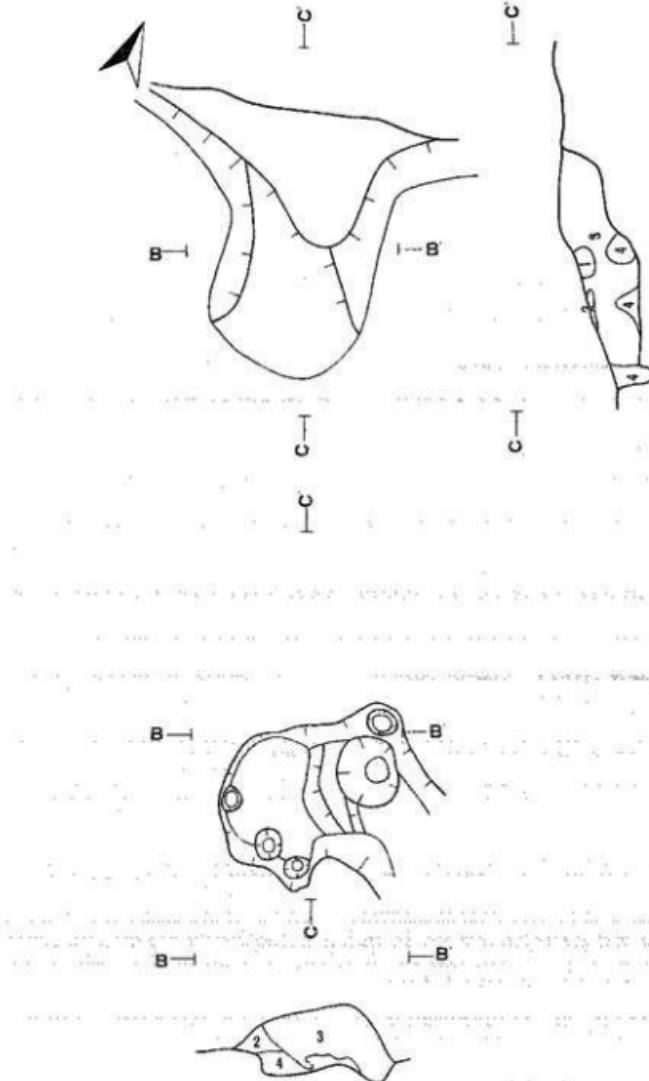
SK (T) 002、SI 004、SI 017 と重複しているが、SI 004 より古く、SK (T) 002、



層	土 色	標 號
1	明 澄 色 (10Y R 5/6)	粘性質、黄褐色小ブロック微量混入
2	暗 澄 色 (10Y R 5/6)	黄褐色小ブロック微量混入
3	暗 黄 色 (10Y R 5/6)	粘性質、粘土質
4	明 黄 澄 色 (10Y R 5/6)	白色粒子少量混入
5	褐 色 (10Y R 5/6)	粘浮質、黄褐色小ブロック少量混入
6	黑 色 (10Y R 5/6)	



第17図 II-SI001 穫穴造構・SK023土壤実測図



層 七 色	一 般 方 向
1 黒 色 (10Y R 5)	粘性強、炭酸物がほとんどを含める。
2 咬 離 色 (10Y R 5)	灰褐色粒子少量混入
3 咬 離 色 (10Y R 5)	灰土、炭化物少量混入
4 黄 褐 色 (10Y R 5)	

0 50cm

第18図 II・SI-1001竪穴造構カマド実測図

S I 017 より新しい。

## II・S I 004 積穴造構(付図4、図版25・26)

位置 19F・G、20F・Gグリッド

平面形・規模 東西 335cm、南北 370cmの方形を呈する。面積13.2m<sup>2</sup>。

**壁** 西壁は消失して確認できず、北西コーナーも S I 004 によって切られている。他の三壁はほぼ急角度で立ち上がりしっかりしている。東壁と南壁の一部で S I 003 と重複している部分は埋土が明瞭に区別できず、確認段階で壁線をとらえることができなかった。東壁4~33cm、南壁11~13cm、北壁15~29cmの高さである。

**床** 傾斜はほとんどみられず、おおよそ平坦である。地山を床面としているが、それほど堅くない。

**ピット** P 96・114・116・117・121・123・128は柱穴、P 83・90は出入口部の柱穴と思われる。

**その他の観察** 壁は存在しないが、柱穴の状況から判断すると西壁に出口の付設が見られる。

西側に深さ3~7cm、幅20~30cmの溝がある。S I 003 より新しく、S K 004 より古い。

**遺物** なし。

## II・S I 005 積穴造構(付図4、図版25・26)

位置 18E・F、19E・Fグリッド

平面形・規模 東西 350cm、南北 340cmの正方形を呈する。面積推定11.5m<sup>2</sup>。

**壁** 東壁は全体が確認できるが、西壁は S I 002・003、南壁は S I 002、北壁は S I 003 によってそれぞれ切られ、一部が消失している。残存している壁は全体的に急角度で立ち上がり、しっかりしており、東壁に向かって漸次高くなっている。東壁は11~35cm、北壁は19~26cmの高さである。

**床** 南西コーナーから中央部にかけて S I 002 の掘り込みを受けている。若干の凹凸がみられる。地山を床面としているが、それほど堅くはない。

**ピット** P 34・42・46・49~51、64は柱穴と思われる。

Pit No	P 33	P 34	P 35	P 36	P 37	P 38	P 39	P 40	P 42	P 43
深さ(cm)	48	10	16	70	43	13	62	48	38	36
Pit No	P 44	P 45	P 46	P 47	P 48	P 49	P 50	P 51	P 64	
深さ(cm)	16	66	65	35	37	62	50	42	70	

**遺物** なし。

**その他の観察** S I 002、003 と重複しており両造構より古い。

## II・S I 006 穫穴造構（付図5 図版27・28）

位置 17H・I グリッド

平面形・規模 東西 400cm、南北 400cmの方形を呈する。面積17.6m<sup>2</sup>。

壁 四壁とも全体が確認できる。西壁北側の立ち上がりがやや緩かで、他はそれほど高くなないが急角度で立ち上がり、しっかりしている。

床 中央に向かって若干傾斜がみられるが、おおよそ平坦である。地山を床面にしているがやわらかい。中央南寄りに木造構より古いS K 002があり、この上と南西隅のS I 009 出入口の上に貼床が施されている。

ピット P 2・6・11・14・20・27・29・37・39・47は柱穴である。P 17・44は棟柱とする時期があったことも考えられるが、前後関係ははっきりしない。P 1・46は出入口部柱穴であろう。

遺物 なし。

その他の観察 北壁に出入り口が付設されている。南東コーナーの突出（S X 005）は本造構より古い。S K 002、S I 009と重複しているが本造構が新しい。

## II・S I 007 穫穴造構（第19図、図版27）

位置 24・25グリッド

平面形・規模 東西 330cm、南北 320cmの方形を呈す。面積10.4m<sup>2</sup>。

壁 東・北壁は高く、ほぼ垂直に立ち上がってしっかりしている。西、南壁は低く南西コーナーに向って漸次低くなる。東壁13~30cm、西壁3~16cm、南壁3~24cm、北壁22~34cmの高さである。

床 北面隅に向っていくぶん傾斜している。中央付近に炉（45×36cm）が構築されている。

地山を床面としており堅い。

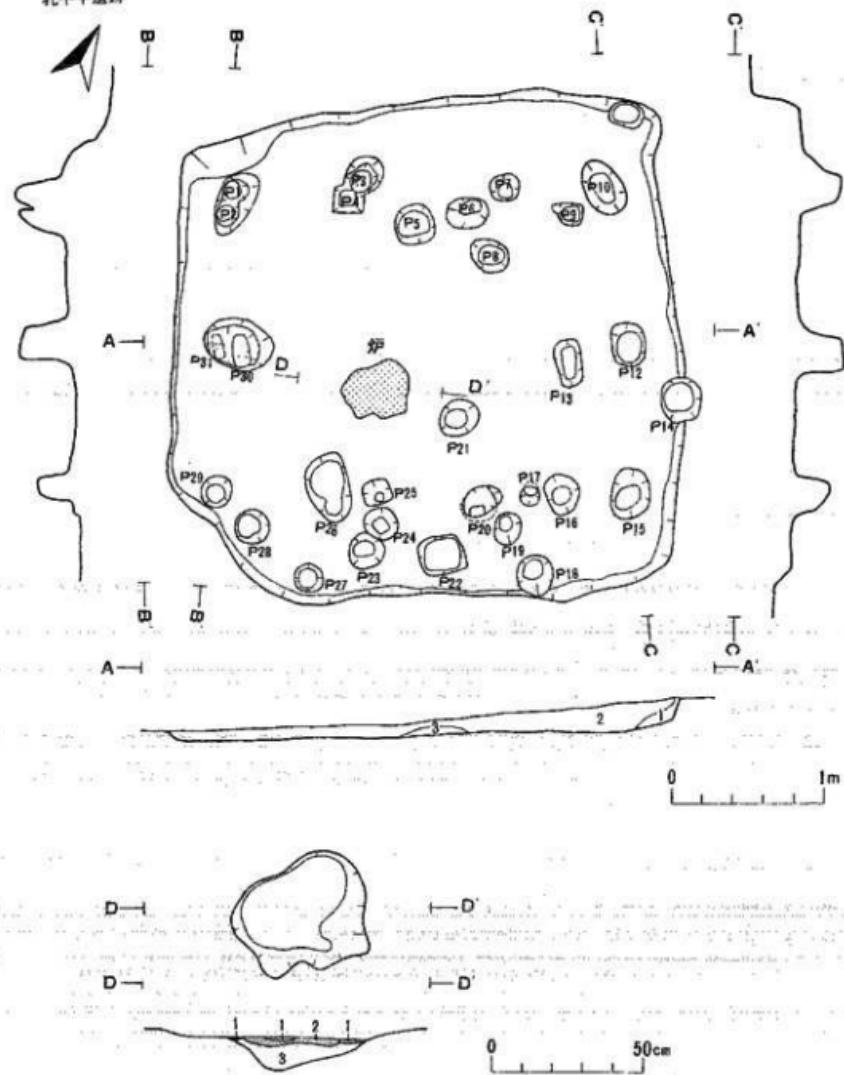
ピット P 1・4・7・10・12・15・20・26・29・30は柱穴

Pit No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12	P 13	P 14	P 15	P 16
深さ(m)	33	30	23	30	18	28	23	22	23	30	11	24	33	40	30	35
Pit No	P17	P18	P19	P20	P21	P22	P23	P24	P25	P26	P27	P28	P29	P30	P31	
深さ(m)	16	24	30	30	44	9	6	25	23	20	13	22	22	38	37	

遺物 なし。

## II・S I 008 穫穴造構（第20図、図版28）

位置 22I・J, 23I・J グリッド

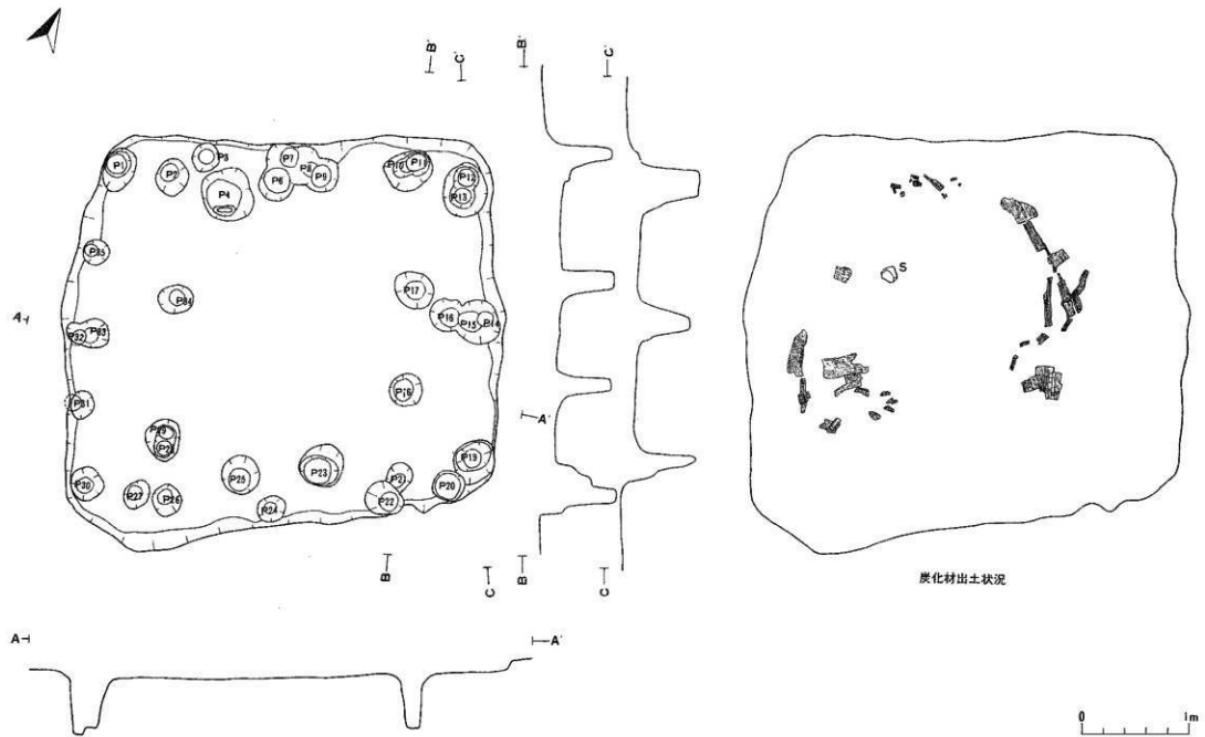


II・SI 007

層	土色	備考
1	褐色 (10Y R 5/6)	やわらかい
2	黒色 (5Y R 1/6)	今わらかい
3	黒色 (5Y R 1/6) 小明黄褐色 (10Y R 7/6)	

層	土色	備考
1	明褐色 (7.5Y R 6/6)	灰を少量含んだ焼土
2	褐色 (10Y R 5/6)	粘性弱、炭化物を少量含んだ灰
3	に上い黄褐色 (10Y R 7/6)	粘性弱、板状、灰少量混入、もろい

第19図 II・SI 007堅穴遺構実測図



第20圖 II-S1008整穴造構實測圖

平面形・規模 東西 420cm、南北 400cm の方形を呈す。面積 14.9m<sup>2</sup>。

壁 東、南壁が比較的高く急角度で立ち上がっているが西、北壁は低い。

床 西壁に向かって若干傾斜しているが、おおよそ平坦である。地山が西側に急傾斜しており、中央から東側は地山を床面としているが、西側は黒褐色土を固めた床面になっている。

ピット	Pit No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
深さ(m)	67	63	44	16	26	65	48	49	63	44	53	55	
Pit No	P13	P14	P15	P16	P17	P18	P19	P20	P21	P22	P23	P24	
深さ(m)	52	50	28	21	55	52	70	22	38	73	54	61	
Pit No	P25	P26	P27	P28	P29	P30	P31	P32	P33	P34	P35		
深さ(m)	74	31	32	50	49	58	62	56	48	59	50		

2 度の建替えに伴なう各々の柱穴は以下の通りである。A、P 2・9・12・13・15・19・23・28・29・34 B、P 1・6・10・17・18・21・25・30・33 C、P 1・3・8・11・17・18・22・24・26・30・31・32・35

#### 遺物 破片

その他の観察 多量の焼土と炭化材がみられることから焼失家屋と思われる。P 6-9 の切り合を見ると P 8 は P 6-9 よりも新しく、柱穴の配置から、2 度の建替えが行なわれている。焼失遺材は、最も新しい時期の住居に伴なうものである。

#### II・S I 009 積穴遺構 (第21図、付図5、図版28・31)

##### 位置 16H・I, I グリッド

平面形・規模 東西 340cm、南北 350cm の方形を呈する。面積 12.4m<sup>2</sup>。

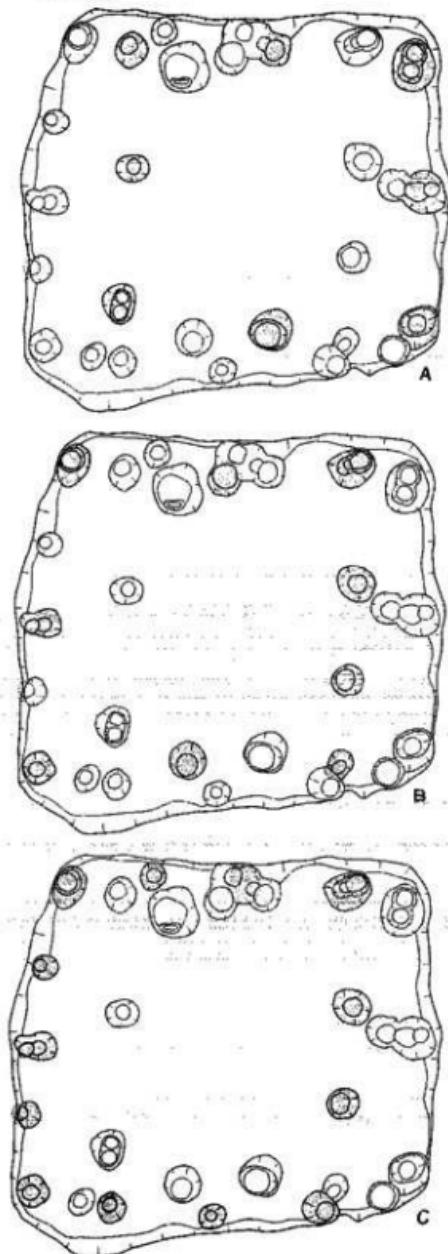
壁 西壁は S I 013 と接しているためかやや低い。他は立ち上りの角度も急で高く、しっかりしている。東壁 19~35cm、西壁 8~16cm、南壁 4~15cm、北壁 9~22cm の高さである。

床 南壁に向かって若干傾斜しており、おおよそ平坦である。S I 006 より床面レベルが低く重複部分の床面はそのまま残存している。地山を床面としているがやわらかい。

ピット P 26・65・66・68-72 が柱穴であり一様に深い。P 21・22・28 は出入口部柱穴であろう。

#### 遺物 なし。

その他の観察 北側に出入り部が付設されている。西側では S I 013・014 とほぼ接しているが、S I 013 が S I 009 よりも新しい S D 001 を切っているとすると、S I 013 の方が本遺構よりも新しいことになる。S I 014 との新旧関係は不明である。



第21図 II・SI 009 竪穴遺構柱穴変遷図

## II・SI 010 竪穴遺構

(第22図、図版28)

位置 17・18J グリッド

平面形・規模 東西320 cm、南北360 cmの方形を呈する。面積11.3m<sup>2</sup>。

壁 東壁の立ち上がりは緩やかだが、他の壁は急角度で立ち上がり、しっかりしている。

床 若干の凹凸があるが、傾斜はほとんどみられない。地山を床面としており堅い。

ピット P1・3・7・11・15・17・18・23は柱穴と思われる。

Pit No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6
深さ(cm)	43	14	51	16	17	29
Pit No.	P7	P8	P9	P10	P11	P12
深さ(cm)	53	22	31	38	53	23
Pit No.	P13	P14	P15	P16	P17	P18
深さ(cm)	12	21	57	43	39	34
Pit No.	P19	P20	P21	P22	P23	P24
深さ(cm)	26	56	15	17	64	23
Pit No.	P25	P26	P27	P28	P29	P30
深さ(cm)	14	15	29	46	48	21
Pit No.	P31	P32	P33	P34	P35	
深さ(cm)	27	15	15	32	40	

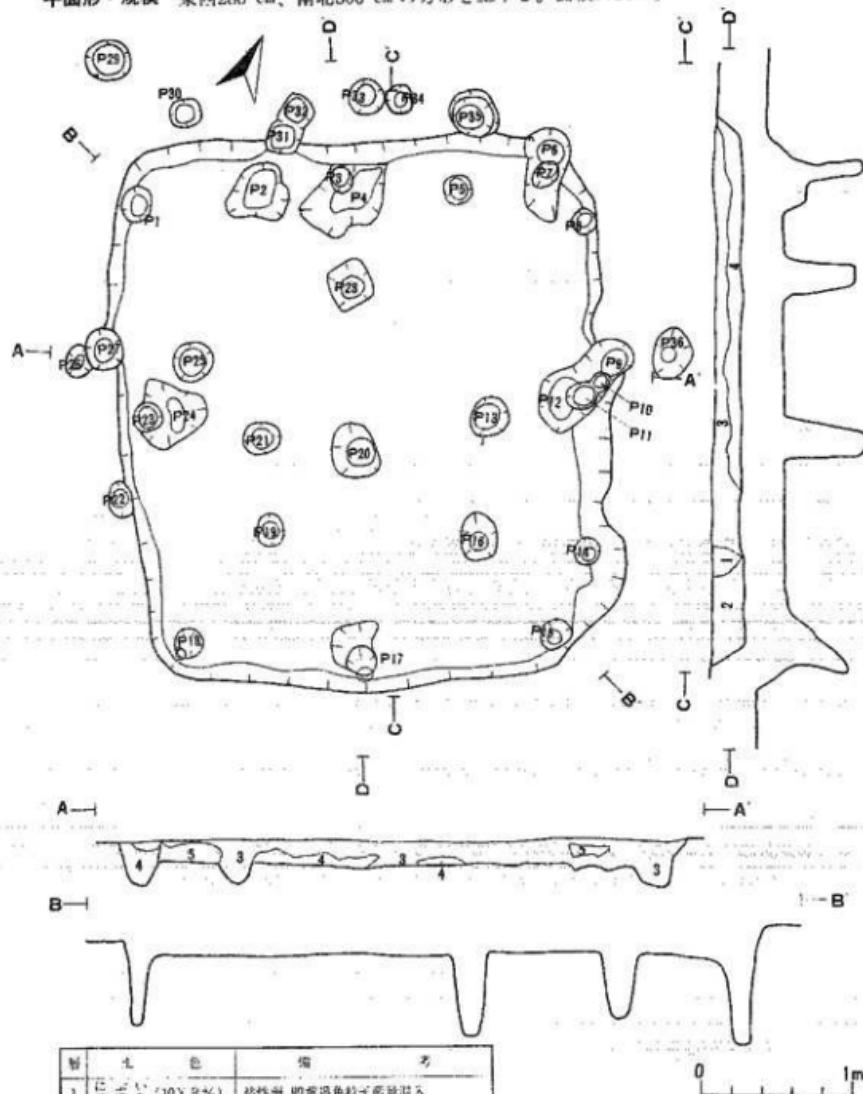
遺物なし。

備考 SX(f) 028 と重複するが、SX(f) 028 より古い。遺構内外に時期の異なるピットが多い。

## II・SI 011 竪穴遺構

(第23図、図版29)

位置 17・18G グリッド

平面形・規模 東西280 cm、南北300 cm の方形を呈する。面積9.24m<sup>2</sup>。

第22図 II・SI010 竪穴造構実測図

**壁** 南壁は S I 008 によって切られ消失しているが、他の壁はほぼ垂直に立ち上がっており、高いしっかりとした作りで残存している。

**床** 部分的に地山の軽石が突き出したり凹凸も若干みられるが、傾斜はほとんど見られない。地山を床面としているが、それほど堅くない。S I 018 による床面の擾乱は見られない。

**ピット** P 7・15・23は柱穴の一部であろうが、東側及び南側では検出されなかった。P 2・25は出入口部の柱穴であろう。

**遺物** なし。

**その他の観察** 北壁に出入り口が付設されており、この部分のみに灰の堆積が見られた。S I 012・S I 018・SK (T) 004 と重複しているが、S I 012・SK (T) 004 より新しく、S I 018 よりは古い。

#### II・S I 012 積穴遺構（第23図、図版29）

**位置** 17G・H, 18G・Hグリッド

**平面形・規模** 東西310 cm、南北410 cmの長方形を呈する、面積推定13.79 m<sup>2</sup>。

**壁** 南壁と西壁が残存しており、ほぼ垂直に立ち上がっている。東壁は S I 011 に切られて残存しない。南壁8~26cm、西壁10~22cmの高さである。

**床** 北壁に向って若干傾斜がみられるがおおよそ平坦である。東側が S I 011 によって掘り込まれ、床面は消失している。地山を床面としているがそれほど堅くない。中央部に広範囲に灰の分布が見られた。

**ピット** 後世のピットも多く、S I 011 との切り合いもあって柱穴を決定し難いが、P 15・17・22・24・34・45・47・49・51・55・57がこの遺構の柱穴、P 26・28は出入口部の柱穴と判断される。

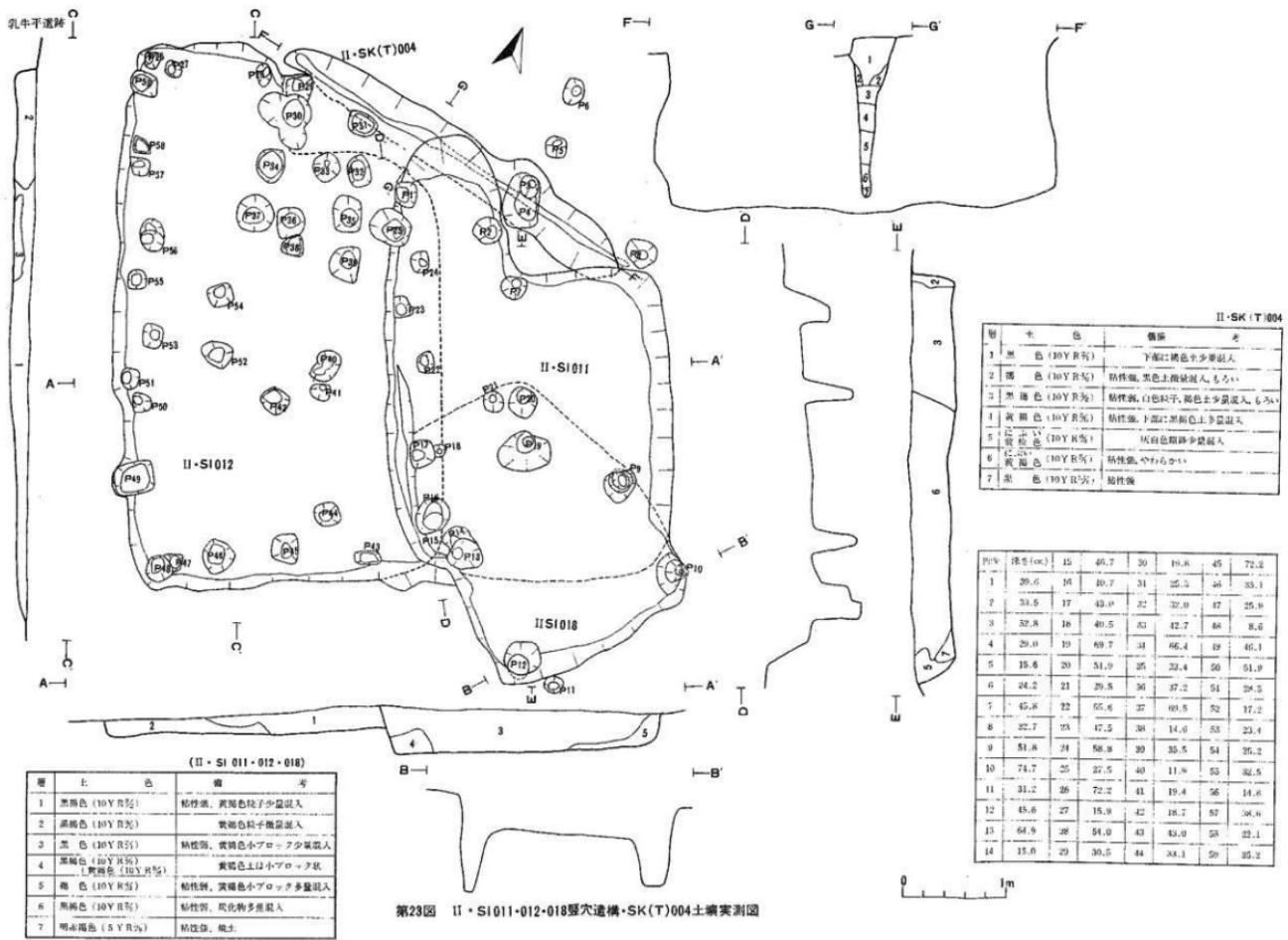
**遺物** なし。

**その他の観察** 北壁がはっきりしないが、P 34・P 57を結ぶあたりから北へ次第に床面が浅くなり、これによって出入口部を推定し得る。S I 011・SK (T) 004 と重複しているが、S I 011 より古く、SK (T) 004 よりは新しい。

#### II・S I 013 積穴遺構（第24図、付図5、図版30・31）

**位置** 16I・Jグリッド

**平面形・規模** 東西390 cm、南北300 cmの長方形を呈する。面積11.6m<sup>2</sup>。



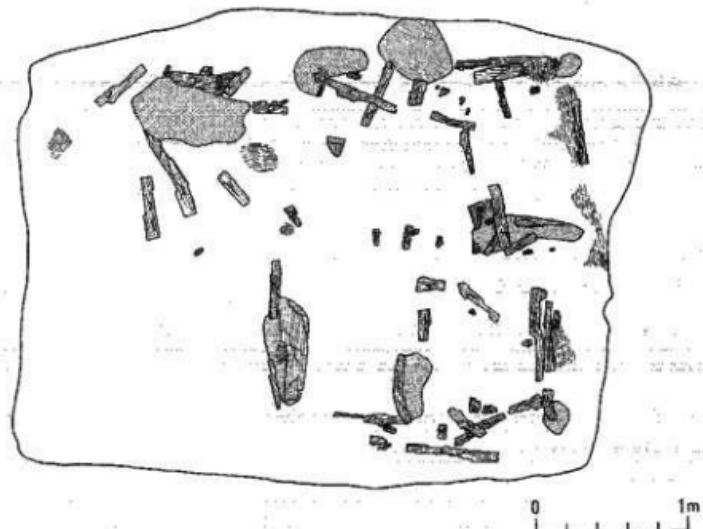
**壁** 南東コーナーは郭の崩壊で消失しており、東壁も一部 S I 009 によって擾乱されているが全体的にしっかりしている。とくに北壁は垂直に立ち上がり高い。南壁に向って漸次低くなる。東壁 9~30cm、西壁 11~25cm、南壁 9~18cm、北壁 25~37cm の高さである。

**床** おおよそ平坦で傾斜もみられない。地山を床面としているが、非常にやわらかい。

**ピット** P75・76・78・79・81・83・84・90・91・93・95・96はこの遺構の柱穴と思われる。

**遺物** なし。

**その他の観察** 焼土・炭化材・カヤ状炭化物が密集していることから焼失家屋である。遺材の状況から屋根材の崩落を思わせる。S I 009・014 と重複しているが本遺構が新しい。また、S K009 は S I 013 の覆土上面より約10cmほど上に底面をもつ遺構で、地山上の黒色土を掘り込んだ新しい遺構である。S K010 も同様だが地山が高くなっているのでわずかに地山を掘り込んでいる。



第24図 II-SI 013竪穴遺構焼土・炭化材出土状況

II・S I 014 穫穴遺構（付図5、図版31）

位 置 16I・J, 17I・J グリッド

平面形・規模 東西300 cm、南北350cm の方形を呈する。面積12.6m<sup>2</sup>。

壁 東、西壁の半分と南壁がS I 013 に切られて消失している。他は良好に残存しており、垂直に立ち上がって高い。

床 南に向かって若干傾斜が見られるが、おおよそ平坦である。地山を床面としているが、非常にやわらかい。

ピット P77・85・86・91・94・98は柱穴である。P99・100・101・103・104 は出入口部柱穴である。

遺 物 なし。

その他の観察 北壁に出入口部が付設されている。出入口部床面は次第に浅くなり、消失して壁をなさない。SK013・SK010 よりも古い。

II・S I 015 穫穴遺構（第25図、図版32）

位 置 25H・I グリッド

平面形・規模 郭の崩壊により北側が消失しているので全体の規模は不明であるが、方形を呈するものと考えられる。

壁 東・南壁の一部が残存し、26cmの高さには垂直な立ち上がりを示している。

床 郭縁辺部に向かって傾斜しているが、おおよそ平坦である。地山を床面としているが非常に軟らかい。

ピット P 1～5 は柱穴である。

遺 物 なし。

その他の観察 S I 016 と重複しており、本遺構の方が新しい。

II・S I 016 穫穴遺構（第25図、図版32）

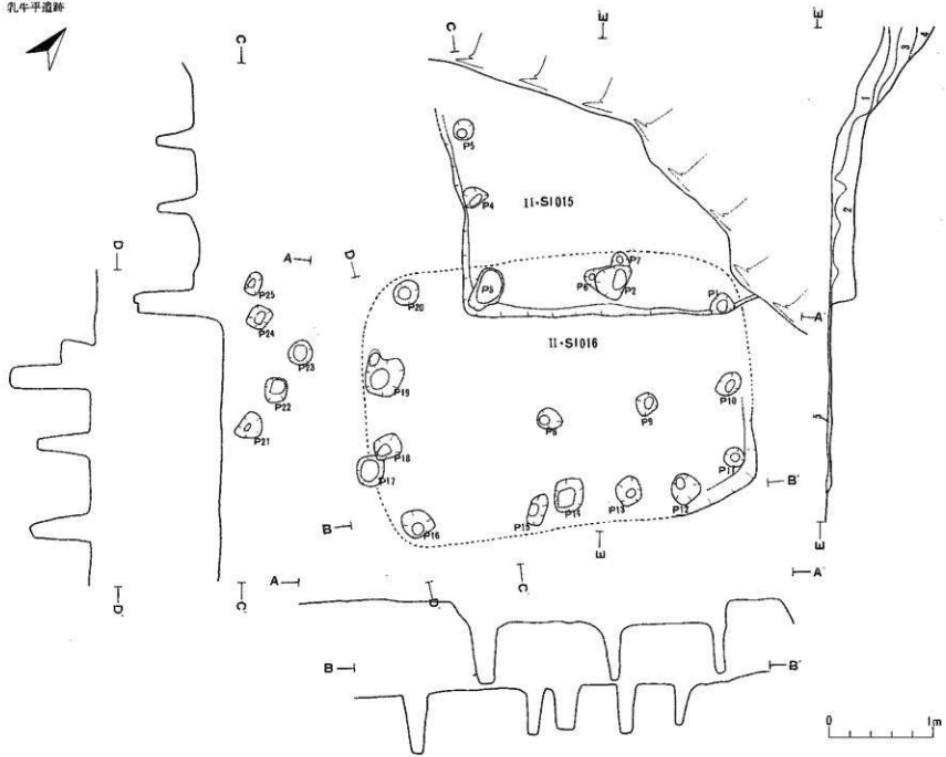
位 置 25H グリッド

平面形・規模 壁がほとんどないが、ピットの状態から東西260 cm、南北370 cmに堆定される。面積推定9.14m<sup>2</sup>。

壁 北東部にわずかに緩やかな立ち上りを確認できるのみで、他は消失している。

床 平坦で、傾斜は見られない。西側はS I 015 によって掘り込まれて消失している。地山を床面としており堅い。

ピット P10・11・13・15・16・18・19が柱穴と思われる。西側はS I 015 の掘り込みによっ



序	土 色	圖 号
1	灰黃褐色 (10Y R 8%)	高褐色較平頭器人
2	黃 色 (10Y R 5%)	もろい
3	灰黃褐色 (10Y R 5%)	軽性強、もろい
4	黃 色 (10Y R 5%)	軽性強
5	灰 黃 色 (10Y R 5%)	軽性強、白色粒子、黃褐色小プロック多量器人

第25図 II-SI015・016整穴造構実測図

てP 6が痕跡的に残存するのみである。

### 遺物なし

その他の観察 S I 015 によって切られている。

### II・S I 017 穴造構（付図4、図版25）

#### 位置 19F グリッド

平面形・規模 S I 003 と 005 に切られており不明だが、おそらく方形を呈するものと思われる。

壁 東壁は北東コーナーでわずかに急角度な立ち上がりが確認されるが、しだいに低くなり消失している。西壁7~8cm、北壁0~8cm。

床 北壁に向って若干傾斜がみられるが、おおよそ平坦である。

ピット P 69~72は本遺構の柱穴であると思われる。

Pit No.	P 68	P 69	P 70	P 71	P 72
深さ(cm)	35	41	31	38	23

### 遺物なし

その他の観察 S I 003・005 に切られている。

### II・S I 018 穴造構（第26図、図版29）

#### 位置 17グリッド

平面形・規模 東西210cm、南北270cmの方形を呈する。面積5.1m<sup>2</sup>。

壁 南壁の一部と東壁が残存しており、ほぼ垂直に立ち上がってしっかりとしている。

床 西壁に向かって若干傾斜しているが、おおよそ平坦である。地山を床面としているがやわらかい。床面レベルはS I 018と同一である。

ピット P 9・10・12・13・17・20は柱穴と思われる。

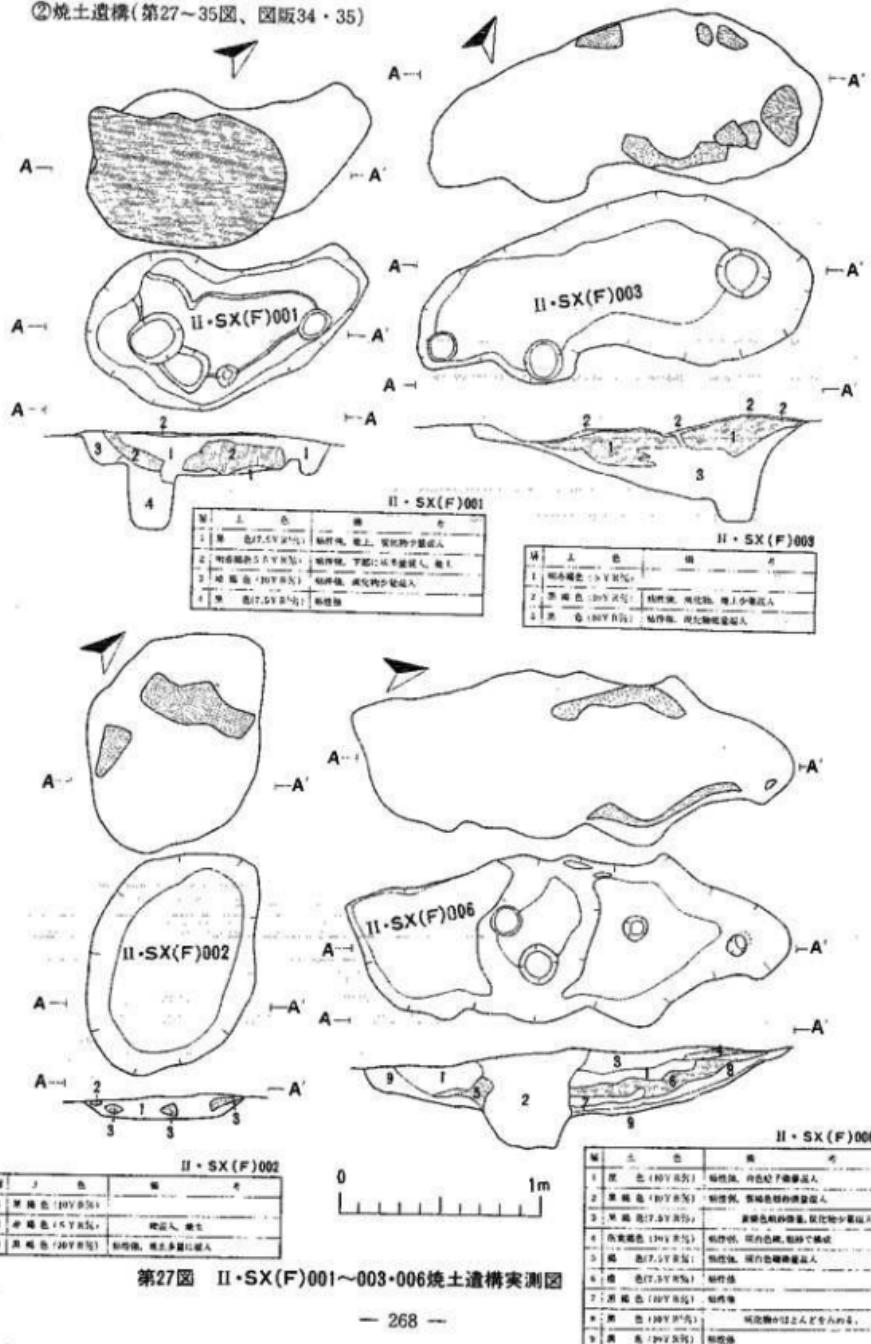
### 遺物なし。

その他の観察 床面一帯に炭化物と焼土が密集していることから焼失家屋である。S I 011と重複しており、S I 011より新しい。が、遺構確認面での切り合い関係は把握できなかった。

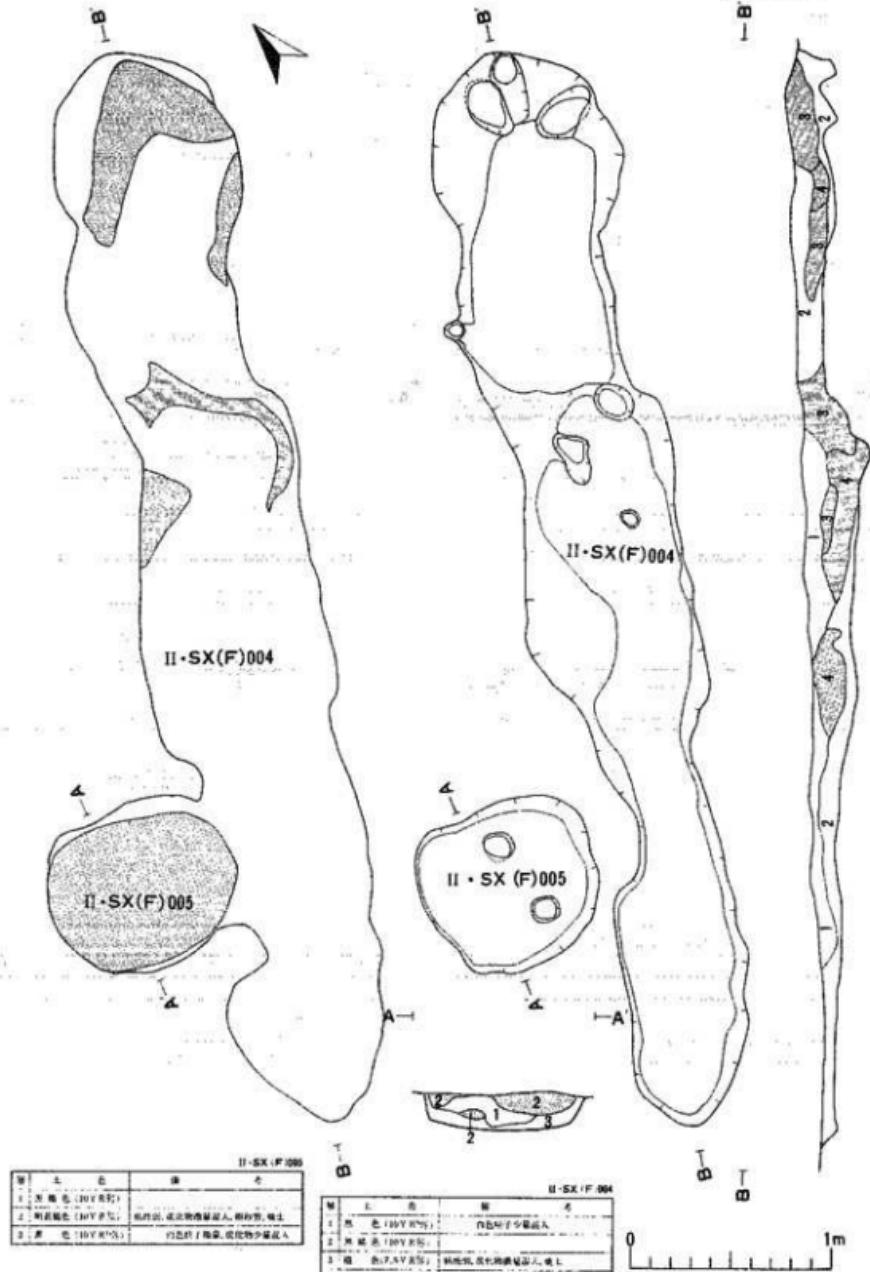


第26図 II・S I 018炭化材出土状況図

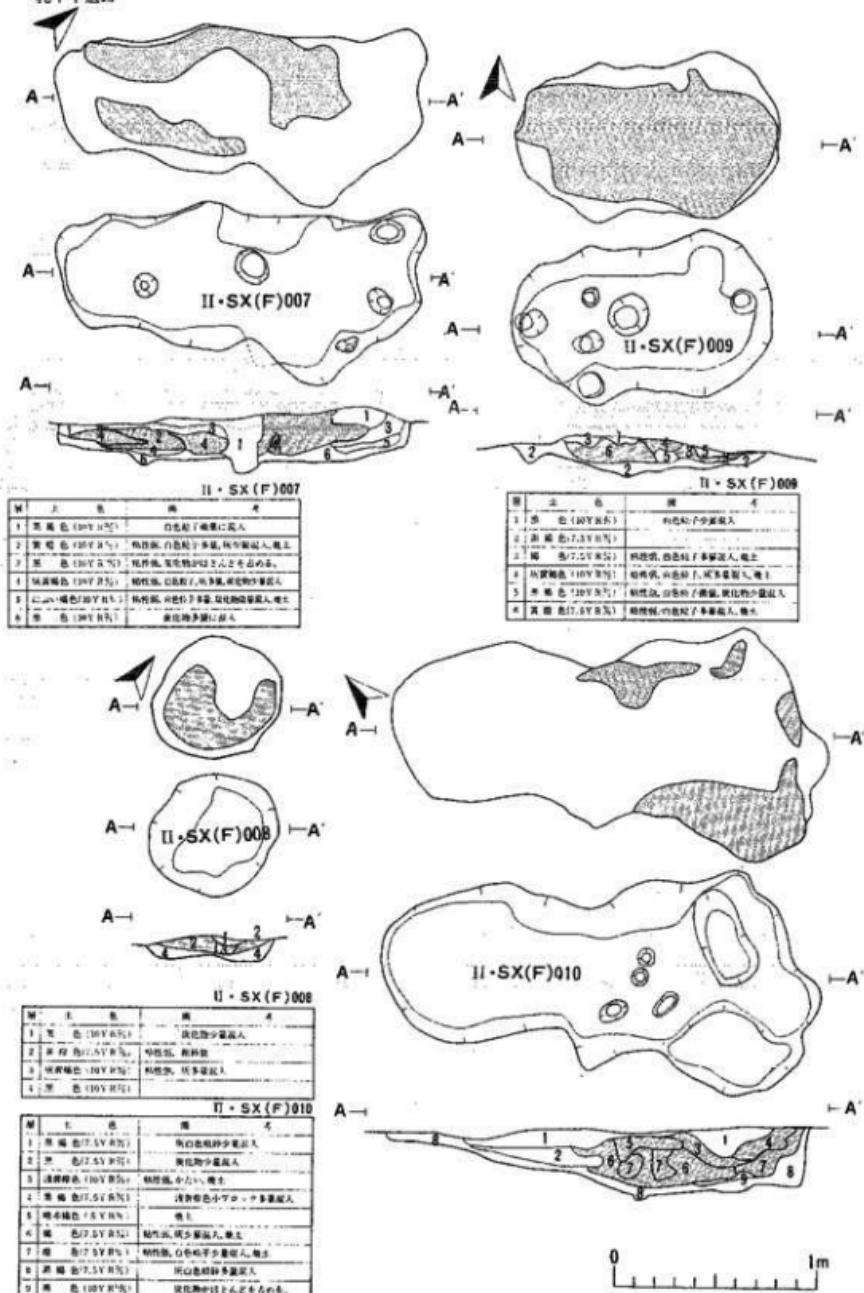
## ②焼土遺構(第27~35図、図版34・35)



第27図 II-SX(F)001~003・006焼土遺構実測図

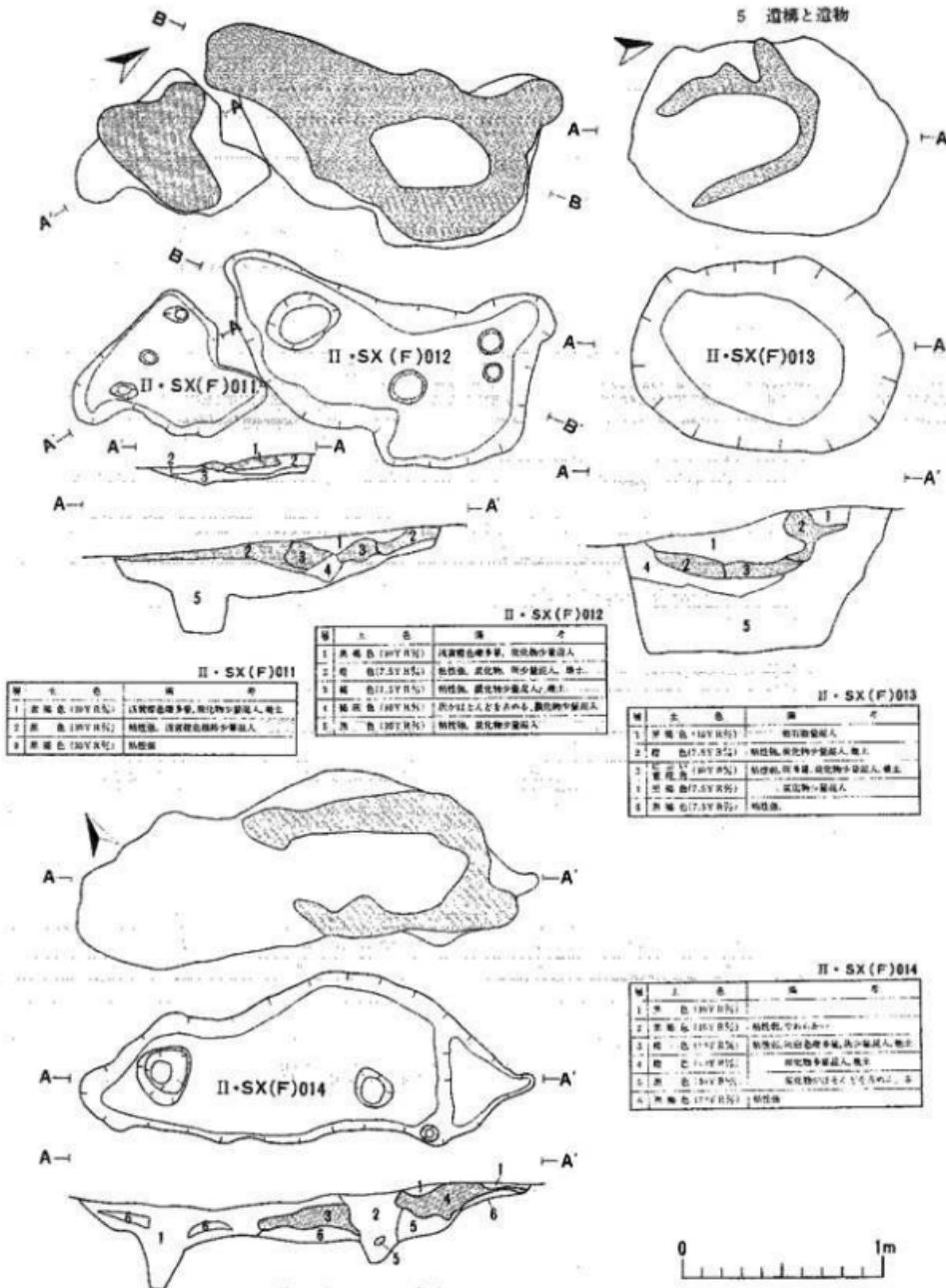


第28図 II-SX(F)004-005焼土遺構実測図



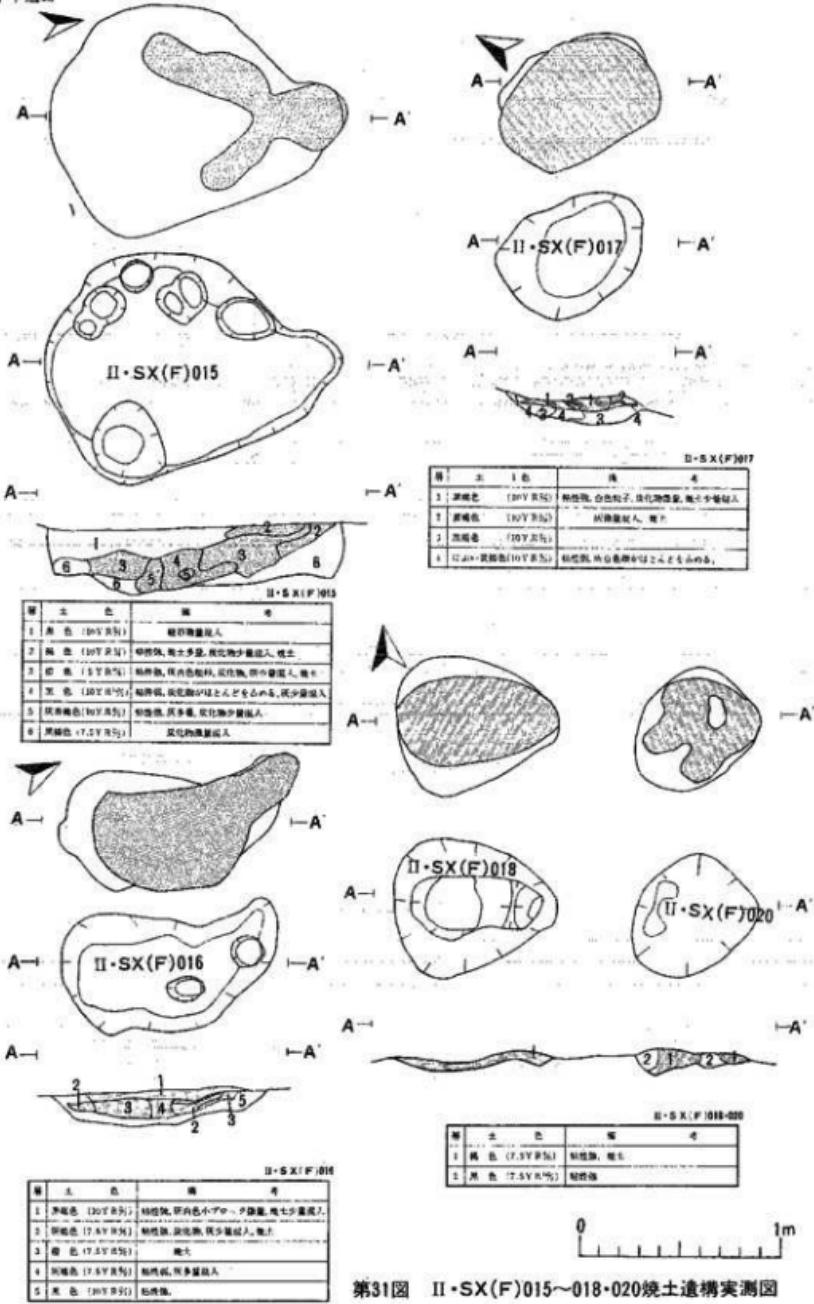
第29図 II-SX(F)007~010焼土造構実測図

5 遺構と遺物

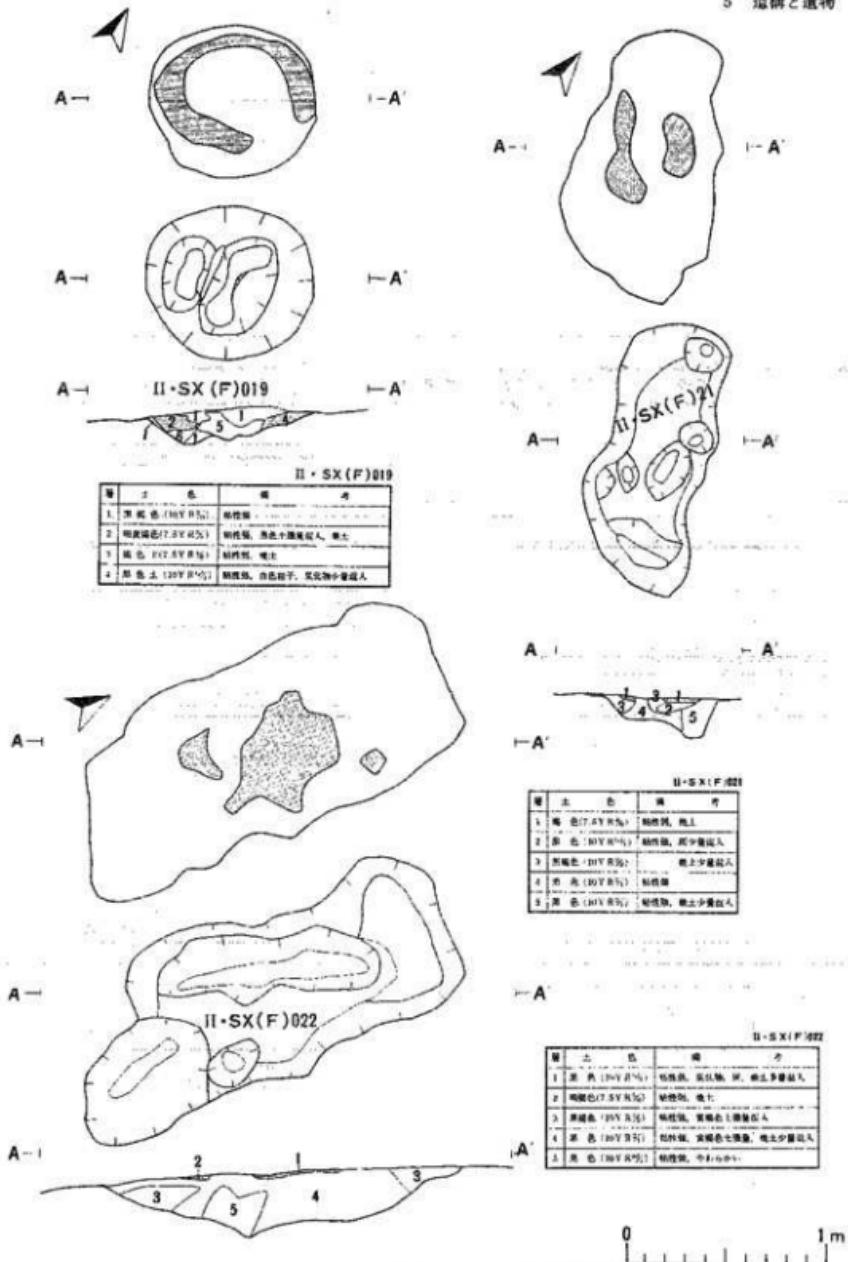


第30図 II-SX(F)011~014焼土遺構実測図

乳牛平遺跡

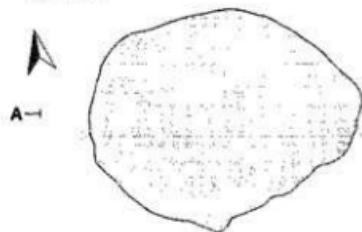


第31図 II-SX(F)015~018・020焼土遺構実測図

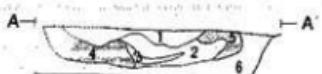
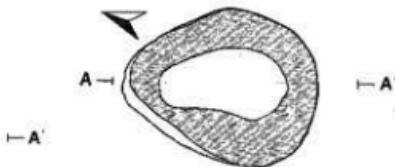


第32図 II-SX(F)019-021-022焼土造構実測図

乳牛平道跡



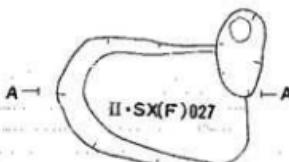
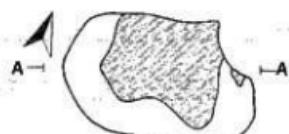
層	土色	備考
1	褐褐色 (10YR 5/6)	粘性強、白色砂子、炭化物少量混入、燒土
2	褐褐色 (10YR 5/6)	白色砂子多量混入
3	褐色 (10YR 5/6)	炭化物多量混入、燒土
4	褐褐色 (10YR 5/6)	粘性強、黑色ほとんどを含む。
5	褐色 (10YR 5/6)	炭化物がほとんどを含む。



層	土色	備考
1	黒褐色 (7.5YR 3/1)	粘性強、白色砂子、炭化物少量混入、燒土
2	褐色 (10YR 4/1)	粘性強、炭化物少量混入、少からかい
3	黒褐色 (10YR 3/1)	II・JI・黄褐色少々多量混入
4	褐褐色 (10YR 3/6)	粘性強
5	黒褐色 (10YR 3/6)	黄褐色少々多量混入



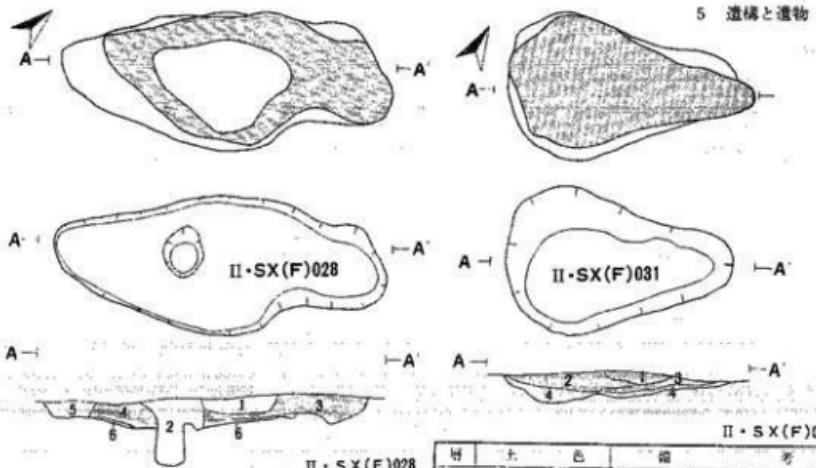
層	土色	備考
1	明度褐色 (10YR 4/6)	粘性強、炭化物少量混入、燒土
2	黒褐色 (10YR 4/6)	燒土、炭化物少量混入
3	黒褐色 (10YR 4/6)	炭化物微量混入



層	土色	備考
1	褐色 (7.5Y R 6/6)	粘性弱、燒土
2	暗褐色 (10Y R 6/6)	粘性強、燒土少量混入
3	黑色 (10Y R 3/6)	粘性強、黃褐色粒子少量混入

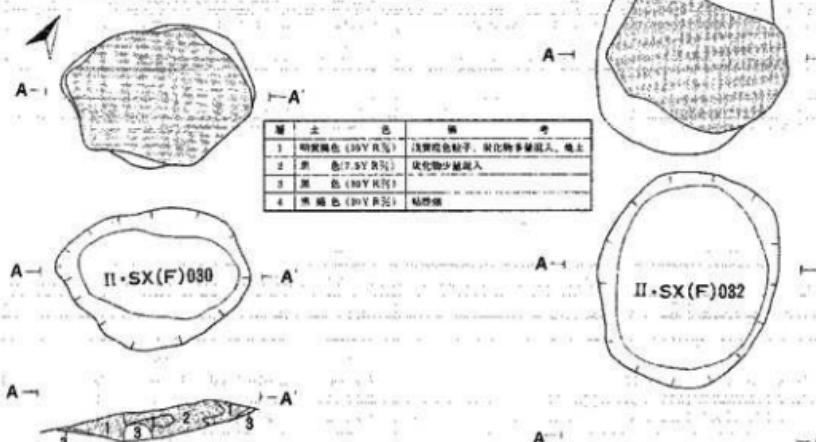
0 1m

第33図 II・SX(F)023・024・026・027焼土遺構実測図



層	土色	性質
1	黒褐色 (10YR 5/6)	粘性強、やわらかい
2	暗褐色 (10YR 5/6)	粘性弱、幾干
3	赤褐色 (5YR 5/6)	黒褐色を少量混入。乾土
4	赤褐色 (5YR 5/6)	黒褐色を少量混入。やわらかい
5	黒褐色 (10YR 5/6)	乾上少量混入、やわらかい
6	黒色 (10Y R 5/6)	粘性物がほとんどを占める。

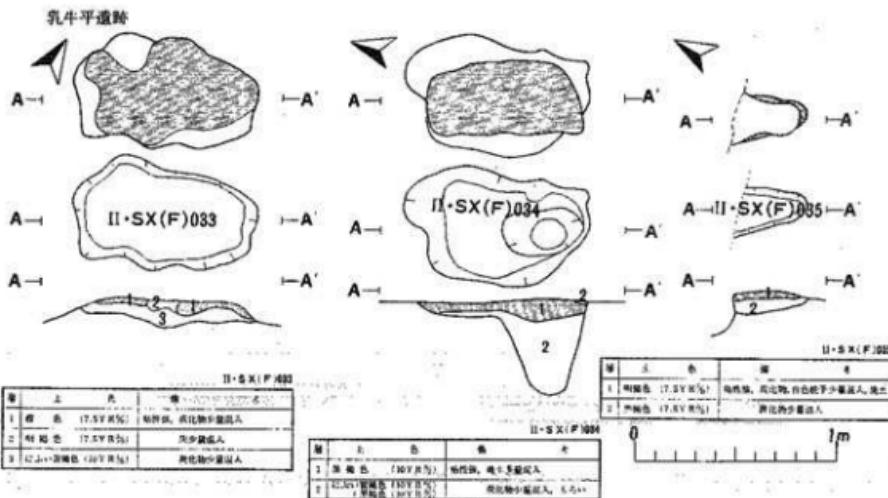
層	土色	性質
1	明褐色 (7.5Y R 5/6)	粘性強、炭化物、灰多量混入、乾土
2	黒褐色 (10Y R 5/6)	粘性弱、炭化物、灰多量混入
3	褐色 (7.5Y R 5/6)	粘性強、少量混入、乾土
4	褐色 (10Y R 5/6)	粘性弱、もろい。



層	土色	性質
1	黄褐色 (7.5Y R 5/6)	粘性強、深褐色色経を多量混入、乾土
2	灰褐色 (10Y R 5/6)	炭化物少量混入、乾土
3	褐色 (7.5Y R 5/6)	粘性弱、炭化物、灰多量混入



第34図 II-SX(F)028~030~032焼土遺構実測図



第35図 II-SX(F)033~035焼土遺構実測図

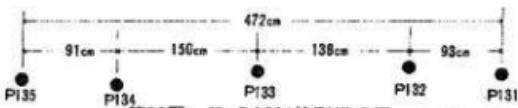
第3表 II-SX(F)焼土遺構観察表

遺構番号	検出位置	法量			遺物
		長径	短径	深さ	
S X (F)001	18-H	143cm	82cm	16~48cm	なし
S X (F)002	19-H, 20-H	120cm	84cm	8~11cm	なし
S X (F)003	20-H, 20-I	199cm	84cm	7~53cm	なし
S X (F)004	20-I, 21-I, 20-J	541cm	95cm	5~34cm	なし
S X (F)005	20-I, 20-H	93cm	91cm	14~18cm	なし
S X (F)006	21-I, 22-I, 21-J, 22-J	213cm	83cm	3~47cm	なし
S X (F)007	22-I, 22-J	180cm	85cm	10~27cm	なし
S X (F)008	22-J	67cm	60cm	9~11cm	なし
S X (F)009	22-J	128cm	83cm	5~20cm	なし
S X (F)010	21-J	213cm	111cm	5~34cm	なし
S X (F)011	22-J	81cm	73cm	5~10cm	なし
S X (F)012	22-J	170cm	100cm	11~41cm	なし
S X (F)013	22-J, 23-J	135cm	96cm	57~68cm	なし
S X (F)014	22-J, 22-K, 23-K	451cm	161cm	5~41cm	なし
S X (F)015	22-K	147cm	112cm	22~33cm	なし
S X (F)016	21-J, 21-K	105cm	60cm	11~17cm	なし
S X (F)017	22-K	74cm	56cm	8~13cm	なし
S X (F)018	24-J, 24-K	81cm	69cm	3~6cm	なし
S X (F)019	24-J, 24-K	84cm	77cm	7~16cm	なし
S X (F)020	24-J	63cm	54cm	2~13cm	なし
S X (F)021	20-H	134cm	54cm	10~19cm	なし
S X (F)022	21-H, 22-H	204cm	86cm	5~31cm	なし
S X (F)023	20-H, 21-H	134cm	103cm	8~20cm	なし
S X (F)024	21-G, 21-H	75cm	70cm	3~12cm	なし
S X (F)026	18-I	97cm	78cm	23~25cm	なし
S X (F)027	J-19	96cm	60cm	20~26cm	なし
S X (F)028	17-I, 18-I	166cm	69cm	8~33cm	なし
S X (F)030	21-K	96cm	71cm	2~14cm	なし
S X (F)031	18-I	113cm	74cm	2~15cm	なし
S X (F)032	21-J	107cm	88cm	27~31cm	なし
S X (F)033	24-I, 24-J	89cm	52cm	4~14cm	なし
S X (F)034	17-H	93cm	57cm	5~47cm	なし
S X (F)035	24-J	(35cm)	(23cm)	(3~11cm)	なし

## ③柱 列

## S A001 柱列（付図4、図版36）

S I 004 の北側に柱穴5個からなる柱列が構築されており、地山面で確認された。ピットの深さはP 1・53cm、P 2・42cm、P 3・72cm、P 4・47cm、P 5・19cmで、方位はN50Wを測る。



第36図 II・SA001柱列模式図

## ④溝

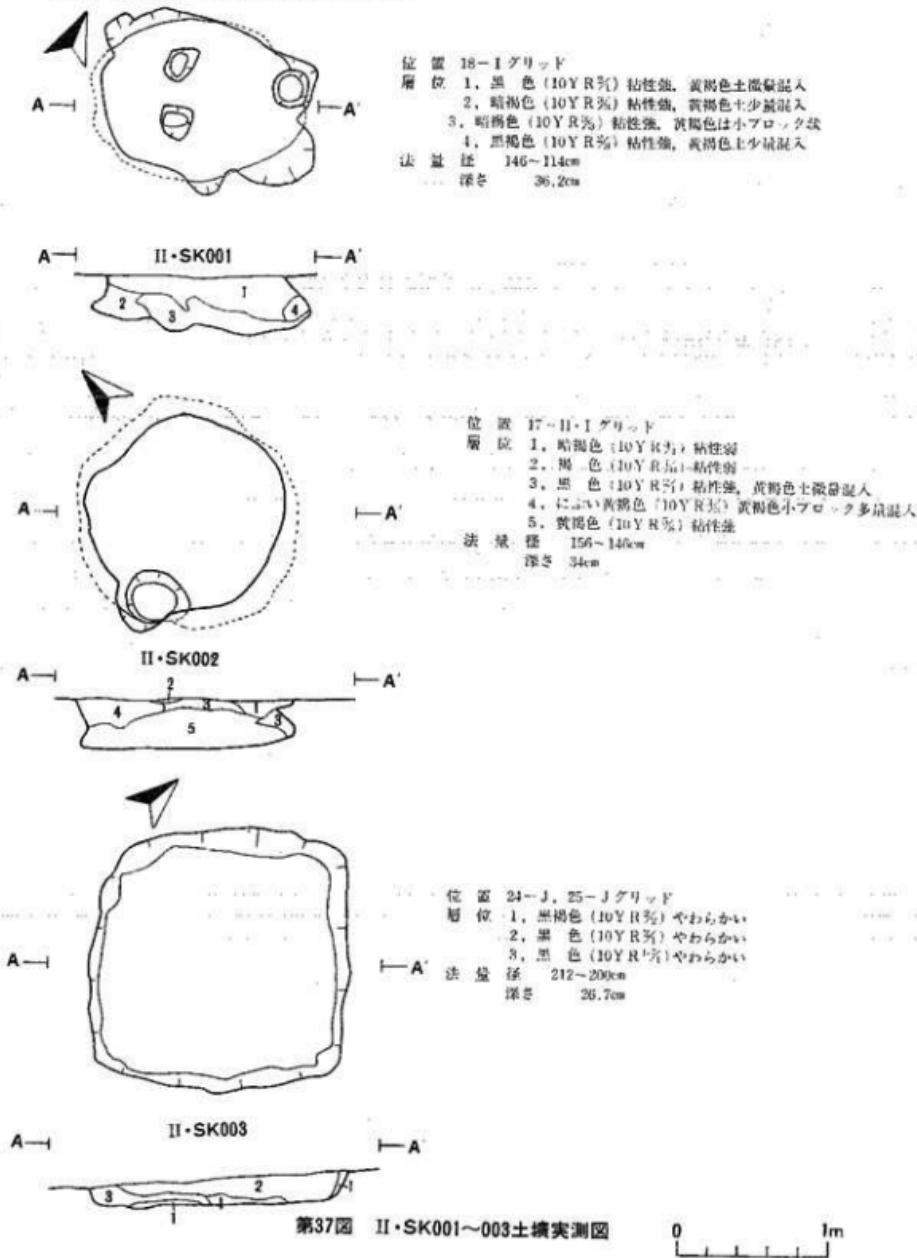
## S D001 溝（付図5）

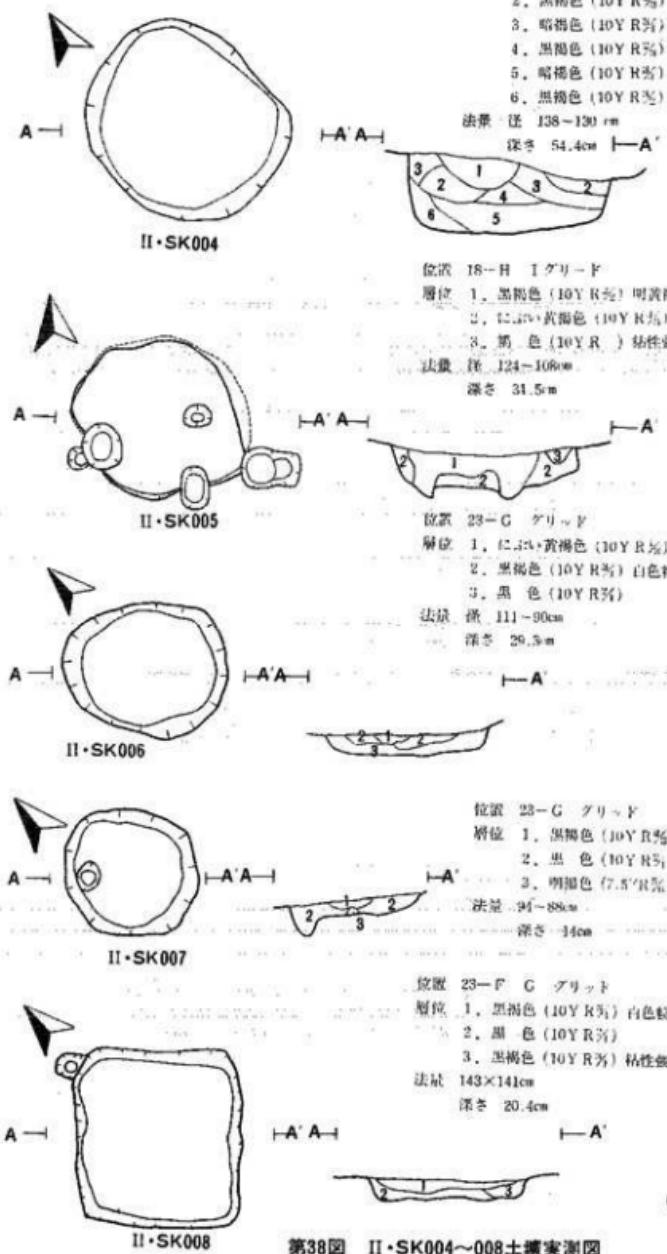
16II・1グリッド内にあり、S X005 東端付近を起点として約7mほど直線的に延びているが、S I 013 穴造構東南隅付近で消失している。深さ6~12cm、幅30cmで底面は平坦である。S I 009 穴造構埋没後に構築されたものである。

## S D002 溝（付図4）

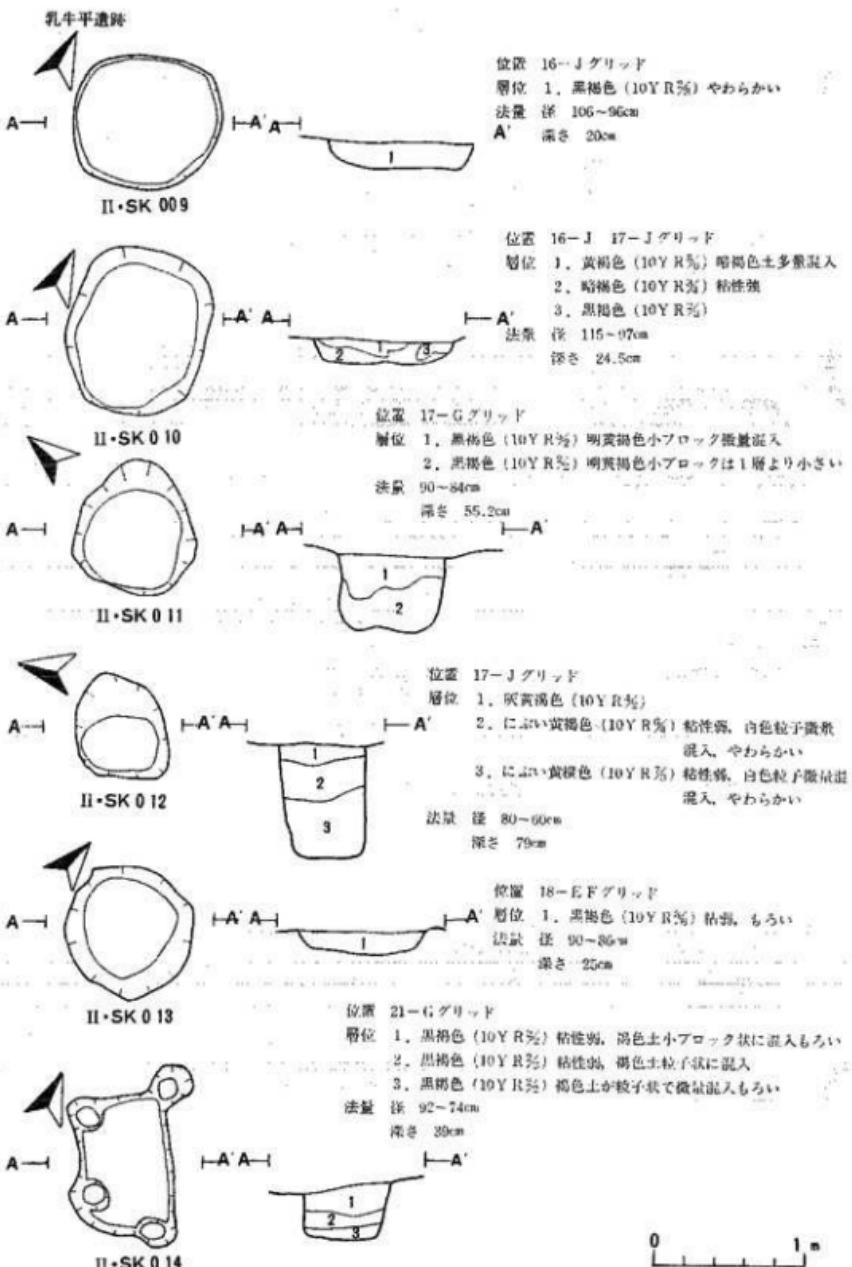
20G~21Gグリッド枕付近にかけて南北に延びる溝である。幅約20cm、深さ5~8cmと非常に浅く、地山面では確認されたが他の造構と重複する部分では確認できず、新旧関係は不明である。

## ⑤土 壤(第37~41図、図版36~40・43)

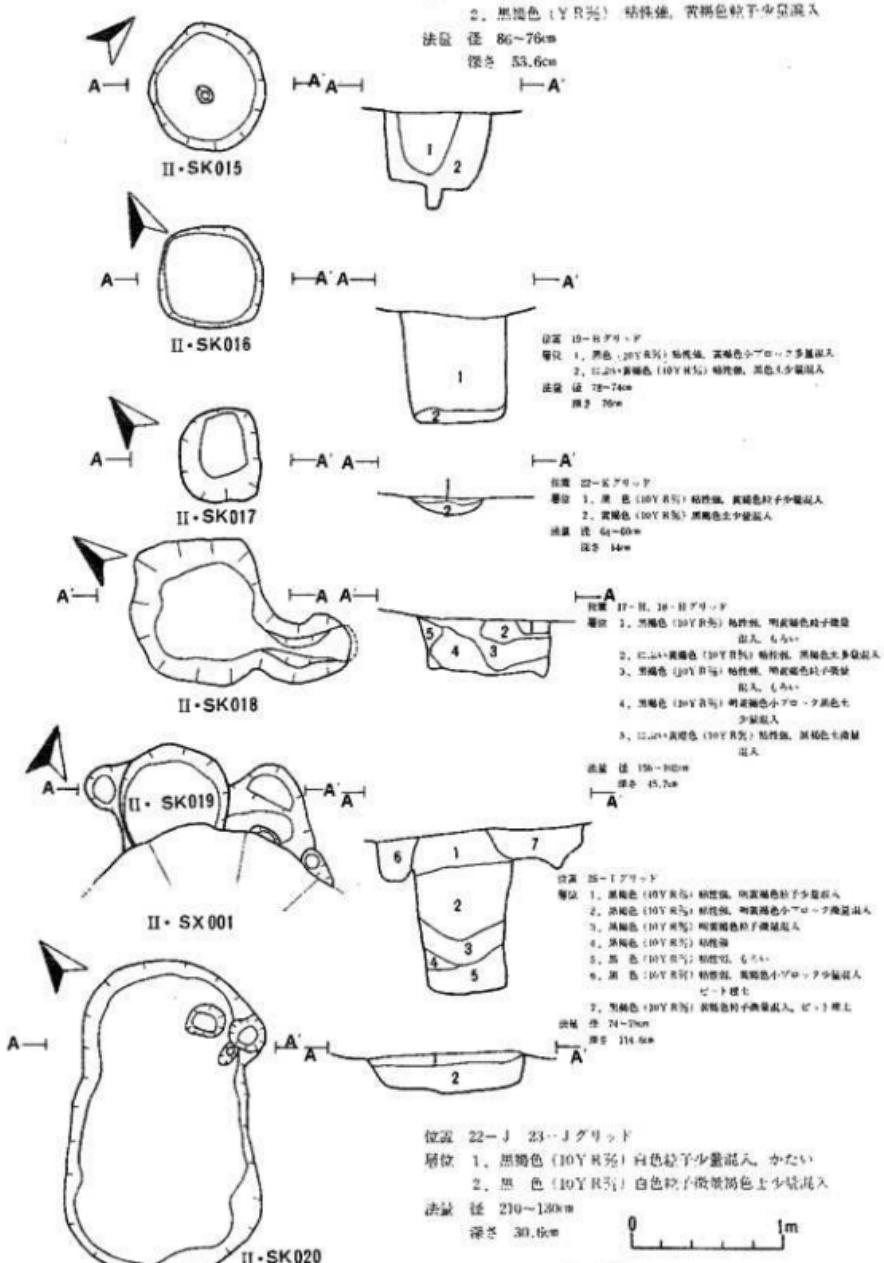




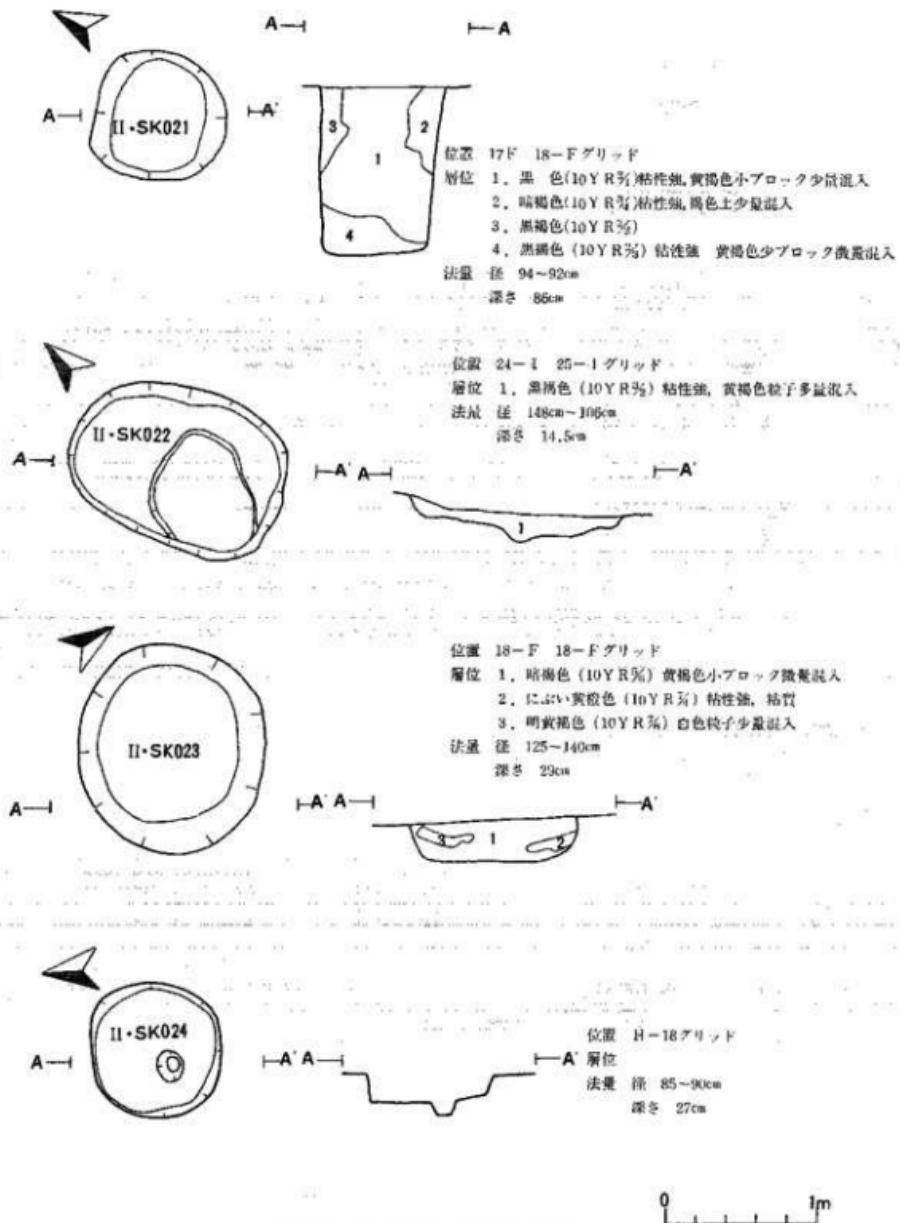
第38図 II-SK004~008土壤実測図



第39図 II-SK009~014土壤実測図

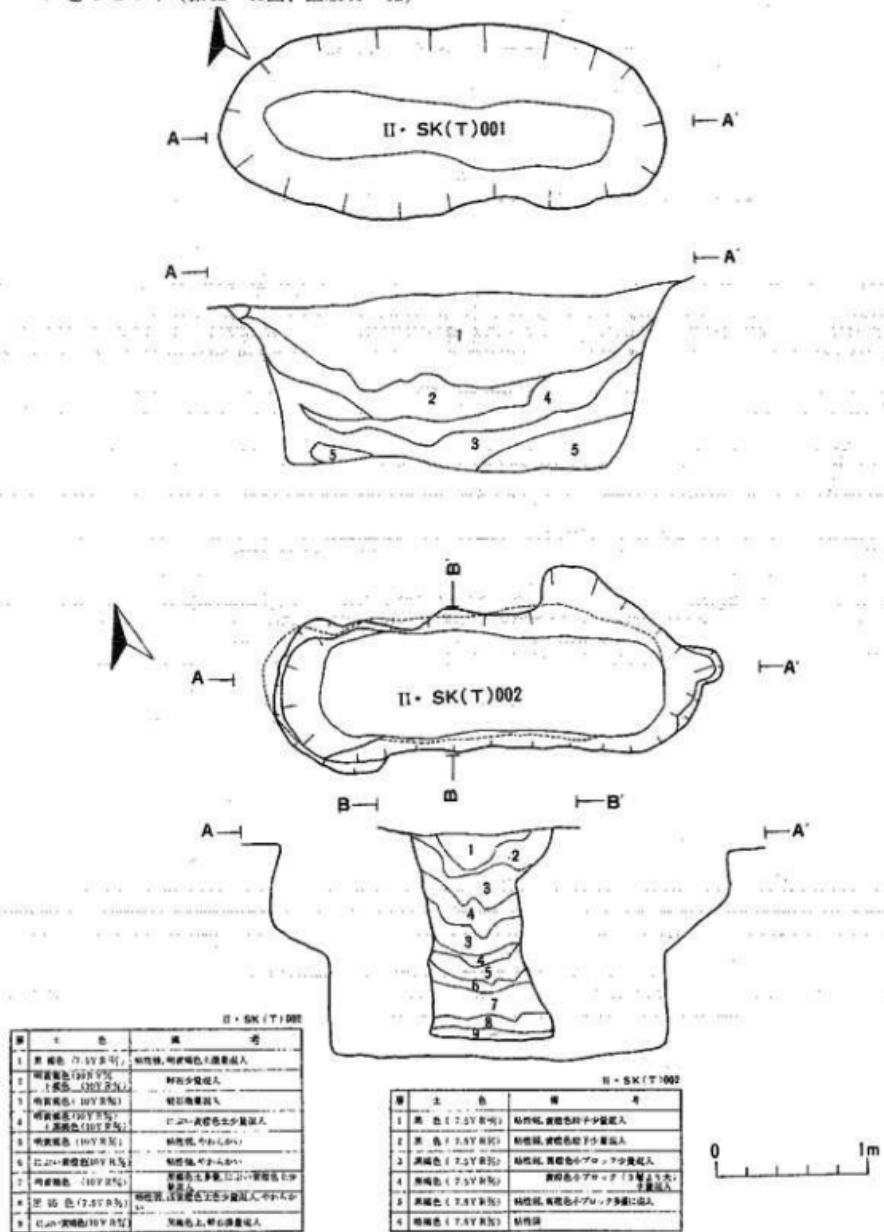


第40図 II-SK015~020土壤実測図

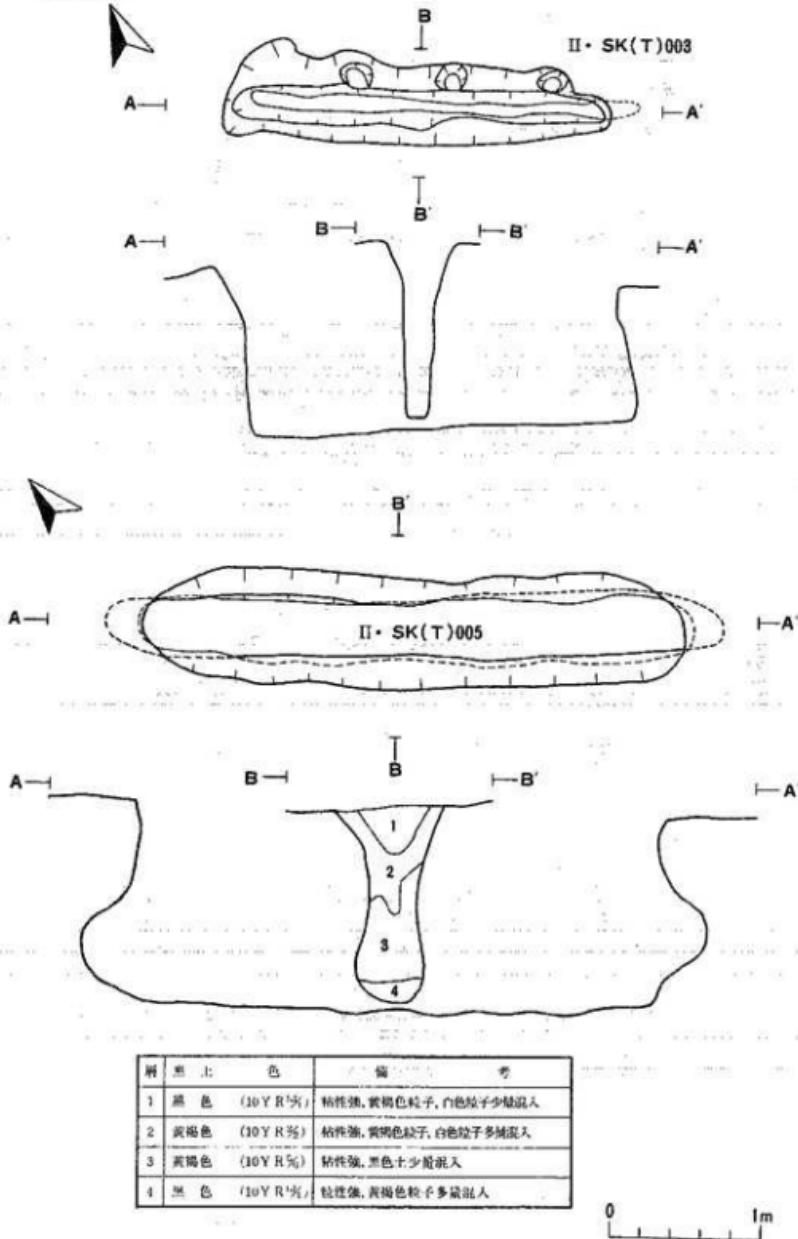


第41図 II-SK021~024土壤実測図

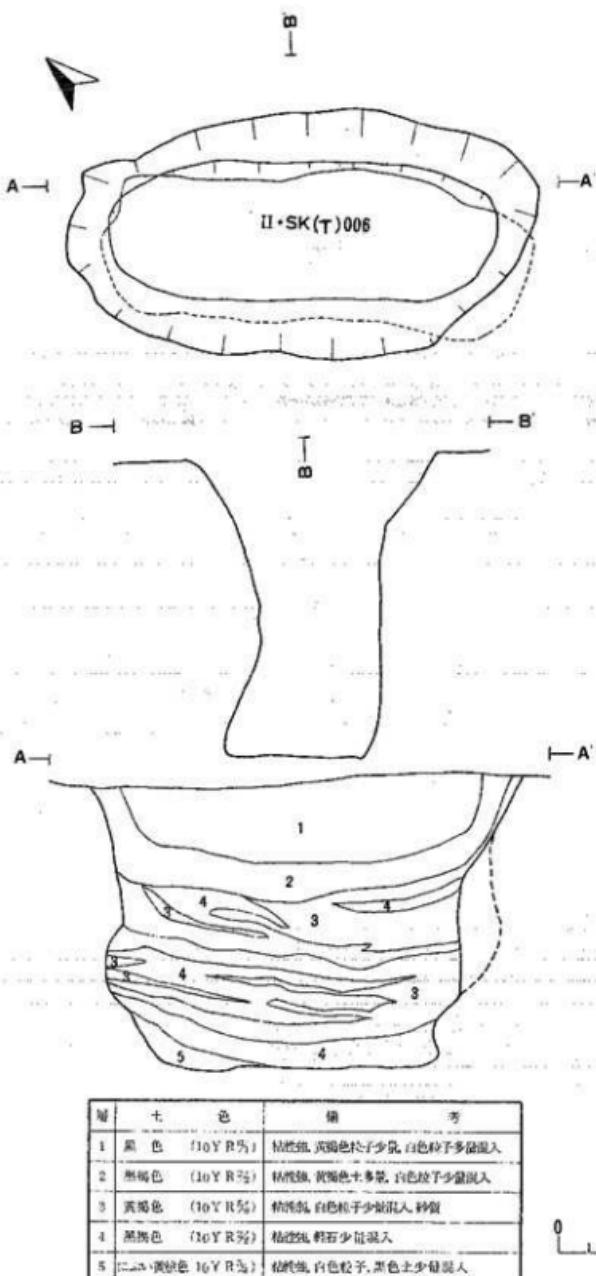
## ⑥ T ピット (第42~45図、図版41・42)



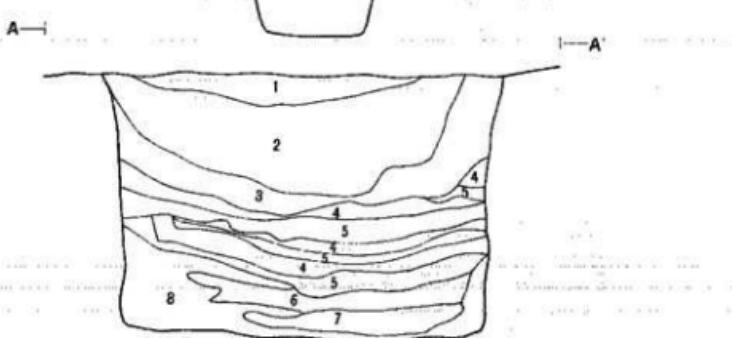
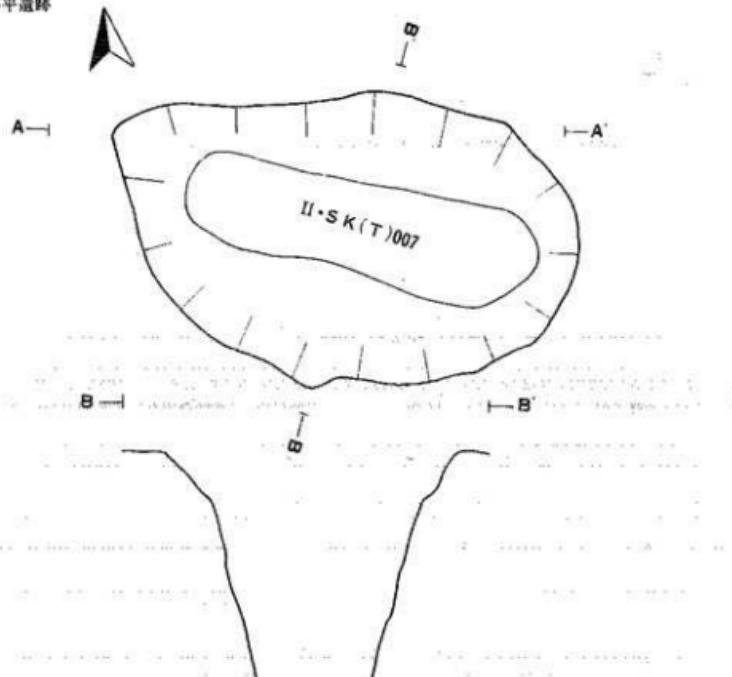
第42図 II-SK(T)001・002 Tピット実測図



第43図 II-SK(T)003・005 Tピット実測図



第44図 II-SK(T)006 T ピット実測図



層	土 色	備 記
1	明黄褐色 (10YR 8/6)	白色粒子多量、黒色土少量混入
2	黒 色 (10YR 4/2)	粘性強、黄褐色粒子、多量混入
3	墨 黃 色 (10YR 4/8)	粘性強、黄褐色小ブロック、白多粒子多量混入
4	黃 級 色 (10YR 8/3)	粘性強、白色粒子、黒色土少量混入
5	黒 色 (10YR 4/8)	粘性強、黄褐色多量混入
6	にじ 黄褐色 (10YR 8/4)	粘性強、黑色土少量混入
7	褐 色 (10YR 6/6)	粘性強、砾石、黒色土多量に混入
8	にじ 黑褐色 (10YR 8/8)	粘性強、砾石、細砂少量混入

0 1m

第45図 II-SK(T)007 Tピット実測図

第4表 II・SK(T)Tピット觀察表

遺構番号	検出位置	法...量			長軸方位	遺物
		長径	短径	深さ		
SK(T)001	21-H, 22-H 21-I, 22-I	298cm	127cm	104~117cm	N-90°-W	なし
SK(T)002	19-F	300cm	122cm	135~140cm	N-98.5°-W	なし
SK(T)003	18-G, 19-G	259cm	53cm	92~112cm	N-65.5°-W	なし
SK(T)005	22-I, 21-J, 22-J	311cm	78cm	126~135cm	N-43°-W	なし
SK(T)006	23-H, 23-I, 24-I	317cm	165cm	185~200cm	N-54°-W	なし
SK(T)007	22-H, 23-H	316cm	200m	168~173cm	N-80.5°-W	なし

## ⑦その他の遺構

## II・SX001 (第46図、図版43)

II郭北西端にあり、SK019 土壙を切っている。逆内錐形で、口径230~250 cm、深さ200 cmで、埋土は上層から下層に至るまで非常に堅いが自然堆積の状態を示している。遺物は出土しなかった。

## II・SX002 (第47図、図版43)

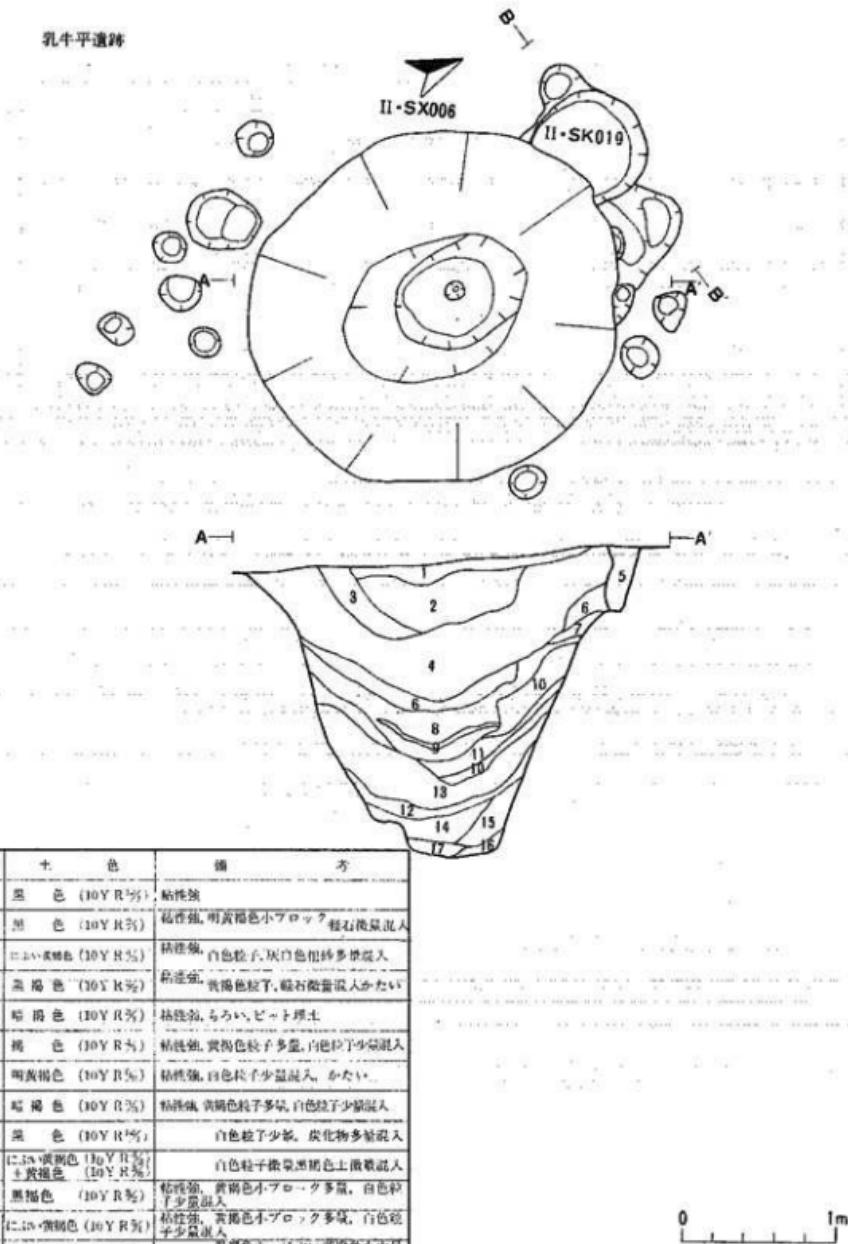
II郭の北西端にあり、郭の崩壊により、一部が崩落している。口径220 cmほどで、深さ160 cm、底面は平坦で、中央部の壁にくびれ部を有する。遺物は出土しなかった。

## II・SX003 (付図5)

17Hグリッドにあり、SI006 南東コーナーに切られている。幅約90cm、深さ7~10cmで、西方向に延びるものらしい。底面は平坦で、遺物はなく、性格も不明である。

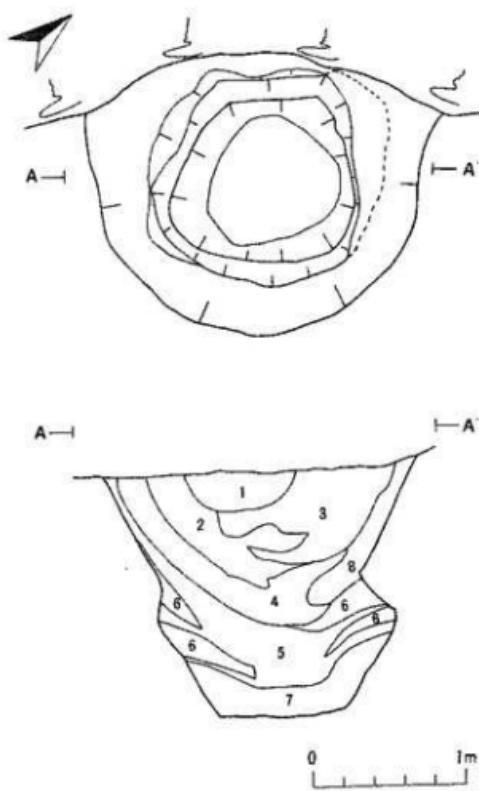
## II・SX004 (付図5)

II郭の最南端に検出された。郭の崩壊により全容は不明であるが、竪穴造構と同様の壁が高さ5~10cmで南北方向に2本残存し、これがSI013・014などと同一の方向を示している。底面は平坦で、東西幅は280 cmである。恐らく竪穴造構であろうと考えるが、この造構に確実に付随するピットはない。



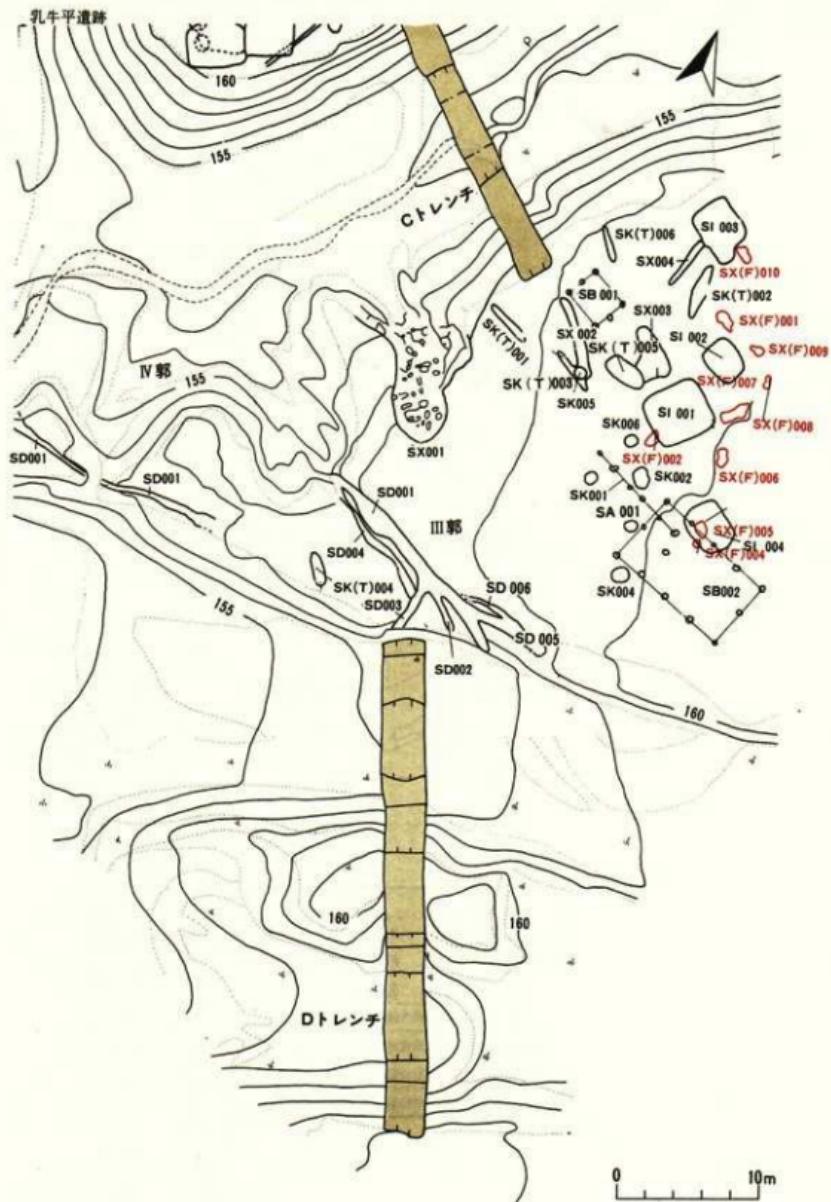
番	土色	性質
1	黒色 (10Y R 5%)	粘性強
2	黒色 (10Y R 5%)	粘性強, 明黄色小ブロック 粗石微量混入
3	にじい黄褐色 (10Y R 5%)	粘性強, 白色粒子, 黄白色粗粒多量混入
4	黒褐色 (10Y R 5%)	粘性強, 黄褐色粒子, 粗石微量混入少
5	暗褐色 (10Y R 5%)	粘性強, らかい, ピート埋土
6	褐色 (10Y R 5%)	粘性強, 黄褐色粒子多量, 白色粒子少量混入
7	明黄褐色 (10Y R 5%)	粘性強, 白色粒子少量混入, かたい
8	暗褐色 (10Y R 5%)	粘性強, 黄褐色粒子多量, 白色粒子少量混入
9	黒色 (10Y R 5%)	白色粒子少量, 炭化物多量混入
10	にじい黄褐色 (10Y R 5%) + 黄褐色 (10Y R 5%)	白色粒子微少, 黄褐色少量混入
11	黒褐色 (10Y R 5%)	粘性強, 黄褐色小ブロック多量, 白色粒子少量混入
12	にじい黄褐色 (10Y R 5%)	粘性強, 黄褐色小ブロック多量, 白色粒子少量混入
13	灰褐色 (10Y R 5%)	灰褐色土, にじい黄褐色少量混入
14	にじい黄褐色 (10Y R 5%)	粘性強, 黄褐色小ブロック少量混入
15	明黄褐色 (10Y R 5%)	粘性強, ブロック状
16	にじい黄褐色 (10Y R 5%)	泥炭化土少量, 黄白色粗粒多量混入

第46図 II-SK019土壤・SX001その他の造構



層	土色	解 析
1	黒 色 (10Y R 5/1)	黄褐色粒子、小ブロック多量混入
2	黒 暗 色 (10Y R 5/2)	黄褐色粒子多量、黑色土少量混入
3	黒 色 (10Y R 5/1)	黄褐色小ブロック多量混入
4	黒 色 (10Y R 5/2)	粘性強、黄褐色粒子多量混入
5	黒 色 (10Y R 5/1) + 黄褐色 (10Y R 5/2)	粘性強
6	黄 暗 色 (10Y R 5/2)	粘性弱、黑色土少量混入
7	明黄褐色 (10Y R 5/2)	粘性弱、白色粒子、黑色土少量混入

第47図 II・SX002その他の遺構実測図



第48図 III・IV郭造構配図

## (3) III郭検出遺構

## ① 穴遺構

## III・S I 001 穴遺構 (第49図、図版46)

位置 11Cグリッド

平面形・規模 東西 430cm、南北 380cmの方形を呈す。面積 15.1m<sup>2</sup>

壁 四壁ともやや外方に傾斜して立ち上がり、高いしっかりとした作りである。

床 傾斜もみられず平坦である。地山を床面としており堅い。

ピット P 1はこの遺構には伴わない後世のピットと思われる。この他は検出されなかった。

上層断面図中にも後世のピットが現われている。

pitNo	P 1
深さ	8 cm

遺物 なし。

その他の観察 南壁に本遺構よりも新しいSX(f)002が重複する。本遺構に伴う柱穴、炉は全く検出されなかった。

## III・S I 002 穴遺構 (第50図 図版46・47)

位置 12B・Cグリッド

平面形・規模 東西 280cm、南北 210cmの方形を呈す。面積 6.0m<sup>2</sup>

壁 四壁ともほぼ垂直に立ち上がりしっかりとした作りである。西コーナーに向かって漸次低くなる。西壁に比べ東壁が短い。

床 全体的に、おおよそ平坦である。

ピット P 1～3・5・7～9・11がこの遺構の主たる柱穴であろう。

Pit No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
深さ(cm)	20	46	54	14	47	10	39	22	13	45	29	34

遺物 なし。

その他の観察 床面一帯に焼土と炭化材が見られることから焼失家屋である。

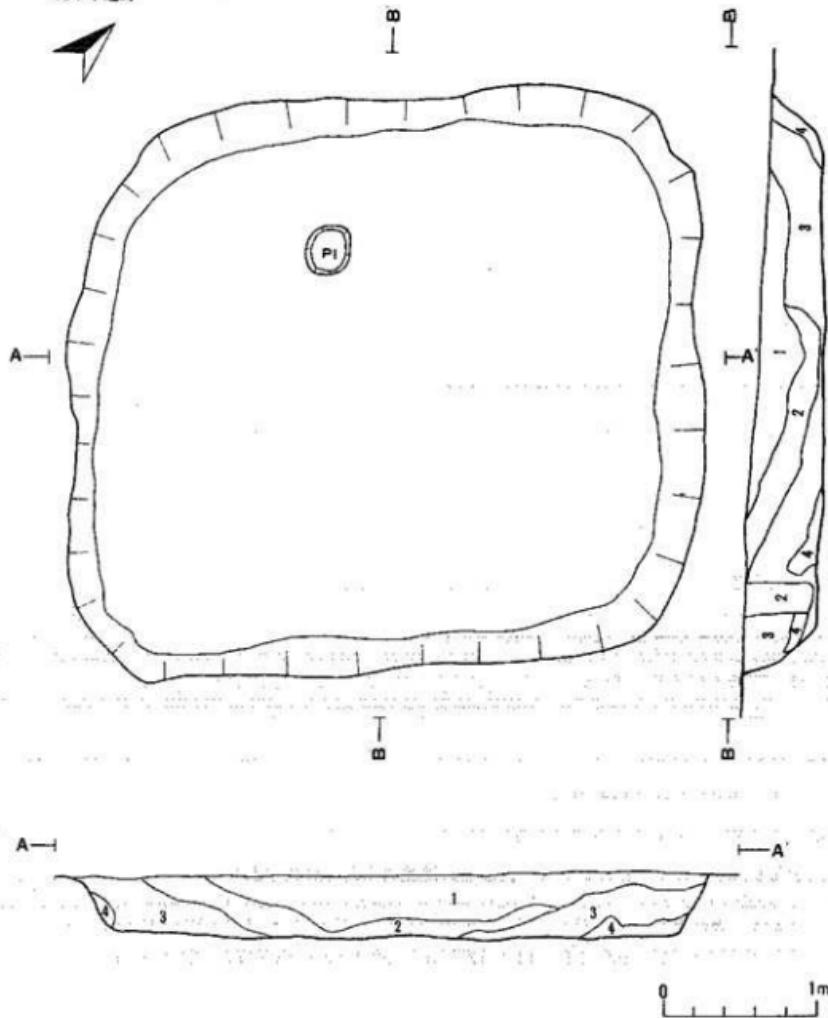
## III・S I 003 穴遺構 (第51図 図版47・48)

位置 13B・C、14B・Cグリッド

平面形・規模 東西 280 cm、南北 330 cmの方形を呈す。面積 9.9 m<sup>2</sup>

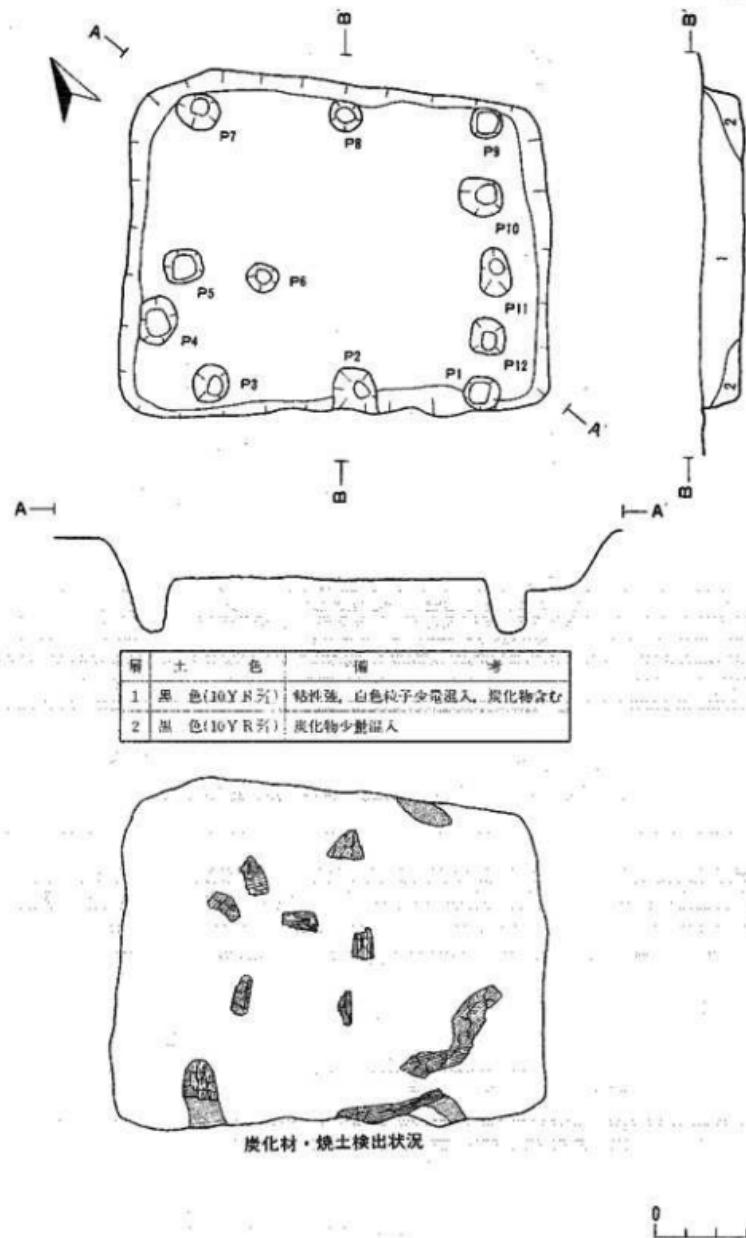
壁 四壁とも完全に残存しており、緩かな立ち上がりではあるが、しっかりした作りである。

北壁ほど高く南西コーナーに向かって漸次低くなる。

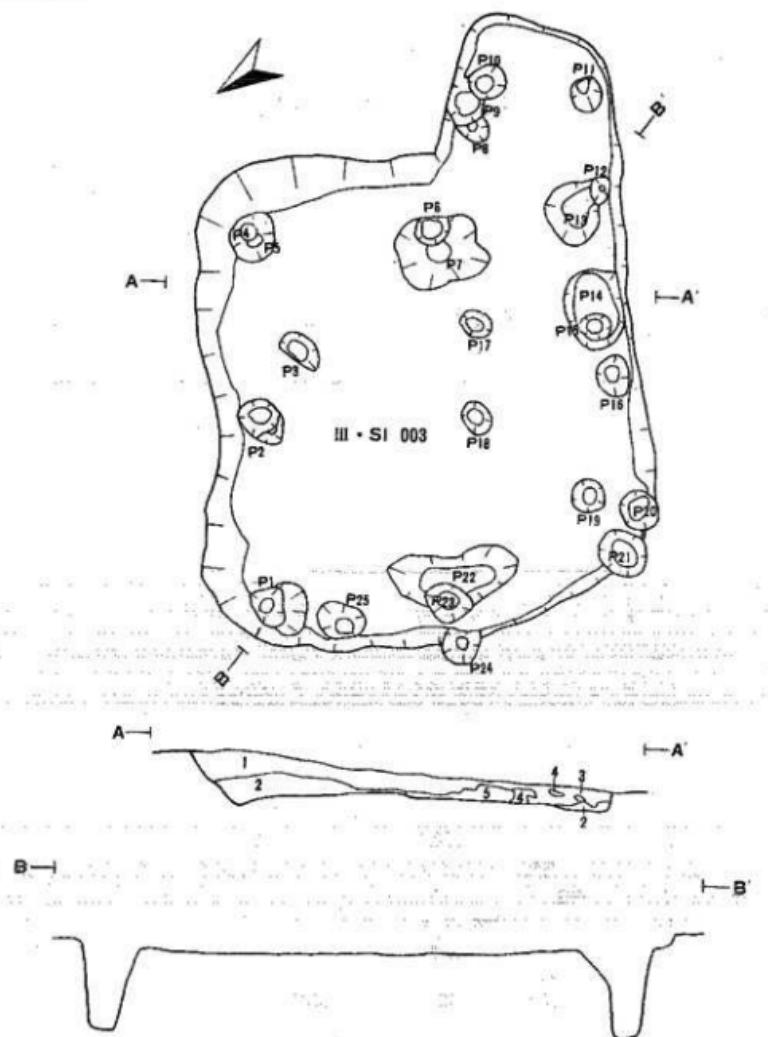


層	土色	特徴
1	黒褐色(10Y R 3/4)	粘性弱。黄褐色小ブロック、鈍石微量混入
2	黒 色(10Y R 3/4)	粘性弱。黄褐色小ブロック、鈍石微量混入
3	黒褐色(10Y R 3/4)	粘性強。黄褐色小ブロック多量混入
4	黒褐色(10Y R 3/4)	粘性強

第49図 III・S 1001豊穴造構実測図

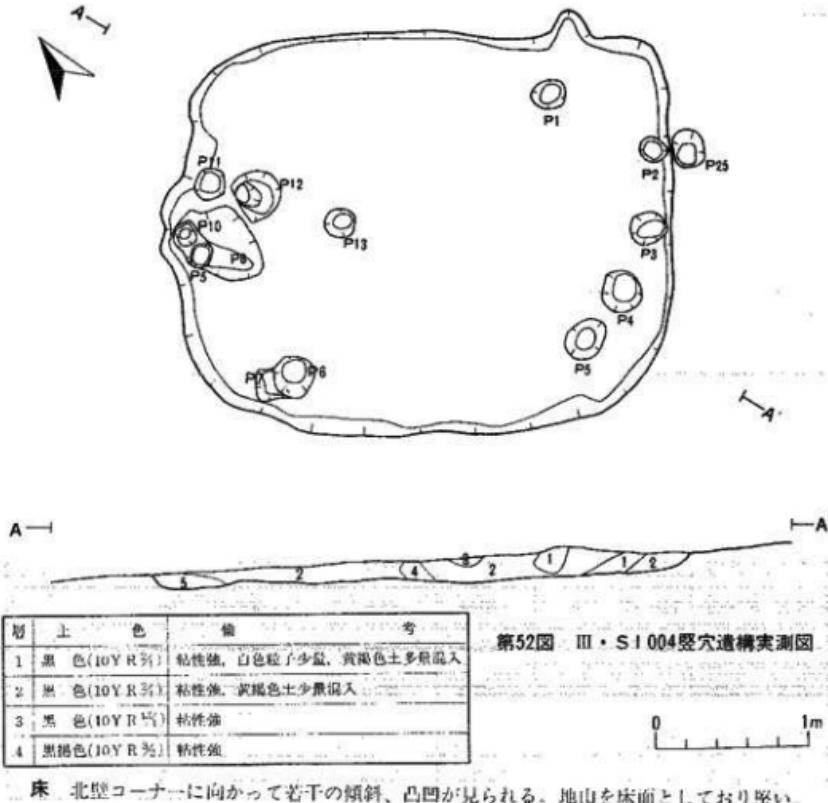


第50図 III・SI 002竪穴造構実測図



層	土 色	備 考
1	黒色(10YR4/6)	粘性強。黄褐色粒子少量混入。
2	黒褐色(10YR3/1)	黄褐色小ブロック少量混入
3	褐 色(5YR4/6)	粘性強
4	褐 色(10YR4/4)	白色粒子微量。黑色土多量混入
5	黄褐色(10YR4/6)	下部に黑色土少量混入

第51図 III・SI 003竪穴造構実測図



造物なし。

その他の観察 東壁に出入り口が付設されている。出入り口部床面は、造構内床面よりもいくぶん高くなるが、壁も10cm前後で形成されている。

### III・S1004竪穴造構 (第52図、図版48)

位置 9B・C, 10B・Cグリッド

平面形・規模 東西 330cm、南北 360cmの方形を呈す。面積8.1m<sup>2</sup>

壁 四壁とも急角度で立ち上がりしっかりしているが全体的に低い。

床 北西コーナーに向かって若干傾斜しているが、おおよそ平坦である。

ピット 遺構内のピットの配置は規則性に乏しく柱穴を決定し難いがP 3～9は棟持柱かと考えられる。

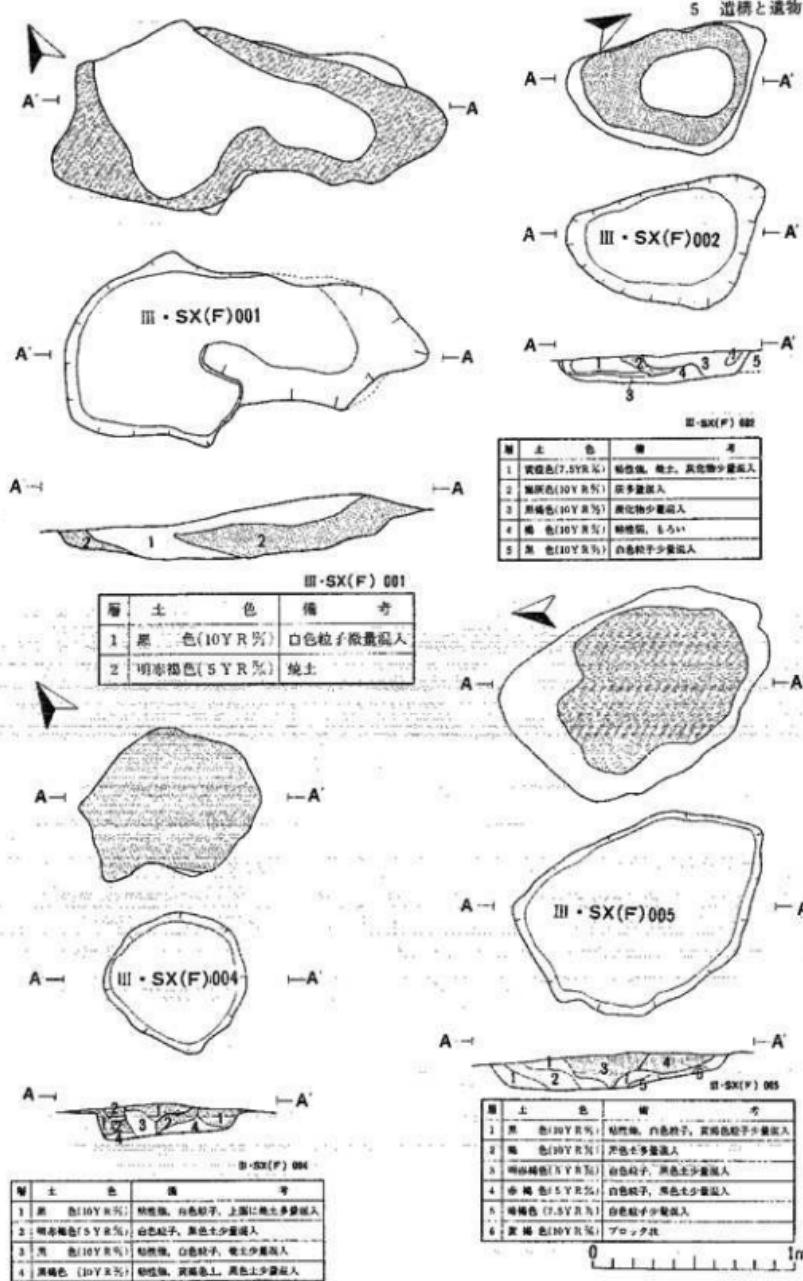
遺物 なし。

### ②焼土遺構(第53・54図、図版50)

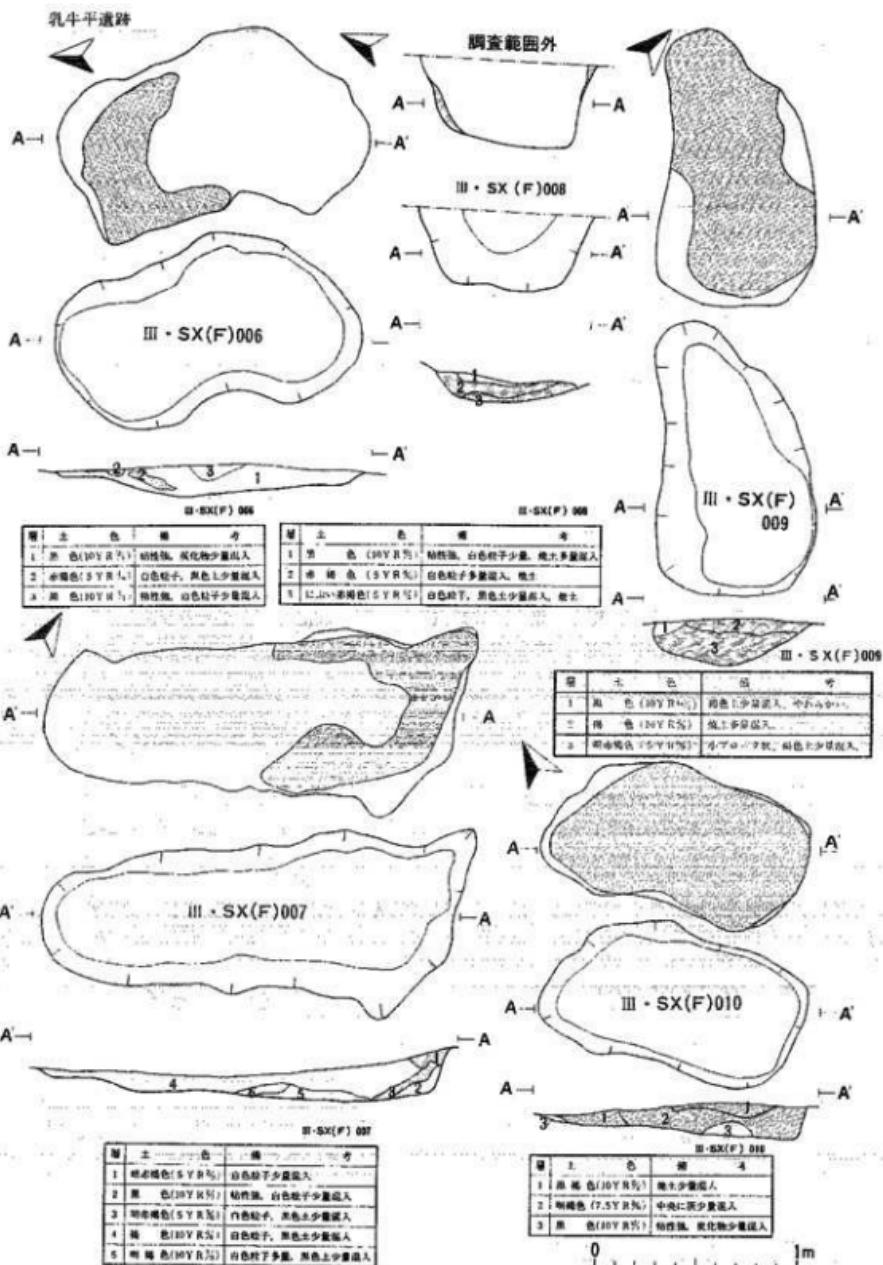
9基検出したが、このうち3基は竪穴遺構と重複する。郭縁辺部ではなく、中央部に集中する傾向が読みとれる。

第5表 Ⅲ・SX(F)焼土遺構観察表

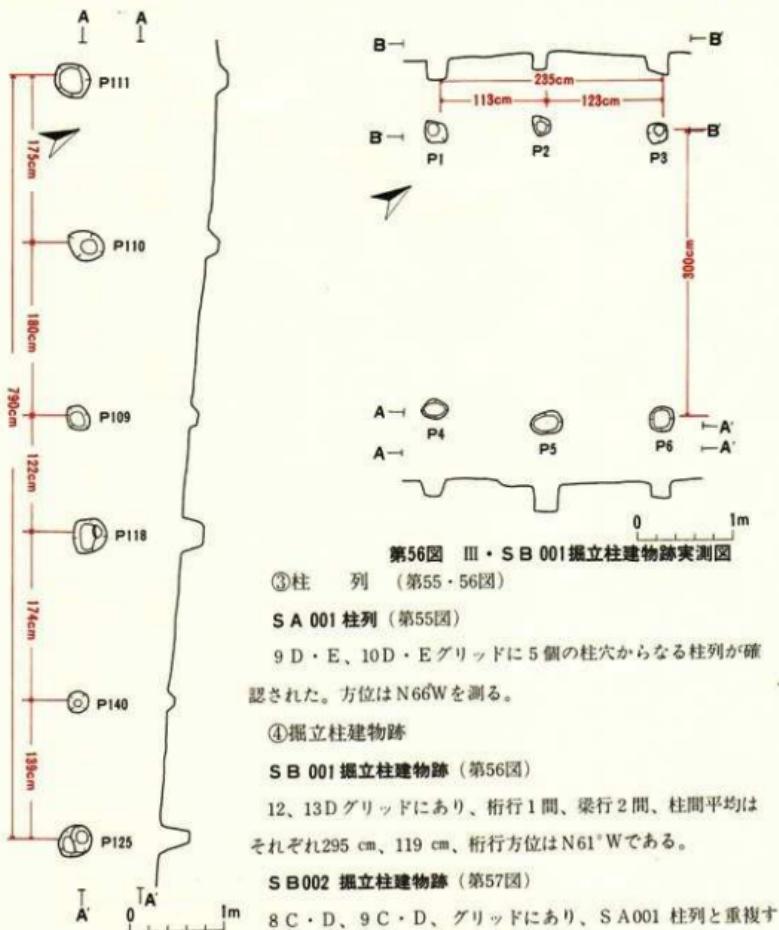
遺構番号	検出位置	法量			遺物
		長径	短径	深さ	
SX(F)001	12-B	180cm	92cm	7～26cm	なし
SX(F)002	11-C	91cm	64cm	11～14cm	なし
SX(F)004	9-C	71cm	70cm	10～15cm	なし
SX(F)005	9-C	130cm	86cm	7～18cm	なし
SX(F)006	10-B	142cm	87cm	3～15cm	なし
SX(F)007	11-B	203cm	89cm	3～19cm	なし
SX(F)008	11-B, 12-B	(87cm)	(39cm)	(3～12cm)	なし
SX(F)009	12-A	139cm	79cm	6～22cm	なし
SX(F)010	13-B	124cm	68cm	3～16cm	なし



第53図 III・SX(F) 001・002, 004, 005焼土造構実測図



第54図 III・SX(F)006~010焼土構造実測図



## ③柱列 (第55・56図)

## SA 001 柱列 (第55図)

9D・E、10D・Eグリッドに5個の柱穴からなる柱列が確認された。方位はN66°Wを測る。

## ④掘立柱建物跡

## SB 001 挖立柱建物跡 (第56図)

12、13Dグリッドにあり、桁行1間、梁行2間、柱間平均はそれぞれ295cm、119cm、桁行方位はN61°Wである。

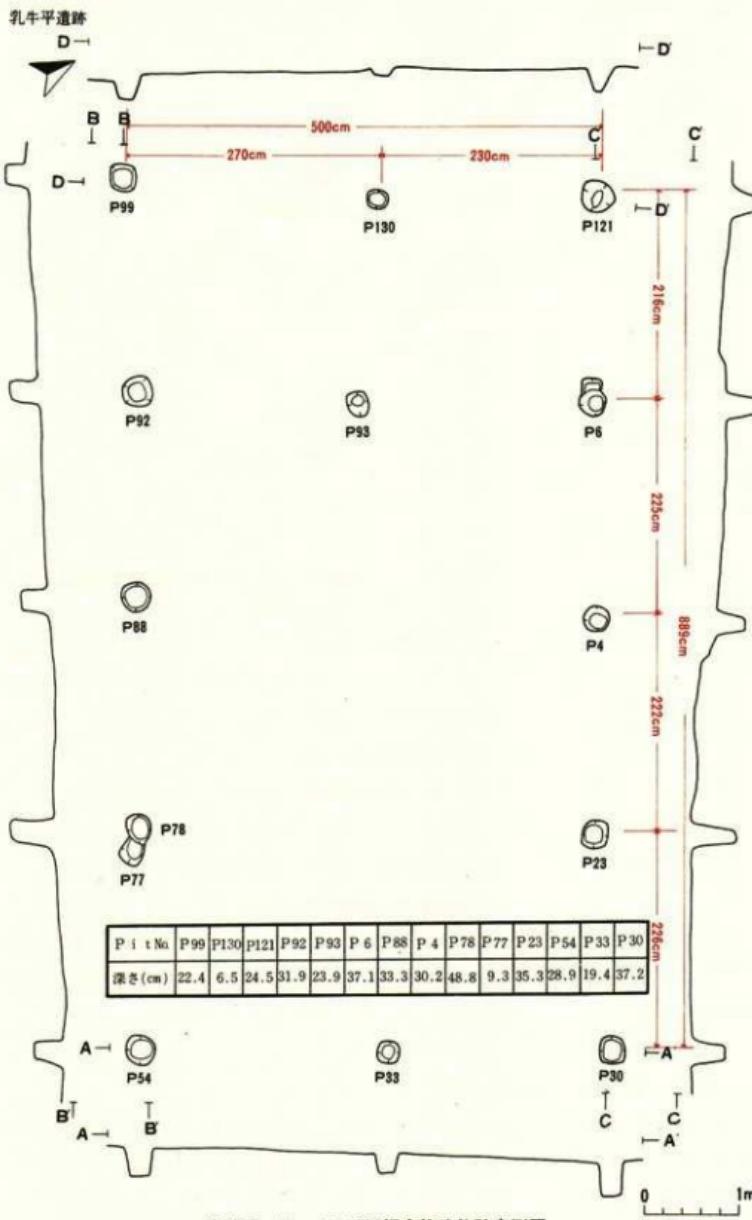
## SB 002 挖立柱建物跡 (第57図)

第55図 III・SA 001 柱列実測図  
るが、新旧関係は不明である。桁行4間、梁行2間、柱間平均はそれぞれ225cm、250cm、桁行方位はN70°Wである。

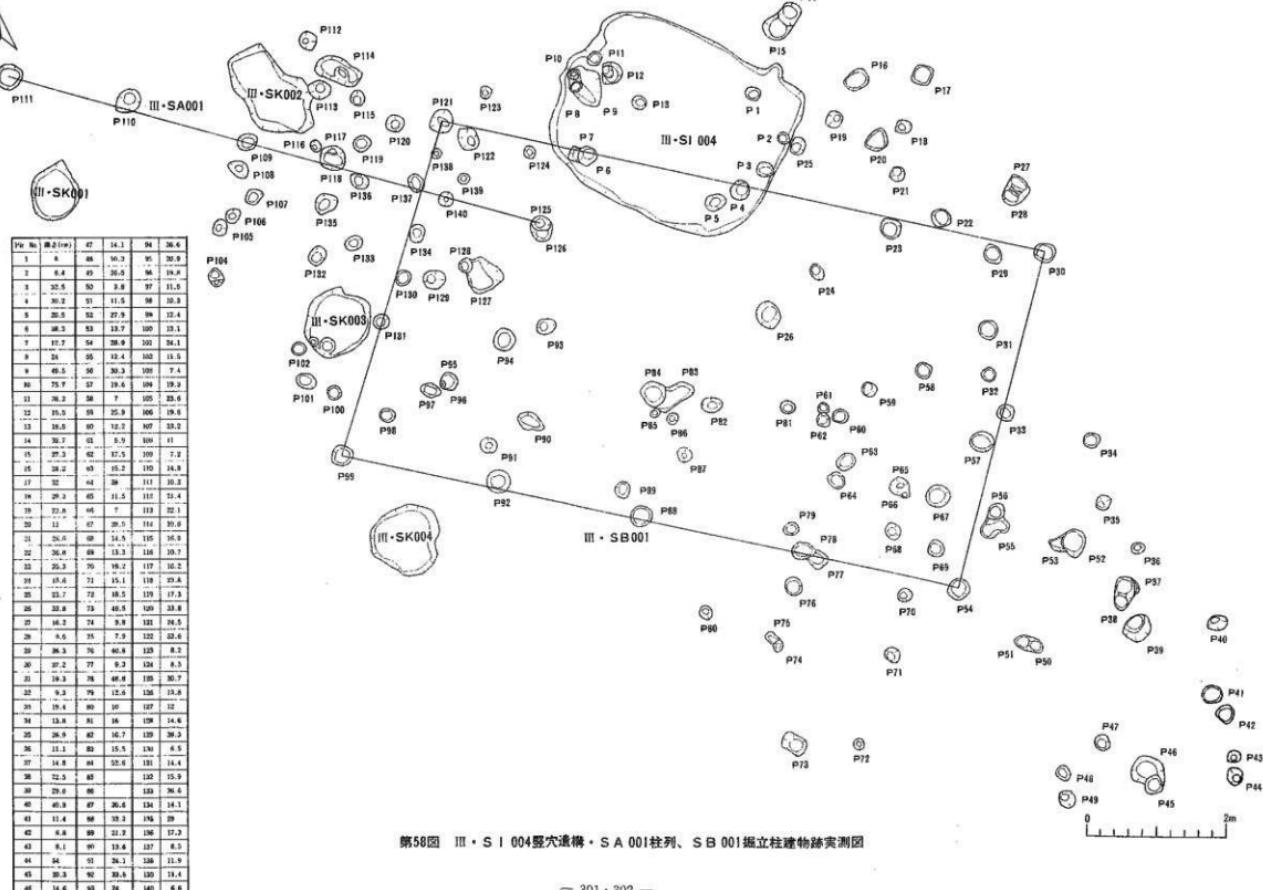
## ⑤溝跡

## SD 001 ~ 006 溝跡 (第59図 図版51・52)

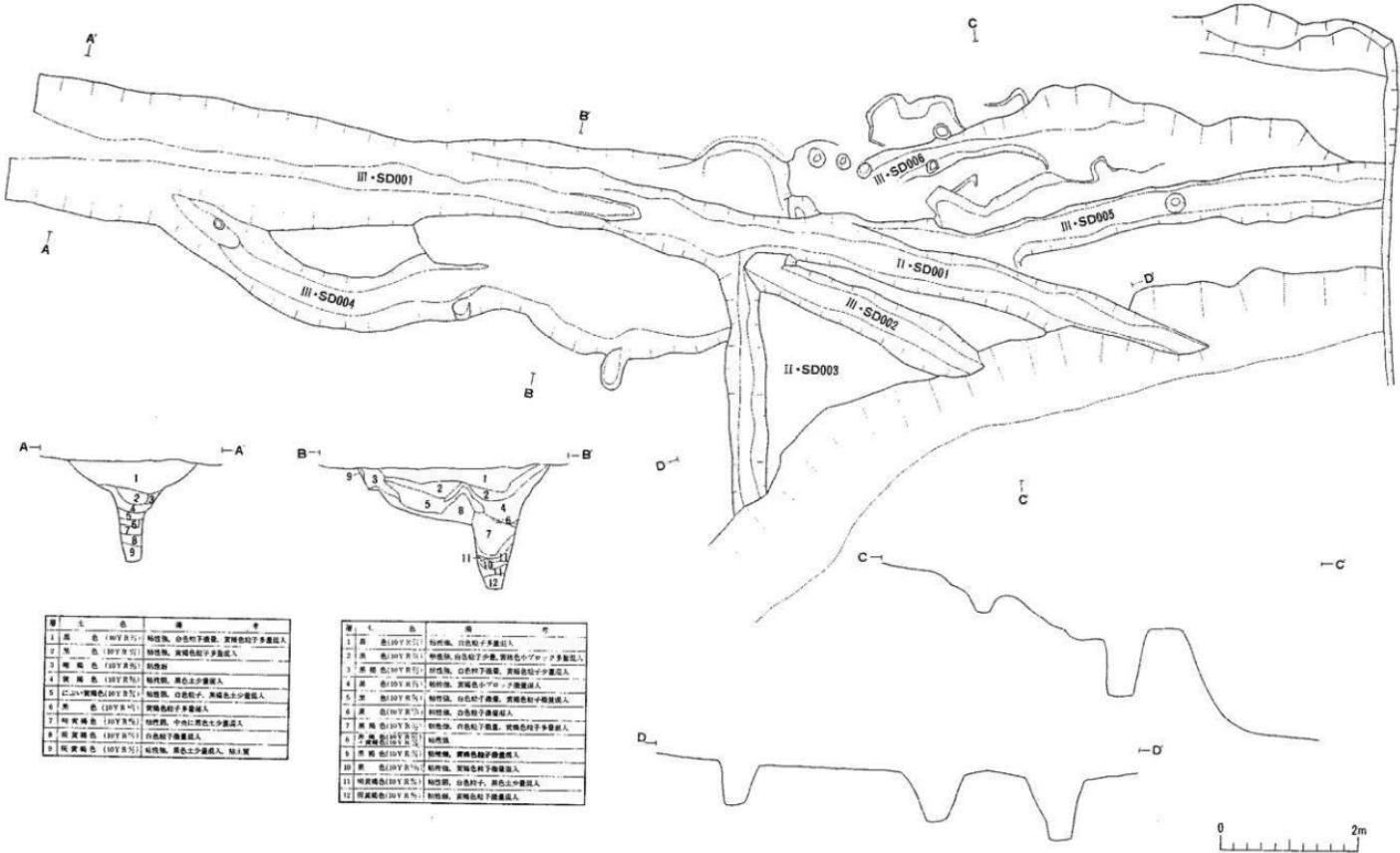
III郭の西端に構築された6条の重複する溝である。この付近はIII、IV郭の接点にあたるが、両郭は掘によって切断されてはいないことから、郭の防禦的性格を有する造構かと考える。柱痕跡は検出されなかった。SD 001が殊に深く、180cmの深さを測る。



第57図 III・SB 002掘立柱建物跡実測図

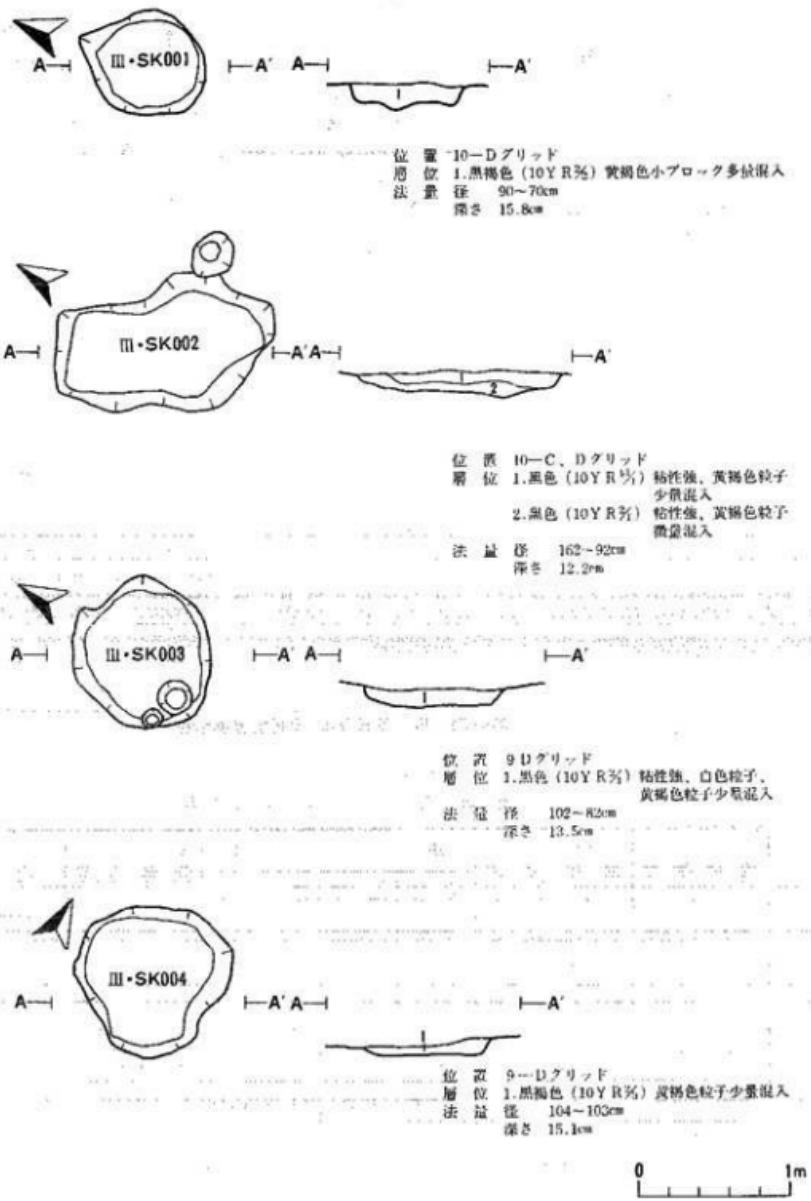


第58図 III-SI 004堅穴遺構・SA 001柱列・SB 001据立柱遺物跡実測図

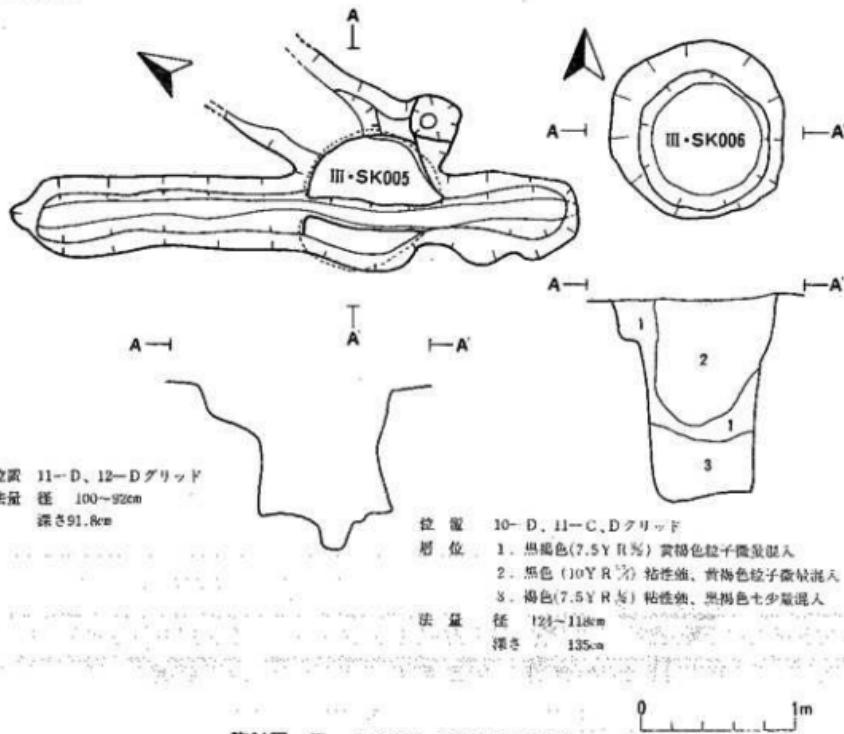


第59图 III·SD 001~006剖面示意图

## ⑥ 土 壤 (第60・61図、図版53)



第60図 III・SK001~004土壤実測図

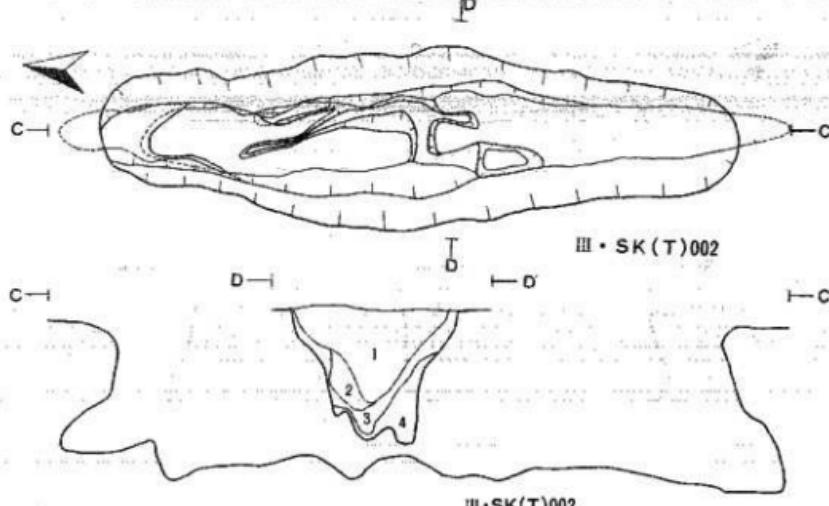
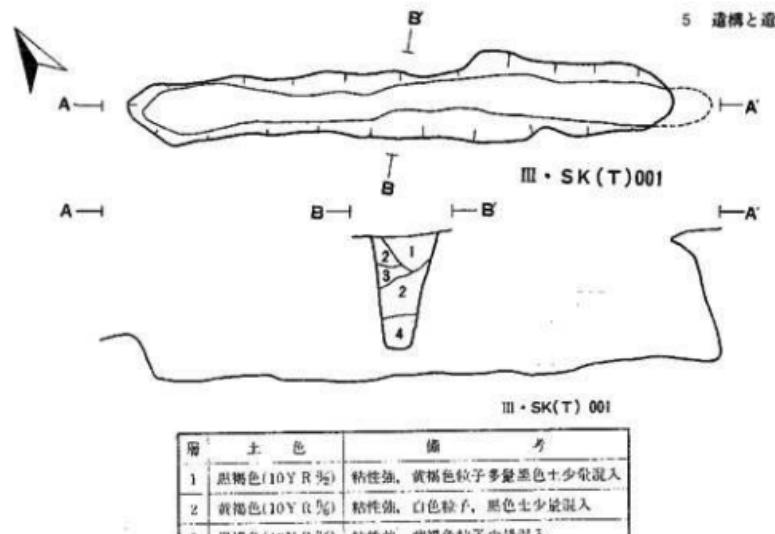


第61図 III・SK005・006土壤実測図

(7) Tピット (第62・63・66図、図版53)

第6表 III・SK(T)Tピット観察表

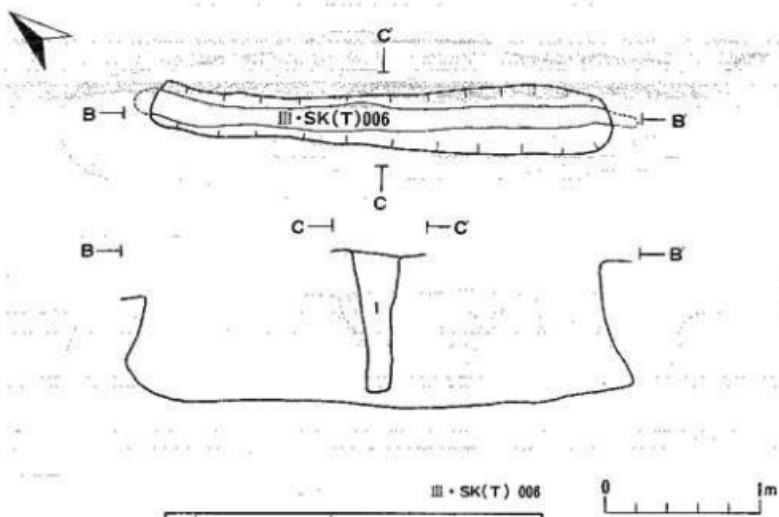
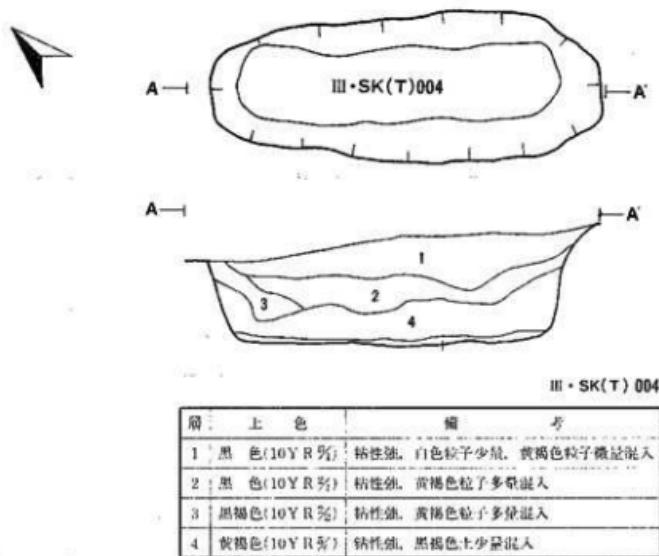
造構番号	検出位置	法量			長軸方位	遺物
		長径	短径	深さ		
S K(T)001	12-E, 12-F	360cm	61cm	73~74cm	N-72.5°-W	なし
S K(T)002	13-B 12-C, 13-C	45cm	118cm	68~105cm	N-41°-W	なし
S K(T)003	11-D, 12-D 12-E	374cm	65cm	115~116cm	N-72°-W	なし
S K(T)004	9-H	258cm	100cm	52~73cm	N-43.5°-W	なし
S K(T)005	11-C, 12-C 11-D, 12-D	345cm	175cm	130~155cm	N-84°-W	なし
S K(T)006	13-D, 14-D	305cm	45cm	61~90cm	N-47°-W	なし



III・SK(T)001・002T ピット実測図

層	土色	備考
1	黒色(10Y R 5%)	粘性強。黄褐色粒子多量混入
2	赤色(10Y R 5%)	粘性強。黄褐色粒子少量混入
3	黒褐色(10Y R 5%)	粘性強。黄褐色粒子多量混入
4	黄褐色(10Y R 5%)	粘性強。黑色土少量混入

0 1m



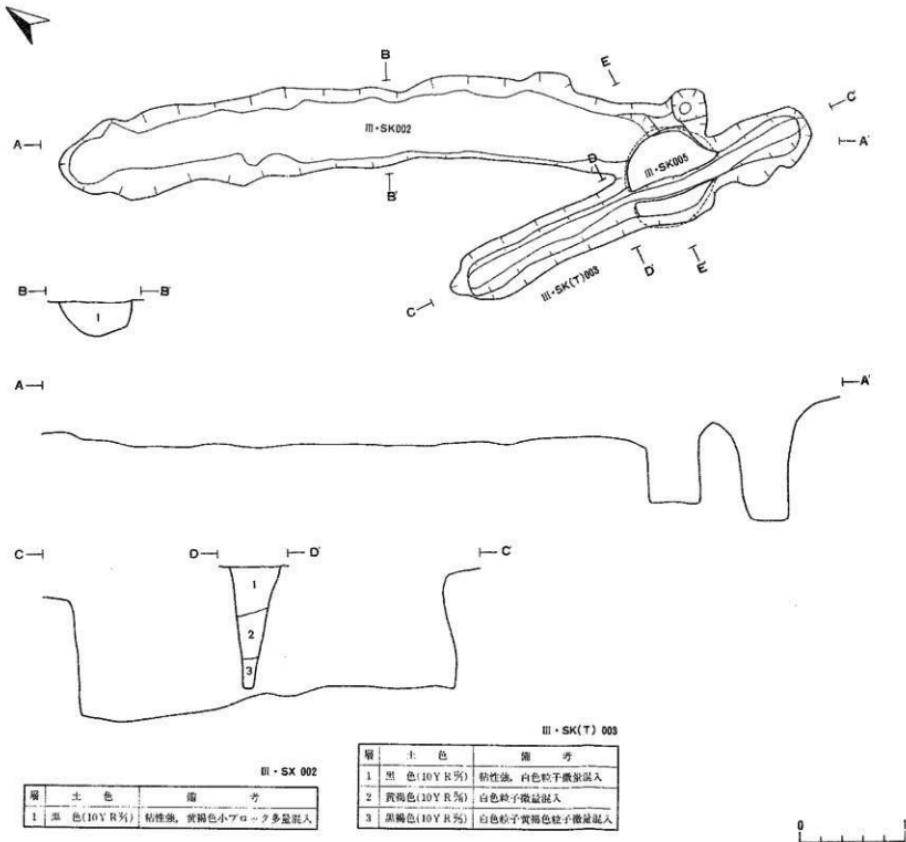
第63図 III・SK(T)004・006Tピット実測図

## ③ その他の遺構 (第64・66・67図、図版54~56)

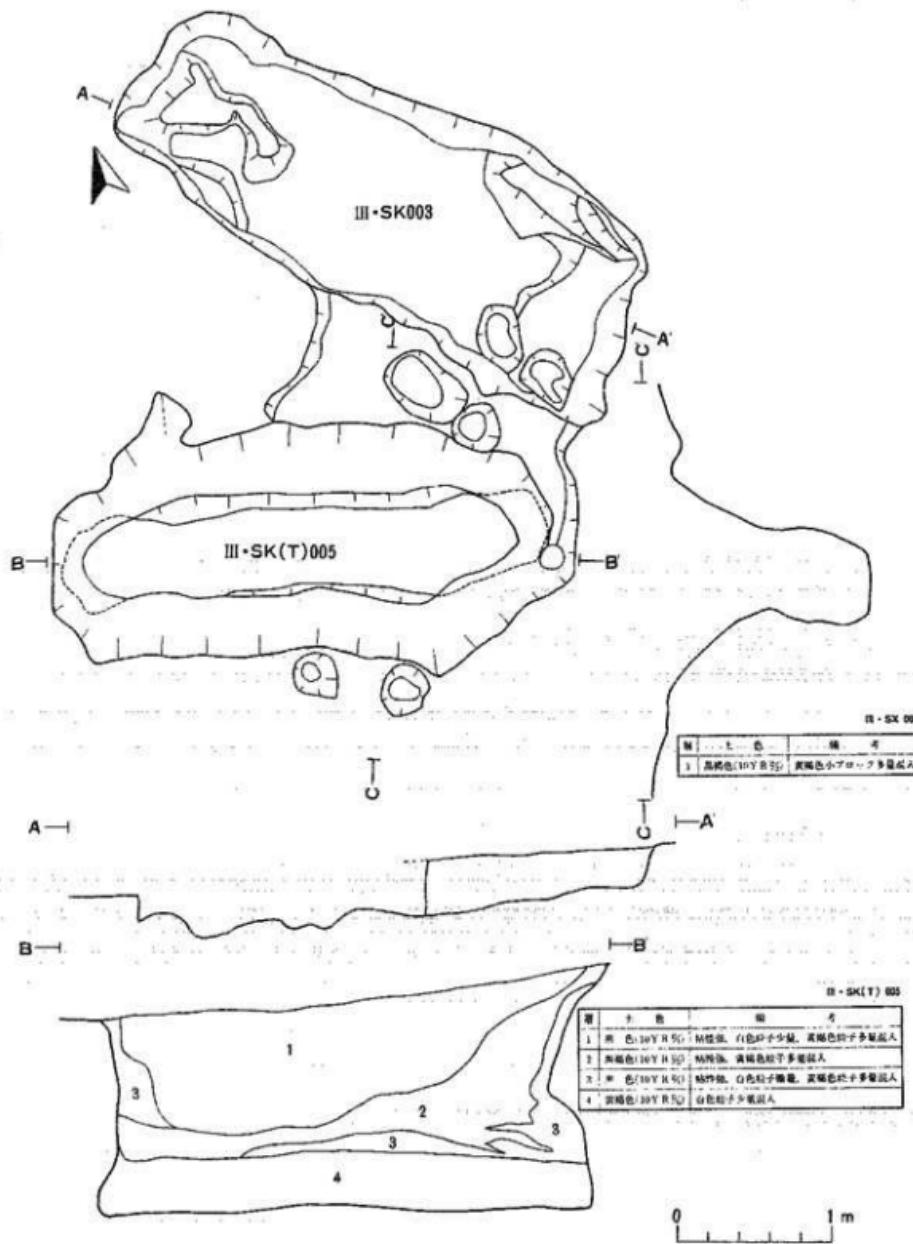
番	生	死	考
1.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨左側、右内板子骨茎人。
2.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨小口アーチ骨茎人。
3.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨
4.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨はゾウ耳。
5.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨左アーチ骨茎人。
6.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨人。
7.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨右アーチ骨茎人。
8.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨右アーチ、右内板子骨茎人。
9.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨人。
10.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨、頭蓋骨小口アーチ骨茎人。
11.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨、頭蓋骨上子骨茎人。
12.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨、頭蓋骨上子骨茎人。
13.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨、頭蓋骨小口アーチ骨茎人。
14.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨、頭蓋骨小口アーチ骨茎人。
15.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨、頭蓋骨左アーチ骨茎人。
16.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨、頭蓋骨左アーチ骨茎人。
17.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨、頭蓋骨左アーチ骨茎人。
18.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨、頭蓋骨左アーチ骨茎人。
19.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨、頭蓋骨左アーチ骨茎人。
20.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨、右内板子骨茎人。
21.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨、右内板子骨茎人。
22.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨、右内板子骨茎人。
23.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨、右内板子骨茎人。
24.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨、右内板子骨茎人。
25.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨小口アーチ骨茎人。
26.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨小口アーチ骨茎人。
27.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨、右内板子骨茎人。
28.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨、右内板子骨茎人。
29.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨、右内板子骨茎人。
30.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨左アーチ、右内板子骨茎人。
31.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨左アーチ骨茎人。
32.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨左アーチ骨茎人。
33.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨左アーチ骨茎人。
34.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨左アーチ骨茎人。
35.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨左アーチ骨茎人。
36.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨左アーチ骨茎人。
37.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨左アーチ骨茎人。
38.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨左アーチ骨茎人。
39.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨左アーチ骨茎人。
40.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨左アーチ骨茎人。
41.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨左アーチ骨茎人。
42.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨、右内板子骨茎人。
43.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨、右内板子骨茎人。
44.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨、右内板子骨茎人。
45.	乳牛	(1971年5月)	頭蓋骨左アーチ骨茎人。



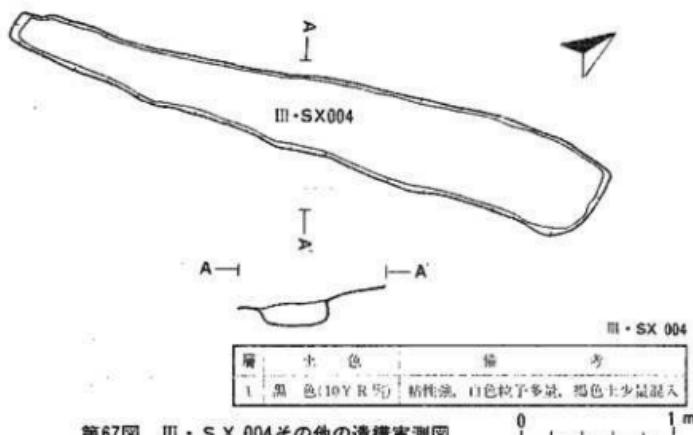
第64図 III・S X 001実測図



第65図 III・SK 005土壤・SK(T)003 Tピット SX 002実測図



第66図 III・SK(T)005 Tビット・SX 003実測図



第67図 III・SX 004その他の造構実測図

**S X 001** (第64図、図版54・55)

III郭の西側斜面を穿ち、その中に地山土のブロックを投げ込んだものである。掘り込みは深い所で2mほどあり、ブロックの径は50cm~100cmである。掘り込みの西端は調査できなかったが<sup>1</sup>、II・III郭間の堀と連続するものらしい。

**S X 002** (第65図)

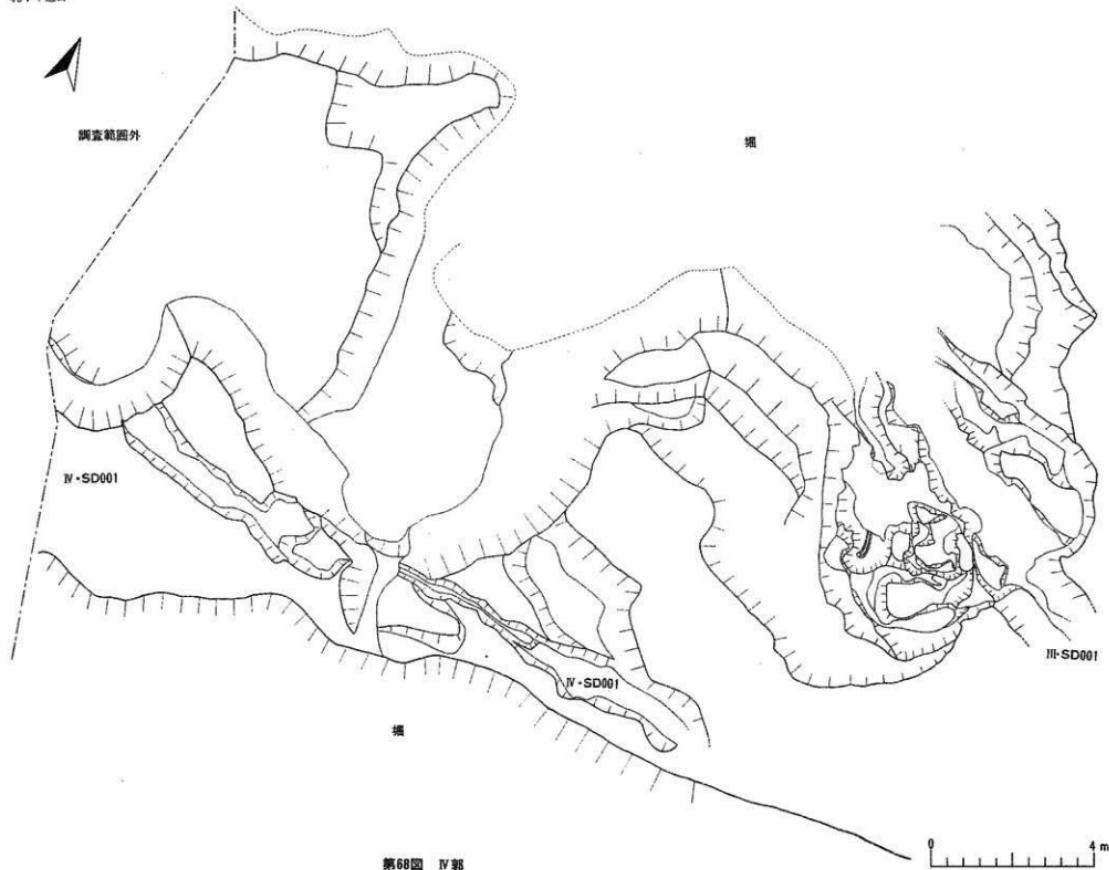
12D・Eグリッドにある溝状の造構である。S K 005 上環、S K (T) 003 Tビットと重複するが、新旧関係は把握できなかった。長さ600cm、幅70~80cm、深さ30cmで、底面は丸みを帯びている。

**S X 003** (第66図、図版55・56)

12・13Dグリッドに検出された。長さ375cm、幅140cmであるが、底面に凹凸があり、20~35cmの深さである。隣接してほぼ同規模の平面を有するS K (T) 005 Tビットがあり、あたかも S X 003 の構築を途中で断念し、長軸方位を変えて、S K (T) 005 を構築したかの感を受ける。

**S K 004** (第67図)

13Cグリッド内にあり、その北端はS I 003 とほぼ接し、確認面も同一面である。長さ405cm、最大幅60cm、深さ10~15cmを測り、底面は平坦である。



第68図 IV部

## (4) IV郭検出遺構

## ① 溝 跡

## SD001 溝 (第68図、図版51)

IV郭はⅢ郭側のごく一部が調査範囲に入ったのみであるが、IV郭東南端の郭縁辺に沿って検出された。長さ約8mを測るが、幅は狭い部分で30cm、広い所で150cmを測り、深さも部分的に差があり、30~50cmである。柱痕跡は認められなかった。

## (5) トレンチ

## Aトレンチ (第69図)

I郭上39.1グリッド杭、I郭下の48Kグリッド杭を結ぶラインを設定し、このライン上のI郭東端からトレンチを設け、トレンチ東側で土層断面図を作成した。郭斜面からそのまま連続して壠へ連なるが、壠の北西側に地山の削り出しによる土塁が見られる。壠内の堆積土はシラスとシラス混じりの黒褐色土であるため、崩壠が激しく底部はボーリング探査によったが、壠底と土塁上との高底差は450cm、I郭上の平場との高底差は1700cmを測る。I郭西側は土取場となりV郭が破壊されているが、Aトレンチの西にある法面には、Aトレンチで確認された壠が現われており、その方向からV郭の北西端へと向かうらしいことがうかがえる(図版60)。

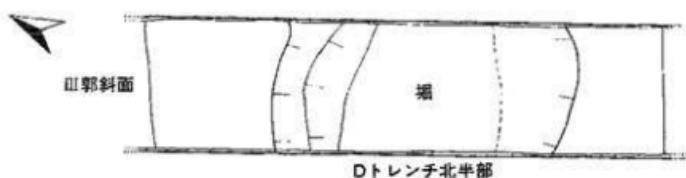
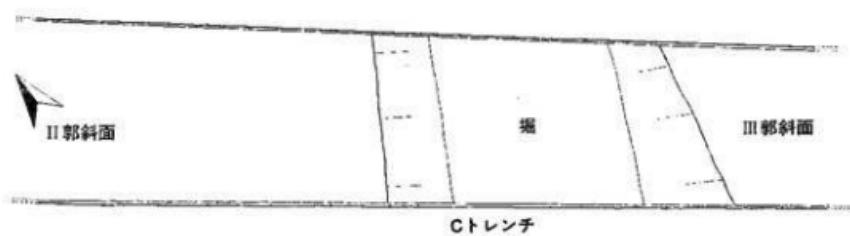
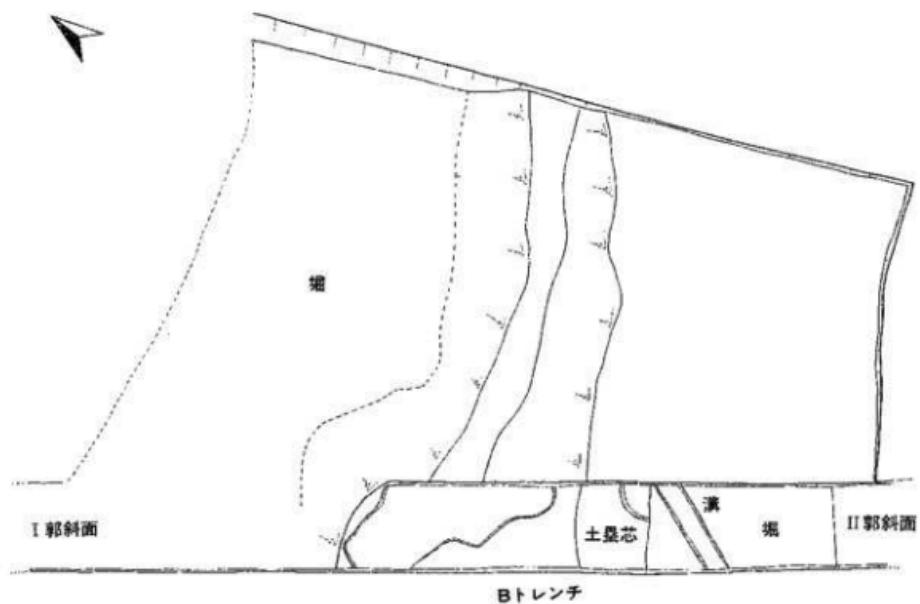
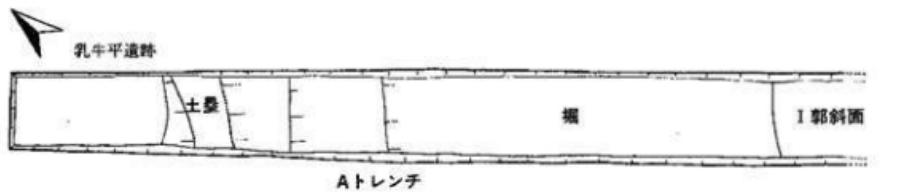
また、I郭斜面下方西側の法面には、法面に沿って壠内の土層断面が現われており、これがI郭とV郭間の壠であると観察される。

## Bトレンチ (第70図)

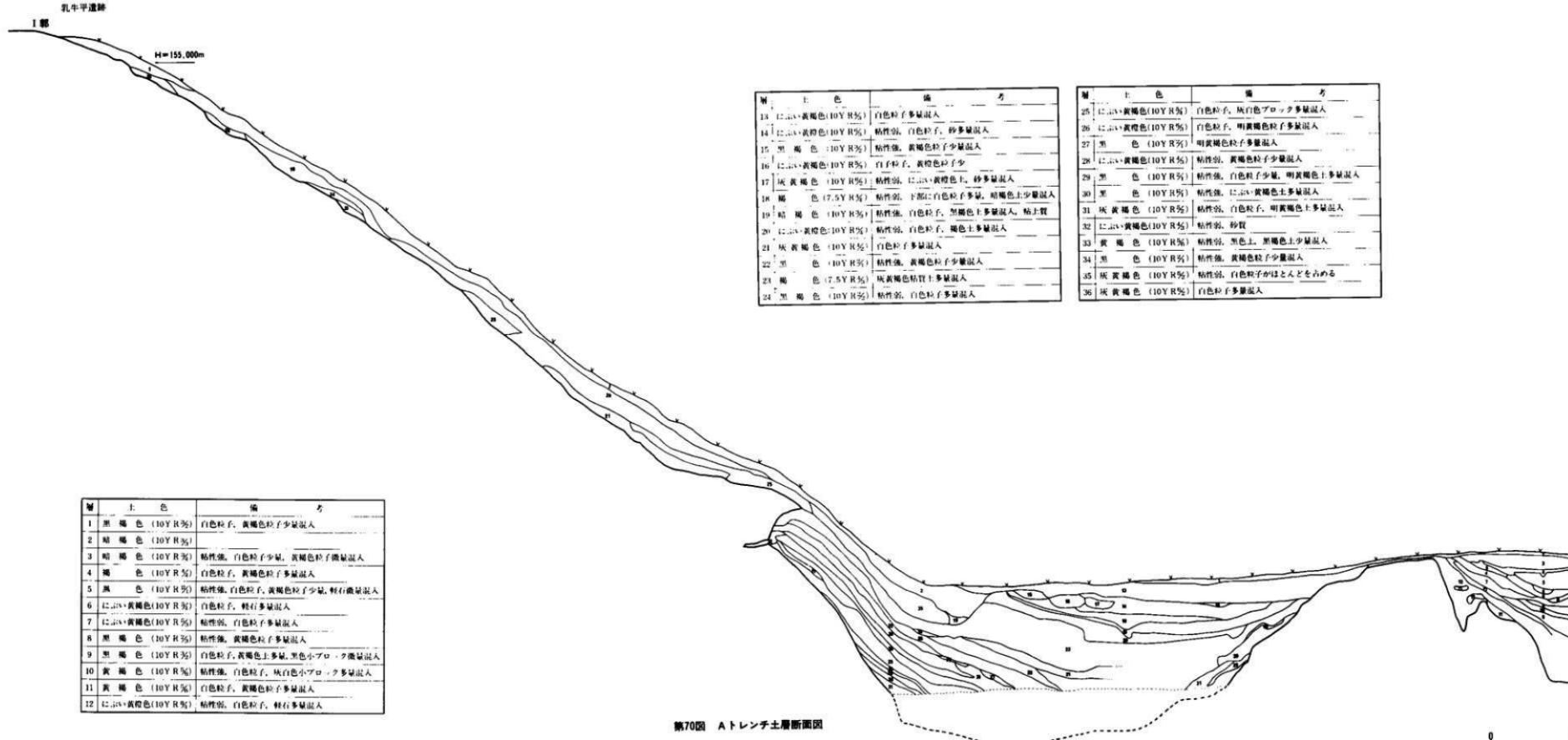
I郭上33.7グリッド杭とII郭上25.5グリッドを結ぶラインにトレンチを設定し、トレンチ西側で土層断面図を作成した。トレンチ内には、2本の壠とその間に土塁が認められた。I郭側の壠は、これも上層の崩壠が激しく、底部の確認はボーリング探査によったが、ほぼ平場で壠底の幅約400cm、現地表からI郭、II郭平場との高底差は、それぞれ1170cm、1550cmを測る。II郭側の壠は壠底が平坦で、幅440cm、現地表から260cm、II郭平場との高底差は1120cmを測る。壠底には幅60cm、深さ80cmで南北方向に走る溝があり、おそらく土塁の下を通ってI郭側の壠に通じる排水溝であろうと思われる。I郭側壠とII郭側壠との間に土塁が存在する。I郭側壠に連なる箇所には、郭上方に見られる黄褐色シラスのブロックを用いて盛り土部を作り、これと地山削り出しによる芯との間に、にぶい黄褐色シラスと灰黄褐色シラスを用いた版塗による土塁である。土塁上とI郭側壠底部との高低差は6800cm、II郭側壠との高低差は2400cmで、芯南端からI郭壠への傾斜面までの幅は700cmを測る。

## Cトレンチ (第71図)

II郭上19Hグリッド杭とIII郭上の13Fグリッド杭を結ぶラインでトレンチを設定し、その西



第69図 トレンチ平面図



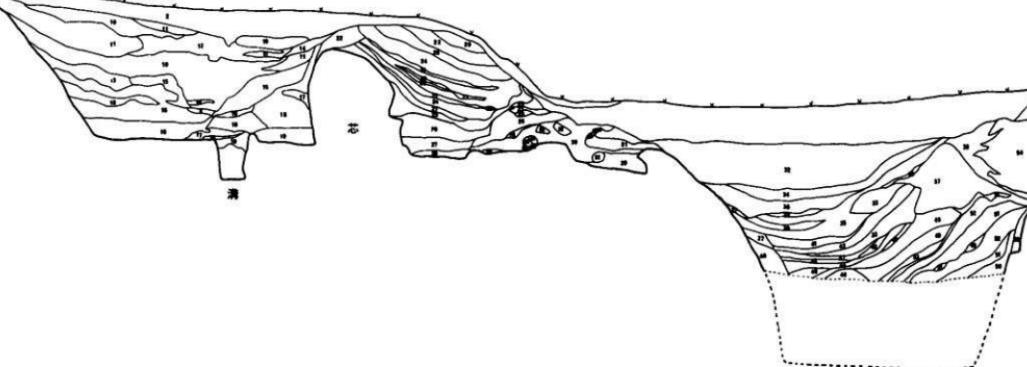
第70図 Aトレンチ土層断面図

番	土 色	備 考
1	黒 極 色 (10Y R 5)	黄褐色粒子多量混入
2	暗 黄 極 色 (10Y R 5)	粘性強、白色粒子少量混入
3	黑 極 色 (10Y R 5)	粘性強、黄褐色粒子、白色粒子、灰化物少量混入
4	暗 色 (10Y R 5)	黄褐色粒子微量混入
5	にじい 黄褐色 (10Y R 5)	白色粒子、黑色土微量混入
6	にじい 黄褐色 (10Y R 5)	粘性弱、轻石微量混入
7	にじい 黄褐色 (10Y R 5)	白色粒子少量混入
8	にじい 黄褐色 (10Y R 5)	白色粒子多量、黑褐色土少量混入
9	灰 黄褐色 (10Y R 5)	白色粒子多量、铁石少量混入
10	にじい 黄褐色 (10Y R 5)	粘性強、白色粒子、砂多量混入
11	にじい 黄褐色 (10Y R 5)	粘性強、白色粒子多量混入
12	灰 黄褐色 (10Y R 5)	粘性強、白色粒子、黑色土多量混入
13	明 黄褐色 (10Y R 5)	粘性強、白色粒子微量、黑褐色土多量混入
14	黑 極 色 (10Y R 5)	粘性強、黄褐色粒子、白色粒子微量混入
15	暗 極 色 (10Y R 5)	粘性強、白色粒子多量混入

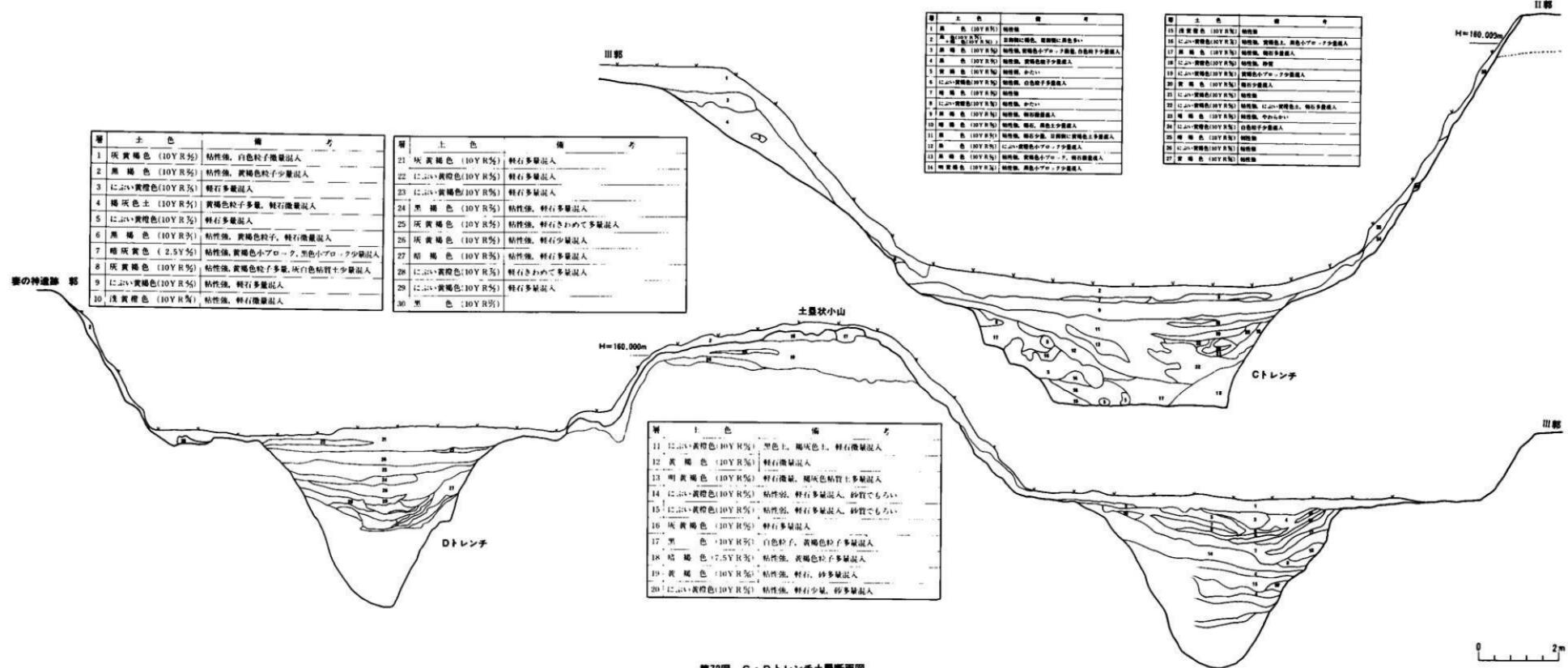
番	上 色	備 考
16	にじい 黄褐色 (10Y R 5)	白色粒子多量、砂铁微量混入
17	にじい 黄褐色 (10Y R 5)	白色粒子少量混入
18	灰 黄褐色 (10Y R 5)	白色粒子多量混入
19	褐 黄褐色 (10Y R 5)	粘性強、白色粒子、砂铁微量、暗褐色土少量出入
20	にじい 黄褐色 (10Y R 5)	黄褐色粒子、白色粒子多量混入
21	にじい 黄褐色 (10Y R 5)	白色粒子、砂、砾多量混入
22	灰 黄褐色 (10Y R 5)	粘性強、白色粒子、にじい 黄褐色土多量混入
23	黑 色 (10Y R 5)	粘性強、白色粒子多量混入
24	灰 黄褐色 (10Y R 5)	粘性強、白色粒子、砂、砾多量混入
25	灰 黄褐色 (10Y R 5)	粘性強、黄褐色小ブロック微量、白色粒子多量混入
26	灰 黄褐色 (10Y R 5)	白色粒子多量、上部に砂铁多量混入
27	灰 黄褐色 (10Y R 5)	白色粒子多量混入
28	灰 黄褐色 (10Y R 5)	粘性強、白色粒子、中央に砂多量、下部に砂铁微量混入
29	灰 黄褐色 (10Y R 5)	粘性強、白色粒子多量混入、上部は粘性質、下部は砂铁

番	土 色	備 考
30	にじい 黄褐色 (10Y R 5)	粘性強、白褐色小ブロック、白色粒子多量、砂铁微量混入
31	黄 色 (10Y R 5)	粘性強、白色粒子微量混入、粘土質
32	黑 黄褐色 (10Y R 5)	粘性強、黄褐色粒子、白色粒子多量混入
33	黑 黄褐色 (10Y R 5)	粘性強、白色粒子、白色粒子、浅黄色土小ブロック微量混入
34	黑 色 (10Y R 5)	粘性強、黄褐色粒子、白色粒子多量混入
35	黑 色 (10Y R 5)	白色粒子多量混入
36	黑 黄褐色 (10Y R 5)	粘性強、黄褐色粒子微量、下部に白色粒子多量混入
37	にじい 黄褐色 (10Y R 5)	粘性強、白色粒子微量混入
38	褐 色 (10Y R 5)	粘性強、明黄色土多量出入
39	黑 黄褐色 (10Y R 5)	粘性強、黄褐色粒子多量混入
40	灰 黄褐色 (10Y R 5)	白色粒子微量混入
41	黑 色 (10Y R 5)	褐灰色小ブロック、黑色小ブロック微量混入
42	黑 黄褐色 (10Y R 5)	黄褐色小ブロック、褐灰色小ブロック微量混入
43	黑 黄褐色 (10Y R 5)	粘性強、黄褐色小ブロック、褐灰色土微量混入

番	土 色	備 考
44	黑 極 色 (10Y R 5)	粘性強、明黄色土小ブロック多量混入
45	黑 黄褐色 (10Y R 5)	粘性強、黄褐色小ブロック微量混入
46	黑 黄褐色 (10Y R 5)	粘性強
47	黑 黄褐色 (10Y R 5)	粘性強、にじい 黄褐色小ブロック微量混入
48	黑 色 (10Y R 5)	明黄色小ブロック多量混入
49	にじい 黄褐色 (10Y R 5)	粘性強、褐灰色土、灰白色小ブロック多量混入
50	にじい 黄褐色 (2.5YR 5)	かたい
51	黑 色 (10Y R 5)	粘性強、白色粒子微量、褐色土多量混入
52	黄 色 (10Y R 5)	明黄色土、褐灰色土少量混入
53	黄 色 (10Y R 5)	細砂質
54	灰 黄褐色 (10Y R 5)	白色粒子少量混入
55	暗灰 黄褐色 (2.5Y R 5)	粘性弱、白色粒子少量混入
56	灰 黄褐色 (10Y R 5)	黑色粒子多量、黄褐色小ブロック、白色粒子微量混入
57	黑 黄褐色 (10Y R 5)	粘性強、黄褐色粒子、白色粒子微量混入



第71図 Bトレンドテ土層断面図



第72回 C・Dトレーナー土層断面図

側で土層断面を観察した。堀は底面が平坦で、幅430cm、現地表から300cmの深さを測る。II郭平場との高低差は980cm、III郭平場との高低差は約850cmを測る。

#### Dトレンチ（第71図）

III郭上：9Gグリッド杭からGラインに沿って、妻の神III遺跡の平場へ向けてトレンチを設定し、その東側で土層断面図を作成した。III郭と妻の神III遺跡との間には、土壘状の小山があることが調査前から明らかであったが、この両側に堀が検出された。いずれも郭と土壘状小山との間に平坦面を有し、そこからV字状の薙耕堀を掘り込んでいる。III郭側の堀は、現地表からの深さが420cm、III郭との高低差は約600cm、妻の神III遺跡側の堀は、現地表からの深さ440cm、妻の神III遺跡の郭との高低差は780cmを測る。

以上のA～Dトレンチの調査結果と郭周辺の地形観察から、各郭の周辺には堀が巡り、要所に土壘の存在することがほぼ明らかである。

### (6) 遺 物

#### a. 土 器（第73～79図、図版69～71）

出土した土器はごく少量であるが、以下の9類に分類され、時間的に大きな幅を有している。

第1類（1～11）：表裏繩文が施され、多くは胎土に纖維を含み、尖底らしいものも見られる。縄文時代早期長七谷地第Ⅲ群か早稻田6類に位置付けられる。

第2類（12・13）：第1類よりも器厚が厚く、突唇、縦条体圧痕の見られるもの。縄文時代前期、円筒下層Ⅱ式かと考える。

第3類（13～33・46）：沈線により流動的なモチーフの描かれたもので、磨消繩文の施されたものを含む。縄文時代後期、十腰内Ⅰ式か。

第4類（34）：沈曲線と磨消繩文の見られる土器であるが、第3類のモチーフとは異なり、口縁部も小波状となって、第3類とは区別されるもの。晩期の新しい時期のものか。

第5類（35～44）：縄文あるいは撫糸文のみのもの。

第6類（45）：無文のもの。

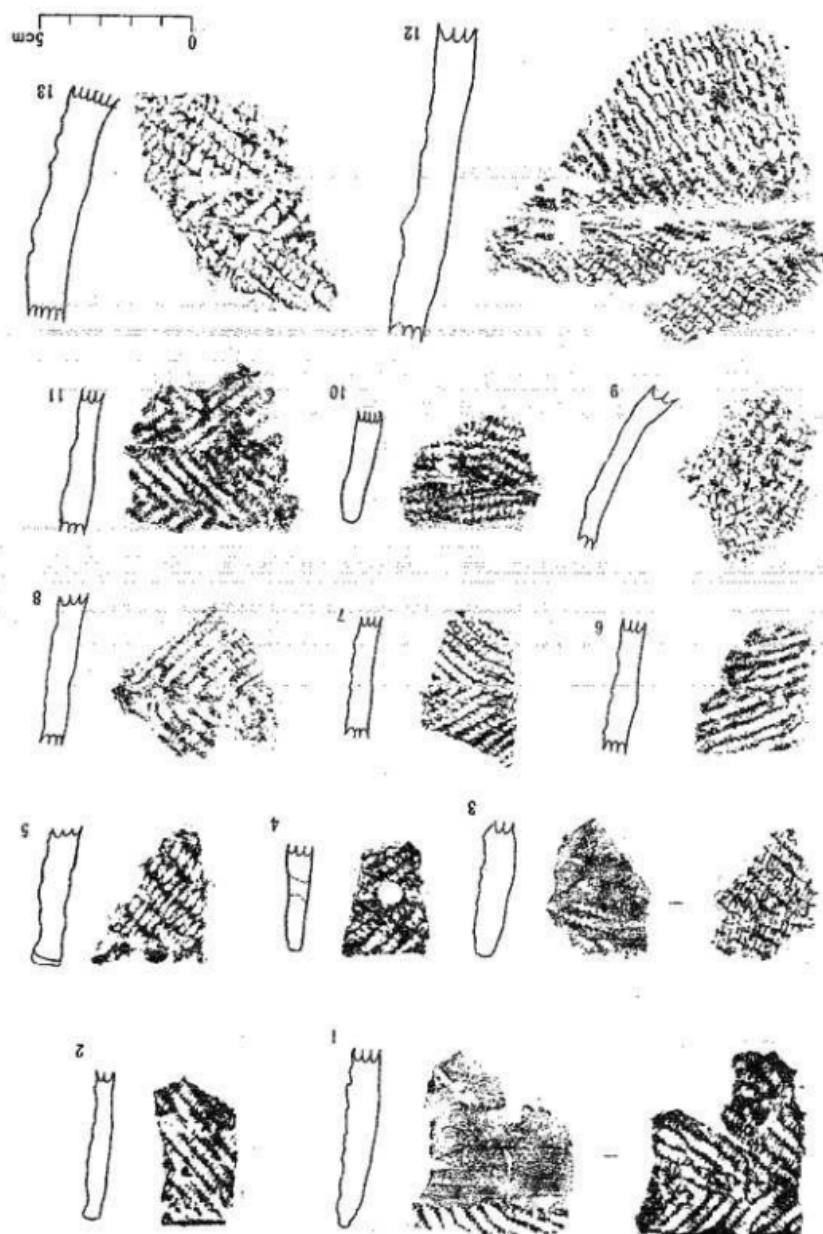
第7類（47～50）：縄文、平行沈線文、鋸歯状文の施されたもの。47、50は弥生時代の田舎館式であろう。

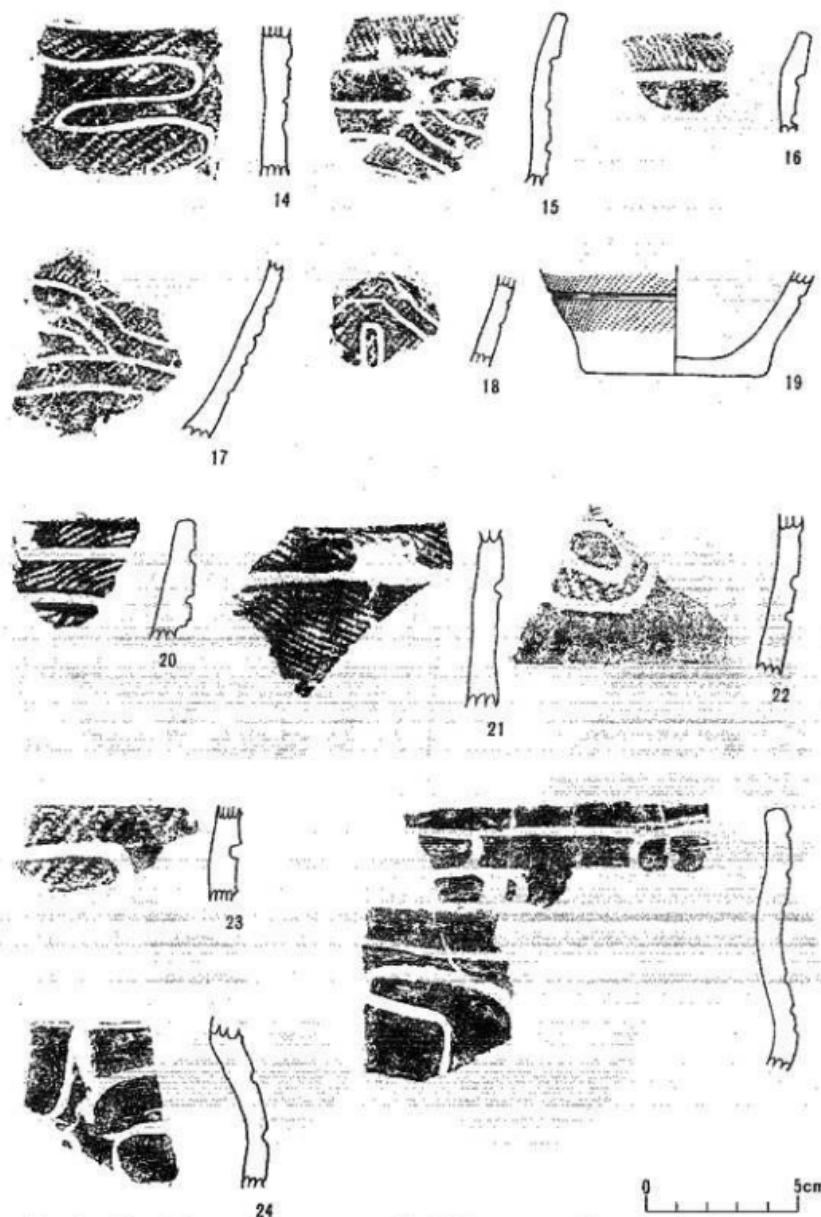
第8類（51～58）：撫糸文のみのもの。弥生時代の小坂Ⅱ式である。

第9類（59～64）：中世陶器。

以上のように館造築以前の縄文時代早期末葉、前期初頭、後期前葉、晩期前葉、弥生時代中後期にわたる土器が出土しているが、館に伴う中世陶器はわずか6片にすぎない。

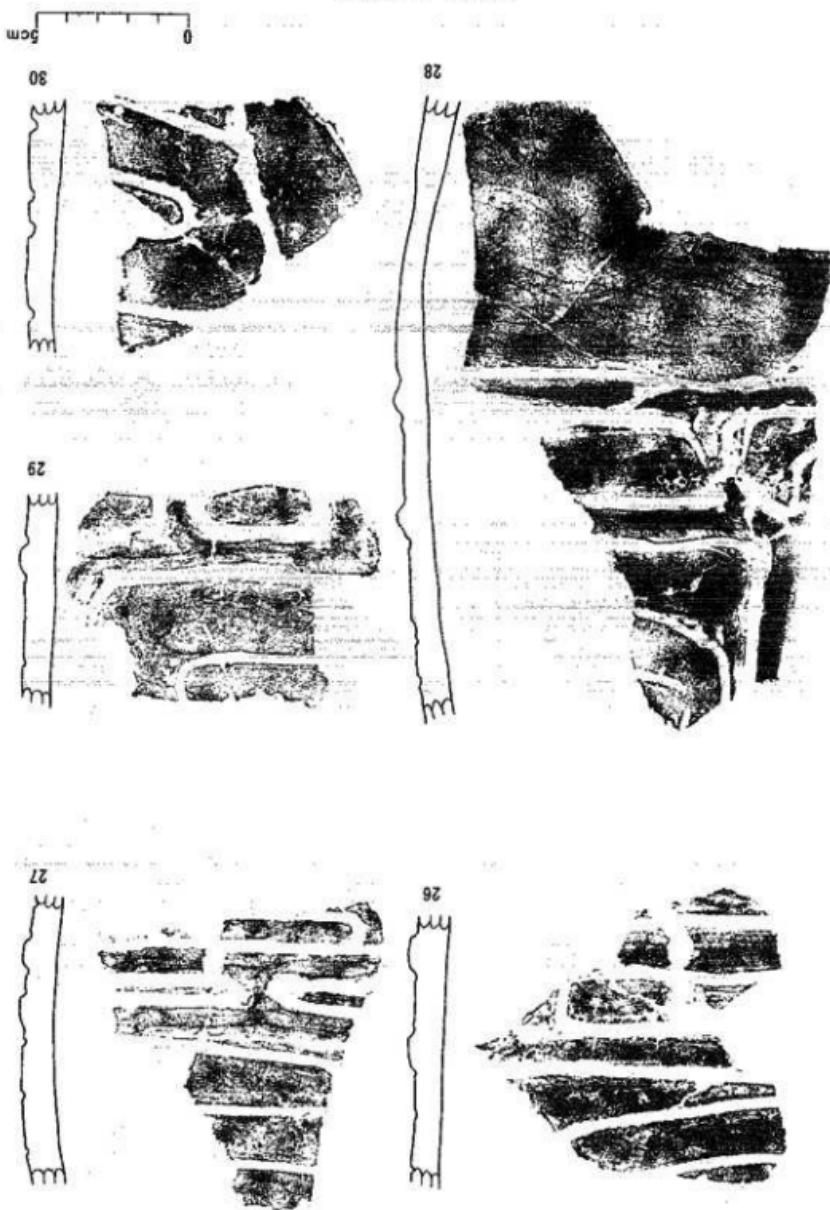
第78圖 出土遺物(1)

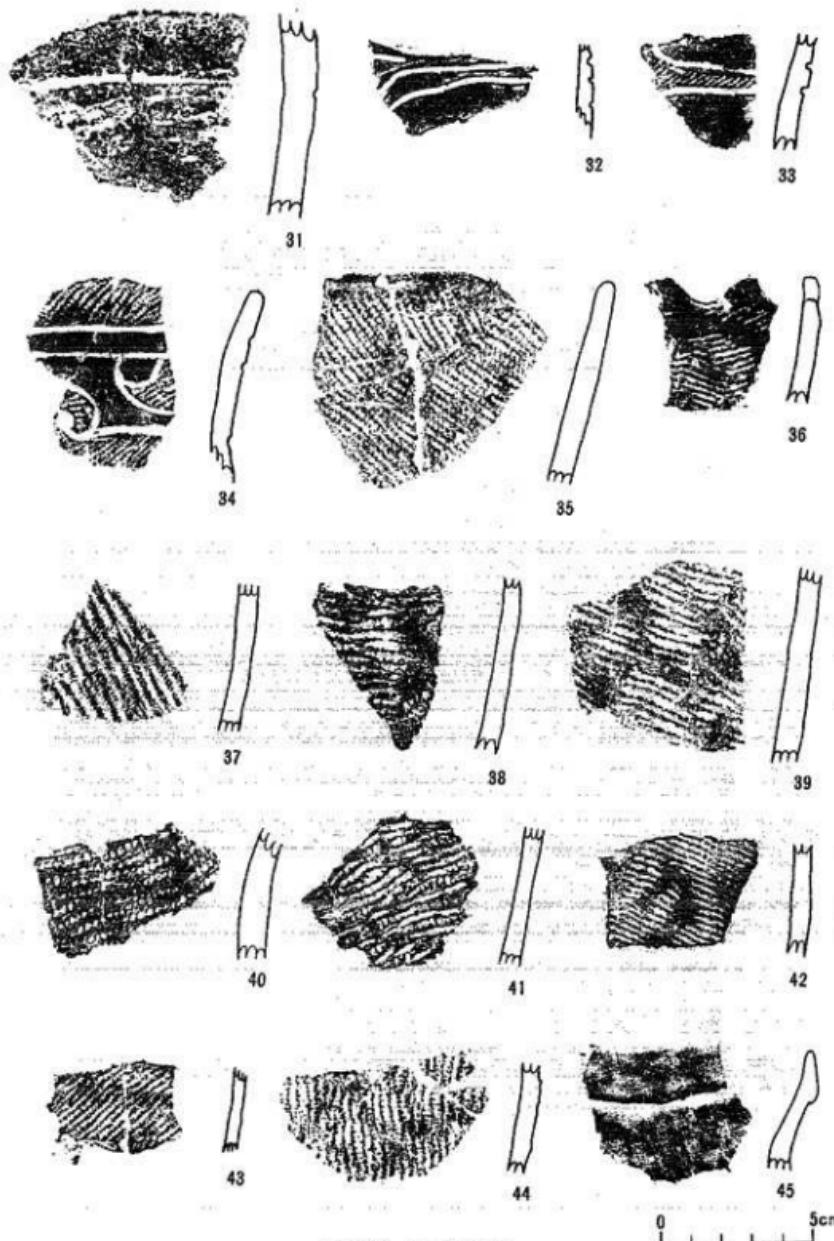




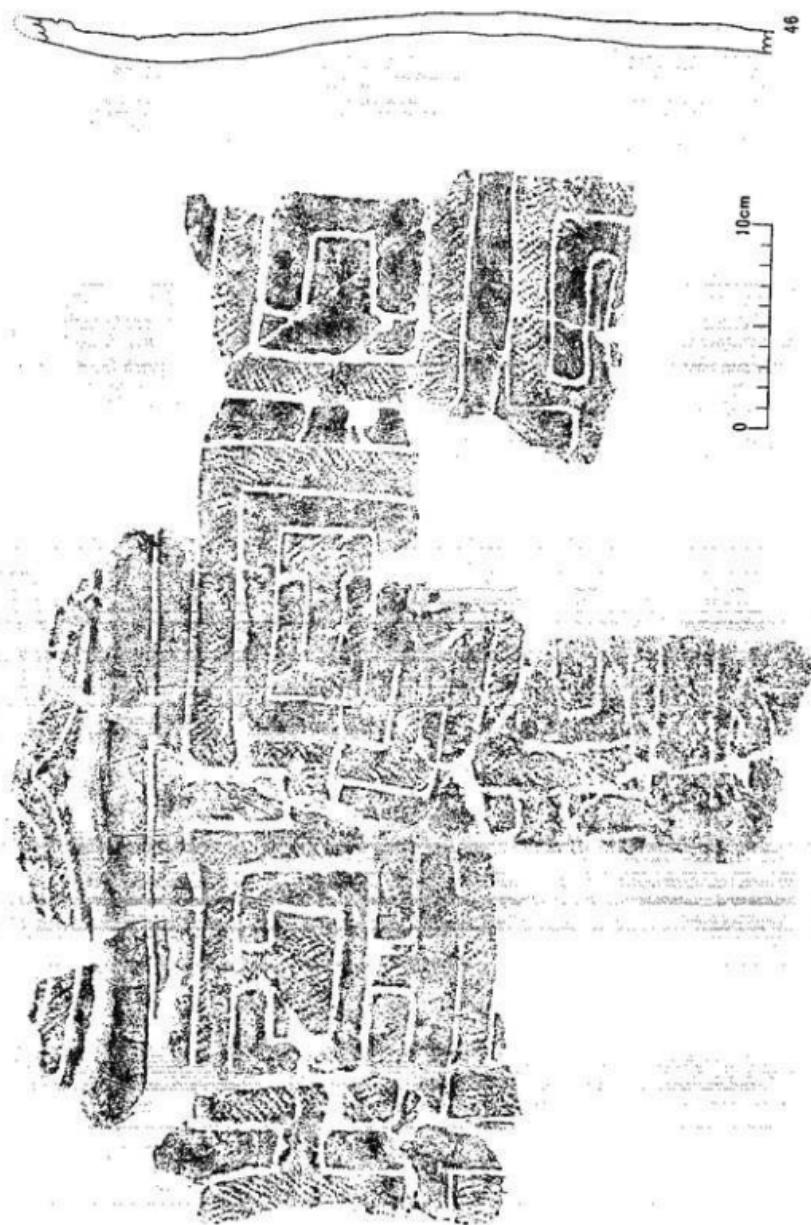
第74図 出土遺物(2)

第75圖 出土遺物(3)

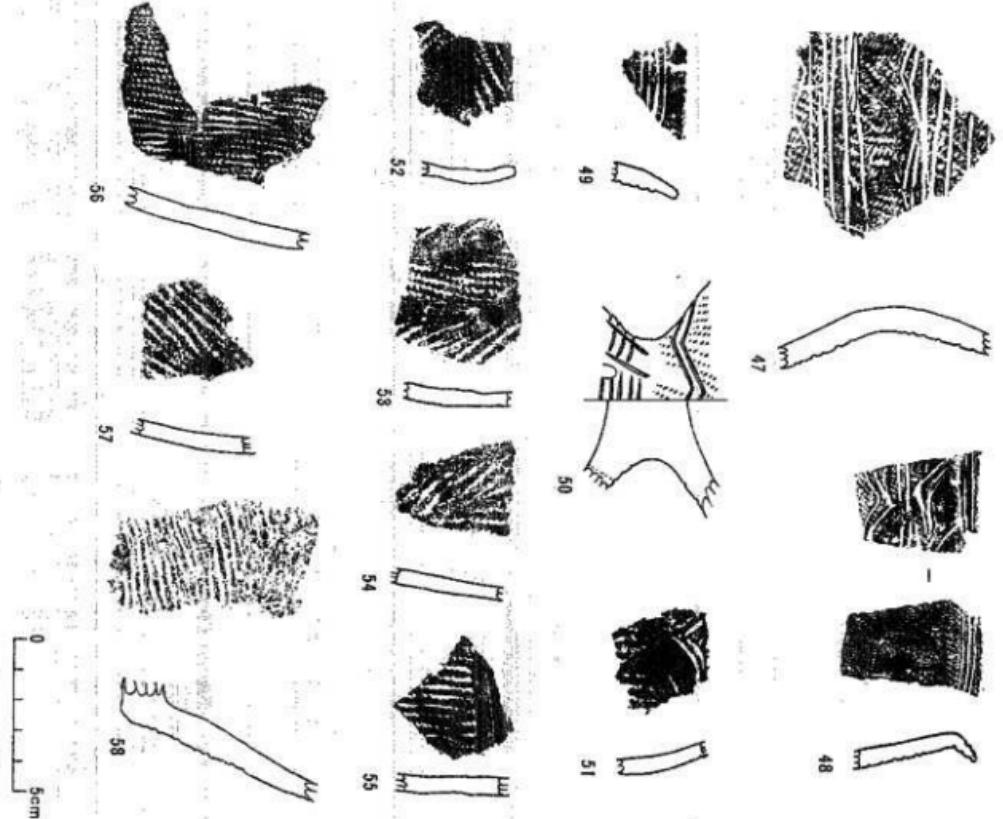




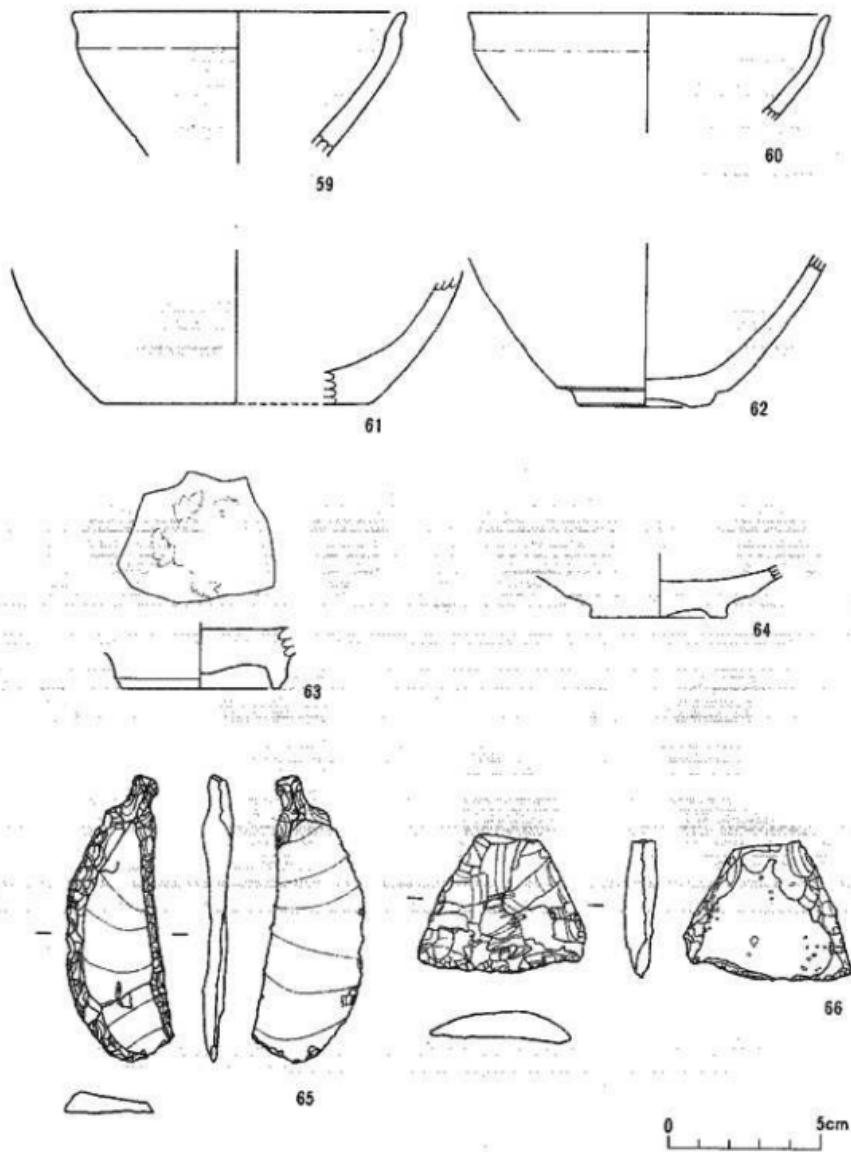
第76図 出土遺物(4)



第77図 出土遺物(5)



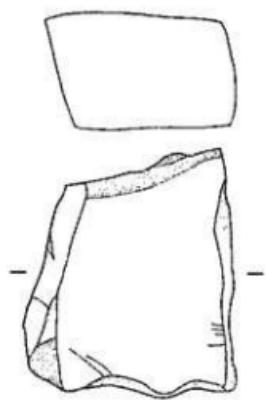
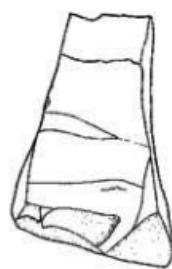
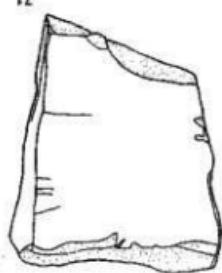
第78図 出土遺物(6)



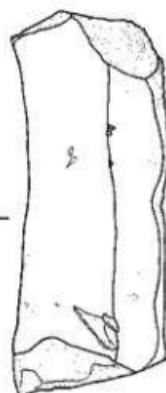
第79図 出土遺物(7)

第80圖 出土遺物(8)

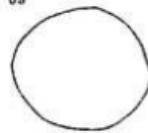
5cm  
0  
71



70



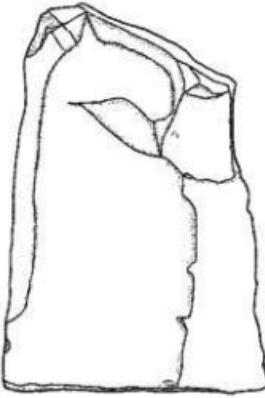
69



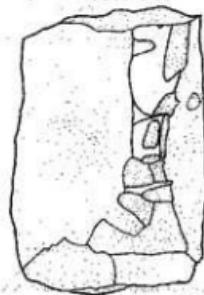
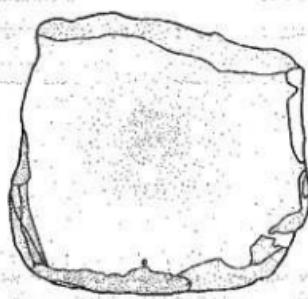
89



8 圖版之遺物



72



73



74

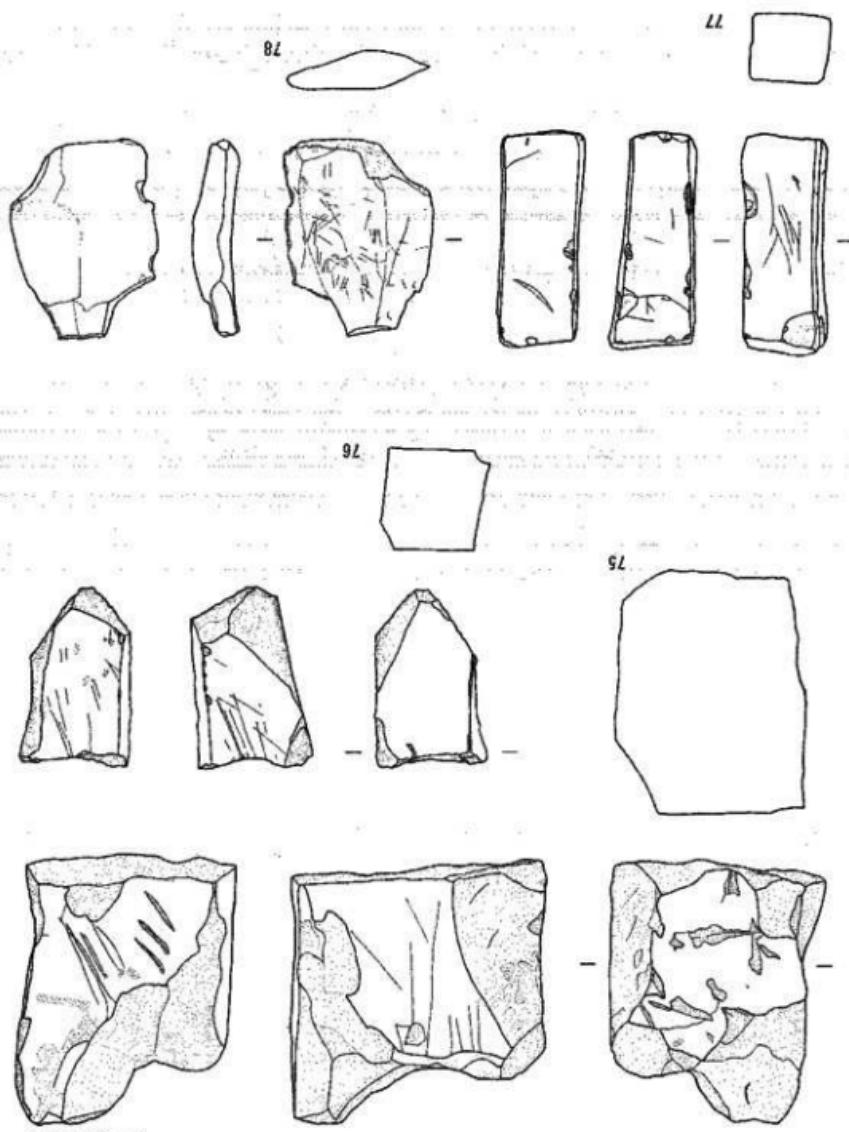


0 5cm

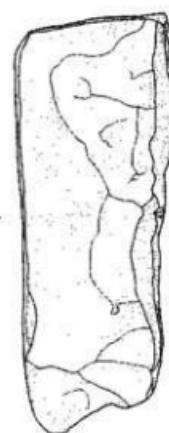
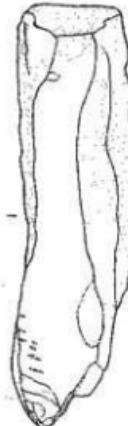
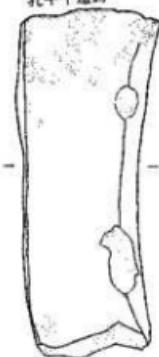
第81図 出土遺物(9)

圖82 出土遺物

5cm 0



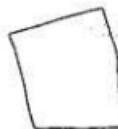
乳牛平遺跡



79



80

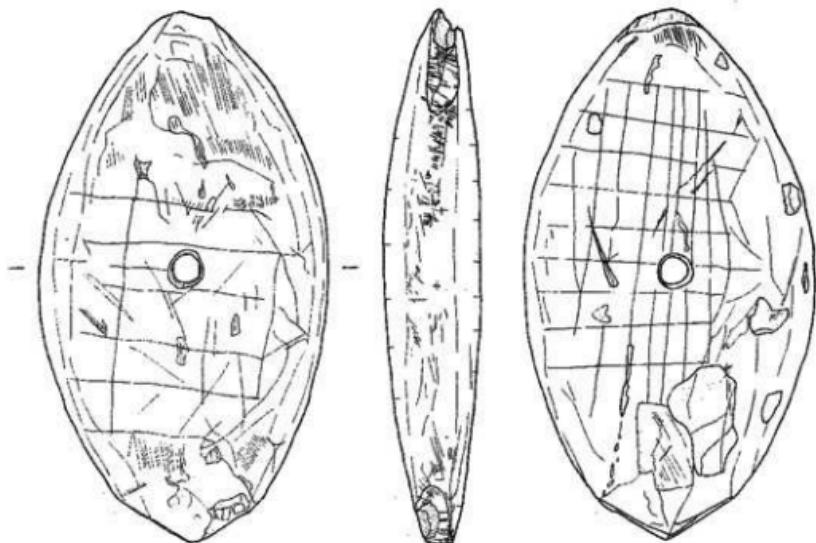


81

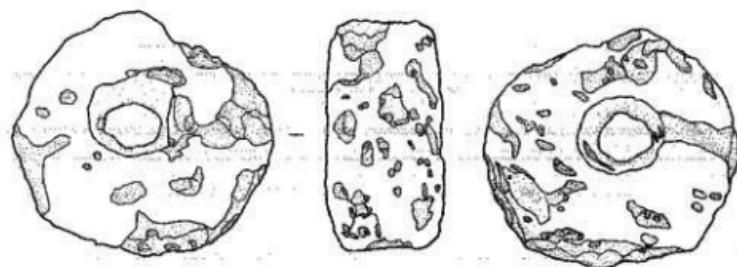
0

10cm

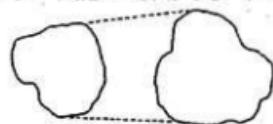
第83図 出土遺物①



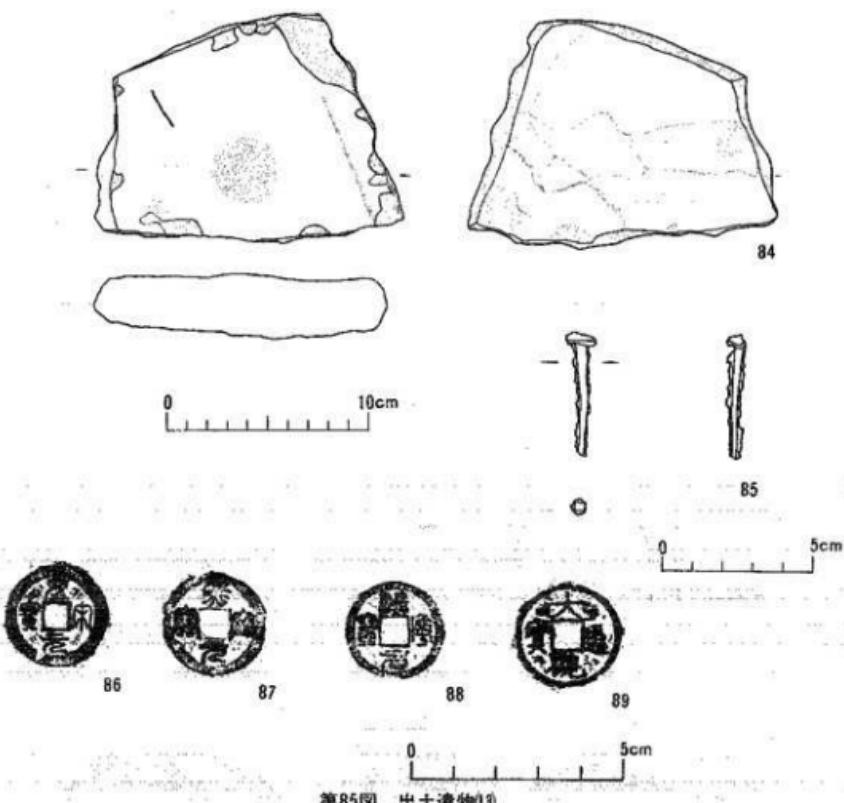
82



83



第84図 出土遺物(12)



第85図 出土遺物(13)

## b. 石 器 (第80~85図、図版71~72)

石器は19点出土した。65・66は石匙、67は両側縁と端部に調整削離を有している。69は磨製石斧。69は全面が研磨されて球形を呈するものである。79~81、84は砾石である。82は全体を研磨し、一方の端部を両側から直線的に尖らせている。底面に細かい碁盤の目状の刻線が見られる。83は軽石製の有孔石製品である。これらのうち砾石は確実に中世の造構から出土した。

## c. 鉄製品 (第85図85、図版72)

II郭S I 009から釘が出土した。

## d. 貨 幣 (第85図86~89、図版72)

5点出土したが、1点は銭名が不明である。

第7表 遺物観察表

件番号	出土地点	部位	外観		内面 色調	器厚 (mm)	胎土	地成	備考
			文	様					
73-1	69-1	(II) S I 006-007	口縁部	R L 蔵文	に赤い黄緑 10YR 8/6	11	砂、礫(2mm)	良好	表裏繩文
2	2	(II) S I 006	口縁部	R L 蔵文	灰黄褐色 10YR 8/6	7	砂	良好	
3	3	(II) S I 006	口縁部	R L 蔵文	に赤い黄緑 7.5YR 8/6	11	細かい砂微量	良好	表裏繩文
4	4	34-L	口縁部	L R 蔵文	に赤い黄緑 7.5YR 8/6	8	砂微量	良好	
5	5	(II) S I 006	口縁部	R L 蔵文	に赤い黄緑 10YR 8/6	10.5	細かい砂微量	良好	
6	6	(II) S I 006-007	横部	L R 蔵文	に赤い黄緑 7.5YR 8/6	9	砂微量	良好	
7	7	Bトレンチ	側部	結・束	深褐色 7.5YR 8/6	8	砂微量、礫(3mm)	良好	
8	8	Bトレンチ	側部	結・束	褐色 7.5YR 8/6	9	砂	良好	
9	9	34-L	側部	L R 蔵文	褐色 5YR 8/6	8	砂、礫(2mm)	良好	
10	10	(II) S I 009	口縁部	L R 蔵文	に赤い黄緑 10YR 8/6	8	細かい砂	良好	
11	11	35-1	側部	結・束	褐色 7.5YR 8/6	10	砂	良好	
12	12	土壘上覆土	調部	R L 蔵文・多輪沿条体圓証文	淡褐色 10YR 8/6	16	砂微量、礫(2mm)	良好	
13	13	33-I	側部	R L 蔵文	褐色 7.5YR 8/6	15	礫(2~3mm)	良好	
74-14	14	12-F	側部	R 横条文→沈線	褐色 7.5YR 8/6	10	砂、礫(2~5mm)	良好	
15	15	(II) S K 002	口縁部	R 横条文→沈線	褐色 5YR 8/6	6	砂微量、礫(2mm)	良好	
16	16	(II) S K 002	口縁部	R 横条文→沈線	褐色 5YR 8/6	7	細かい砂	良好	
17	17	(II) S K 002	側部	R 横条文→沈線	褐色 5YR 8/6	8	砂やや多量	良好	
18	18	(II) S K 002	側部	R 横条文→沈線	褐色 5YR 8/6	7	細かい砂	良好	
19	なし	(II) S K 002	胸部・底面	R 横条文	に赤い黄緑 10YR 8/6	10-15	砂多量(1~2mm)	良好	
20	19	(II) S K 002	口縁部	R L 蔵文→沈線	褐色 7.5YR 8/6	11	細かい砂	良好	
21	20	(II) S K 002	側部	R L 蔵文→沈線	に赤い黄緑 5YR 8/6	9	砂少量、礫(3mm)	良好	
22	21	Aトレンチ	側部	沈線	に赤い黄緑 5YR 8/6	8	砂多量、礫(3~7mm)	良好	
23	22	Aトレンチ	側部	R L 蔵文→沈線	褐色 7.5YR 8/6	9	砂多量、礫(3mm)	良好	
24	23	(II) S K 002	側部	沈線	褐色 5YR 8/6	11	細かい砂	良好	

## 〔土器〕

第8表 遺物観察表

件番号	団番号	出土地点	部 位	外 文		内 色 調	器 厚 (mm)	地 土	燒 成	備 考
				種	色					
74-25	69-24	(I) S K002	口 線 部	沈線	-	淺灰 7.5Y R 8%	9	細かい砂	良好	
75-26	25	(II) S K001	梗 部	櫛雷文	-	12.4L・褐 7.5Y R 8%	10	細かい砂	良好	
27	26	(II) S K001	腹 部	隆蒂文	-	12.4L・褐 7.5Y R 8%	12	砂、塵(2~3mm)	良好	
28	70-27	(II) S K001	B 部	隆蒂貼付文	-	12.4L・黄 10Y R 8%	12	砂、塵(3mm)	良好	
29	28	(II) S K001	柄 部	隆蒂文	-	12.4L・褐 7.5Y R 8%	12	砂、塵(3mm)	良好	
30	29	(II) S K001	底 部	沈線	-	12.4L・褐 7.5Y R 8%	11	砂、塵(2~4mm)	良好	
76-31	30	(II) S K002	側 部	沈線	-	12.4L・褐 7.5Y R 8%	11	砂多量、塵(2~4mm)	普通	
32	31	12-C	肩 部	沈線	-	12.4L・黄 10Y R 8%	5	細かい砂	良好	
33	33	(II) S I 009	側 部	L 櫛条文→沈線	-	12.4L・褐 7.5Y R 8%	7	細かい砂	良好	
34	34	22-J	口 線 部	L R 櫛文→沈線	-	浅黃褐色 10Y R 8%	7.5	砂	良好	
35	35	B 層内 2~3m	口 線 部	R L 櫛文	-	12.4L・褐 5 Y R 8%	9	細かい砂	良好	
36	36	29-H, G	口 線 部	L 櫛条文	-	浅黃褐色 10Y R 8%	6.5	細かい砂	良好	
37	37	B 層内 2~3m	肩 部	R L 櫛文	-	浅黃褐色 7.5Y R 8%	7	砂、塵(7mm)	良好	
38	38	(III) S K002	側 部	L R 櫛文	-	12.4L・黄 10Y R 8%	7	砂	良好	
39	39	35-J	側 部	L R 櫛文	-	12.4L・黄 7.5Y R 8%	9	塵(1~3mm) 多量	良好	
40	40	(II) S X(F) 001	側 部	L R 櫛文	-	12.4L・褐 5 Y R 8%	9.5	塵(1~2mm)	良好	
41	41	(II) S I 006	側 部	L R 櫛文	-	12.4L・黄 10Y R 8%	6	砂	良好	
42	42	20-II, G	側 部	L 櫛条文	-	浅黃褐色 10Y R 8%	6.5	細かい砂	良好	
43	43	23-I	側 部	L R 櫛文	-	12.4L・黄 10Y R 8%	4	細かい砂	良好	
44	44	(III) S I 006	側 部	R L 櫛文	-	灰 10Y R 8%	6	砂	良好	
45	45	(II) S K002	口 線 部	隆蒂文	-	浅黃褐色 10Y R 8%	7	砂	良好	
77-46	32	(II) S K002 R P 6	底 部	R L 櫛文→沈線	12.4L・褐 10Y R 8%	14	砂荒い	良好		
78-47	46	(II) S I 001	側 部	L R 櫛文→沈線	12.4L・褐 7.5Y R 8%	9	細かい砂	良好		
48	47	35-J	口 線 部	L 櫛条文→沈線	12.4L・褐 5 Y R 8%	6	細かい砂	良好		

第9表 遺物観察表

特撰番号	団版番号	出土地点	部 位	外 面		内 面		器厚 (mm)	胎 土	地 成	備 考
				文	様	色	調				
78-49	70-48	(I) 35-L.	口 端 部	L.R. 鎌文→沈線		に赤い褐色 5YR 6%		6	細かい砂	良好	
50	49	Bトレンチ	底部~ 右部	L.R. 鎌文→沈線	直	7.5Y R 3%		27		良好で堅い	
51	50	III S D 001	側 部	R.L. 鎌文→沈線		に赤い褐色 10YR 6%		6	砂、珪(3 mm)	良好	
52	51	III S D 001	口 端 部	L.R. 鎌文		に赤い褐色 10YR 6%		5	砂	良好	
53	71-52	III S D 001	側 部	L.R. R.L. 鎌文		に赤い褐色 7.5Y R 3%		5.5	砂微量	良好	
54	53	III S X 001	側 部	L.R. 鎌文		に赤い褐色 7.5Y R 3%		5	砂多量	良好	
55	54	III S D 001	腹 部	R.L. 鎌文		に赤い褐色 10YR 6%		6	砂微量、珪(1~3 mm)	良好	
56	55	III S D 001	側 部	R.L. 鎌文		黒褐色 10Y R 3%		7	砂、珪(3 mm)	良好	
57	56	III S D 001	側 部	R.L. 鎌文		に赤い褐色 10Y R 6%		5.5	砂	良好	
58	57	II-H. G	側部~ 底盤	L.R. 鎌文		浅黃褐色 10Y R 6%		11	砂、珪(2~3 mm)	普通	
特撰番号	団版番号	出土地点	口 深 (mm)	底 深 (mm)	器 高 (mm)	外 面	内 面	備 考			
79-59	71-58	Bトレンチ	(准) 110	—	—	暗褐色 7.5Y R 3%	に赤い褐色 7.5Y R 6%			天目	
60	59	III 11-B	(様) 119	—	—	黑 N 3%	黑 N 3%			天目	
61	60	Bトレンチ手内	—	(様) 88	—	樹脂赤褐色 2.5Y R 3%	浅黄 7.5Y R 3%ない しオリーブ墨 10Y R 6%			中國製	
62	63	III S 1009	—	44	—	暗褐色 7.5Y R 3%	灰褐色 7.5Y R 3%			天目	
63	61	Aトレンチ	—	45	—	に赤い褐色 7.5Y R 3%	灰オリーブ 5Y R 6%			唐津	
64	62	Bトレンチ	—	52	—					青磁	

第10表 遺物観察表

〔石器〕

掲番 図版 号	図版 番号	名 称	出土地区	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 質	備 考
79-65	71-64	石 匙	(II) 20-G	9.4	3.2	1.0	22.9	頁岩	
66	65	石 匙	(III) S D001	4.5	5.7	1.0	24.6	頁岩	
80-67	66		(III) 6-G	6.1	3.7	1.4	26.8	頁岩	
68	67	磨製石斧	(III) S X001	9.6	3.4	2.1	106.0		
69	68		(II) 23-H	4.4	4.5	—	68.0		
70	69	砥 石	(II) 18-G	12.4	4.9	3.0	185.0		
71	70	砥 石	(II) S I 004	8.1	6.8	5.1	314.0	凝灰岩	
81-72	71		Bトレンチ場内	12.5	8.1	4.7	460.0	凝灰岩	
73	72		Bトレンチ場内	9.4	5.7	9.8	455.0		
74	72-73	砥 石	(III) S I 001	4.1	1.7	1.6	18.0		
82-75	74	砥 石	Bトレンチ場内	8.4	7.1	8.3	604.0	凝灰岩	
76	75	砥 石	Bトレンチ	5.6	3.7	3.8	78.7		
77	76	砥 石	(II) 17-J	7.1	2.8	2.8	78.9		
78	77		II. S X013	6.5	4.8	1.3	32.1		
83-79	78	砥 石	II. G-19	17.2	6.9	5.0	635.0		
80	79	砥 石	Bトレンチ場内	21.0	5.6	7.9	1100.0	凝灰岩	
81	80	砥 石	(II) S I 008	17.3	7.9	6.4	810.0		
84-82	81		(II) 19-G	17.5	9.5	3.2	775.0		
83	82		(II) S X013	8.0	8.6	3.9	33.2	燧石	
85-84	83		(II) S I 001	11.0	15.4	—	620.0	安山岩	

〔貨幣〕

85-86	72-84	聖宋元宝	(II) 22-J
87	85	熙寧元宝	(III) 12-F
88	86	熙寧元宝	(II) 22-K
89	87	大觀通寶	(I) 33-I

## 6. まとめ

乳牛平遺跡からは、縄文時代・弥生時代・中世の各時代にわたる遺構、遺物が検出された。郭平場から検出された遺構のうち、断面がフラスコ状となる土壙、Tピットは伴出遺物はないが縄文時代の遺構であると考えられる。

乳牛平遺跡においては大湯浮石層と遺構との関係は明確でない。大湯浮石層はII郭中央部の黒褐色土上面にごく小範囲で極めて薄い堆積層が見られただけであるが、妻の神山遺跡では豊穴遺構、焼土遺構、掘立柱建物跡が確実に大湯浮石層を掘り込んで構築されている。豊穴遺構は中世遺跡からの発見例が多く、乳牛平遺跡の豊穴遺構、焼土遺構、掘立柱建物跡、柱列は中世に属するもので、郭平場に伴うものであると考える。また、郭の周囲は堀、土塁で防護されおり、乳牛平遺構は『鹿角由来記』に見える乳牛館であると考えられる。<sup>(註1)</sup>

乳牛館は乳牛平遺跡だけで完結するものではなく、南方の妻の神III遺跡をも含んでいる。V郭西側の住宅付近には段差が見られ、その形状がI・II郭間の土塁の調査前の状態とよく似ており、ここに土塁の存在が予想される。また『ほ場整備地域内（鹿角北東地区）遺跡分布地図』によると、乳牛館の範囲はおおよそ東西、南北とも 540m、面積約 2000,000 m<sup>2</sup>の規模に推定されている。<sup>(註2)</sup>

乳牛平遺跡のI～III郭の平場面積と各郭ごとの確実な中世遺構は以下のとおりである。

I郭：	1,040m <sup>2</sup>	豊穴遺構10	焼土遺構8	
II郭：	1,250m <sup>2</sup>	豊穴遺構18	焼土遺構33	柱列1
III郭：	1,740m <sup>2</sup>	豊穴遺構4	焼土遺構10	柱列1 掘立柱建物跡2 溝6

豊穴遺構はI、II郭においては平場中央部にほとんどなく、郭縁辺部に構築されている。II郭のSI 0011棟のみカマドらしいものがあるが、他にはカマドは付設されていない。こうした豊穴遺構は県内にも多く、大館市片山館<sup>(註3)</sup>、比内町谷地中館<sup>(註4)</sup>、鹿角市小枝指七館<sup>(註5)</sup>、小平<sup>(註6)</sup>、新斗米館<sup>(註7)</sup>、高市向館<sup>(註8)</sup>、御休堂<sup>(註9)</sup>、歌内<sup>(註10)</sup>、小豆沢館<sup>(註11)</sup>などに類例が検出され、このうち御休堂では一部に平安時代にまで遡及する可能性も考えられているが、他の多くは中世に属している。また館に付随するものでも炉、出入口部のあるものとないものとがあり、その用途についても例えれば簡易宿舎、掘立柱建物跡に共伴する土座居住居、住居もしくは作業場、土倉、矢倉、物置、家畜小屋などの諸説があつて定かでない。III郭や妻の神III遺跡では掘立柱建物跡と共に存する可能性を指摘するに留めたい。<sup>(註12)</sup>

焼土遺構は、豊穴遺構とは同一の確認面にあり、豊穴遺構と重複する場合、豊穴遺構を切るものと、切られるものとが見られる。掘立柱建物跡のないI・II郭にも多く、掘立柱建物跡

との関連よりはむしろ堅穴遺構の使用と何らかの関連を有するものと考えられる。櫛羽口らしいものがⅠ郭から出土しているが鉄滓ではなく、鍛冶場とは断定し難い。

乳牛平遺跡は前述のように、妻の神田遺跡から連続する乳牛館の一部であるが、掘立柱建物跡がⅢ郭の調査範囲内に2棟検出されたにすぎないこと、及びⅠ～Ⅳ郭の平場は妻ノ神田遺跡に比べ極めて小規模であり、通常の生活の場とは考えられないことなどから、妻の神田遺跡側との間には大きな相違点を指摘できる。加えて妻の神田遺跡と乳牛平遺跡Ⅲ・Ⅳ郭との間には二重の堀、上原状小山が存在し、Ⅲ・Ⅳ郭には妻の神田遺跡側からの防禦性、陥絶性がうかがえる。こうしたことから、広い郭面積を有し、多くの掘立柱建物跡が構築され、内部に土塙墓をも有する妻の神田遺跡側を主郭と考えると、乳牛平遺跡は戦時に備えた軍事的施設である色彩が強く、乳牛館の如く必ずしも交通の要所ではなくとも、軍事的色彩の濃厚な部分を鹿角地方の中世城館は備えていると見える。

これまで鹿角地方における中世城館は、軍事的性格よりも行政的性格が強かったことが強調<sup>(註18)</sup>されているが<sup>(註19)</sup>、安村二郎氏が鹿角地方の中世城館の観察と、その歴史的背景から洞察しているように、軍事的色彩は濃厚である。

鹿角地方における中世城館は、堅固な軍事施設を備えたものが當時50戸前後ないし100戸を越えることのない村力で、しかも典型的な一村一館形式で至近距離の間に連立するが、その有様の一端を乳牛館が示しているように考えられる。

註1 「鹿角山系記」『南部叢書』第1冊 南部叢書刊行会 1927年

註2 昭和51～53年度にわたり実施した、国営総合農地開発事業・鹿角北東地区内の遺跡分布調査報告書

註3 板橋芳範「古代・中世の文化」「大館市史」第1巻 大館市 1979年

註4 島山憲司「谷地中ノ館」遺跡発掘調査報告書 比内町教育委員会 1978年

註5 江上波夫・他『館址』東京大学出版会 1958年

註6 庄内昭男「小平遺跡発掘調査報告書」鹿角市教育委員会 1979年

註7 a 伊藤種秋「新斗米館跡 鹿角市新斗米館跡第I次発掘調査報告書」鹿角市教育委員会  
1981年

b 秋元信夫「新斗米館跡 鹿角市新斗米館跡第II次発掘調査報告書」鹿角市教育委員会  
1982年

註8 秋元信夫「高市向館発掘調査報告書」鹿角市教育委員会 1982年

註9 秋元信夫「御休堂遺跡発掘調査報告書」鹿角市教育委員会 1981年

註10 小玉準「東北縦貫自動車道発掘調査報告書II」秋田県教育委員会 1982年

- 註11 桜田隆「小豆沢館遺跡」『東北複合自動車道発掘調査報告書IV』秋田県教育委員会 1982年
- 註12 註7 bに同じ。
- 註13 高橋与右エ門「二戸市沢内日遺跡(昭和53年度)」(財)岩手県埋蔵文化財センター 1979年
- 註14 大橋康二「考古学的考察」『尻八館調査報告書』青森県立郷土館 1981年
- 註15 工藤清泰「浪岡城跡」浪岡町教育委員会 1981年
- 註16 民野靖「大瀬川C遺跡」『東北複合自動車道関係埋蔵文化財調査報告書III』岩手県教育委員会・日本道路公団 1981年
- 註17 註5に同じ。
- 註18 a 塩谷順耳「鹿角地方の館」『秋田県立博物館研究報告』第3号 秋田県立博物館 1978年、  
「結局城主・織豊期の村の支配者は、系譜的に兼倉期の地頭につながり、長期に亘って分派しながら村に定着し、地名を姓として館を本拠としていたものである。従って村を支配するための館は軍事的性格より行政的性格が強かったと言えよう。」
- b 塩谷順耳「文化財レポート(129)秋田の中世城館」『日本歴史』第386号 1980年  
「例えば鹿角郡(中世後期を通じ南部氏領)であれば、東からのびる舌状台地突端部を利用し、その基部を空堀で区切り郭郭、或いは連郭状平垣面を構成、時にそれに帯郭・腰郭をめぐらしている。従って単純な形を示し、水田面からの高さも20~30メートルのものが多く、軍事的機能はあまりもっていない。城というよりは地侍の居館的性格がつよく、そのために體に中世の集落をもっている。『要するに館は、村を支配する地侍が、村民労働力を徴収して造ったものであり、そのため村落単位に構築され、故に軍事的機能よりは行政的要素をもつものであった。』
- 註19 a 安村二郎「新斗米館の歴史的環境」『新斗米館跡』鹿角市教育委員会 1981年  
「室町・織豊期において鹿角四氏とくに奈良・安保両氏は、天正十九年奥州仕置軍に制圧されるまでは、越後以来の鹿角の地主として、久しく繰り返された南部氏・浅利氏・秋田氏の鹿角侵略の手から、相伝の土地を保守すべく、時には和し、時には抗し、絶えず権謀術策の渦中にあったことを示しているように思われる。」
- 新斗米館が、史書にその名を留めることのない小館であったにしても、相当の規模のもとに郭を營み、塹を掘り、堀を固め、防備堅固の跡を残させているのは、かかる状況の然らしむるところと云えよう。また、新斗米館から北に小平館、小枝指館と続き、南に高市館、柴内館、乳牛館と並んで近距離のうちに接続しているのは、鹿角四氏がその移住以来同族的結束をつよめながら四隅の侵略勢力に相対してきたことを物語るものでなかろうか。」
- b 安村二郎「小枝指館跡 I、館の位置と歴史的環境」『鹿角の館』鹿角市教育委員会 1982年

「小枝指揮は、戦国動乱の世にあって、他の鹿角地士と同じように南部氏、秋田氏、浅利氏諸勢力の激突する中で、辛うじて伝来の地を守り続けた苦悩をその塙溝の深さに留めている。」

c 安村二郎・片岡正一『鹿角の中世城館』『鹿角市史』 第1巻 1982年

「このような規模は、郡内四氏の多党支配による蜗牛角上の勢力争いというよりは、やはり国人連合による南部党・秋田安東党との抗争に原因があるようと思われる。」

註20 a 註18 a に同じ。

「江戸中期の史料から推測しても、戦国・繩墨期において100戸を超えるような村は鹿角地方に殆んど存在しなかった。」

「總じて、戦国・繩墨期、鹿角地方における館主の支配する村は決して大きいものでなく、100戸以下か或いは50戸にも満たない集落であったのであり、館主も地侍である反面、有力農民の性格が強かったと音得るのである。」

b 塩谷順耳『由利諸党と館——下村・玉米領を中心について』『秋田地方史論集』 半田市太郎教授追官記念会編 1981年

「結局、館は必ずしも大村にばかり出来るわけではなく、50戸前後の村力でも造り得た。」

#### 発掘調査参加者

浅石一清一 浅石林一郎 大信田 学 小田島健一 川又 康彦 木村 翁吉 木村 善男  
 佐藤 光雄 佐藤 由蔵 関本 芳雄 田中 敬二 田中権四郎 奈貞正次郎 岩山 市助  
 浅石一イソ 浅石一七 浅石一ミヨ 浅石一ヨエ 阿部一妙子 阿部一玲子 安保 カヨ  
 安保ハルエ 安保ユキ子 大森 栄子 金沢実津子 川又 スエ 川又 ソヨ 川又 千代  
 久慈 チヤ 児玉ハツエ 齋藤 久子 佐藤 トシ 佐藤フミエ 高橋 ミワ 豊田 コヨ  
 苗代沢良子 中村 陽子 根本 キワ 根本 シエ 橋場 トシ 古家カツ子 古家 一子  
 村木 繁子 米田 ノリ 宮沢 カヨ 柳沢 光子 山口チヨ子



図版1 遺 跡

空から見た乳牛平遺跡



図版1 遺 跡

空から見た乳牛平遺跡



1 西町1遺跡より見た乳牛平遺跡



図版2 遺 跡

2 柴内館から見た乳牛平遺跡



1 1郭調査前

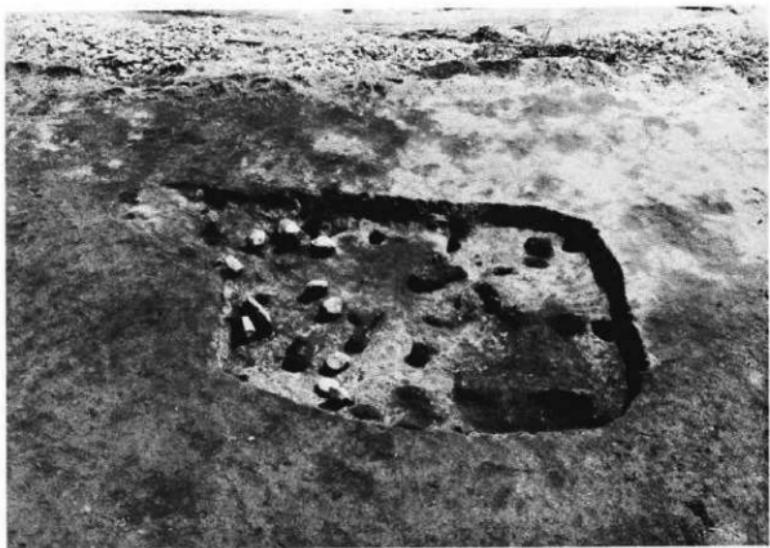


図版3 遺 跡

2 同 上



1 I・S I 001



國版4 遺 跡

2 I・S I 002

乳牛平遺跡



1 1 · S I 002



圖版 5 遺跡 2 1 · S I 002 南西コ一十一柱痕跡



1 I · S I 002



圖版6 遺 跡

2 I · S I 002



1 I · S I 003



圖版7 遺 跡

2 I · S I 003

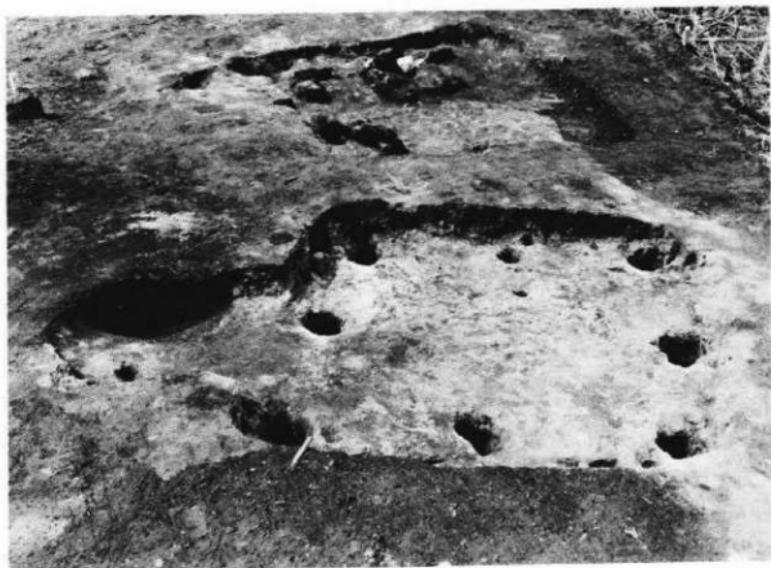


1 I・S.I. 003



図版8 遺 跡

2 I・S.I. 004



1 I - S I 003・004



図版9 遺 跡

2 I - S I 003・004

圖版10 遺 跡



1 I · S 1 004



2 I · S 1 004

乳牛平酒坊



1 I・S I 002・006



図版II 遺 跡

2 I・S I 002・005・006

乳牛  
平進  
肺



I I - S I 005

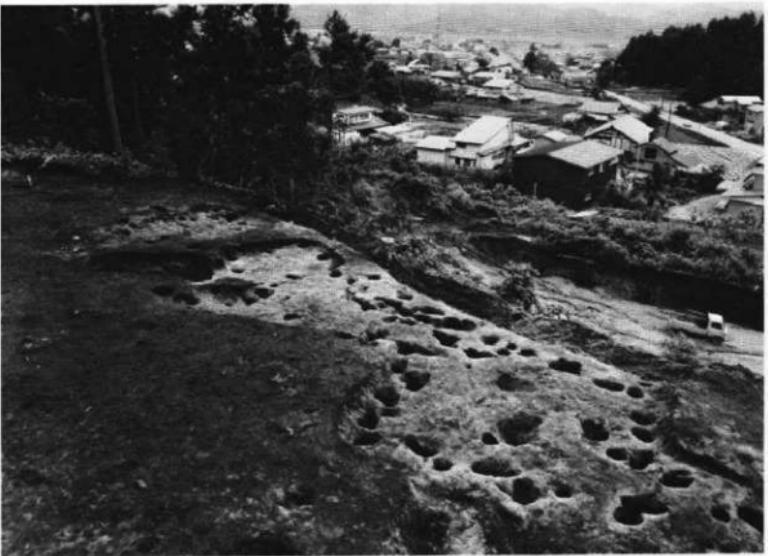


圖版12 通 路 2 I - S I 006



1 I・S I 003・004  
007~010

2 I・S I 003・004・007~010



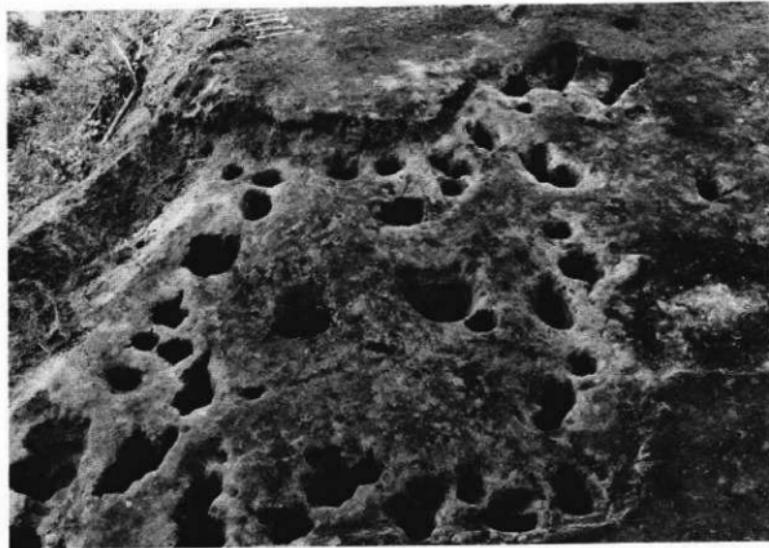
1 I・S I 003・004  
007~010



2 I・S I 003・004・007~010

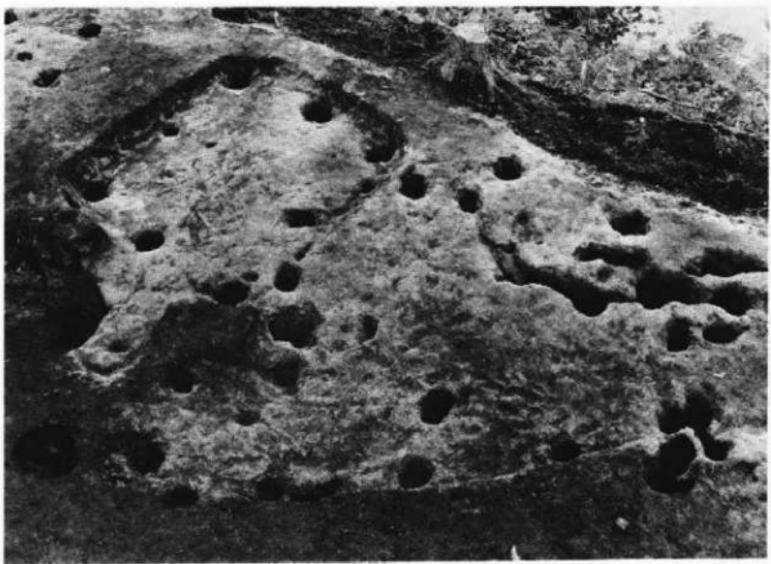


I I · S I 009 · 010



圖版15 遺 跡

2 I · S I 009 · 010

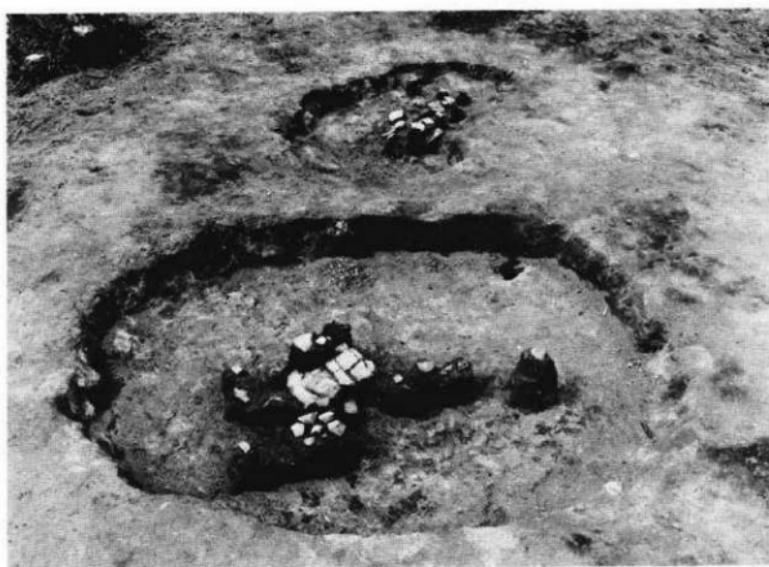


1 I・S I 003・008



図版16 遺 跡

2 I・S K 001・002



1 I・SK 001・002

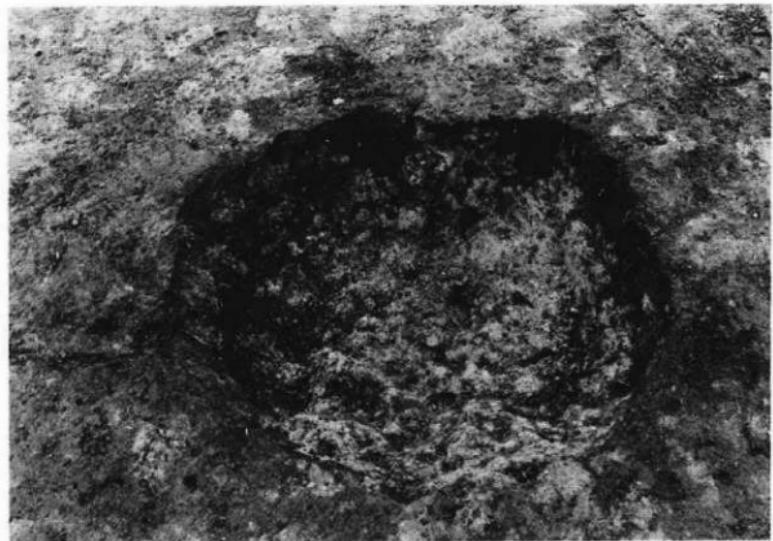


図版17 遺 跡

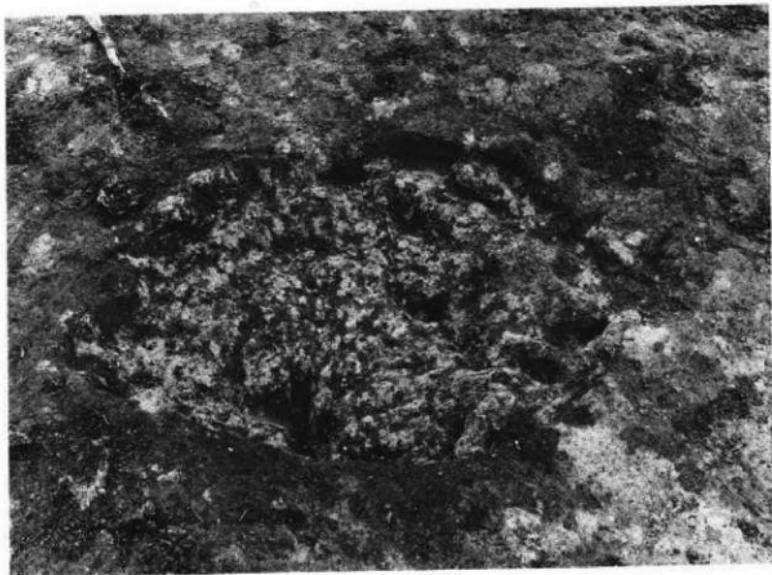
2 I・SK 006・007



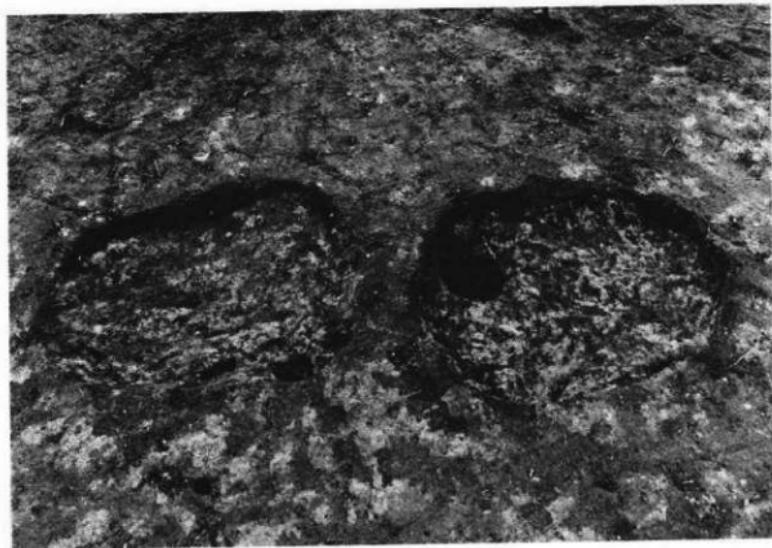
1 I · SK 008-010



2 I · SK 011



1 I · SK 012



圖版19 遺 跡

2 I · SK 013 · 014



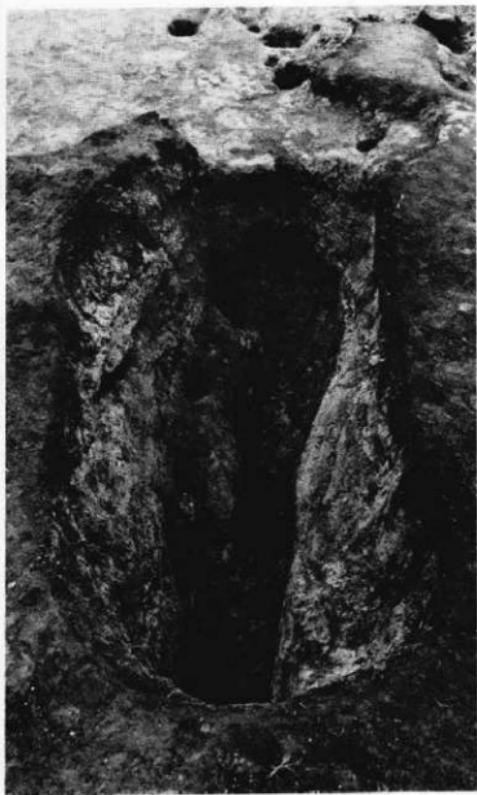
I I · SK 015



2 I · SK (F) 002



1 I・SK(T) 001



2 I・SK(T) 002



1 I 郭全景



図版22 遺 跡

2 I 郭全景

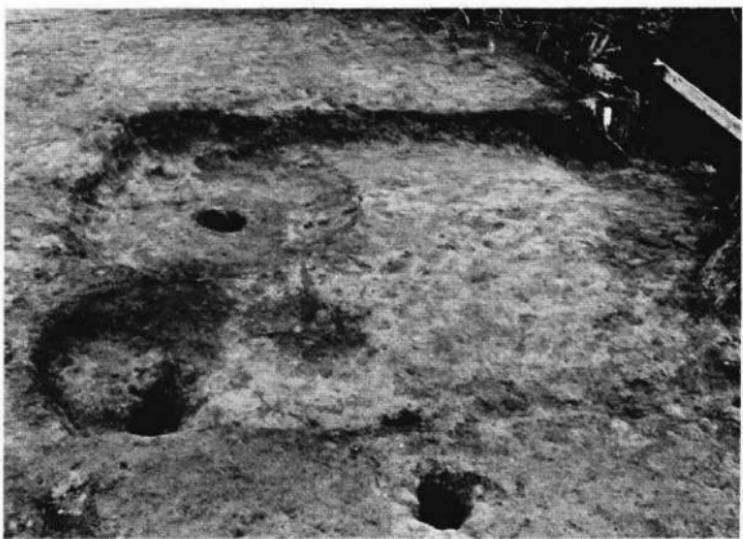


1 I郭から見たII郭



図版23 遺 跡

2 II郭調査状況



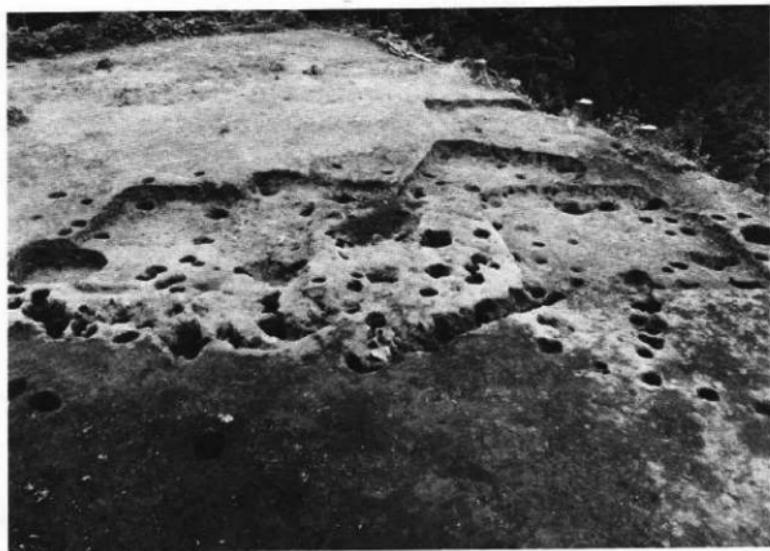
1 II・S I 001



2 II・S I 002

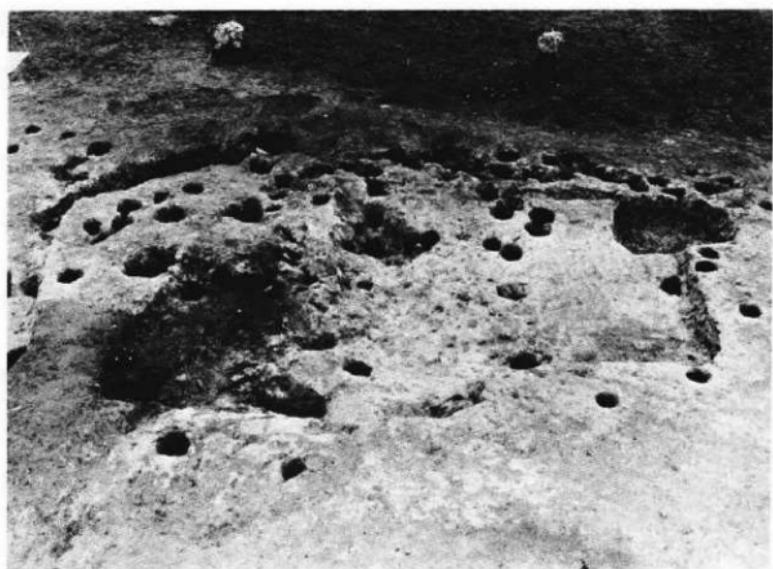


1 II・S I 001~005



図版25 遺 跡

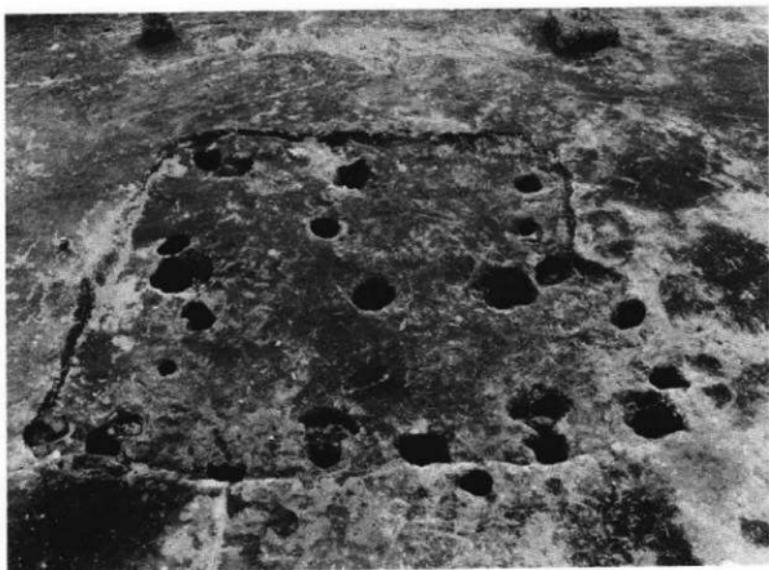
2 II・S I 001~005・017



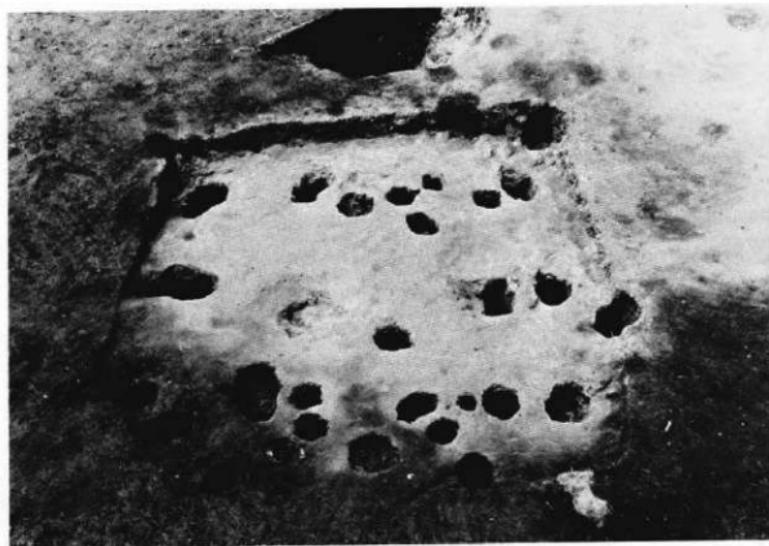
1 II・S I 004・005・S K 004



2 II・S I 004・005・S K 004



1 II・S I 006

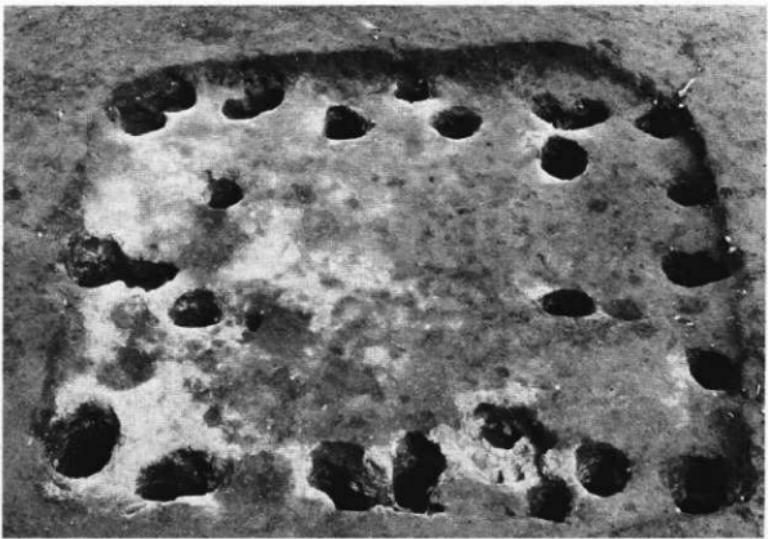


國版27 遺 跡

2 II・S I 007

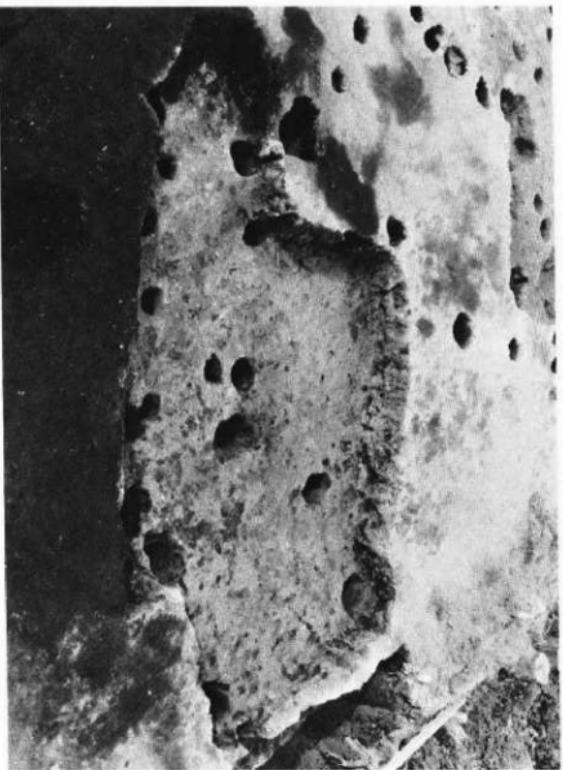


1 II・SI 006・009・010



2 II・SI 008

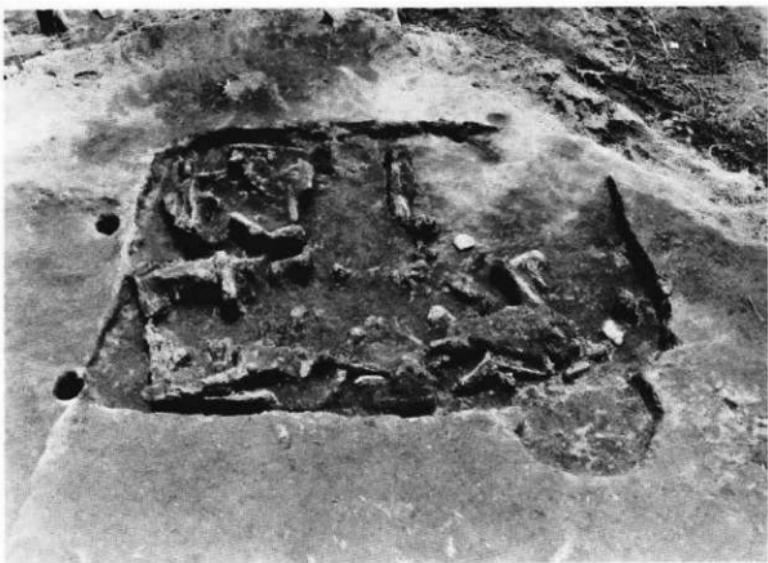
乳牛平道跡



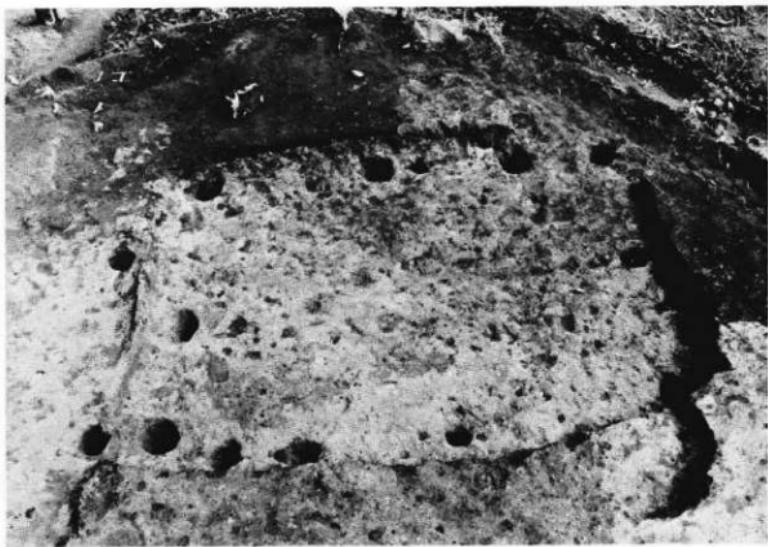
I II · S I 011 · 018



図版29 遺跡 2 II · S I 011 · 012 · 018 · S K (T) 004



1 II·S I 013炭化材出土状況



図版30 遺 跡

2 II·S I 013



1 II・S I 009・013・014



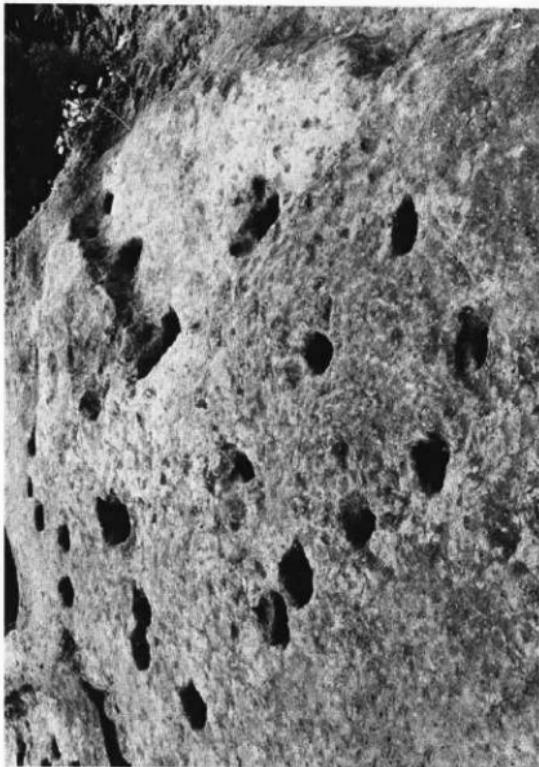
図版31 遺 跡

2 II・S I 013・014



I II · S I 015 · 016

乳牛平邊筋

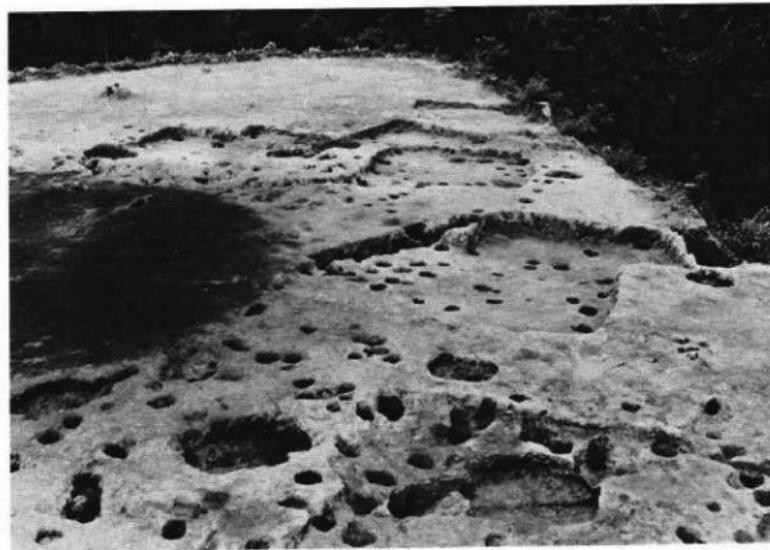


II II · S I 015 · 016

圖版32 造  
體

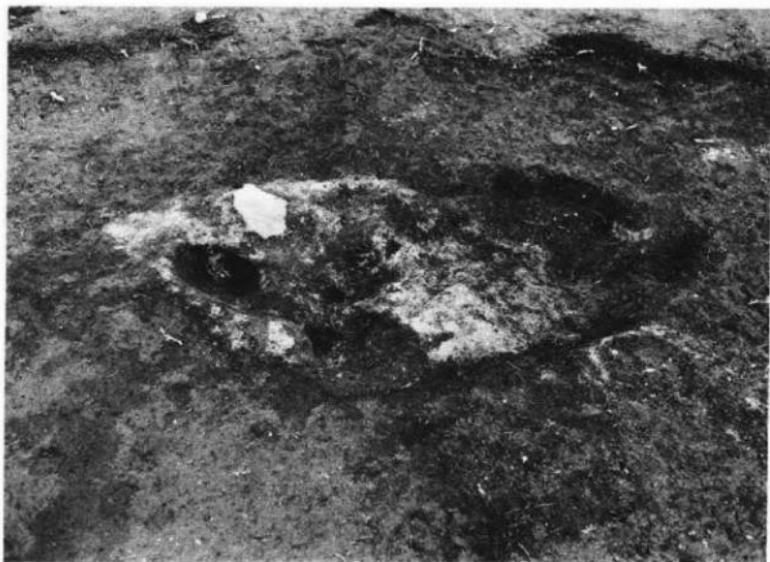


1 II 郡南端の竪穴遺構



図版33 遺 跡

2 同 上



1 II・SX(F) 003



図版34 造 路

2 II・SX(F) 006

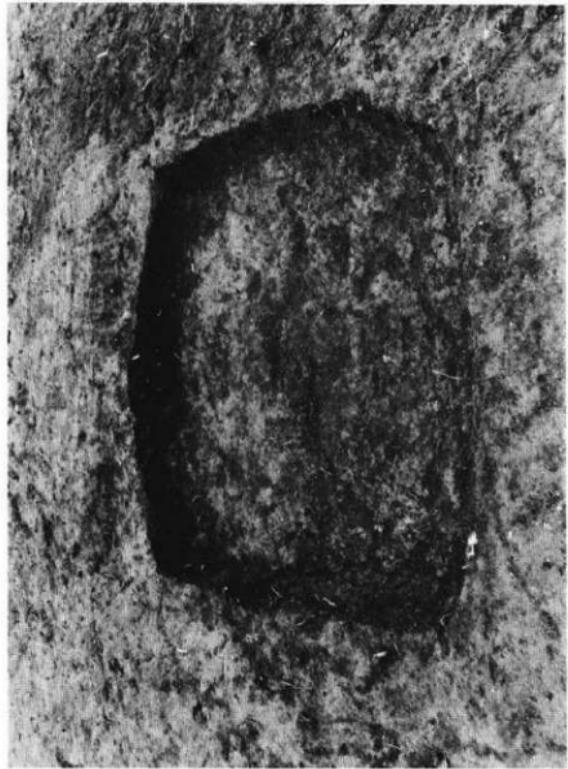


1 II・SX(F) 007



図版35 遺 跡

2 II・SK 001

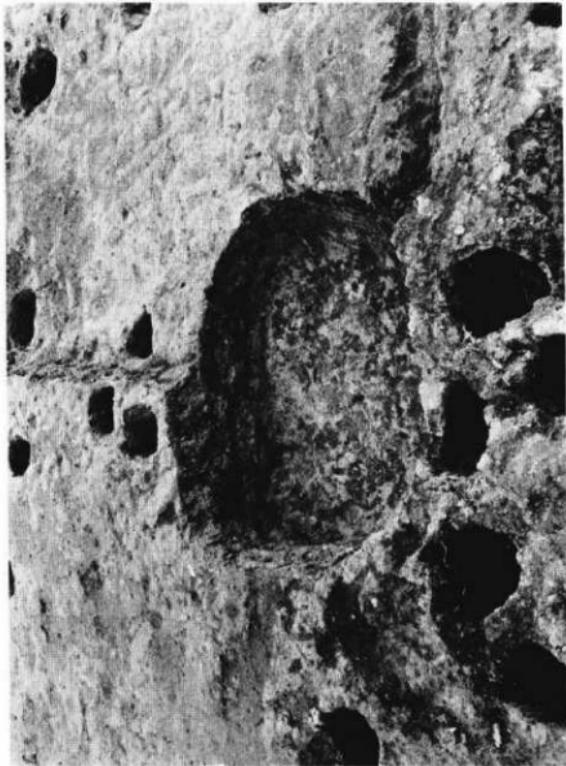


1 II・SK 003



2 II・SK 004

乳牛平遺跡

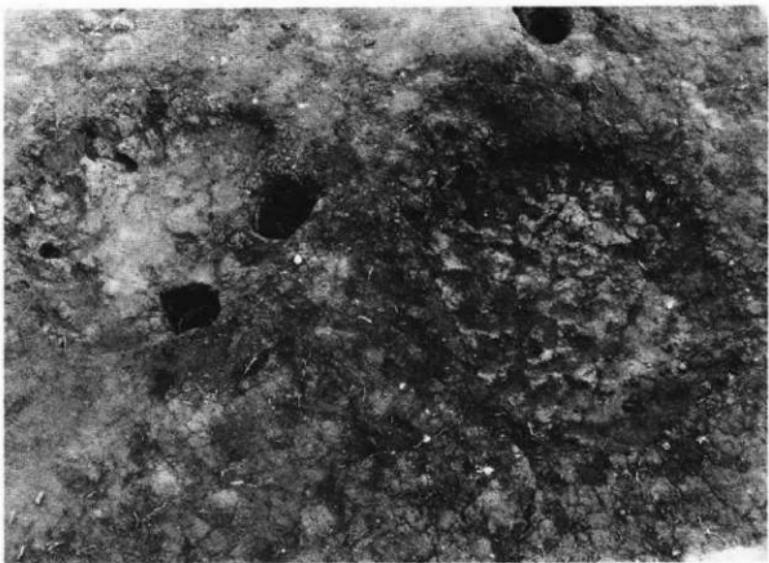


1 II・SK 004



2 II・SK 005

圖版37 遺跡

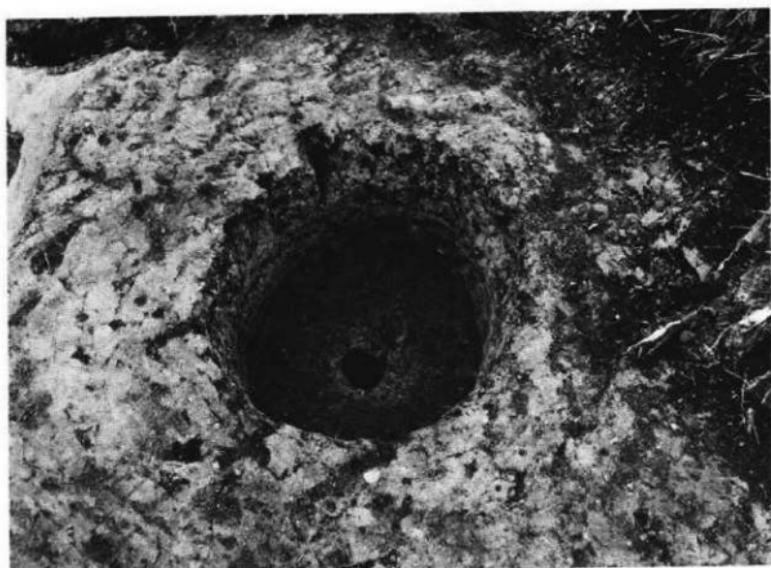


1 II・SK 006・007



図版38 遺 物

2 II・SK 008



1 II・SK 015



図版39 遺 跡

2 II・SK 019



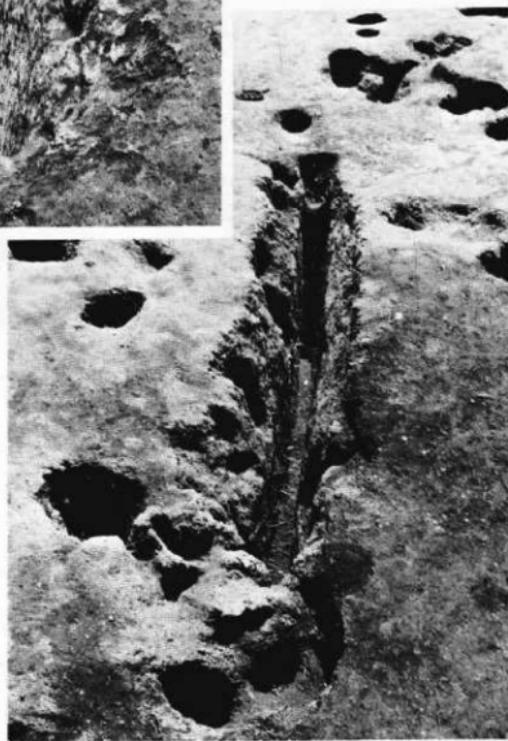
1 II・SK 020



2 II・SK 021



1 II・SK(T) 001



2 II・SK(T) 003



1 II・SK(T) 004



2 II・SK(T) 005

3 II・SK(T) 006



1 II・S X 001



図版43 遺 跡

2 II・S X 002・S K 015



1 II 部



図版44 遺 路

2 II 部

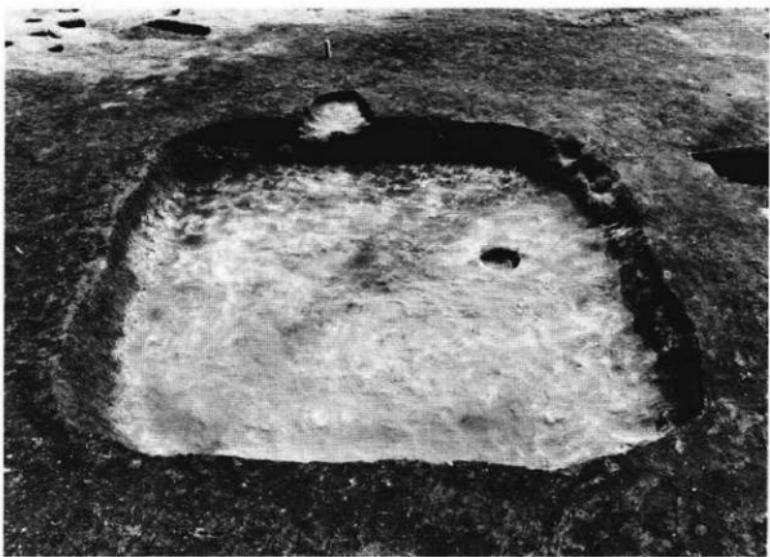


1 II・Ⅲ郭と妻の神遺跡



図版45 遺 跡

2 II・Ⅲ郭と妻の神遺跡

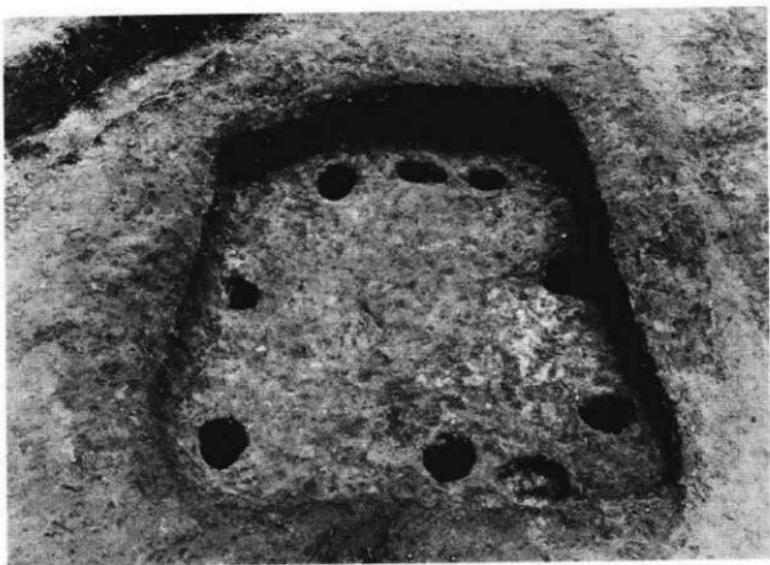


1 III・S I 001



圖版46 遺 跡

2 III・S I 002

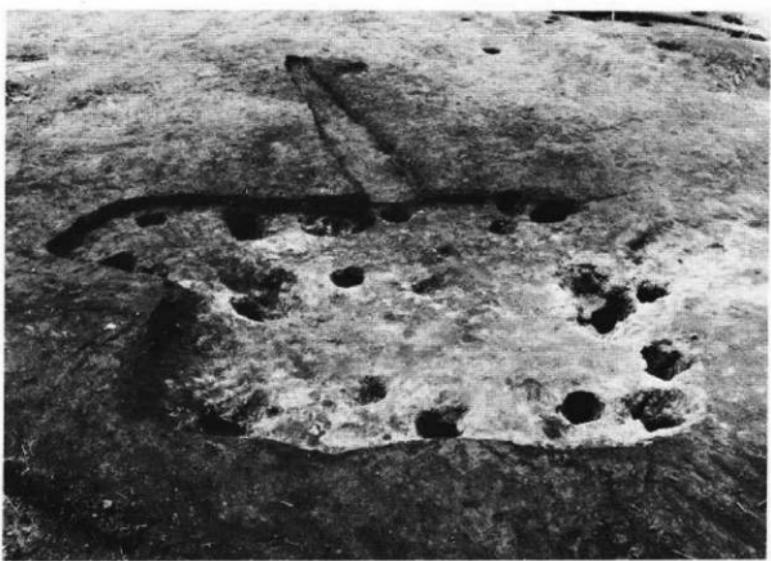


1 III・SI 002

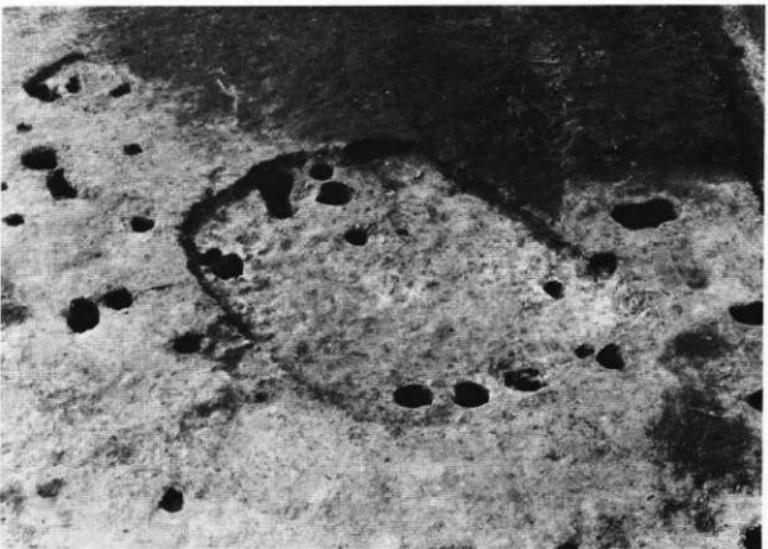


圖版47 遺 跡

2 III・SI 003



I III - S I 003



図版48 遺 跡

2 III - S I 004



1 三 郡

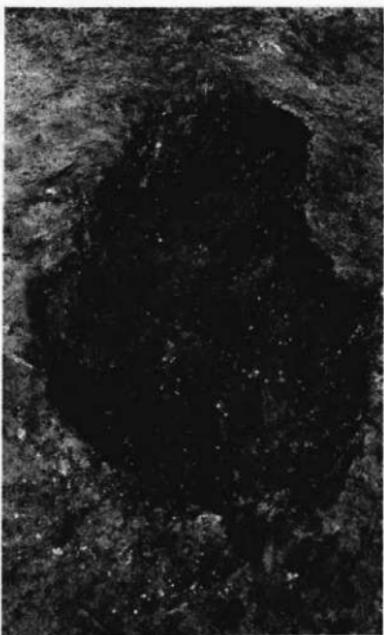


図版49 遺 跡

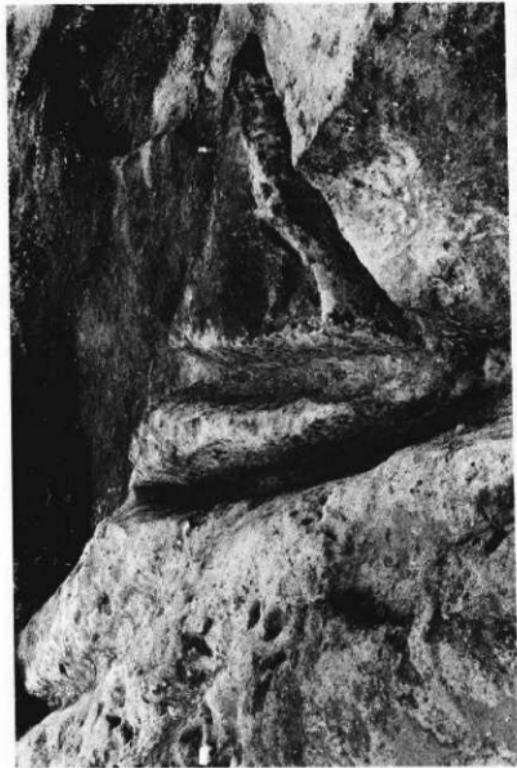
2 三 郡



1 III・SX(F) 001



2 III・SX(F) 001



1 III・SD 001~006

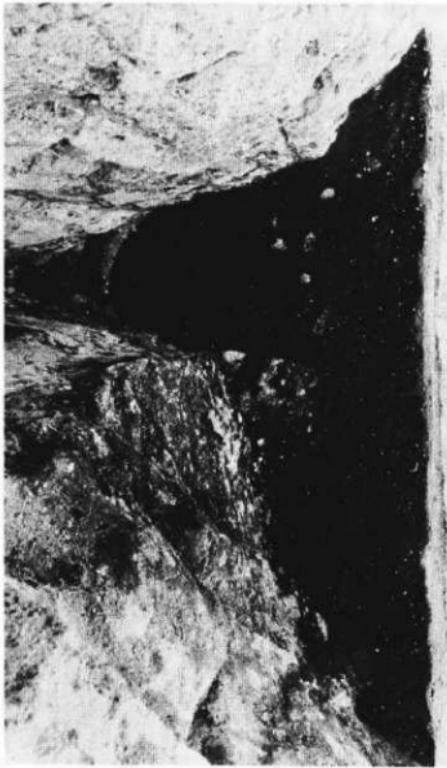


2 III・SD 001~006

牛平溝



1 III・S D 001~006

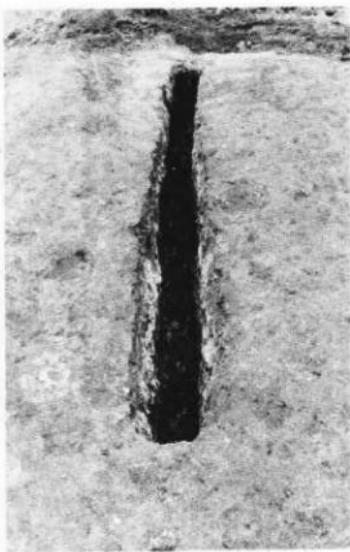


圖版52 途 路

2 III・S D 001土層斷面



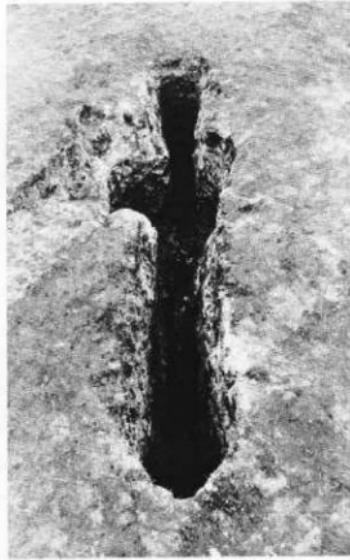
1 III・SK(T) 001



2 III・SK(T) 006



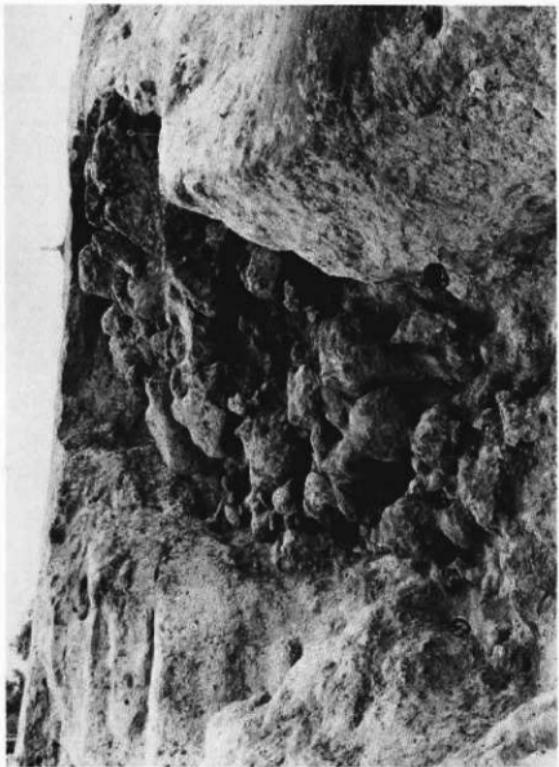
3 III・SK(T) 003・SK 005・SX 002



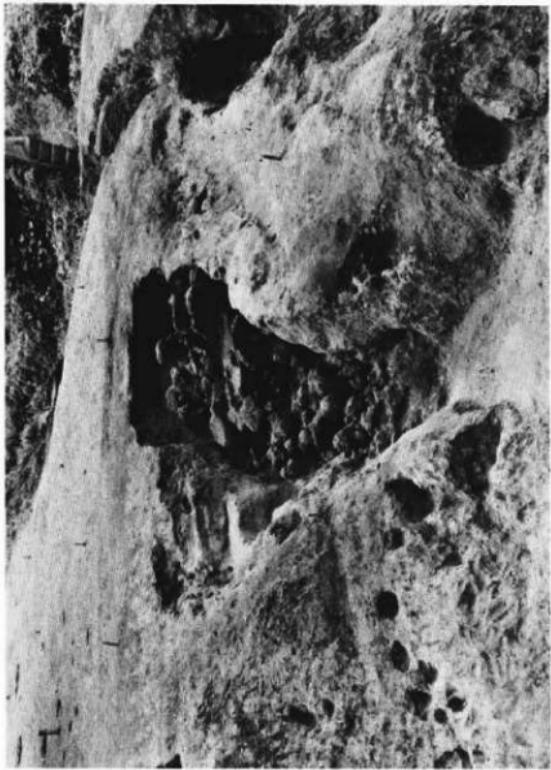
4 III・SK(T) 003・SK 010・SX 002

圖版54 遺 跡

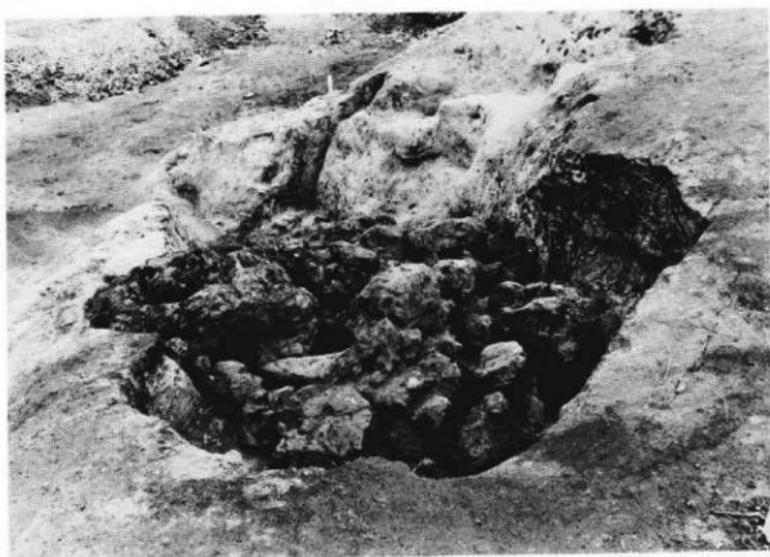
2 III · SX 001



1 III · SX 001



乳牛平遺跡



1 III・SX 001

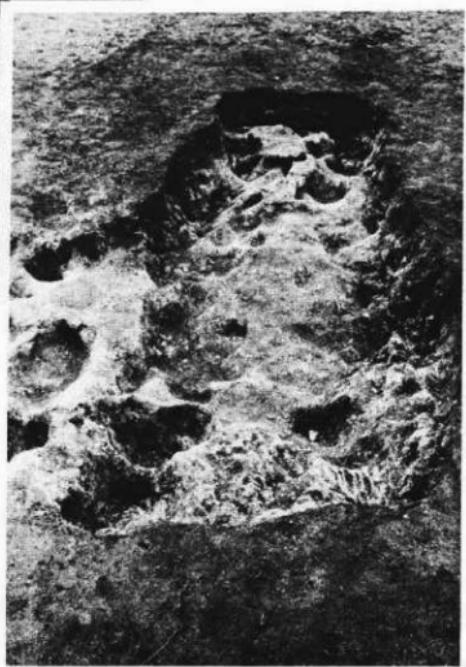


図版55 遺 跡

2 III・SX 003



1 III · SX 003



2 III · SX 003

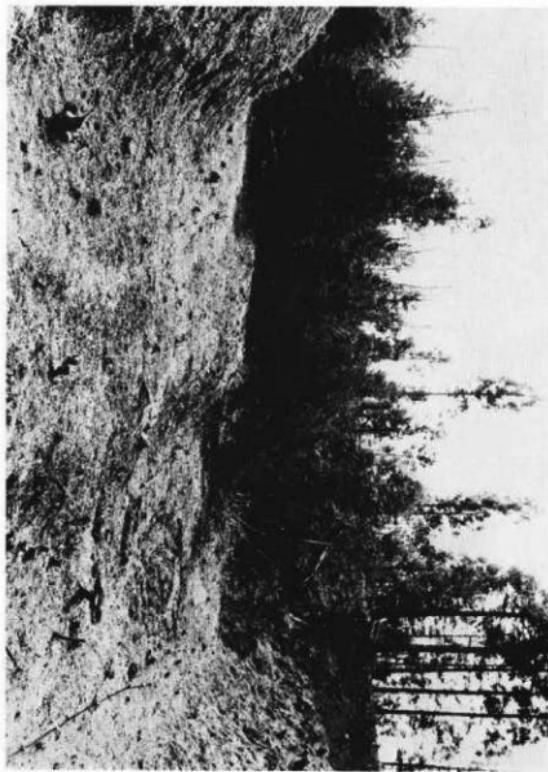


1 V郭残存部とI・V郭間の堀

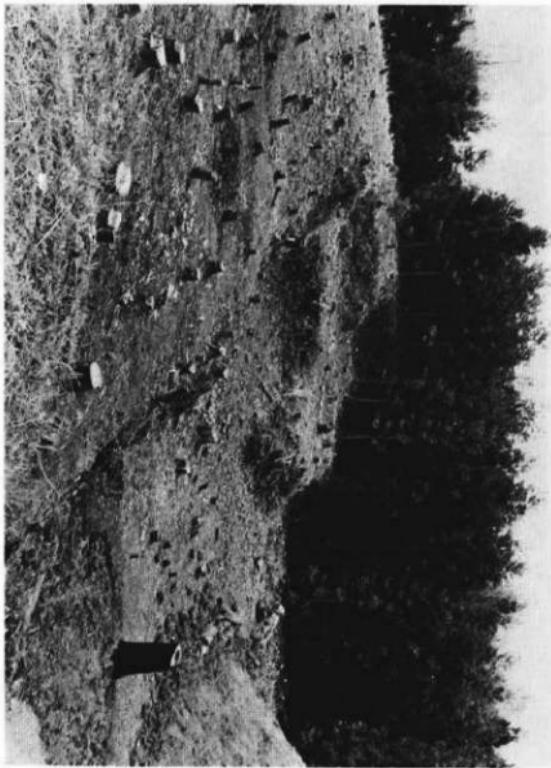


図版57 遺 跡

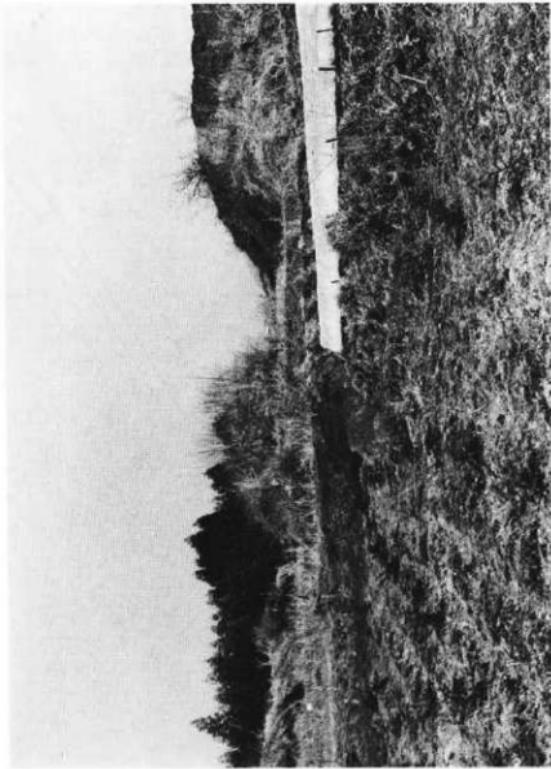
2 V郭西端に見られる段差



I - II 部門の堀跡を前 (中央部段差が土堤)



2 II・III 部門の堀跡を前



1 三郭と妻の神Ⅲ道跡の地（中央部土塁状小山）



図版59 造跡 2 三郭と土塁状小山間の堀（左、三郭 右、小山）



1 I 郭北側に見られる堆



2 同 上



1 Bトレーニング坑在状況



図版61 遺跡 調査 上 同 同

1 Bトレンチ調査状況



2 同 上



図版62 遺 踪



1 II郭とBトレンチ

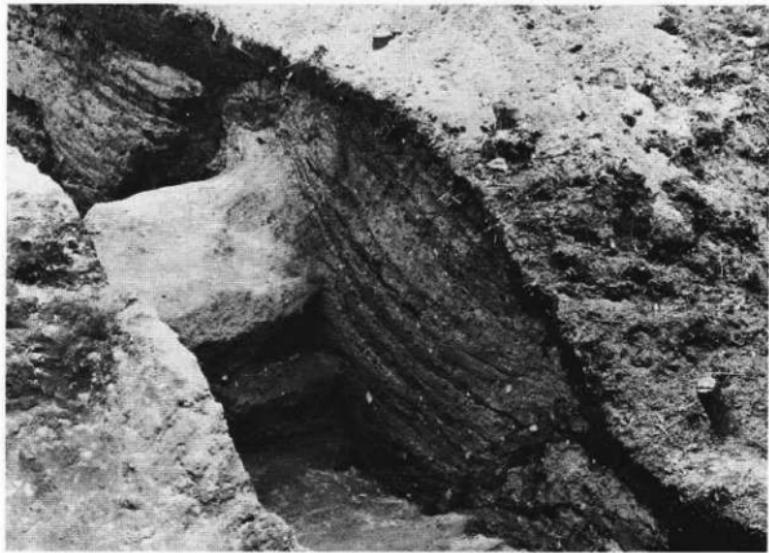


図版63 遺 跡

2 Bトレンチ調査状況



1 Bトレンチ土壠



2 Bトレンチ土壠



1 Bトレンチ土壁



図版65 遺跡 2 BトレンチII郭側壁土層

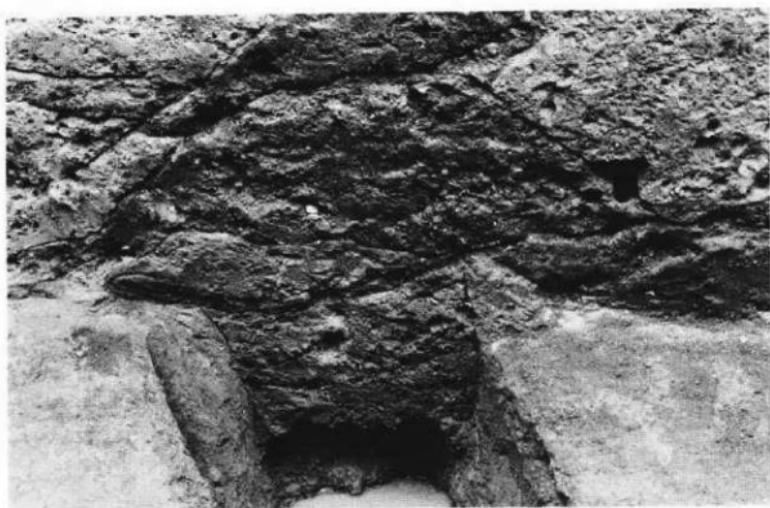


1 B トレンチ土塁芯と堀底の溝



図版66 遺 跡

2 B トレンチ南側堀底の溝



1 Bトレンチ南側堀底の溝  
土層



2 Bトレンチ土基芯

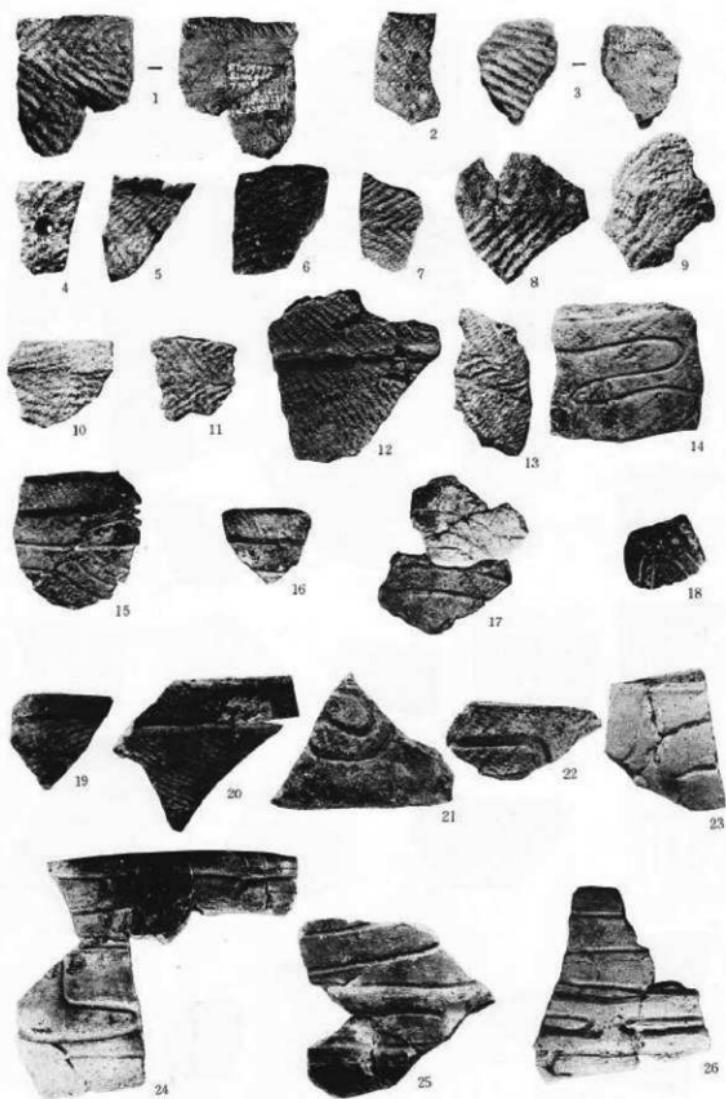


1 田郭より見た丘郭

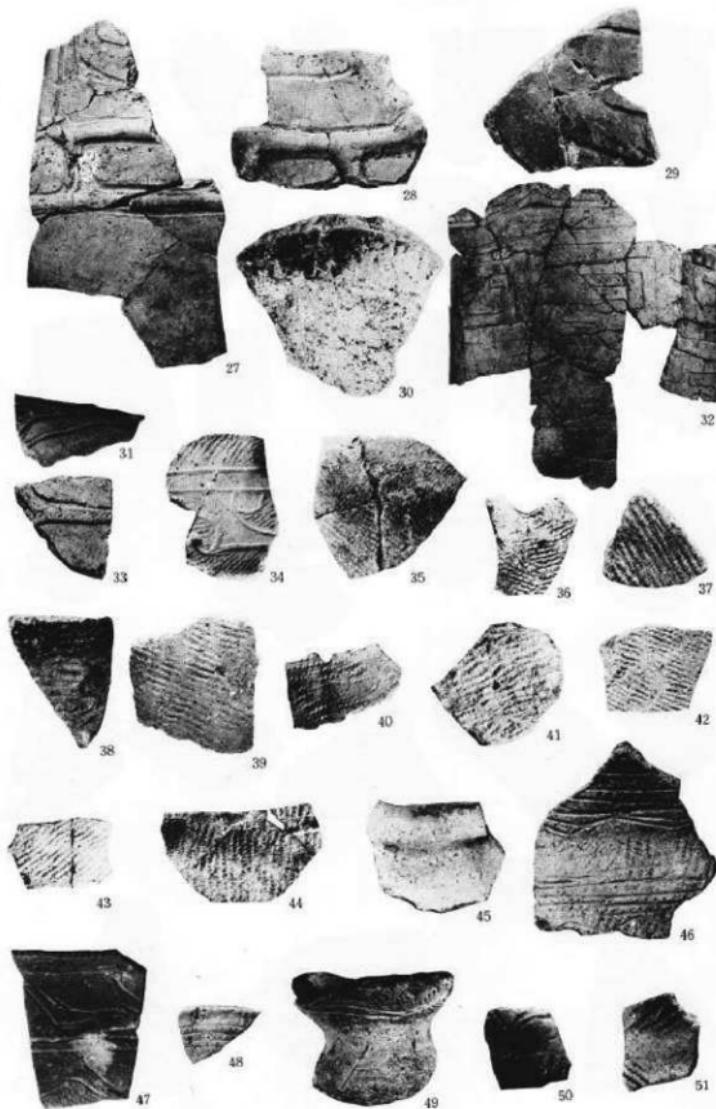


図版68 遺 跡

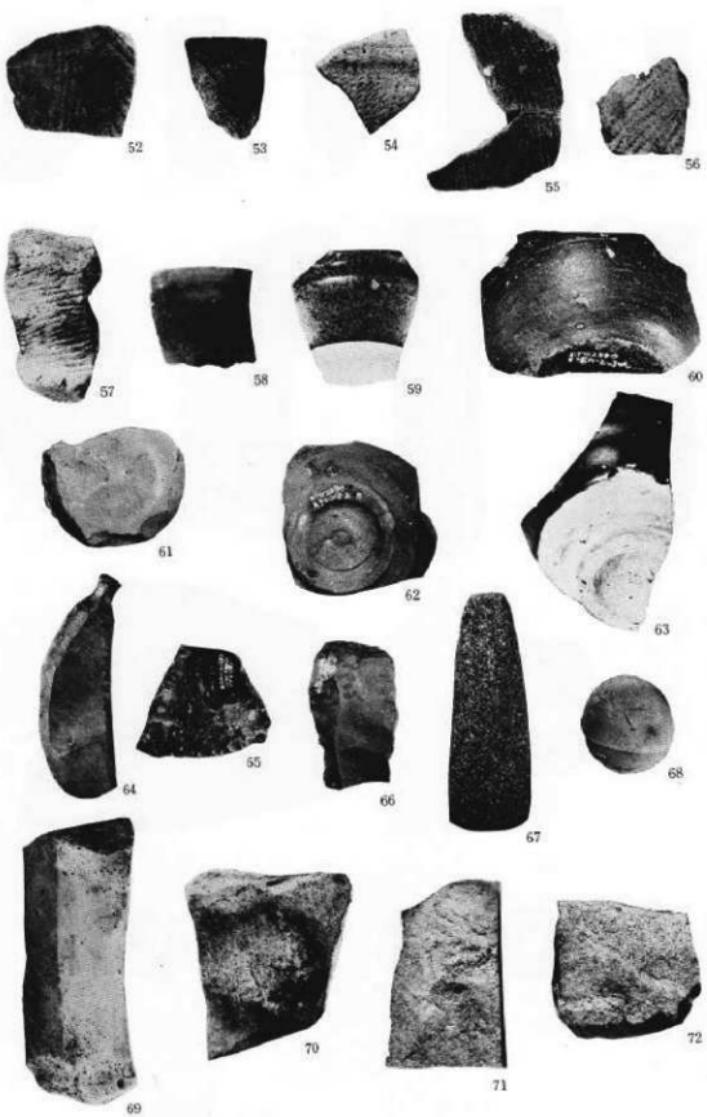
2 妻の神III遺跡から見た乳牛平遺跡



圖版69 遺物

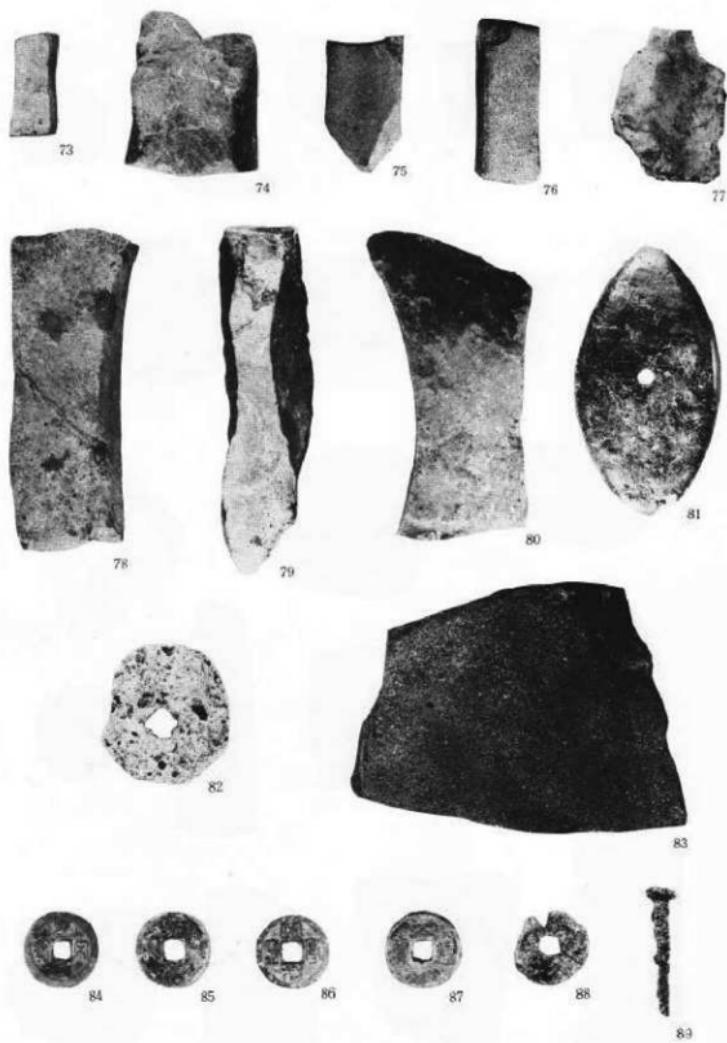


図版70 遺 物



図版71 遺物

乳牛平遺跡



図版72 遺物